

同様の溝 227 が 3 P P 17~19 地区で検出されており、堤を片側に有している。この溝は、面からいくと、北の溝や土塋の多い地区よりも一段低い部分にある。他地区では、古墳時代前期には水田が多く、当地区の低い部分はその可能性が考えられる。そこでこの溝は、それらに伴う遺構の可能性も考えられる。

〈溝 227〉は、3 P O 17~19、3 P P 17~19 地区において検出した。南北方向に蛇行しながら延びる溝である。両端は、調査区外へ続く。検出長は約 14.5m、幅は 1.8~2.7m、深さは 0.3m を測る。溝内埋土は、茶灰色砂である。遺物は、ほとんど検出しなかった。この溝は東側に堤を有している。堤は幅 2.6~4.7m、高さ 0.5m を測り、南へ行くにつれやや細くなっている。この堤は盛土であり、茶灰色砂質土が 1 層である。この堤は、西側にもあると考えられるが、調査区外のため明らかにはし得ない。溝 226 と同様の溝と考えられるが、この溝の性格は不明である。この溝の底部には、溝を横断したり縦断する足跡を数百個検出した。しかし、足の指型まで遺存しているものは全く検出しなかった。足跡の詳細については、後述する。

C 土塋 土塋は 6 基あり、溝 226 より北に多い。

〈土塋 324〉は、3 P P 7 地区において検出した。上部は削平を受け、下部のみ存在していた。検出長径 0.95m、短径 0.5m、深さ 0.15m を測る。楕円形の土塋である。埋土は、炭化物層が 1 層だけである。遺物は、土器片を僅かに含む。遺構面 I に伴う遺構である。

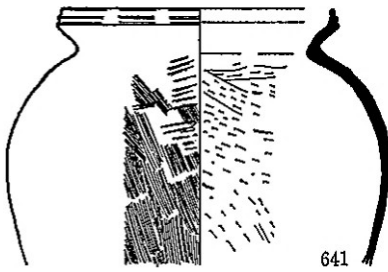
〈土塋 325〉は、3 P P 8・9 地区において検出した。この土塋は南側を溝 225 に、東側を土塋 326 に切られている。検出長は 1.5m、検出幅は 1.2m、深さ 0.05m を測る。非常に浅い土塋である。埋土は、底部に炭化物層が薄く堆積しており、上層に暗灰色粘質土が堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土塋 327〉は、3 P O 9 地区において検出した。長さは 0.9m、幅は 0.8m、深さ 0.1m を測る。浅い不定形な土塋である。埋土は、暗灰色粘質土が 1 層堆積してただけである。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土塋 328〉は、3 P O 9 地区において検出した。長さは 0.7m、幅は 0.5m、深さは 0.05m を測る。非常に浅い隅丸方形の土塋である。埋土は、下層に灰白色微砂、上層に暗灰色微砂質粘土が堆積していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土塋 329〉は、3 P Q 8 地区において検出した。長さは 1.3m、幅は 0.9m、深さは 0.45m を測る。東北から西南に長い方形である。肩口からほぼ垂直に掘られている。埋土は 1 層で、灰色粘土と褐色粘土が混在していた。遺物は、ほとんど検出しなかった。

〈土塋 330〉は、3 P R 8 地区において検出した。長さは 2.0m、幅は 1.5m、深さは 0.3m を測る。東西に長い方形の土塋で浅い摺鉢状を呈している。埋土は、3 層あり、下層に灰褐色砂が 5cm、中層に炭化物層が 10cm、上層に黄灰色砂が 15cm 堆積していた。遺物は、庄内式土器（第 153 図）を主に検出した。破片ばかりで完形品は全くない。



第126図 落込15出土土器 (1/4)

D 落込 遺構面 I に伴う落込は、1基確認、検出した
だけである。

<落込15>は、3 P P 8、3 P Q 8 地区において検出し
た。長さは 3.0m、幅は0.7~2.0m、深さは 0.1mを測
る。浅い不定形の落込である。埋土は、黒色粘質土が1
層堆積していただだけである。

遺物は、土器（第126図）等を僅かに検出した。この
土器は甕で口頸部および体部上半が残存していた。口径17.2cm、腹径20.1cm、現存高13.6cmを測
る。口縁部は短く外反し、口縁端部は、やや内上方へつまみあげられ面をもつ。頸部は「く」の
字状に屈曲し、やや肩の張る体部へと続く。調整は、口頸部内外面ともヨコナデ、体部外面は、
左下がりの粗い叩目後、縦方向の刷毛目、内面はヘラケズリを施している。口縁部端面には凹線
紋状の強いナデが2条施されている。外面に煤が付着している。胎土は、暗緑褐色を呈する生駒
西麓産の土器である。

E 小結

この面で確認、検出した遺構は、井戸2基、溝3条、土壙6基である。しかし、実際には、面
の別れる部分とそうではない部分があり。遺構面 I に伴う遺構が他にも存在するかも知れない。
ここではとりあえず上述の遺構等から、考えてみることにする。

この遺構面は、3 P 6 地区以南で明確に認められたものであり、以北と比較すると約20cm低く
なっている。この面は、南へいくにつれ低くなっていくのである。遺構を検出したのは3 P 12地
区までであり、それ以南では認められなかった。当調査区以南の各調査区では、古墳時代前期の
水田跡が確認されており、中には明確な遺構としての畔を伴うものもある。そのため、当調査区
の南半部も水田跡の可能性が十分に考えられる。3 P 10地区を東西に延びる溝 226 があり、この
溝は両側に堤が設けられており、堤が築かれることにより、溝が機能を果たすものである。この
ようにわざわざ堤を設けてまで水を流すということは、単純に排水の為の溝ではなく、どちらか
といえば水田等の灌漑用の溝と考えられるであろう。しかし、この溝のすぐ西脇が水田等に利用
されていたかどうかは明確ではない。それは、溝の北に土壙、南に井戸が存在しているためであ
る。これらの遺構からは、この付近が非常に居住区域に近いと考えられ、この水が生活用水とな
る可能性も無いとはいえないが、井戸が存在するため考え難い。そうすると、この溝はやはり灌
漑用と考えるのが適当であろう。井戸等の遺構との時間差から、溝の西脇が水田として利用され
た時期も無かったとはいえない。どちらにしても、この時期の居住区域は地域的に非常に限られ
ており、一面が水田であったのであろう。

2) 遺構面Ⅱ

遺構面Ⅱに伴う遺構は、井戸、溝、土器溜、土塋、落込等を数多く検出した。遺構面が重なっていることもあるが、居住域が広がったことも遺構の多い原因といえよう。

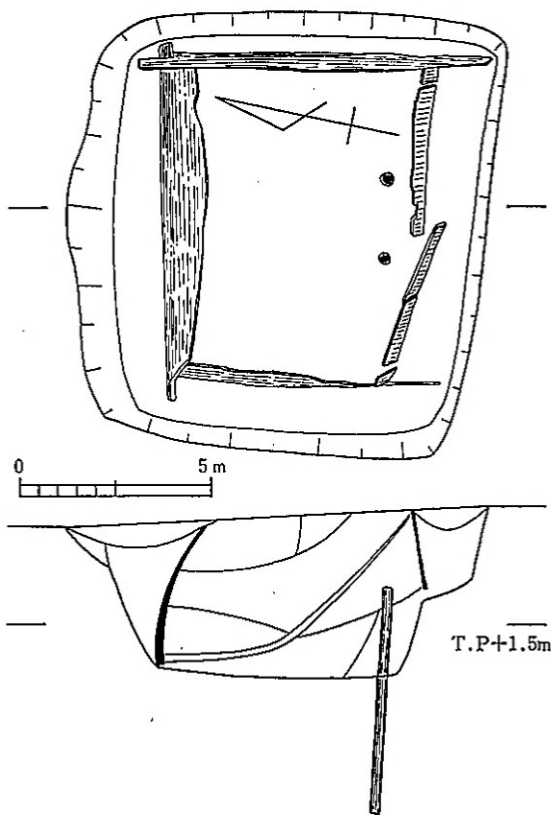
A 井戸 井戸は2基あり、1基は枠を使用している。

<井戸8>は、3PT4地区において検出した。1辺約1mの方形の掘方を有している。井戸枠があり、この時期の他の井戸とは僅かに異なっている。5枚の板を使用しており、3枚は僅かに彎曲した板を横位置で使用し、2枚は真すくの板で縦に使用している。枠の内法は、東西0.85m、南北0.65m、深さ0.35mを測る。3枚の板は両端の各々が突出しており、それぞれ組合うようになっている。南のみが2枚の縦板を使用しており、枠内の南側に2本の杭が打ち込まれていた。この杭は、南の枠板の補強用であるらしい。枠内の埋土は、南の枠板上端から北の底部に斜めに木葉が層をなして堆積しており、この木葉層を挟んで上・下2層に大別でき、それぞれが細分できる。下層は、灰色砂・灰色砂礫の上に白色砂が堆積していた。上層は、灰色砂礫、灰色粘土、白色砂礫、青灰色粘土の順に堆積していた。井戸枠内部からは全く遺物を検出できなかった。遺物は、掘方内の埋土から僅かに土器片を検出したただけである。中に庄内式土器の小破片を含んでいた。

<井戸11>は、3PR12地区において検出したもので、円形の掘方を有している。直径0.65m、深さ0.7mを測る。埋土は、5層に分けられ、下層から黒色粘土が5cm、暗灰色粘土が5cm、茶褐色粘土が35cm、灰褐色粘土が15cm、灰褐色土が15cm堆積していた。遺物は、第3層から壺の体部破片を検出したただけである。形状等から井戸としたが、実際の用途は明らかにはし得ない。

B 溝 溝は、1条検出したのみで、実際には割合長期間使用されていた溝のようである。

<溝224>は、3PU7地区から僅かに蛇行しながら3PO2地区へ延び、調査区外に続く。検出長は約40m、幅は0.8~1.9m、深さは0.3~0.6mを測る。流れは東南から西北方向と考えられる。埋土の状況は地区により異なっている。溝底には部分的



第127図 井戸8平面・断面実測図

に深いところが2ヶ所ある。3 P Q 5 地区から3 P R 6 地区、3 P T 7 地区から3 P U 7 地区である。3 P U 7 地区における埋土の状況（第128図）は、5層に分けられる。下層に黄灰色粘土が10cm、続いて両側に灰色粗砂（褐色粘土混り）が10cm堆積し、溝幅が1.2mと狭くなり、灰黄色粘土が10cm、黒褐色粘土が2cm、茶褐色粘土が20cm堆積していた。この堆積から考えられることは、まず、溝内に黄灰色粘土、続いて灰色粗砂（褐色粘土混り）が堆積し、溝がほとんど埋ってしまった。その後、中央部に掘り直しが行なわれ、そこに灰黄色粘土、黒褐色粘土、茶褐色粘土が堆積したと考えられる。3 P R 6 地区における埋土の状況は、3層に分けられる。下層に灰色粘土が5cm、中層に灰色粗砂（褐色粘土混り）が30cm、上層に茶褐色粘土が25cm堆積していた。中層と上層の間には薄い灰色粘土層が認められる。3 P P 3 地区における埋土の状況は、ほとんど灰色粗砂（褐色粘土混）1層だけである。すべてに共通するのは灰色粗砂層（褐色粘土混り）である。下層の粘土層は溝底の深いところのみ色調は僅かに異なるが認められる。最上層の茶褐色粘土層は溝底の深い部分の最上部に堆積しているが、3 P P 3 地区で僅かに認められる。

遺物は、庄内式土器を含む多量の土器（第143～148図）を検出した。下層から検出した遺物は、深い部分には完形品は少なく破片が多い。中層には完形品や完形のまま土圧により壊れたものが多い。上層の遺物は完形品のままのものも多く、それぞれの層で遺物の有り方が僅かに異なるようである。



第128図 溝224埋土断面図

C 土器溜 土器溜は3ヶ所あり、土器の出土状況に違いがあるが、その性格については明らかにし得ない。

<土器溜1>は、3 P Q 4 地区において約2ヶ所を検出した。不定形なため、実際にどの程度検出し得たのかは明らかでない。検出長南北3.5m、東西2.0m、深さ0.4mを測る。埋土は、4層あり、下層から茶褐色粘土が15cm、続いて灰色砂・暗灰色粘土が5cm、黄褐色粘土が20cm堆積していた。遺物は、土器（第149図）のみで、茶褐色粘土層、黄褐色粘土層内より検出した。中間層を挟んで、上・下2層に分けられるようである。上・下両層共に完形品になるものはほとんどなく、破片ばかりである。

<土器溜2>は、3 P Q 5 地区において検出した。検出長南北5.2m、東西3.0m、高さ0.2mの台状頂部に径約2mの不定形な落込が認められた。台状部は、灰色、灰茶色砂礫層であり、盛土ではないようである。この頂部の凹みに灰褐色砂が15cm堆積していた。この層中から土器（第

150図)を検出した。完形品もあるが、破片が主である。台状部は一部を溝224により削られているが、溝224の埋没後、くずれて一部が溝224を覆っていた。

〈土器溜3〉は、3PQ・R10・11地区において検出した。遺物の出土状況(第151図)は、特別な掘方を持たず、黄色粘土層上面の自然の凹地に多量の土器(第152図)を集積させただけである。土器集積の範囲は、約1.5m四方である。遺物は、土器のみでほとんどが完形品であり、破片は非常に少ない。この遺構は明らかに遺構面Ⅱに伴うものである。

D 土塋 土塋は全部で2基あるが、不定形のものである。

〈土塋323〉は、3PT6地区において検出したもので、不定形の土塋である。長軸は1.7m、短軸は1.5m、深さは0.35mを測る。長軸は溝224に平行する。埋土は、3層あり、下層から黄灰色粘土が10cm、中層に黒褐色粘土が5cm、上層に茶褐色粘土が20cm堆積していた。この堆積層は、そのまま溝224へと続いている。溝224が掘り直された時点で掘られたものと考えられる。遺物は、僅かに土器片を検出した。

〈土塋326〉は、3PP8～9地区において検出した。長さは1.2m、幅は1.0m、深さは0.05mを測る。非常に浅い不定形の土塋である。南端部は、古墳時代中期遺構面に伴う溝229に削平される。埋土は、下層に茶灰色粘質土、上層に暗茶灰色粘質土が堆積していた。遺物は、土器片を僅かに検出しただけである。この遺構は、層位的にも遺構面Ⅱに伴う遺構である。

E 落込 落込は、4基あるが、形態、大小はさまざまである。

〈落込16〉は、3PS7地区において検出した。長径は2.1m、短径は1.2m、深さは0.1mを測る。東南から西北方向に長い楕円形の落込である。長軸はほぼ溝224に平行する。遺物は土器を僅かに検出した。

〈落込17〉は、3PU9地区において検出した。長径3.2m、短径1.4m、深さ0.1mを測る。浅い三角形の落込である。遺物は僅かに土器を検出しただけである。

〈落込18〉は、3PU9地区において検出した。落込17に接している。長径2.3m、短径1.1m、深さ0.1mを測る、浅い不定形の落込である。遺物は僅かに土器を検出しただけである。

F 河川 河川は、弥生時代中期から方向を何度か変えるが、当調査地区において北端をずっと流れていた。この時期には、その河川もほとんど姿を消しかけており、かわって南端に河川が現われた。

〈河川9〉は、3PU4～6地区から西北に延び、3PQ・R2地区へ続く。両端は調査区外へ延びる。検出長は約25m、幅は5.5～7.0m、深さは0.2～0.4mを測る。埋土は、灰褐色粘土や灰褐色砂が堆積していた。この河川は、決して弥生時代中期から継続して流れていたものではなく、途中で何回も埋まることもあったようである。遺物は、土器(第129図)を検出したが、量的に少なく、時期的にも、古墳時代前期から中期にわたって流れていたと考えられるが、河川といえる程大規模なものではなく、小規模な自然流路という方が適当であろう。

〈河川10〉は、当調査区南端の3PQ～S21・22地区において検出したもので、東南から西北へ流れていた。大部分が調査区外へ続く。この河川の南肩はC地区北端に一部が現われている。幅約10m、深さ1.5mを測る。北端の河川が埋まってしまったために、ここが新しい流路になったものと考えられる。B地区は、弥生時代中期の段階から中央部が高くなっており、A・C地区は低くなっている。そのため、北端の低い部分が埋まってくると南端の低い部分を河川が流れるようになったと考えられる。

遺物は小型丸底壺（第133図665）のみで、他にはほとんど検出しなかった。しかし、古墳時代前期だけではなく、確実に中期にも流れていたようである。

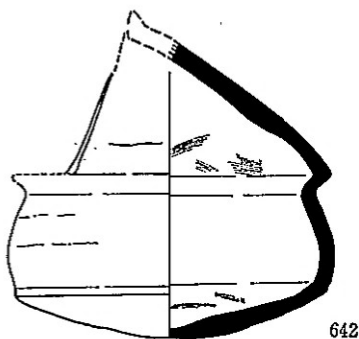
G 小結

遺構面Ⅱに伴う明確なものは土器溜であり、他には何もない。3P6地区以北の遺構がすべて遺構面Ⅰに伴うものとすれば、遺構面Ⅱには土器溜だけとなるのであるが、溝224からはこの土

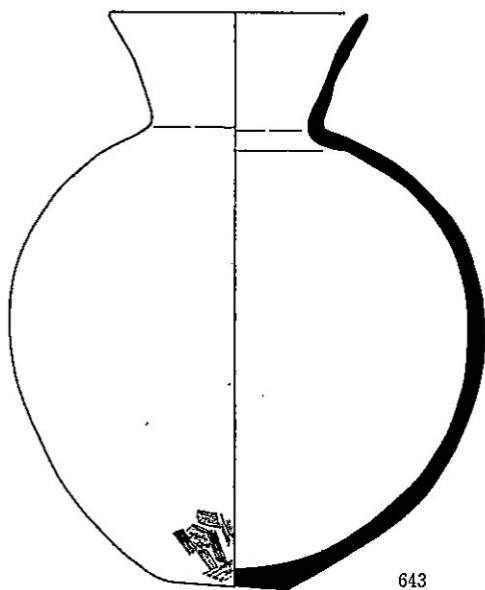
器溜と同時期か僅かに新しいと考えられる土器を検出しており、溝も存在していたことは明らかである。ただし、溝が本来の機能を保っていたかどうかは明らかにし得ない。しかし、どちらにしても完形品を多量に検出することから居住区域には近いと考えられる。

この時期には、遺構面Ⅰで検出した灌漑用と考えられる溝は埋っており、この付近が一体どの様に利用されていたかは明らかではない。3P11地区以北は他の調査区の同時期の遺構面よりも30～50cm高いことから居住区域であったと考えられる。しかし、遺構面Ⅰと同様に住居址等はなく、場所的にも限られており、弥生時代中期以来当調査区北端を流れていた河川の自然堤防上に僅かに居住し、周辺の低地で水稻耕作等を行っていたと考えられる。

瓜生堂遺跡の北の西岩田遺跡もよく似たようなものと考えられ、この時期の河内平野中心部の集落は、微高地上に小集落が点在していたのであろう。



642



643

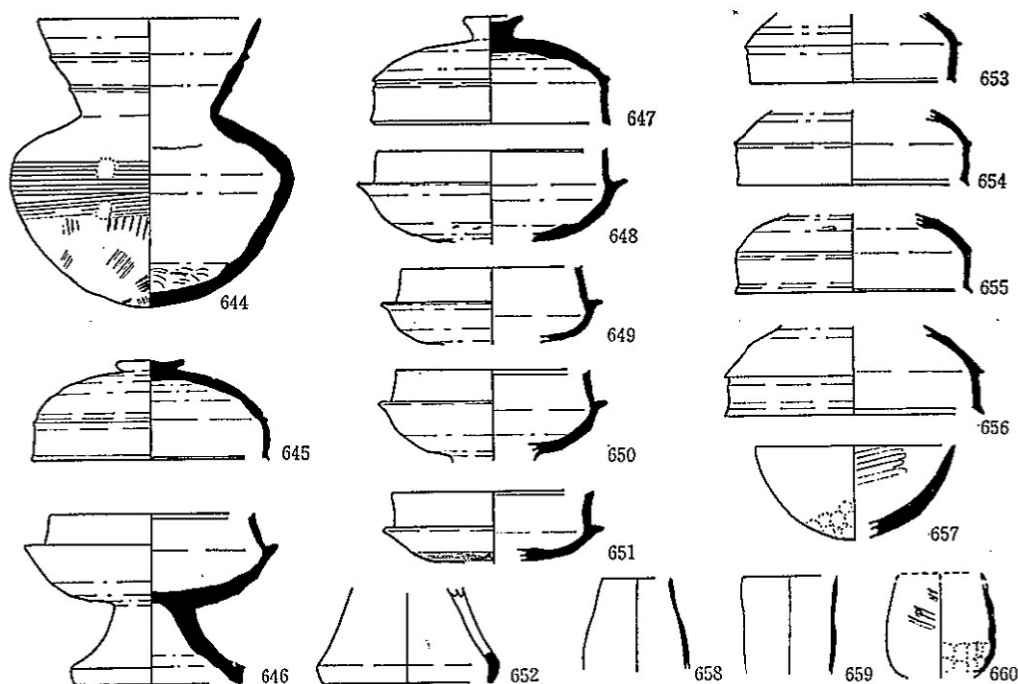
第129図 河川9出土土器(1/4)

5 古墳時代中期の遺構と遺物

古墳時代中期の遺構面は、当調査区北端では古墳時代前期遺構面Ⅱとある程度明確に分離できるが、南端では重なってしまう。遺構は、井戸と土壙が主であるが少なく、調査区内に散在している。他には、古墳時代前期から続くと考えられる河川がある。

A 井戸 井戸は3基検出した。3基とも全く異なった造り方をしている。

<井戸12>は、3PP7地区において約90%を検出した。北半部は調査区外へ続く。形状、規模は明確にし得ないが、不整形円形で、径約3m、深さ約1mと考えられる。2段掘りの井戸である。1段目はほぼ垂直に40cm掘られている。そこで平坦面を造り径1.7mとなり、ほぼ垂直に60cm掘られている。明確な井戸枠はないが、2段目東端に何かの廃材と考えられる長さ2.2m、幅0.25m、厚さ0.05mの板を検出した。当初は井戸枠があったと考えられる。埋土は、大きく4層に分けられる。下層から暗灰色粘土が35cm、続いて青灰色砂が10cm、茶褐色粘土が30cm、灰褐色土が25cm堆積していた。遺物は、主に茶褐色粘土層と青灰色砂層の境から検出した。土器(第130図)が主であるが、竹籠も検出した。須恵器が多く、壺1点、蓋杯5組、有蓋高杯2組、杯蓋、高杯脚部等を検出した。土師器は少なく、丸底の椀1点(第130図657)と高杯脚部を検出ただけである。他に、製塩土器を数点検出した(第130図658~660)。小型で丸底のものであり、乳白色で全面ナデ仕上げのものと、暗灰色で叩目を残すものの2種ある。この井戸の時期は、須恵器等から、5世紀後半と考えられる。



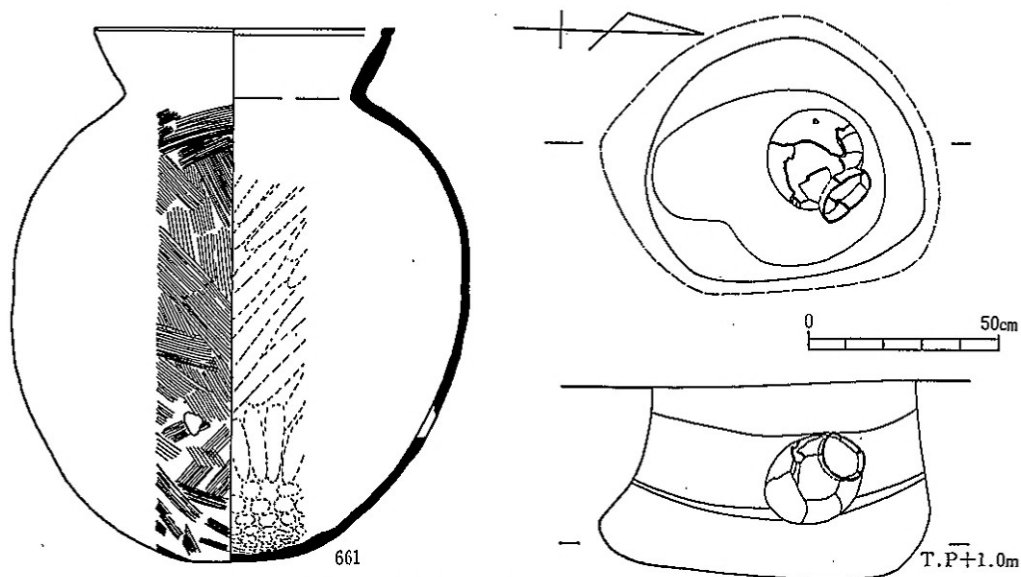
第130図 井戸12出土土器(4)

〈井戸13〉は、3PQ14地区において検出した。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.55mを測る。不整円形を呈している。埋土は、4層あり、下層から灰色粘土が15cm、続いて黒色粘土が5cm、黄灰色粘土が20cm、灰褐色粘土が15cm堆積していた。遺物は、土師器の甕を黄灰色粘土層から検出した。下層の灰色粘土からはウリの種子を多数検出した。

甕は、口径16.0cm、器高28.6cm、腹径24.3cmを測る。口縁部は斜上方へ内彎する。口縁部上端は面をもち、内側へ僅かに肥厚する。体部は縦長の球形を呈している。体部の調整は、外面が斜方向の刷毛目、内面が斜方向のナデである。底部内面には指頭圧痕が認められる。口頸部は、ヨコナデを施している。形態等から布留式でも新しく、須恵器を伴うもので、5世紀後半と考えられる(第131図661)。

〈井戸14〉は、3PR18地区において検出した。直径1.5m、深さ0.8mを測る。円形を呈し僅かに2段掘りになっているが、あまり明確なものではない。埋土は、6層に分けられ、下層から灰黒色粘土が25cm、続いて灰色粘土(灰色砂・黒色粘土混り)が25cm、灰色砂が10cm、灰色粘土が10cm、黄褐色粘土が10cm、部分的に灰褐色粘土が5cmである。灰黒色粘土内に直径35~40cmの井戸枠を検出した。これは蔓を幾重にも巻いたものである。この枠内に灰黒色粘土に埋った状態で須恵器の壺(第132図663)を1点検出した。他には、枠内と枠上からそれぞれフクベの種子を検出した。

壺は、口径10.4cm、器高15.5cm、腹径19.2cmを測る。口縁部はほぼ垂直に短く立つ。体部は肩部の張った扁平な球形で、丸底である。底部から僅か上の部分にヘラケズリを施している。上層の灰褐色粘土・黄褐色粘土からは、奈良時代~平安時代の土師器片を検出したが、下層の須恵器壺は古墳時代のものと考えられる。他に下層からは時期の明確な遺物を検出しなかった。壺は古

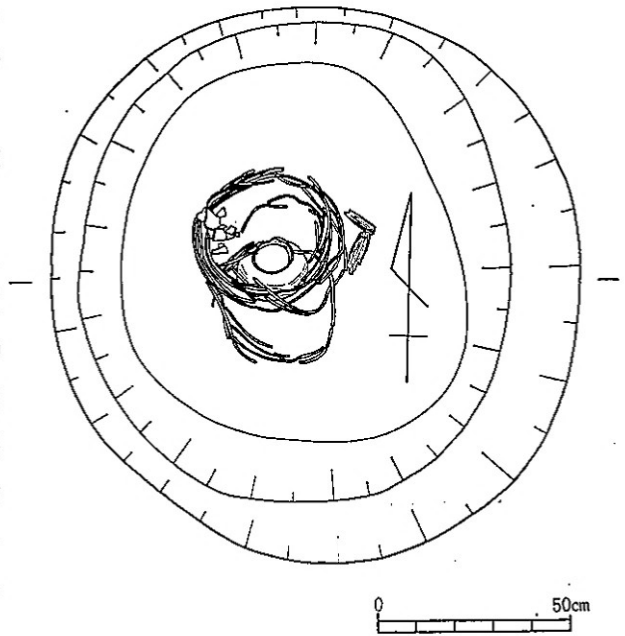


第131図 井戸13平面、断面図及び出土土器

墳時代でも後期の土器と考えられるが、ここでは一応、中期の遺構の中で説明した。

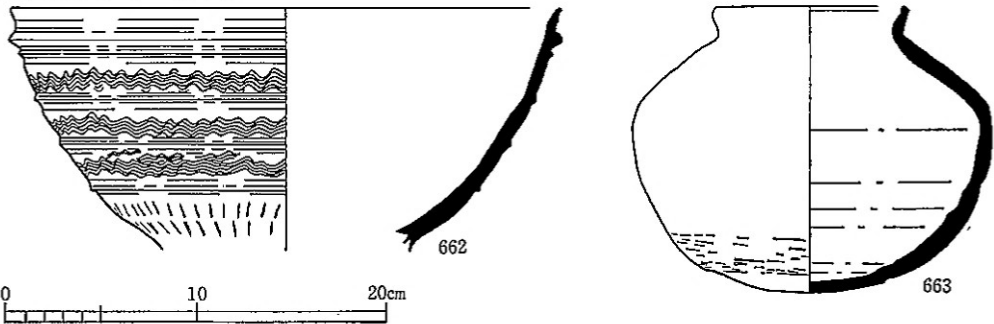
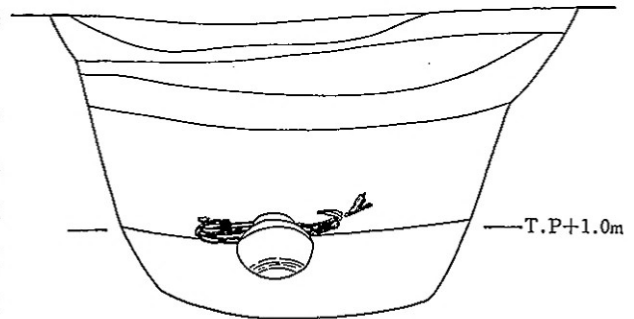
B 溝 溝は非常に少なく、2条を確認、検出した。

<溝 229>は、3 P S 7 地区から始まり東南に延び、3 P U 8 地区で調査区外へ続く。検出長 9.5m、幅0.7~0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は、2層に分けられ、下層に黄灰色粗砂（茶褐色粘土混り）が10cm、上層に茶褐色粘土が5cm堆積していた。遺物は下層から僅かに土器片を検出しただけである。



C 土壇 土壇も非常に少なく、1基を確認、検出しただけである。

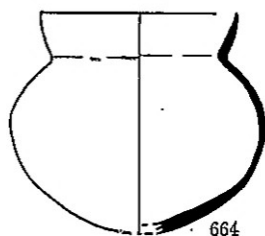
<土壇 331>は、3 P T 6 地区において検出した。直径1.35m、深さ0.35mを測る。円形の摺鉢状を呈する。埋土は、下層に灰黄色粘土が壁面に添って10cm、中層に黒色粘土が20cm、上層には灰褐色粘土が中央部分にのみ5cm堆積していた。遺物は、灰黄色粘土層内から鉢形器台の鉢部破片(第132図662)を検出しただけである。



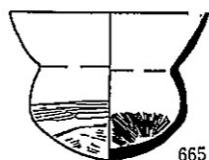
第132図 井戸14平面、断面図及び出土土器(663)、土壇331出土土器(662)

D 落込 落込は明確な遺物を検出しないものもあり、時期が決め難く、時期を確認し得たのは、1基のみである。

<落込20>は、3PQ7地区において一部を検出した。検出長は東西1.3m、南北2.1m、深さ0.15mを測る。非常に浅く不定形なものである。埋土は、下層に茶褐色粘土、中層に黒色粘土、上層に黄色粘土が堆積していた。遺物は、土師器の壺(第133図664)を1点と土器の小砂片を僅



かに検出した。壺は、口径10.5cm、器高12.0cm、腹径13.4cmを測る。口縁部は斜上方へ内彎している。口縁端部は尖り気味におわる。体部は扁平な球形であるが、体部下半から底部にかけてやや尖り気味である。口頸部の調整は内外面ともにヨコナデ、体部は外面がヘラミガキ、内面はナデを施している。胎土には少量のクサリ礫を含み、色調は赤褐色を呈している。



E 河川 河川は、南端と北端において認められるもので、古墳時代前期から続いてくるものである。

<河川9>は、北端を流れる小規模な浅いもので、<河川10>は、南端にある幅約10m、深さ1.5mを測る大規模なものである。両方ともに古墳時代前期の項で説明した。

第133図 落込20(664)、
河川10(665)出土土器

F 小結

古墳時代中期の遺構は、井戸、溝、土壇等を検出しただけである。この時期は、井戸を多く検出したが、住居跡は全く判っていない。この時期の遺構は今回の調査では、当地区のみで検出した。しかし、僅かに古い時期の遺構としてはG地区で河川を検出しており、多量の遺物を検出している。なお、その時期の集落も明らかではない。瓜生堂遺跡の過去の調査では、B地区から西へ100~150m離れた地区において5世紀後半の遺物を検出しており、この時期の集落がB地区の西を中心に広がる可能性も十分に考えられる。現段階では、この時期の遺構をあまり検出していないため、まだまだ不明な点が多い。

この時期の前後は、長原遺跡において検出したような小規模な方墳が平野部にも多く造られる。巨摩鹿寺遺跡では古墳の周濠と考えられる溝を検出している。以前から埴輪の出土も知られており、平地における小古墳のあり方等が今後の問題となるであろう。瓜生堂遺跡周辺に関しては、現在のところ巨摩鹿寺遺跡で検出された1基のみであるため明らかにはし得ないが、長原遺跡や郡遺跡等と同様にこの時期には平地の集落に割合近いところに古墳が群在するのであろう。なお、このような小古墳が、何時頃現われるのかも今後の問題となろう。5世紀段階で方墳が出現し、6世紀になると円墳に変わるようである。これが平野部に多い様相と考えられる。巨摩鹿寺遺跡の周濠はごく一部であるが円形に回るようであり、埴輪からも6世紀の円墳と考えられる。今後の調査を待ちたい。

6 奈良時代の遺構と遺物

この時期の遺構は掘立柱建物ばかりで、明確な遺物がなく、時期決定に困った。柱穴内の小破片や上部の攪乱層から出土した遺物からも良好な資料が得られなかった。しかし、C地区の同一面で不定形の落込を検出し、中から多量の土師器を検出した。当地区において検出した掘立柱建物等をその時期に比定した。

A 掘立柱建物 建物は、全部で7棟検出した。建物の向きは、梁、桁に関係なくすべてN()°Eで表わした。

<掘立柱建物6>は、3PR・S8地区において検出した。建物は桁軸がN45°Eに振っている。2間×3間で、束柱はない。柱穴は1辺0.4~0.6mの長方形の掘方を持つものが多い。柱根は全く残っておらず、柱痕はほとんどが直径20cmを測る。この付近では遺構面が相当に削平されており、柱穴の深さは10cm前後である。柱間は一定ではなく、梁間が1.65mと1.85m、桁行柱間は1.05mと1.4mを測る。相対する柱間は同寸である。この建物は、梁行3.5m、桁行3.85mを測り、2間×3間にしては正方形に近い。

<掘立柱建物7>は、3PQ・R8・9地区において検出した。建物は桁軸がN45°Eで、建物6と同角度に振っている。2間×3間で、束柱がある。柱穴は1辺0.4~0.6mの長方形の掘方を持つものが多い。柱根は全く残っておらず、柱痕はほとんどが直径20cmを測る。柱穴の深さは10cm前後である。柱間は一定ではなく、梁間が1.85mと2.0m、桁行は等間で1.4mを測る。相対する柱間は同寸である。この建物は、梁行3.85m、桁行4.2mを測り、2間×3間にしては正方形に近い。

この建物の西側柱は建物6の西側柱の延長線上にある。梁行が異なるため、東側は揃わない。建物6の桁行が3.85m、建物7の梁行が3.85mと同寸で、建物6と建物7の間隔が同じく3.85mを測る。このことから、建物6・7は同時期の建物と考えられる。

<掘立柱建物8>は、3PQ13・3PR13・14地区において検出した。建物は梁軸がN45°Eに振っている。3間×3間で束柱はない。柱穴は0.4~0.6mの長方形の掘方を持つものが多いが、不整形のものもある。柱根は全く残っておらず、柱痕はほとんどが直径15cmを測る。柱穴の深さは5~10cmを測り、消失したものもある。柱間は一定ではなく、梁間は1.05mと1.4m、桁行は1.4m、1.75m、2.1mを測る。相対する柱間が同寸でないものがある。この建物は、梁行3.85m、桁行4.9mを測り、3間×3間にしては長方形である。

この建物も建物6・7と同角度に振っており、関連するものと考えられる。建物6・7の西側柱列の延長線上から東南に10.5m離れたところが建物8の西柱列が並び、また建物7の南柱列から11.55m離れて建物8の北柱列が並ぶ。10.5m=3.5m×3、11.55m=3.85m×3であり、建物6の梁行と桁行を3倍づつ延ばした距離である。このため建物6~8は、同時期で1セットになるものと考えられる。建物6は束柱はないが、建物7と同様に倉の可能性が考えられ、建物8

は住居であろう。

〈掘立柱建物9〉は、3PQ・R16・17地区において検出した。建物の桁軸がN40°Eに振っている。2間×3間と考えられるが、消失したものがあり、明確にはし得ない。束柱はない。柱根は全く残っておらず、柱痕は直径10～15cmを測る。柱穴の深さは5cmと浅い。柱間は一定ではなく、梁間は1.75m等間、桁行も等間で各1.4mを測る。この建物は、梁行3.5m、桁行4.2mを測り、2間×3間にしては正方形に近いが、他の建物に比較すると長方形である。

〈掘立柱建物10〉は、3PR17・18、3PS18地区において検出した。建物はN40°Eに振っている。3間×3間で束柱はない。柱穴は1辺0.7～0.9mの長方形の掘方を持つものが多い。柱根は全く残っておらず、柱痕は直径20cmを測る。建物の北半部は削平されており、北の柱穴は非常に浅い。柱穴の深さは深いもので40cmを測る。柱間は一定ではなく1.05m、1.75mを測り、相対する柱間は同寸である。1辺3.85mの正方形の建物である。

建物9と同角度に振っており、建物9の東桁から7.8m離れたところが建物10の西面の延長線上であり、建物9の南面から2.1m離れたところが建物10の東西の延長線上にあたる。7.7m=3.85m×2、2.1m=4.2m÷2であり、建物9・10が同時期で1セットになると考えられる。建物10は束柱はないが倉の可能性があり、建物9は住居の可能性はある。

〈掘立柱建物11〉は、3PT18・19地区において検出した。建物は桁軸がN10°Eに振っている。2間×2間の建物で束柱はない。柱穴は1辺0.5～1.1mの長方形の掘方を持つものが多い。柱根は全く残っておらず、柱痕は直径20cmを測る。柱穴の深さは40cmを測る。柱間は一定ではなく、梁間が1.75mと2.1m、桁行は等間で2.1mを測る。相対する柱間は同寸である。この建物は梁行3.85m、桁行4.2mを測り、2間×2間にしては長方形である。

〈掘立柱建物12〉は、3PT19地区において検出した。建物は梁軸がN15°Eに振っている。1間×2間の建物である。柱穴は1辺0.7～1.0mの長方形の掘方を持つ。柱根は全く残っておらず、柱痕は直径15cmを測る。柱穴の深さは30cmを測る。柱間は一定ではなく、梁間1.05m、桁行の柱間はふぞろいで1.75mと2.1m、1.85mと2.0mを測る。桁行は3.85mである。北側柱の柱穴は建11の南側柱の柱穴にほとんど重なっており、僅かに軸が振っている。そのため建物11を増築したのではなく、新しい時期の全く別の建物と考えられる。

B 溝 この時期の溝は、1条のみ確認、検出した。

〈溝231〉は、3PP18地区から南東に延び、3PP19地区でおわる。長さは6.5m、幅は0.2～0.45m、深さ0.1mを測る。浅い小規模なものである。埋土は、暗灰色粘質土が堆積してただけである。遺物は、非常に少なく、土器の小破片を含む程度である。そのため、時期を決め難いが、一応奈良時代の遺構と考えられるようである。この溝は3PP18・19地区において検出したビット群とは同一軸ではなく、一連のものとは考えられない。

C 土壙 土壙も非常に少なく、4基を確認、検出した。

<土壙 337>は、3 P P18地区において検出した。長径1.8m、短径1.6m、深さ0.4mを測る。不整形円形を呈している。肩口からはほぼ垂直に掘られている。埋土は、下層に暗灰色粘質土、上層に暗灰茶色粘質土が堆積していた。

遺物は、土器の小破片を僅かに検出した程度である。この土壙は、多量の湧水があることから井戸かとも考えられるが、井戸枠等の施設は全く検出しなかった。

<土壙 338>は、3 P O17・18、3 P P17・18地区において検出した。西側部分は、後世の攪乱を受け削平されてしまっているため、全体の形は不明である。残存部の形状は三角形を呈し、検出長辺は3.5m、短辺2.1m、深さ0.1mを測る。もともとは方形の土壙と思われる。埋土は、暗灰褐色砂質土が1層堆積していた。

遺物は、ほとんど検出しなかった。この土壙の北側に土壙 339 があり、本来的には同一の遺構であったと考えられる。

<土壙 339>は、3 P P17地区において検出した。長さは 2.7m、幅は0.2~1.3m、深さは0.05 mを測る。非常に浅い不定形な土壙である。埋土は、暗灰褐色砂質土が1層堆積していた。遺物は、土器の小破片を僅かに検出した程度である。

<土壙 340>は、3 P P17地区において検出した。長さは2.2m、幅は1.0~0.8m、深さは0.2mを測る。浅い不定形な土壙である。埋土は、暗灰褐色粘質土が1層堆積していた。遺物は、土器の小破片を僅かに検出した程度である。

D ピット ピットは、掘立柱建物として復元できるものは、掘立柱建物の項で説明した。ここでは、掘立柱建物として復元できないピットを取り扱うこととした。

<ピット1803>と<ピット1804>は、掘立柱建物7の桁軸と同一方向に並んでいるが、他の柱穴が、調査区外にあると思われる、掘立柱建物の柱穴と考えられる。柱根は全く残っておらず、柱痕は直径20cmを測る。ピット1803とピット1804間隔は2.0mを測る。

3 P P18・19地区において、8個のピットを検出している。その中で、<ピット1811>、<ピット1812>、<ピット1813>、<ピット1816>、<ピット1817>、<ピット1818>の6個のピットにより、掘立柱建物が建つ可能性がある。とすれば、梁軸がN35° Eに振った、2間×3間の建物が考えられる。柱穴は0.6~0.9mの不整形円形のものが多い。柱根は全く残っておらず、柱痕はほとんどが直径20cmを測る。消失してしまっている柱穴もある。柱間は一定ではなく、梁間は1.4m、桁行は1.4m、1.75mを測る。相応する柱間が同寸でないものがある。この建物は、梁行3.85m、桁行5.95mを測り2間×3間の長方形である。

この建物は、他の建物と同一方向のものではなく、時期の違うものと考えられる。しかし、他のピットと組合わされて、別の建物が建つ可能性も考えられる。この他にも、ピットは、数個確認されているが、掘立柱建物として復元できるものはない。

E 小結

今回の調査で奈良時代の建物を7棟検出した。他地区ではC地区において土器溜を検出した程度である。過去の調査では、B・C地区の西方で同時期の建物や井戸を検出しており、この時期の遺構分布範囲はある程度限定できるようである。しかし、細長いトレンチ状の調査が多く、まとまった面積の調査はほとんど行われていない。そのため、建物の規模や井戸等の他遺構との組合せが明確になされないため不明な点が多い。今回検出した建物については、ある程度建物規模や組合せが明確になった。

今回検出した建物の柱間は一定ではなく、1.05、1.4、1.65、1.75、1.85、2.0、2.1mを測る。そのため、明確な最大公約数は求めらず、規準尺はないようである。しかし、1.05、1.4、1.75、2.1mは0.35mが最大公約数として求められる。また、梁・桁行は1.05、3.5、3.85、4.2、4.9mを測り、0.35mが最大公約数として求められる。柱間には僅かなズレが認められるが、建物の規模は0.35mを規準尺として建てられたと考えられる。建物6は3.5m(10尺)×3.85m(11尺)、建物7は3.85m(11尺)×4.2m(12尺)、建物8は3.85m(11尺)×4.9m(14尺)、建物9は3.5m(10尺)×4.2m(12尺)、建物10は3.85m(11尺)×3.85m(11尺)、建物11は3.85m(11尺)×4.2m(12尺)、建物12は1.05m(3尺)×3.85m(11尺)でそれぞれ建てられている。各建物中の組合せ関係は、すべての建物が真北に対して同角度に振っていることと、各建物間の距離が規準尺0.35mの倍数で隔っていることから考えられた。建物6と建物7の間隔は3.85m(11尺)を測る。建物7と建物8の間隔は建物7から西南に15.4m(44尺)、東南に10.5m(30尺)平行移動した位置に、両建物の西北角が当る。建物9と建物10の間隔は、同様に西南に2.1m(6尺)、東南に7.7m(22尺)平行移動した位置に当る。

この規準尺の0.35mは高麗尺の0.356mであるとも考えられる。しかし、高麗尺は大宝令に定められた大尺であるが奈良時代以降はほとんど用いられなかったことになっている。ただ、今回検出した建物群が高麗尺を規準尺としたか、偶然に0.35mを規準尺として用いたのかは、この集落の性格に関係すると考えられる。

瓜生堂遺跡及び周辺における同時期の遺跡や遺構と比較する必要がある。そこで考えられるのは、瓜生堂遺跡から僅かに東南へいった若江遺跡でほぼ同時期の掘立柱建物が検出されており、そこが若江郡の郡衙跡と考えられている。過去の瓜生堂遺跡の調査でも「若」の墨書のある須恵器が検出されている。これらを考え合せると郡衙の官人のための集落の可能性が十分に考えられる。高槻市の郡家今城遺跡等と同様の集落と考えられる。郡家今城遺跡では集落が郡衙の衰退とともに衰退していくようであり、瓜生堂遺跡の建物群も非常に小規模ではあるがあまり長期間営まれていないようである点からも十分に考えられるであろう。今後の調査により明確になるであろう。

7 鎌倉・室町時代の遺構と遺物

この時期の遺構は南端部に多く集中しており、北にいくにつれ少なくなる。これは、南端部がほとんど削平されずに残ったため、この付近にしか遺構がなかったということではない。遺構は、溝、土塋、ピット等を多数検出したが、性格の明らかでないものが多い。遺物も、検出しているが、小破片ばかりで、明確な時期決定はできない。

A 溝 溝は多数検出している。南端部と北部では異なっている。南端部にある溝は西南から東北に延びるものが多く、それに直交するものもあるが、北部ではほとんどが東南から西北に延びるものばかりである。

<溝 245>は、3 P R22地区から東北に延び、3 P R20地区で終る。検出長12m、幅 0.5～0.7 m、深さ 0.1mを測る。埋土は、褐色土であり、少量の遺物を含むが、小破片のため時期決定は困難である。

<溝 246>は、3 P R21地区から始まり、東北に延びて3 P S19地区で消えてしまう。3 P S20地区から北では深くなっている。検出長は11.5m、幅は0.6～0.8m、深さは0.1～0.25mを測る。埋土は、灰褐色土であり、少量の遺物を含む。遺物は、土師器、瓦器に加わえて中国製青磁碗などがあるが、時期は不明である。

他にも多くの溝はあるが、ほとんどが溝245・246と同様の状況であるため、ここでは省略した。

B 土塋 土塋は、数基検出しているが、形状・大小様々である。しかし、大規模なものが目立つ。

<土塋 349>は、3 P U18・19地区において約 $\frac{1}{2}$ を検出した。検出長東西3.3m、南北6.5m、深さ0.9mを測る。

埋土は、大きく3層に分けられ、下層に暗青灰色砂が40cm、中層に黒灰色粘土が30cm、上層に暗灰色土が20cm堆積していた。遺物は、各層から土器をごく少量検出した。小破片であるため時期の決定は困難である。

<土塋 347>は、3 P R18地区において検出した。長径は1.8m、短径は1.4m、深さは0.5mを測る。南北に長い楕円形を呈している。埋土は、3層に分けられ、下層に暗灰色粘土が20cm、中層に黒灰色粘土が10cm、上層に灰色粘土が20cm堆積していた。遺物は、瓦器の小破片を検出しただけである。

C ピット

ピットは、3 P Q19地区、3 P R19・20地区において、2～3個ずつ検出した。直径は 0.2～0.4mの円形や楕円形のものが多い。深さは、ほとんどのものが10cm前後の浅いものばかりであり、柱根は全く残っておらず、並ぶものもなく建物にはなり得ないものばかりである。柱穴かどうか不明である。

8 足跡

1) 弥生時代中期遺構面 I

弥生時代中期遺構面 I で検出した足跡は遺構面を構成する黄灰色砂層が堆積する以前に、当地が沼沢地であった時点で、灰緑色粘土層上面に残されたものである。埋土は灰白色細砂であり、灰白色細砂がシルト化する所では灰緑色粘土と区別できなくなる。

<3 P S・T・U 7・8・9 における足跡> (第134 図) この地区で検出した足跡は 183 個である。足型の遺存状況及び深さ等他の場所に比べて比較的良好な状態であった。深さは 1～5 cm である。足指の遺存は少数例において認められ、歩行状況も 2 例確認した。

<3 P O・P 2・3・4、3 P O・P・Q 7・8・9、3 P O・P 17・18・19、3 P S・T・U 17・18・19 における足跡> これらの地区で検出した足跡は遺存状況も良くない。足の指、歩行状況まで判断し得るものは無い。足型の検出のみでしかも浅い遺存状況であった。検出個数は、各地区で順に 5、29、30、10 個である。

2) 弥生時代中期遺構面 II

弥生時代中期遺構面 II において検出した足跡面は 2 個所で、川底であった。足跡の検出面は暗灰色粘土層上面、および中期の河川が灰緑色粘質土層を削り込んだ面で検出した。川底部であるが比較的良好な遺存状況は良好である。

<3 P S・T 2・3・4 における足跡> ここでの足跡は河川 1 の黄灰色砂層の下層である暗灰色粘土層上面に残った足跡である。検出状況は主に川底部であり、一部肩口でも検出した。総数 172 個であり、深さ 2～10 cm、埋土は灰白色細砂である。指の遺存例は親指等、2、3 指が認められるものはあるが、5 指全部が認められるものはない。川底部に集中して足跡を検出したが、足跡方向が川筋に対して縦断方向のみならず横断方向にも認められ、それらは川底部外では消失していることから人間が意識的に残したものではなく、自然的条件によって川底にのみ残ったものであると考えられる。

<3 P O 7・8 における足跡> ここでの足跡検出面は灰緑色粘質土層上面であり、この上層に河川 1 の黄灰色砂層がある。足跡の埋土も黄灰色砂であるため、中期遺構面 II の足跡と判断した。足跡個体数は 11 個であり、足の指の遺存及び歩行状況等は遺存状況が良くない為、判断出来なかった。足跡の深さは 2～3 cm 程度である。

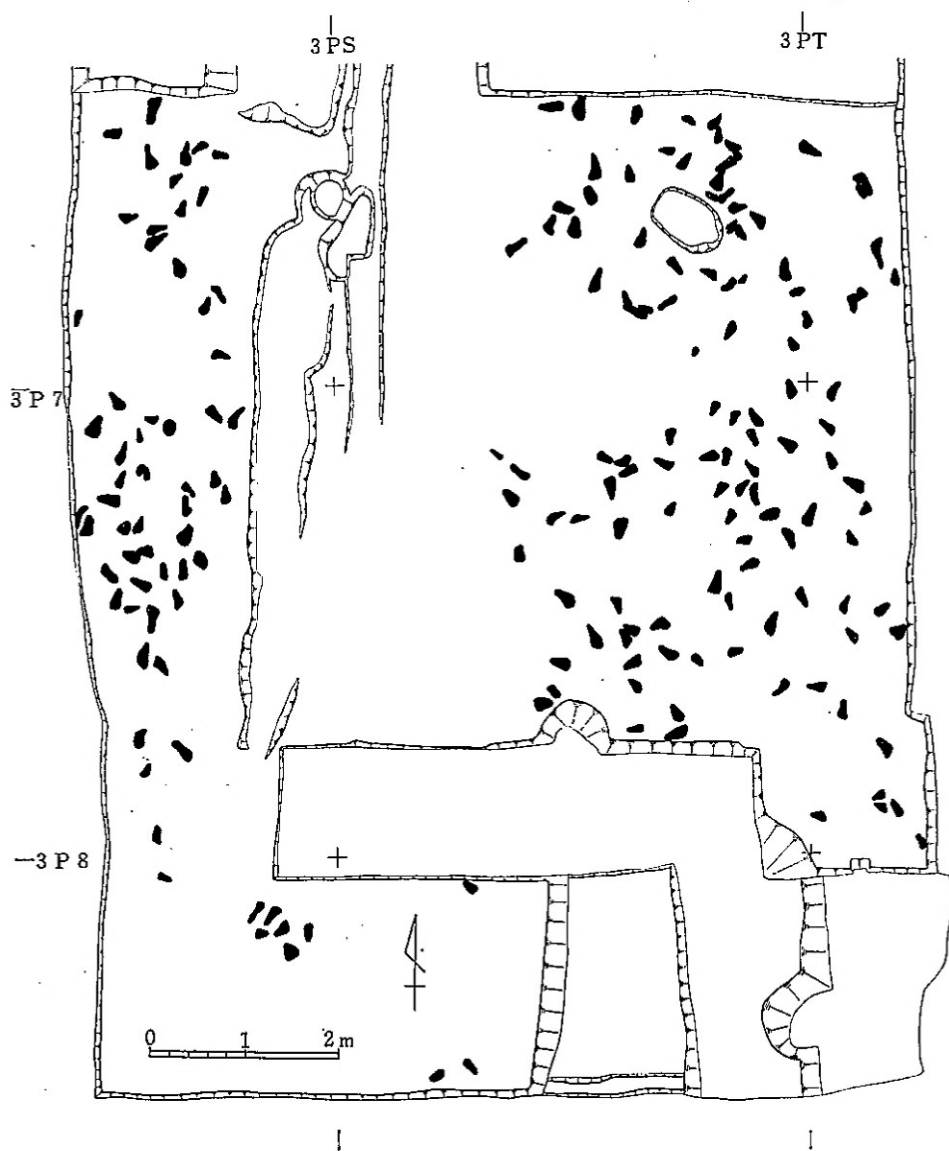
3) 弥生時代後期遺構面 I

弥生時代後期遺構面 I における足跡の検出は全部で 5 個所あり、うち 4 個所は後期遺構面 I の包含層である黒色粘土層上面で検出したものである。

<3 P O・P 3・4 における足跡> 検出面は粗砂混り灰色粘土層上面で、土壙 321 の 1 層上層である。埋土は黄灰色砂で 81 個検出した。深さは 5～10 cm で比較的深く足跡自体の残存状況は良好であるが、足指が認められる例や、歩行状況が判る例はなかった。

＜3PS・T2・3・4における足跡＞（第135図） 河川1が埋没した上に後期Ⅰ包含層が溝状に堆積し、この上面に認められた。総数720個、深さ5～15cmである。残存状況は比較的良好であり、足指を判別し得る例も認められる。しかし、歩行状況については、判断しがたく、まして、足跡を残した人々の行動の目的等を想定することは不可能である。

＜3PS・T7における足跡＞ 一部分は弥生時代後期河川4で削られて露出した後期遺構面Ⅰ包含層上面、一部は後期遺構面Ⅰの包含層上に堆積したシルト層上面から検出した。前者の埋土は黄灰色砂後者は灰白色細砂である。検出個数は前者7個、後者は2個である。深さは、前者3



第134図 弥生時代中期遺構面Ⅰの足跡実測図（3PS・T・U7・8・9）

cm、後者10cmで残存状況は良くなく、足指、歩行状況等は判断できない。

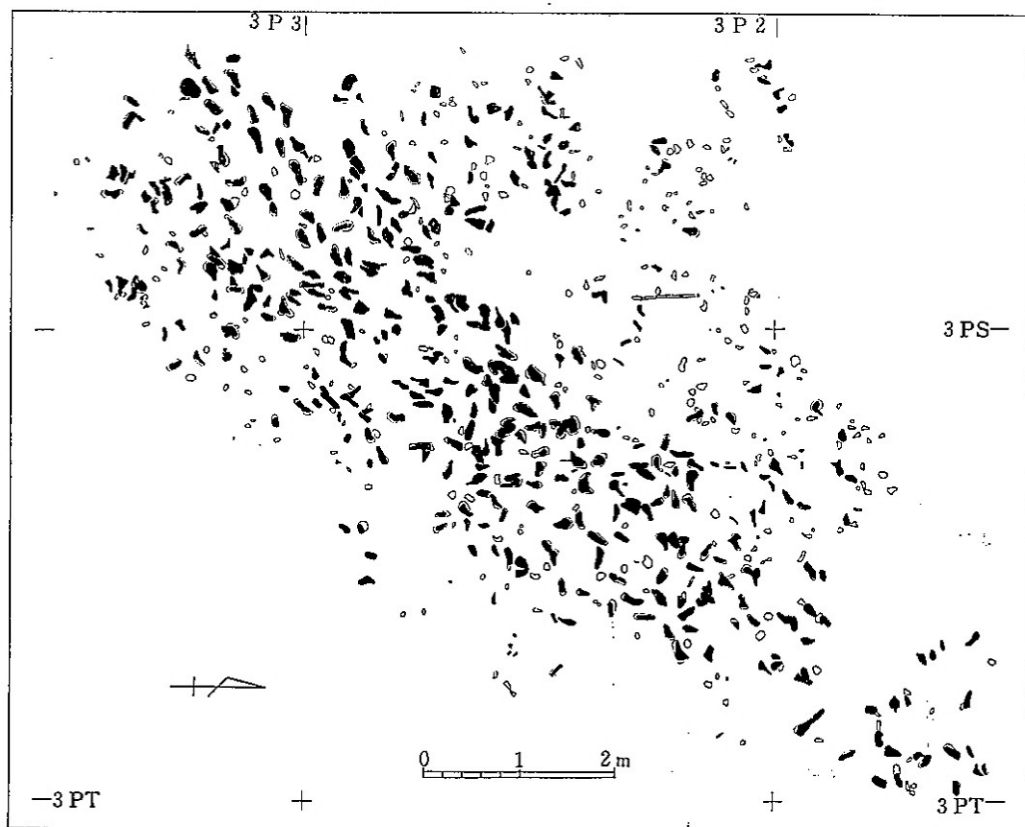
<3 P P・Q17・18、3 P S・T・U17・18・19における足跡> 後期遺構面Ⅰの包含層である黒色粘土上面で検出した。埋土は灰白色細砂である。個数は前者が122個、後者は378個検出した。両者とも遺存状況は比較的悪く、足の型のみ遺っており、足指および歩行状況まで判断する事は難しい。

4) 古墳時代前期遺構面Ⅰ

古墳時代前期遺構面Ⅰで検出した足跡は1個所のみで、溝底部で検出した。

<3 P O・P17・18・19における足跡> 溝227の底面で検出した。埋土は、溝227と同じ茶灰色砂である。個数は143個であり、溝を横断したり縦断したりする歩行状況を示すが、はたしてそれが何を意味するかは判断し難い。深さ2~4cmである。

5) 小結 以上足跡の出土について概略を明らかにしたが、これらをまとめると、出土層位では人々が生活する以前の沼沢地、溝の底部、包含層上面等である。足跡総個数は1913個であり、このうち足指、歩行状況等はごく一部のものについて、ある程度確認し得るが、これらの足跡から人々の行動の目的や生活状況まで復元するには困難さが伴うようである。



第195図 弥生時代後期遺構面Ⅰの足跡実測図(3 P S・T 2・3・4)

9 弥生時代中期遺構面Ⅰ（溝29）出土遺物についての小考

弥生時代中期遺構面Ⅰで検出された溝29は、3PR9地区から西北に延び、3PQ8地区東南隅で稍北に向きを変え3PQ7地区に至る。両端が調査区外へ続くため全長は明らかではないが、検出長は15mを測る。幅1.5~3.0m、深さ0.25~0.4mである。東の方が浅く、西へいくに従って深くなる。埋土は、東では、下層に黒灰色粘土、上層に灰黒色粘土が堆積し、西では、下層に部分的な炭化物層があり、中層は黒灰色粘土、上層に灰色粘土が堆積していた。遺物は、主に黒灰色粘土層から出土している。土器がコンテナ（43.5×33.5×15cm）に約10杯分、木器が2点、石器が3点ある（第137図参照）。

土器は、B地区の遺構のなかで最も多量に出土している。遊離破片が大多数を占め、完形品になるものは、ごくわずかである。口縁部を含む破片および完形品を1個体とすれば総数283個体出土している。これらのなかで、肉眼観察でも識別可能ないわゆる角閃石・黒雲母の砂粒を多量に含み暗褐色・暗緑褐色等を呈する土器が全体量の36.4%（103個体）を占めている。それに比して、淡茶褐色・淡黄褐色等を呈する土器は、63.6%（180個体）である。

従来、瓜生堂遺跡で作られたと考えられる土器は、“「生駒西麓産の土器」といわれる茶褐色・暗褐色の他に青緑褐色のものがたくさんある。……他地域からもたらされている土器と考えられるものは明褐色から赤みがかかった黄褐色、白灰色を呈す。”とされてきた。

従って溝29出土土器の36.4%が瓜生堂遺跡で作られたものであり、残りの63.6%のものが他地域からもたらされたとも考えられる。すなわち、河内の中心部にある瓜生堂遺跡では、過半数を占める土器が搬入品であることになる。しかし、和泉の池上遺跡では搬入品が弥生時代中期後半で1割にも満たない。また摂津などでも同様のことがうかがわれる。とすれば、瓜生堂遺跡の土器生産は、他地域とは異なる様相を示すということになるだろうか。

さて今回の発掘で瓜生堂遺跡から検出された粘土層は、約10枚にのぼる。それらのなかで、土器生産に使用されたと思われる粘土は、弥生時代前期包含層である黒褐色粘土、その上層の茶黒色粘土、および弥生時代中期遺構面Ⅰを形成する青灰色粘土の3種類である。これらの粘土は、下層にいくほど泥炭質になり植物遺体を多量に含むようになる。弥生時代前期包含層である黒褐色粘土は、含水率が高く乾燥すると収縮率も大きい¹⁾ため土器生産に適さないように思われる。残りの2種は、土器生産に適していると思われ、焼成するといずれも淡茶褐色になる。これらは、かなり微細な角閃石・黒雲母等を含んでいる。これは角閃石の母岩である閃緑岩類が、生駒西麓一帯に分布しており、楠根川の自然堤防内にある瓜生堂遺跡および周辺の低湿泥地帯には、度重なる流水堆積により生駒西麓に露頭する角閃石等が運び込まれていることからもうなずけるものである。

また、一見すれば搬入品かと思われる淡茶褐色・淡黄褐色等を呈する溝29出土土器のなかに、角閃石・黒雲母の砂粒をわずかに混入しているものがある。なお和泉の池上遺跡周辺で生産され

たと思われる土器には、角閃石³⁾を含まず、摂津でも同様なことが推察される。

以上述べてきたことから、63.6%を占める淡茶褐色・淡黄褐色等を呈する土器は、瓜生堂遺跡もしくは周辺の低湿泥地帯で作られたものと考えられる。残りの36.4%の角閃石・黒雲母等を多量に含み暗褐色・暗緑褐色等を呈する土器は、生駒西麓の段丘上で作られたものである。

このように、河内地域内での土器の細分が考えられ、土器の胎土等の特徴を明確にすることにより、河内地域内での遺跡間の交流が明らかになるであろう。

しかしながら、瓜生堂遺跡および周辺の低湿泥地帯で作られたと思われる土器のなかに、若干の搬入品が含まれている可能性もあり、今後瓜生堂遺跡で作られたと思われる土器の胎土分析を行いその組成を明らかにする必要があるであろう。

以下、実測可能な土器を中心に、瓜生堂遺跡で作られたと思われる土器と、生駒西麓産の土器を対比させて記述してゆく。

第12表 溝29出土土器器種構成表（口縁部を含む破片・完形品）

器種	産地	瓜生堂産		生駒西麓産		計	
		個数	%	個数	%	個数	%
広口壺形土器	A	19	20.6	10	19.4	68	24.0
	B	11		9			
	C	7		1			
細頸壺形土器		1	0.6	0	0		
水差形土器		4	2.2	2	1.9		
無頸壺形土器	A	0	1.1	0	1.9	68	24.0
	B	2		1			
	C	0		1			
鉢形土器	A	16	18.9	9	15.5	41	14.5
	B	6		5			
	C	3		2			
高杯形土器	A	4	6.7	1	1.0	18	4.6
	B	8		0			
蓋形土器	壺用	4	4.4	3	2.9	11	3.9
	甕用	4		0			
甕形土器		91	50.5	59	57.4	150	53.0
計		180	63.6	103	36.4	283	100
高杯形土器脚部		12		4		16	

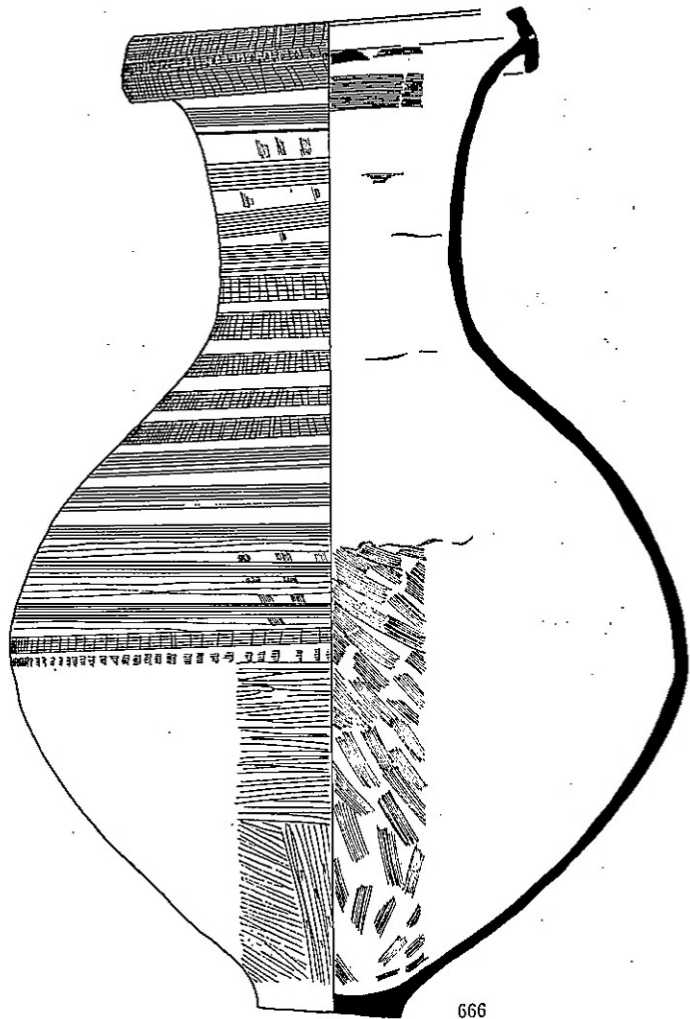
溝29出土土器は、広口壺形土器（A・B・C）、細頸壺形土器、水差形土器、無頸壺形土器（B・C）、鉢形土器（A・B・C）、高杯形土器（A・B）、蓋形土器（壺用、甗用）、甗形土器で構成している。その器種構成は、第12表のようになる。甗形土器が全体量の過半数を占め、次いで壺形土器、鉢形土器の順になる。高杯形土器、蓋形土器、水差形土器は全体量の約1割である。

＜広口壺形土器＞

広口壺形土器は、壺形土器の約9割を占める。口縁部の形態・紋様等で以下の3種に大別できる。

A 第133図。広口壺形土器の約半数を占める。口径20cm前後のものが多く、頸部の短い広口壺形土器が主にある。口縁部が外反し、口縁端部は上方へやや立ち上がり下方へわずかに拡張する。口縁部端面に、波状紋を施すものが多く、頸部および体部上半に櫛描直線紋と波状紋を交互に施しているものが多い(第133図670、674)。口縁部内面に扇形紋、波状紋等を施すものも多い。口縁端部が下方へ大きく垂下するものもわずかにあり、口縁部端面に凹線紋、棒状浮紋等を施している。口縁端部が下方へのみやや拡張するものは、口縁部端面に簾状紋、波状紋等を施している。口縁部は、ヨコナデ、刷毛目調整をする。体部までの遺存率が低いため全容を明らかにできなかった。

生駒西麓産の土器は、約1/3強を占める。頸部から大きく口縁部を外反させ口縁端部が下方へのみやや拡張する。口縁部端面の紋様は、簾状紋を施すものが多く(第133図



第136図 溝29出土広口壺形土器B (4)

668)、波状紋(第133図669)等を施すものもある。口縁部内面に紋様を施すものはごくわずかである。頸部はやや太めのものが多く、櫛描直線紋、簾状紋等を施している。第133図667は、口縁部内面に流水紋、口縁部端面に刻目紋、頸部に簾状紋・流水紋を施している。第133図675は、口縁部端面に欠損しているが、頸部は筒状に長く伸びなだらかな曲線を描いて腹部の張る体部に続き底部は平坦である。頸体部に櫛描直線紋を施している。調整は、外面頸体部に刷毛目、体部下半にヘラミガキを施している。底部中央に焼成後の穿孔がある。口径10cm内外の小型の土器もあり、第133図673は、口縁部端面に刻目紋、体部上半に1周3回に分けて櫛描直線紋を粗く施している。頸体部内外面に靱痕を3個残している。

B 第136図、第139図677~680。広口壺形土器の約3割を占める。口径20~25cmのものが多い。筒状の頸部から大きく外反し屈曲してさらに内傾ぎみに上方へのみ拡張する口縁部をもつ。口縁拡張部は広い面をなす。口縁屈曲部がやや丸味をもつものもある。口縁部端面には、波状紋、簾状紋、凹線紋等を施す。第139図678は、無紋である。凹線紋を口縁部端面に施すものは頸体部の境目に指頭圧痕状凸帯を1本めぐらしている(第139図679、680)。頸部以下の残存率が低いため、紋様は確とはしないが、体部上半に櫛描直線紋を施すものもある。Aと同様に口頸部にナデ、刷毛目調整を施している。

生駒西麓産の土器は、約4割を占める。筒状の頸部から大きく外反する口縁部がさらに上・下に拡張する。拡張部は広い面をなす。口縁部端面の紋様は、Aと同様に、簾状紋を施すものが多く刺突紋、扇形紋を併用する場合がある。扇形紋のみを数帯交互に用いる特殊例もある。頸体部に櫛描直線紋、簾状紋を施して。第139図677は、やや大型のものであり、第136図666は、唯一の完形品である。調整は、Aと同様に、口頸部内外面にヨコナデ、刷毛目を、体部外面にヘラミガキを施している。

C 広口壺形土器の約1割を占める。口径12~20cmのやや小型のものが多い。口縁部は短く外反し口縁部は、上方へわずかに立ち上がり下方へやや拡張し面をもつ。頸部は短い筒状を呈す。飾られない無紋の土器であるが、口縁部端面に斜格子紋、刻目紋を施す場合がわずかにある。外面に煤の付着しているものが約1/4強ある。生駒西麓産の土器は、1点のみ出土している。形態・技法ともに、差異がない。ナデ、刷毛目調整を施している。

<細頸壺形土器>

口頸部破片が1点のみ出土している。口径14cm、現存高11.4cm。筒状でやや裾すぼまりの頸部に、内彎ぎみにおわる口縁部をもつ。口縁部上端は面をもちわずかに内方へ突出する。口頸部がやや太く短いものである。口縁部外面に凹線紋4条、頸部外面に簾状紋・凸帯間竹管紋3個1組12個所を2帯以上施している。外面は、ヨコナデ、刷毛目調整を施している(第139図682)。

<水差形土器>

口径10cm前後。短く直立する口頸部に、腰の張った体部、体部上半に横位の半環状の把手を付

け把手側に挟りをもつ。口縁部外面に、凹線紋、櫛描直線紋を施すものと無紋のものがある。

生駒西麓産の土器は $\frac{1}{4}$ を占める。第140図690は、口頸部がやや短く体部との境が明確でなく腰の張りが強いと思われるものである。口縁部に挟りをもつかどうかは、小破片のため不明である。外面はヘラミガキ調整を施している。第140図689は、口頸部がやや外方へ開き、腰の張る体部をもち、口縁部の把手側に挟りをもつ。口縁部から体部上半にかけて波状紋、櫛描直線紋、簾状紋を組合わせて施している。紋様間に磨研線を1条ずつめぐらす。外面体部はヘラミガキ調整を施している。

<無頸壺形土器>

無頸壺形土器は、短く外反する口縁部をもつBと段状口縁部をもつCの2種がある。直口のAは出土していない。壺形土器の1割にも満たない土器である。

B 第139図684。2点出土している。口径10~13cm。短く外反する口縁部に、やや腰が張る体部をもつ。体部上半外面に櫛描直線紋を施すものと、無紋のものがある。いずれも体部上端の相対位置に2個1組の紐孔を穿っている。第139図684は、外面に煤が付着し無紋である。体部外面の調整はヘラミガキを施している。生駒西麓産の土器は1点出土しており、形態・技法ともにあまり変わりがなく、体部上半外面に簾状紋を施している。

C 第139図683。1点のみ出土している。口径9.2cm。段状の口縁部を強いヨコナデにより凹ませている。体部上半外面に簾状紋を施し紋様間に磨研線を1条めぐらしている。体部上端の相対位置に2個1組の紐孔を穿っている。体部内面も丁寧にヘラミガキ調整する生駒西麓産の土器である。

<鉢形土器>

鉢形土器には、直口のAと短く外反する口縁部をもつB、段状口縁のCがある。約6:3:1の割合である。

A 第140図692、693、694。口径20~30cm内外のやや大型のものが主にある。口縁部はやや内傾して立ち上がり底部から斜め上方に開いた深めの体部をもつ。口縁部外面に、凹線紋を施すものが約 $\frac{1}{4}$ を占める。その他には、口縁部外面に凹線紋状に強いヨコナデを1周させるもの（第140図692）、波状紋を施すもの、無紋のものなどがある。また、口径10cm内外の小型の土器もあり、口縁部外面には、凹線紋を施している。脚台部がつくと思われるものもある（第140図693）。調整は、体部外面をヘラミガキするものが多い。

生駒西麓産の土器は、約 $\frac{1}{4}$ を占める。口径10cm内外の小型のものが主にある。やや浅い碗状の体部をもつ。無紋の土器が約 $\frac{1}{2}$ を占める。口縁部外面に刻目紋、列点紋、簾状紋等を施している。体部が深く脚台部をもつものもある（第140図691）。

B 第140図695、697。口頸部が屈曲して短く外反し口縁端部が下方へわずかに肥厚し、口縁部内面が端面よりわずかに突出するものと、口頸部が「く」の字状に屈曲し口縁端部がわずかに立

ち上がり垂下する頸状口縁をもつものがある。前者が大多数を占める。いずれも腰に稜を有し、内傾して立ち上がる体部をもつ。口縁部端面は無紋のものと、列点紋、波状紋を施すものがある。体部上半に櫛描直線紋、簾状紋等を施している。内外面にヘラミガキ調整を施すものが多い。

生駒西麓産の土器は、約半数を占める。口縁部が肥厚せず面になし体部が丸味をもつものと、口縁部がわずかに垂下し腰に稜があり内傾して立ち上がる体部をもつものがある。前者が1点のみ出土している。口縁部端面に刻目紋、列点紋、簾状紋等を施す。体部上半に櫛描直線紋、簾状紋等を施す。紋様最下端に波状紋、列点紋、扇形紋等を付加する場合もある。内外面にヘラミガキ調整を施すものが多い。

C 第140図696。粘土紐を1本貼りめぐらした段状口縁部に、腰に稜を有しやや内傾して立ち上がる体部をもつ。口縁部端面は無紋で、体部上半に櫛描直線紋、簾状紋、波状紋等を組合わせて用いる。無紋のものも1点ある。

生駒西麓産の土器は、口縁部端面に波状紋、列点紋を施し、体部上半に簾状紋を施している。

B同様に内外面ともヘラミガキ調整をするものが多い。

B、Cともに口径20~30cmのやや大型のものがほとんどである。

<高杯形土器>

高杯形土器には、直口のAと水平口縁をもつBの2種がある。

A 第140図698、699。口径16~20cmのものが多い。皿状の杯部のものと。杯部中央に稜をもつものがある。前者は無紋のものがある。いずれも鉢形土器Aと同様に口縁部外面に凹線紋を施すものが多い。生駒西麓産の土器は1点のみ出土しており、皿状の杯部をもち無紋である。内外面にヘラミガキ調整を施している。

B 第140図700。口径20~26cm。斜外方に伸びる杯部と、水平に伸びさらに屈曲して垂下する口縁部をもつ。杯部と口縁部の境目に断面三角形、四角形等の凸帯を1本めぐらしている。紋様は施されない。内外面にヘラミガキ調整を施している。

脚台部破片では総数20個体出土しているが、脚台部のみではA・Bの区別はできない。高杯形土器の脚柱は、中空のものがほとんどを占め、半中実のものが1点のみある。内面に絞目を残すものが多く、外面はヘラミガキ調整を施している。脚台部は裾広がり、脚台端部は面をもつ。脚台端部は上・下にわずかに拡張するものが大半を占める。脚台端部が上・下のどちらかのみわずかに拡張するものもある。いずれも外面はヘラミガキ調整を施している。生駒西麓産の土器は約3割を占める。脚柱には、中実のもの、半中実のもの、中空のもの、中空で脚台部との境目を円板充填法でふさぐものなどがある(第140図702)。脚台部は裾広がり、脚台端部は面をもつ。脚台端面は、上方にのみわずかに拡張するもの、上・下にわずかに拡張するもの、下方にのみわずかに拡張するものなどがある。いずれも脚柱・脚台部外面にヘラミガキ調整を施している。

脚柱・脚台部ともに紋様を施すものは出土していない。また、煤の付着状況により破損後、甕用蓋形土器に転用したと思われるものが数例出土している。

<蓋形土器>

蓋形土器には、壺用蓋形土器と甕用蓋形土器の2種がある。壺用蓋形土器が大半を占める。

壺用蓋形土器 第139図685、686。口径10～15cm。笠状の体部中央に突出するつまみをつける。口縁端部は面をもつ。口縁端部は脂厚せずにそのままおわるものと、わずかに垂下するものがある。周縁の相対位置に2個1組の紐孔を穿つ。外面の調整はヘラミガキを施すものがほとんどである。生駒西麓産の土器も約半数出土しており、形態・技法ともに差異がない。

甕用蓋形土器 第139図688。口径12～18cm。笠状の体部中央につまみをつけるやや丈高の土器である。口縁端部は面をもち、壺用蓋形土器と同様に肥厚せずにおわるものと、わずかに上・下に拡張するものがある。外面は刷毛目調整をするものがほとんどである。第139図688は、外面にヘラミガキ調整を施している。小破片のため紐孔の有無は判らないが壺用蓋形土器の可能性もある。内外面ともに煤が付着しているものが多いのは、甕形土器と共通している。

<甕形土器>

第141、142図。口径12～25cmの小型のものと、30cm以上の大型のものがある。

小型のものには、①頸部の屈曲が丸味をもち口縁端部が肥厚しないもの、②「く」の字形に屈曲し口縁部下端のみをわずかに拡張するもの、③「く」の字形に屈曲し口縁端部を上方へのみ拡張するもの、④「く」の字形に屈曲し口縁端部を上・下に少し拡張するもの、⑤④の口縁部端面に強いヨコナデもしくは凹線紋を1条施すものの5種に大別できる。過半数のものが③であり、次いで②、④、⑤、①の順になる。⑤のなかには、体部上半に押捺紋を施すものがある。体部内外面の調整は刷毛目を施すものが多く、体部外面下半をヘラケズリするものが多い。生駒西麓産の土器は約8割を占める。過半数が②であり、次いで①、③の順となり、④、⑤は出土していない。体部内外面の調整は、ヘラミガキを施すものが多く、刷毛目、ヘラケズリを併用している場合もある。なお、内外面に粗い刷毛目を施す近江系の甕も2点出土している。ともに生駒西麓産の土器である(第141図710、711)。

大型のものは、約2割を占め、前述の③、④の2種に大別できる。①、②、⑤は出土していない。③には頸部外面に指頭圧痕紋凸帯を1本施すものがある(第142図724)。体部内外面の調整は、小型のものと同様に刷毛目調整を施すものが多い。生駒西麓産の土器は、約4割を占める。①～④の4種に大別できる。②が約半数あり、次いで③、①、④の順である。頸部の屈曲は全体的に丸味をもっている。体部内外面の調整は小型のものと同様にヘラミガキを施すものが多い。刷毛目を併用する場合もある。第141図718は、体部内面下半に縦方向の刷毛目後粗いヘラミガキを施し、粗い縦方向のヘラケズリを加えている特殊例である。

小型・大型ともに、煤の付着しているものが多い。

以上、器種ごとの特徴を概括した。

それに加えて、装飾性のある器種（壺形土器、水差形土器、鉢形土器、高杯形土器）の頸体部破片のみの紋様についてみると、第13表のようになる。櫛描直線紋が全体の過半数を占め、次いで波状紋（もしくはそれとの組み合わせ）、簾状紋（もしくはそれとの組み合わせ）で、全体の約9割を占める。残りの1割強に、凹線紋、凸帯紋、扇形紋、斜格子紋、列点紋等がある。

生駒西麓産の土器の紋様は、櫛描直線紋が全体の約半数を占める。次いで簾状紋（もしくはそれとの組み合わせ）で、全体の約9割近くを占める。残りの1割強に列点紋、扇形紋、波状紋、斜格子紋等がある。凸帯紋、凹線紋は出土していない。

以下、溝29出土土器の特徴を記述してゆく。

1、広口壺形土器A・B・Cの割合は、5：4：1である。

広口壺形土器Aには、口縁端部をわずかに上・下に拡張させ口頸部の短いものが主にあ

第13表 溝29出土土器紋様構成表（頸体部破片のみ）

紋様	産地	瓜生堂産		生駒西麓産		計	
		個数	%	個数	%	個数	%
櫛描直線紋		80	51.9	56	49.2	136	50.7
波状紋		14	26.6	0	3.5	45	16.8
波・直		27		4			
簾状紋		12	9.2	23	36.8	56	20.9
簾・直		1		7			
簾・円浮		1		1			
簾・波		0		11			
扇形紋		2	1.3	2	3.5	6	2.2
扇・直		0		2			
列点紋		1	1.3	2	4.4	7	2.6
列・直		1		3			
斜格子紋		2	1.3	3	2.6	5	2.0
凸・簾		1	4.5	0	0	7	2.6
凸・波		1		0			
指頭圧痕紋凸帯		5		0			
凹線紋		3	3.9	0	0	6	2.2
凹・波		3		0			
計		154	57.5	114	42.5	268	100

り、波状紋・櫛描直線紋を併用する場合が多く、口縁部端面に凹線紋が施されることがあっても頸部には施されない。口縁部端面の下方への拡張はさほど行なわれない。生駒西麓産の土器は口縁部を下方へのみやや拡張する。簾状紋が多用され、口縁部を立ち上がらせるものはない。凹線紋・凸帯を用いる土器もない。

広口壺形土器Bには、口縁部を上方へのみ拡張し、口縁部端面に凹線紋を施すものが増え口縁拡張部の屈曲がやや丸味をもつものが現われる。装飾性に富む土器というよりは、やや無紋化傾向の強い土器が多い。それに比して、生駒西麓産の土器は、口縁拡張部は上・下に拡張するものが普通であるが、上方へのみ拡張するものもわずかにある。Aと同様に簾状紋を施すものが多く装飾性に富むものであるが、施紋の仕方がやや雑になる。A同様に、凹線紋、凸帯紋は用いられない。

広口壺形土器Cの割合は、広口壺形土器の約1割にあたり、形態的には、Aの口頸部の短いものとあまり変わりがない。生駒西麓産の土器も、形態・技法等差異がない。広口壺形土器において装飾性に富むものが圧倒的多数を占める。

- 2、細頸壺形土器は、口頸部の内彎がややゆるやかになり、口縁部に凹線紋、頸部に凸帯紋を施している。生駒西麓産の土器は出土していない。
- 3、水差形土器の口縁部は水平で、把手側に扶りをもつ。口縁部に凹線紋を施すが、条数は少なく、頸部にまで施すものはない。生駒西麓産の土器も同様な形態をもつが、凹線紋は使用されない。
- 4、無頸壺形土器は、出土例が少なく全体像は明らかではない。Aが出土しておらず、B、Cがわずかに出土している。形態・技法ともに、生駒西麓産ともあまり差異がない。大型のものは出土しておらず、凹線紋を施す場合もない。
- 5、鉢形土器A・B・Cの割合は、6：3：1である。

鉢形土器Aに凹線紋が多用され、やや大型のものが主にある。深鉢形のものが多い。これに比して、生駒西麓産の土器は小型のものが多く、浅鉢形で無紋のものがほとんどである。

鉢形土器Bに、鬚状口縁④をもつものが出現し、B、Cいずれもやや大型のものが主にある。体部上半の紋様は、簾状紋を施す場合が多く、凹線紋は施されない。生駒西麓産の土器ともあまり差異のない器種である。

- 6、高杯形土器のA・Bの割合は、1：2である。

高杯形土器Aには、皿状の杯部のものと杯部中央に稜をもつものがある。いずれも凹線紋を施すものが多く、無紋のものもある。生駒西麓産の土器は、皿状の杯部のものである。

高杯形土器Bは紋様を施すものはなく、水平口縁部や垂下部がやや拡張される。

高杯形土器の脚柱部には、中空のものがほとんどで、半中実のものが1点ある。脚台端部は上・下に拡張するものが多い。生駒西麓産の脚柱部は、中実のもの、半中実のもの、中空

のもの、脚柱と脚台部との境目を円板充填法でふさぐものがあり、脚台端部も、上方のみ、上・下、下方のみに拡張するものがあり変化に富む。

7、蓋形土器の壺用・甕用の割合は、1：1である。壺用・甕用ともに小型のものである。生駒西麓産の甕用蓋形土器は出土していない。壺用蓋形土器は、形態・技法ともに変わりがない。

8、甕形土器の小型と大型の割合は、4：1であり、小型、大型ともに煤を付着するものが多い。

甕形土器小型の口頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部を上方へ立ち上がらせるものが過半数を占め、上・下にやや拡張し口縁部端面に強いヨコナデおよび凹線紋を施すものが約1割ある。生駒西麓産の土器は、第Ⅱ様式から引き継ぐ形態をとるものがあるが、口頸部を「く」の字形に屈曲し、口縁端部を上方および下方へのみやや拡張するものが強ある。

甕形土器の大形のもの、口頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部を上方および上・下方へやや拡張する。生駒西麓産の土器は、口頸部がやや丸味をもって外反し、口縁端部を下方へのみやや拡張するものが主にある。

溝29出土土器には、壺形土器A・B、鉢形土器A、高杯形土器Aに、凹線紋を多用され始めるが、その条数は、1条～5条であり、3、4条を施すものが多い。生駒西麓産の土器は、なお籐状紋を多用しているが、その施し方は雑なものが多くなり、凹線紋はまだ出現しない。短頸壺形土器、器台形土器の出現はみられず、飾られる土器（広口壺形土器A・B、細頸壺形土器、水差形土器、無頸壺形土器B・C、鉢形土器A・B・C、高杯形土器A・B）の無紋化傾向は、あまり示されない。

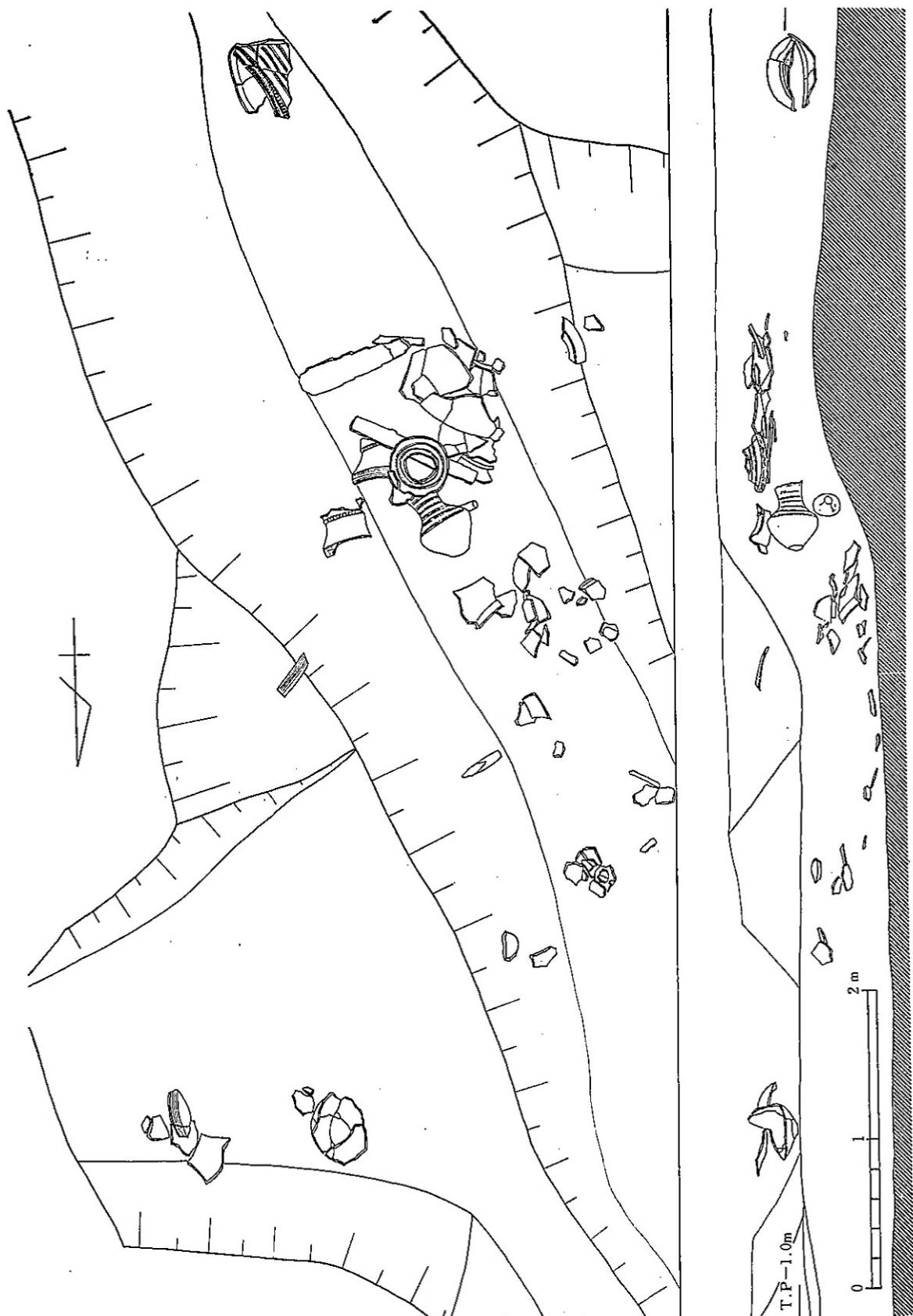
以上、生駒西麓産の土器と比較しながら、瓜生堂遺跡で作られたと思われる低湿泥地帯の土器の特徴を述べてきた。今回は、溝29出土土器のみを取りあつたが、今後さらに、各遺構出土のものや、包含層出土の土器の特徴を明らかにしてゆきたい。

溝29出土の木器には、高杯（第115図W-25）、弓（第115図W-26）の2点があり、この他に板材や先端を加工した杭状のものが数点出土している。石器では、石庖丁1点（第102図S-65）、柱状片刃石斧1点（第103図S-107）、砥石1点（第112図S-144）の計3点が出土している。

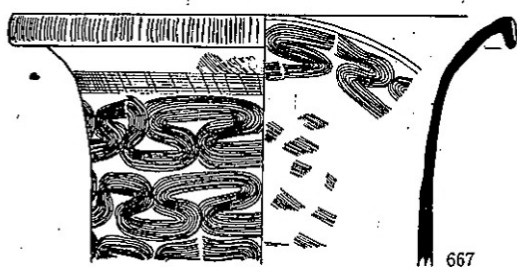
注 1) 「瓜生堂遺跡Ⅱ」 瓜生堂遺跡調査会 1973.3 P.52.53

2) 「池上遺跡 第2分冊 土器編」 (財)大阪文化財センター 1979.3 P.74

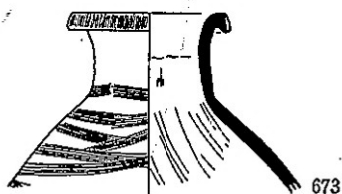
3) 同 上 P.190



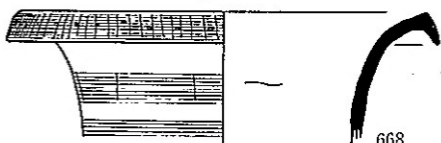
第137图 沟29平面·断面图



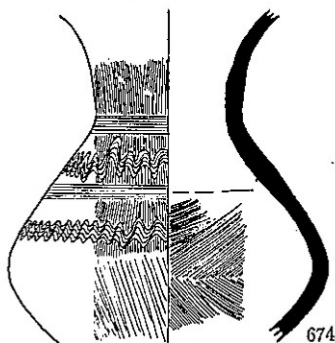
667



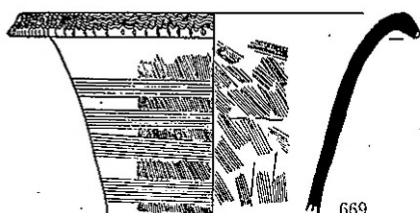
673



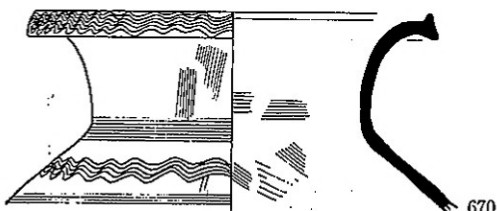
668



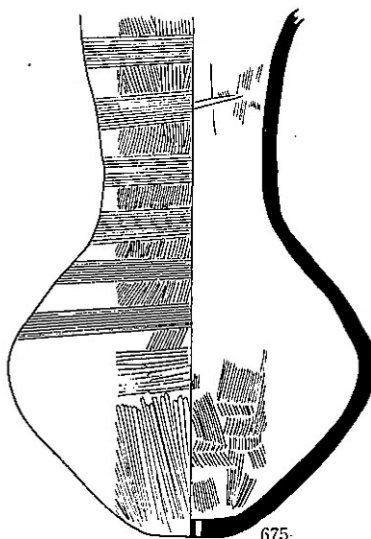
674



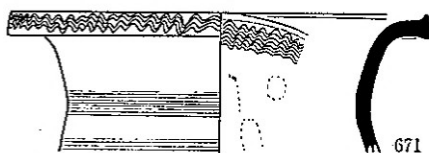
669



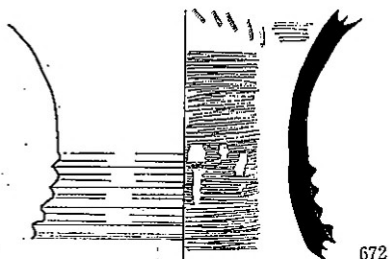
670



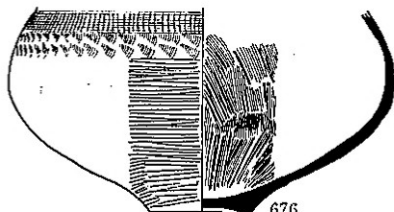
675



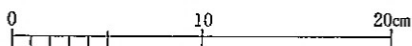
671



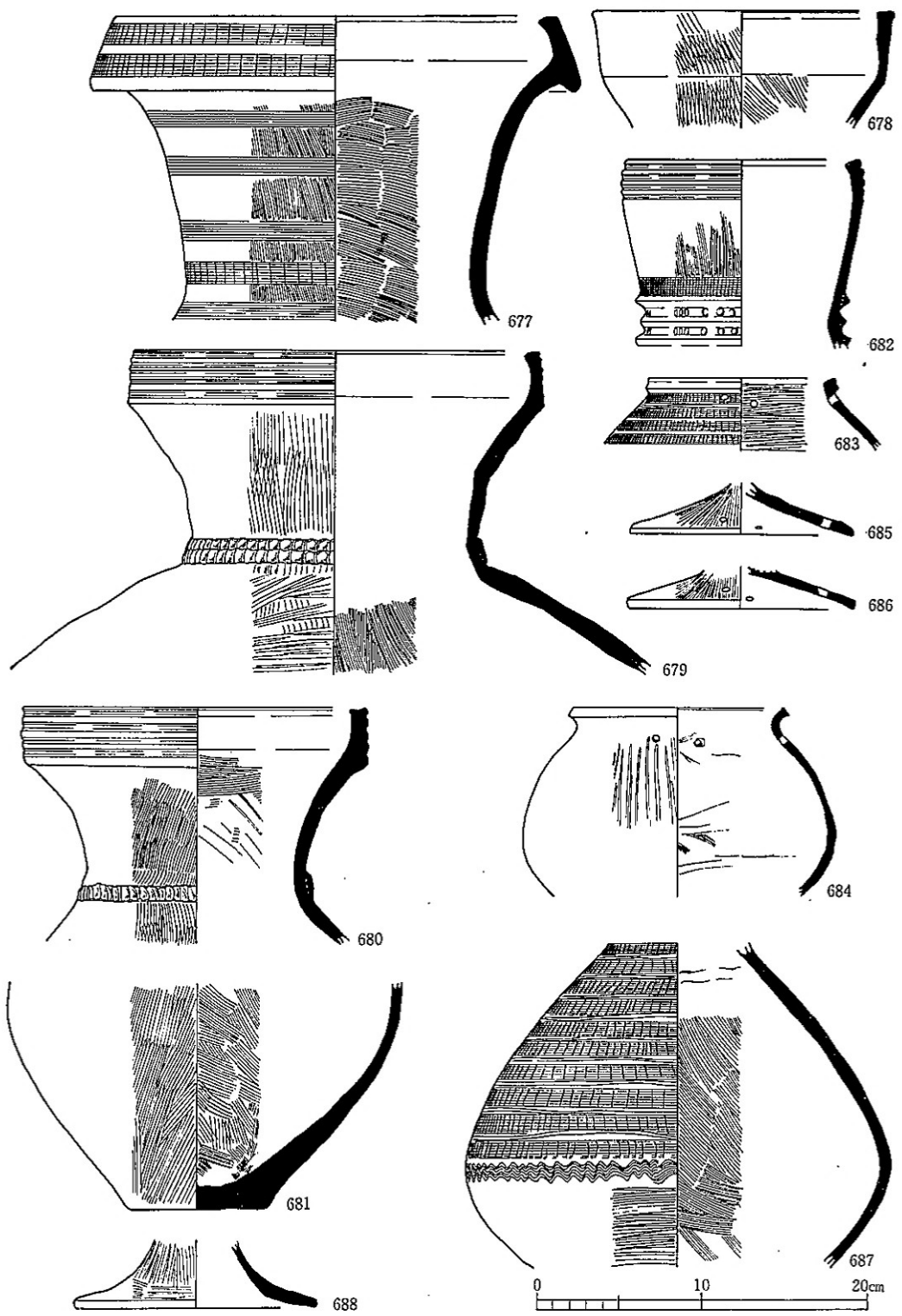
672



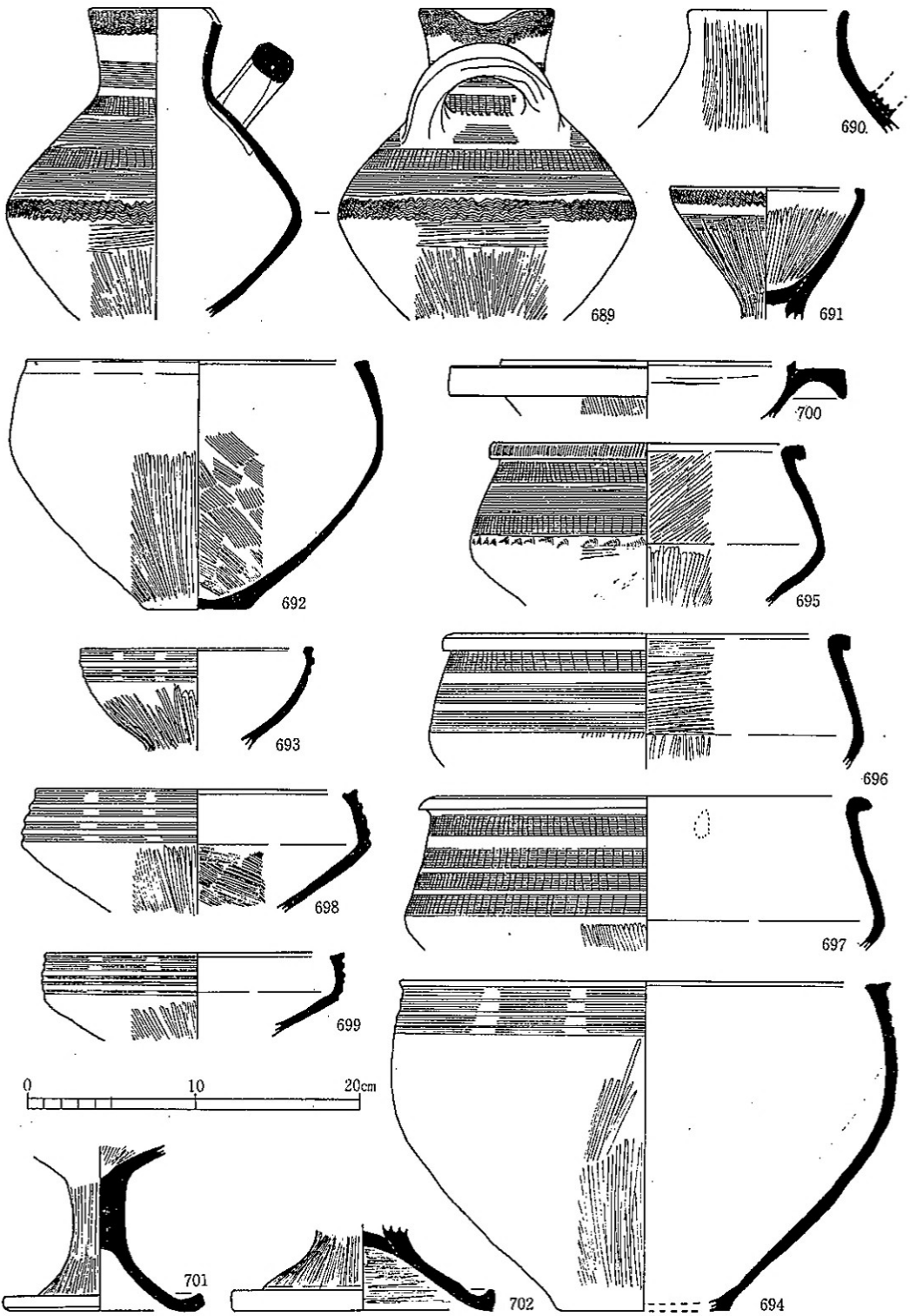
676



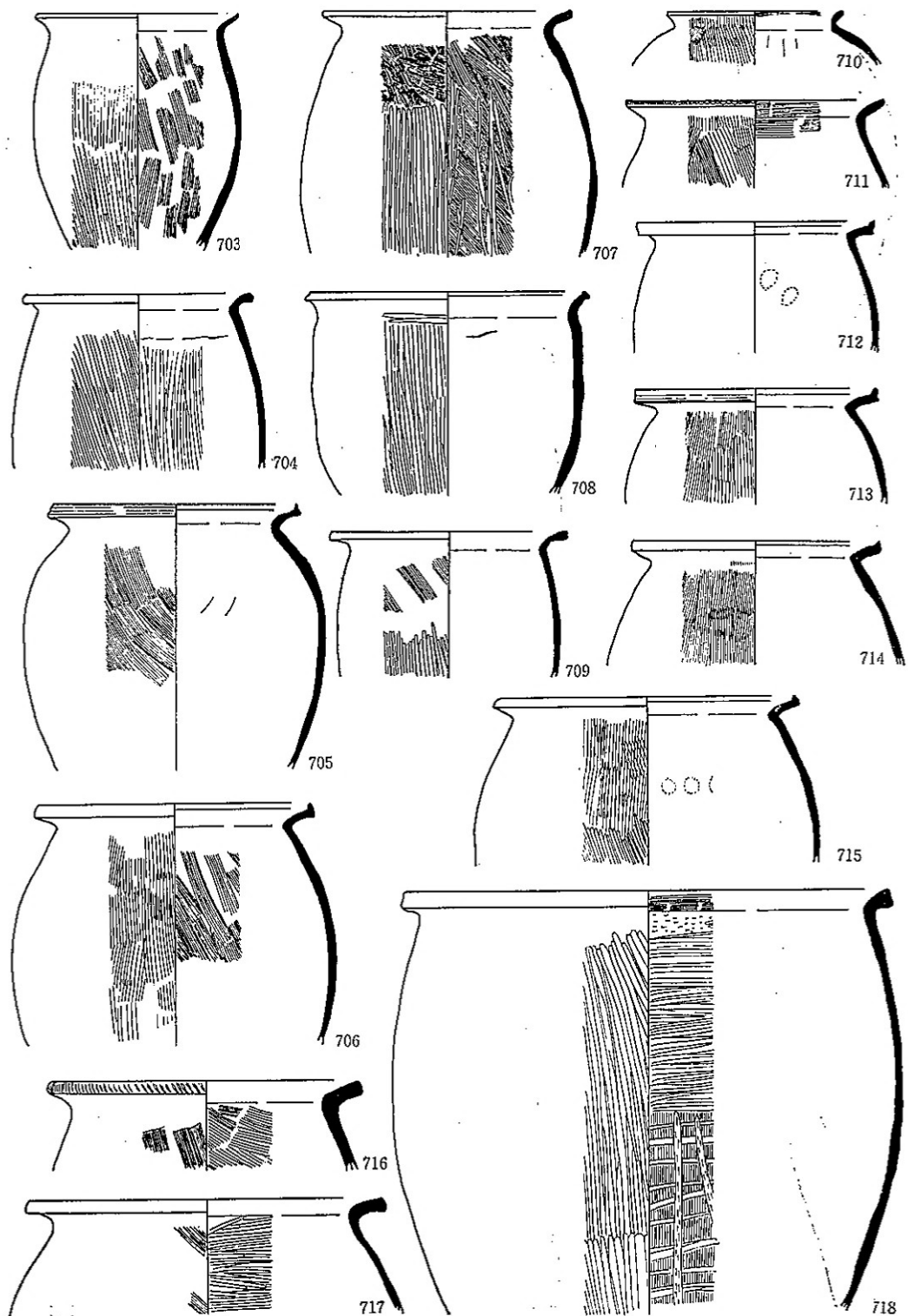
第138图 沟 29 出土土器



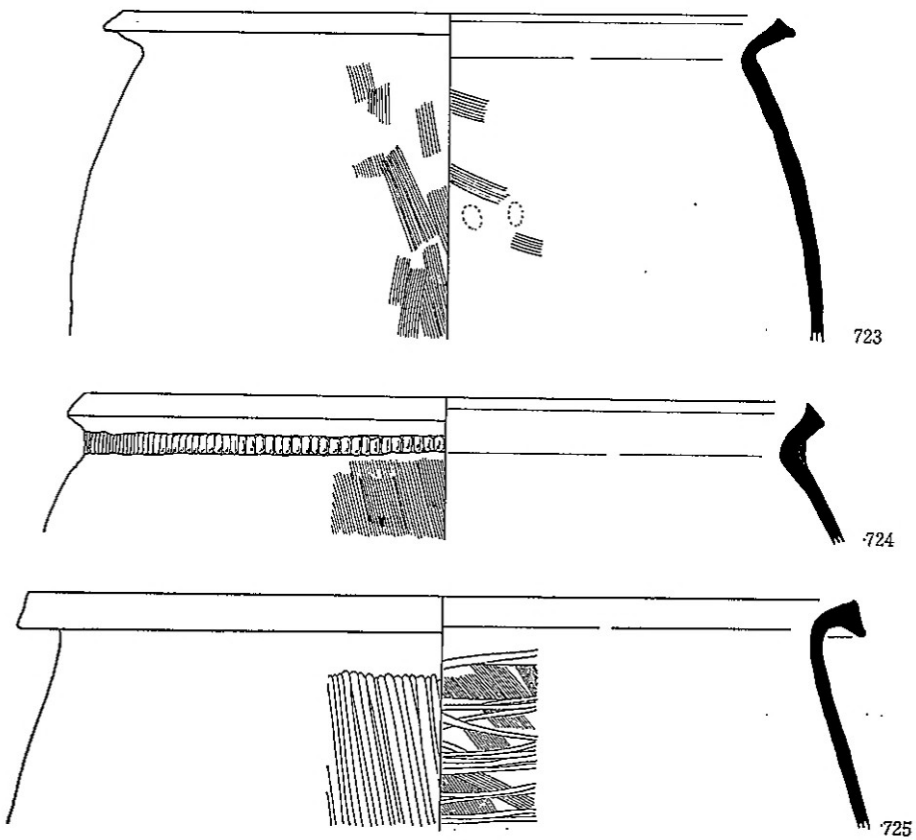
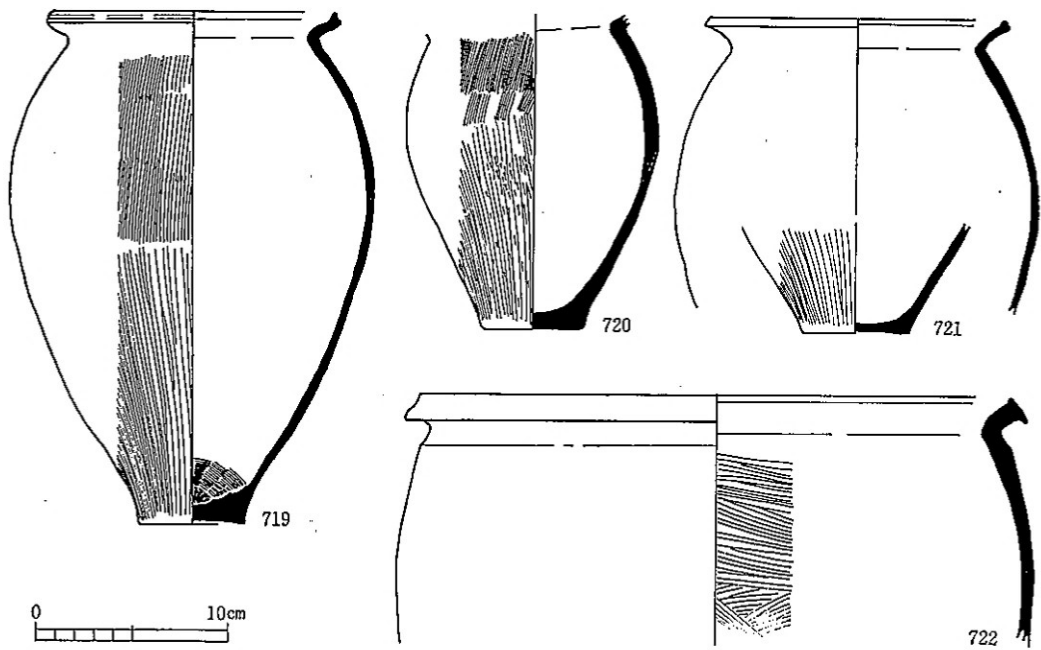
第139图 沟 29 出土土器



第140图 沟 29 出土土器



第141图 沟29出土土器(1/4)



第142圖 溝 29 出 土 土 器

10 B地区出土の庄内式土器について

1) はじめに

「庄内式土器」は、田中琢氏により命名されたものであり、氏の論文「布留式以前」で提唱されて以来、古墳時代前期の土器として通ってきた。しかし、ここ数年は都出比呂志氏の「弥生第Ⅶ様式」説により、弥生時代終末の土器と考える人も多くなってきているようであるが、今回の報告では、そのまま古墳時代前期の土器として扱った。また、「庄内式土器」の呼称は一般的に甕形土器の特徴をもとに行われる場合が多い。

「庄内式土器」は非常に明瞭な胎土を有しているところから、他地域へ運ばれても判別し易い。胎土は、前項の中でいう生駒西麓産の土器と全く同じであり、「角閃石、黒雲母等を多量に含み黒褐色、茶褐色を呈する」ものである。この種の胎土を有する土器は古くから生駒西麓産とされてきたものである。「庄内式土器」の出土例は畿内においては、いたるところにあり、量的には少ないが西日本一帯で検出例が増加している。各地で報告され、まとめられているが、「庄内式土器」の生産地と考えられる生駒西麓では少ない。

和泉、大和、摂津ではある程度まとめられているが、「庄内式土器」自体は搬入品であり、併行する各地の土器編年的な様相が強く、「庄内式土器」自体を明確に編年したものはほとんどない。また、河内においても各遺跡で相当数検出されているが、原口正三氏が上田町遺跡で「上田町Ⅱ式」を提唱され、河内の中でも、いわゆる庄内式とそうでない甕が混在することを指摘された。しかし、生駒西麓の遺跡で庄内式甕のみを検出する遺跡は報告されておらず、庄内式甕の編年等についてはあまりまとめられていない。

今回の調査ではB地区において僅かにまとまった土器を検出した。B地区には居住区域と考えられる遺構があり、遺構の集中する北半部は、他地区よりも明らかに高く、南半部から南の各調査区は低い。低くなっているのは瓜生堂遺跡だけではなく、南に隣接する巨摩廃寺遺跡も同様であり、更に南の若江北遺跡でやっと高くなっていく。瓜生堂遺跡のB地区から若江北遺跡までは500mあり、この間は生産区域である水田跡が主に検出された。そのため、他調査区では遺物が少なく、遺物量はB地区に集中した。遺構はそれほど多い訳ではないが、割合まとまった量の遺物を検出した遺構がいくつかあり、また、ある程度、層位的に取り上げられたことから、この時期の土器を考える良好な資料となり得ると考えられ、いわゆる庄内式甕等を分類してみた。

しかし、前項でも明らかなように、瓜生堂遺跡においても庄内式甕は搬入品と考えられるものである。そのため、本当の庄内式甕の編年となり得るかどうかの問題もあるが、和泉、大和、摂津で考えられたものよりも、明らかに庄内式甕が多く、庄内式でない甕もあるが、量的には少なく、ある程度、生駒西麓に近い編年が考えられるであろう。以下、各遺構の土器を説明していくことにする。

2) 遺構・各層位出土土器

ここでは、古墳時代前期遺構面Ⅰ、Ⅱにおいて検出した溝224、土器溜1・2・3、土壙330の遺物について簡単に説明する。

A 溝224 (付図11~13)

溝224の埋土は、地区によって堆積状況が異なっているが、すべての地区において共通する層があるため、上下関係は明らかである。4層に分けられ、最下層が黄灰色粘土、下層が灰色粗砂(褐色粘土混)、中層が灰黄色粘土、上層が茶褐色粘土である。最下層は3PR5・6地区、3PT・U7地区の2個所で確認した。ただし、3PR5・6地区では非常に薄い堆積であり、この層からは全く遺物を検出しなかった。下層は全地区で確認した。中層は3PR6・7地区、3PT・U7地区の2個所で確認した。上層は中層のあった2個所で確認した。上・中・下層からは多量の遺物を検出した。以下、層毎に遺物の説明をする。

<下層>から検出した土器は、完形品もあるにはあるが、破片の方が多いようである。壺(726・728・730・732・734・737・747・756)、甕(769・770・773・774・776・779・787)、鉢(741~743・748)、高杯(757~761)、器台(750~753)、手焙形土器(749)と各器種が揃っている。

(726)は口頸部の破片である。口径11.8cm、口縁部高9.2cmを測る。口縁部は、頸部からほぼ垂直に立ち上がり、斜上へ外反する。頸部内面には稜がある。頸部外面に竹管紋が施されている。口頸部の調整は不明である。(732)は口頸部の破片である。口径15.4cm、口縁部高5.1cm、頸部径13.7cmを測る。肩の張る体部と考えられる。頸部は内傾気味にほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は斜に短く外反する。口縁端部は上に立ちあがり、下には粘土を張り足し、幅広い外端面をつくっている。調整は内外面ともに不明である。(733)は口頸部の破片である。口径17.9cm、口縁部高3.6cm、頸部径12.6cmを測る。肩のあまり張らない体部と考えられる。頸部は斜上へ立ち上がり、口縁部は斜外へ屈曲する。口縁端部は僅かに立ち上がり、外端面を持つ。口縁部内外面、頸部外面の調整はヨコナデ、頸部内面は左回りの刷毛目を施している。(734)は口頸部の破片である。口径16.6cm、口縁部高5.4cm、頸部径8.7cmを測る。頸部は斜上へ立ち上がり、口縁部は斜外へ屈曲する。口縁端部は僅かに立ち上がり、下方へも僅かに拡張し、外端面を持つ。口縁部内外面、頸部外面の調整はヨコナデ、頸部内面は左回りの刷毛目を施している。頸部外面下半には竹管紋が2段、口縁外端面には一部波状紋になる直線紋、口縁部内面には稚拙な波状紋を施している。(729)は体部中央以下を欠失した破片である。口径14.4cm、口縁部高3.3cm、頸部径10.3cm、現存高9.5cmを測る。体部は球形と考えられる。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上へ短く外反する。口縁端部は丸い。調整は内外面ともに不明である。(737)は口頸部の破片である。口径23.4cmを測る。頸部は斜上へ立ち上がり、口縁部は斜外へ外反し、更に斜上へ高く立ち上がる。口縁端部は丸い。いわゆる二重口縁の壺である。口頸部の調整は内外面ともにヨコナデを施している。頸部外面、口縁外端面、口縁部内面に波状紋を施しており、口縁外端面には2個

1対の竹管紋のついた円形浮紋を6個所施している。(747)は底部の破片である。現存腹径11.6cm、現存高5.5cm、底径2.8cmを測る。球形の体部に突出しない平底を持つ。調整は内外面ともに不明である。(756)は底部を欠失している。口径23.7cm、腹径50.1cm、現存高40.0cmを測る。頸部は斜上へ立ち上がり、口縁部は斜上へ短く外反し、更に斜上へ僅かに内彎気味に立ち上がる。口縁端部には外傾する面を持つ。体部は肩の張らない球形である。体部の調整は、外面が斜方向のヘラミガキ、内面には斜方向の刷毛目を施している。口頸部は、頸部外面が縦方向の刷毛目、他はヨコナデを施している。体部上端には完全に回らない波状紋が2帯、口縁立上り部に不整形な波状紋が施されている。

甕は庄内式(769・770・773・774・787)とそうでないもの(776・779)の2種類に大別できる。(769)は口頸部の破片である。口径20.2cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁端部は内傾気味につまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部上端の調整は、外面が左下りの細い叩目、内面が左上方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデである。(770)は完形品である。口径14.3cm、腹径16.2cm、器高16.4cmを測る。体部は球形で丸底である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上へ外反する。口縁端部は上へつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下りの中細の叩目の後に下半部にナデと斜方向の刷毛目、内面には斜方向のヘラケズリを施している。口縁部は内外面ともにヨコナデである。(773)は底部を欠失している。口径16.5cm、腹径20.5cm、現在高18.6cmを測る。体部は球形であるが、下半部がやや尖り気味である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上へ外反する。口縁端部は上へつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目の後に上端部のみ右下りの刷毛目、外面下半がナデ及び斜方向の刷毛目、内面下半が縦方向、内面中央が横方向、内面上半が左上方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデであり、外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(774)は完形品である。口径18.2cm、器高20.3cm、腹径21.0cmを測る。体部は球形で丸底である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上へ外反する。口縁端部はつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目、下半が上方向の刷毛目、内面が斜・横方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデであり、外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(787)は底部を欠失している。口径17.4cm、腹径22.4cm、現存高16.8cmを測る。体部は球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目、外面下半が上方向の刷毛目、内面が斜・横方向のヘラケズリである。(776)は完形品である。口径13.1cm、腹径13.6cm、器高12.7cm、底径2.5cmを測る。体部はイチジク形であり、底部は突出しない。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。体部の調整は、外面上半は叩目の後にナデ、下半が水平の中細の叩目、内面が一部刷毛目の後にナデである。口縁部はヨコナデで

ある。頸部外面及び体部上端には左下りの叩目が認められる。(779)は完形品である。口径14.6cm、腹径19.0cm、器高19.8cm、底径4.2cmを測る。体部は球形であり、僅かに突出する底部を持つ。頸部は丸い「く」の字形を呈し、口縁部は斜上に外反する。体部の調整は、外面上半が左下りの粗い叩目、中央が水平の粗い叩目、下半が左下りの粗い叩目、内面上半・中央が一部ヘラケズリの後ナデ、下半が左上りの刷毛目である。

鉢は小型品ばかりで大型品は検出していない。(741)は口頸部及び体部上半の破片である。口径10.6cm、腹径8.7cm、現存高4.2cmを測る。体部は不明である。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は斜上に外反する。調整は内外面ともに不明である。(742)はほぼ完形品である。口径9.1cm、腹径8.9cm、器高8.2cm、底径1.5cmを測る。体部は球形であり、底部は突出しない。僅かに上げ底である。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は斜上に外反する。調整は内外面ともに不明である。

(743)は口頸部及び体部上半の破片である。口径10.0cm、頸径9.0cm、現存高4.5cmを測る。体部は頸部が最大を測る椀形を呈する。口縁部は斜上に内彎する。調整は内外面ともに不明である。(748)は口頸部を欠失している。底径4.8cm、現存高8.3cmを測る。体部は底部から斜上に立ち上がり、筒状を呈する。底部中央に径0.8cmの穿孔がある。体部の調整は、外面が右下りの中細の叩目、内面は底部にヘラ痕が認められるが不明である。

高杯は少なく、完形品もない。(757)は杯体部及び口縁部の破片である。口径20.8cm、杯底径7.5cm、現存高5.8cmを測る。杯体部は杯底部から斜に伸び、口縁部は屈曲して斜外に伸びる。口縁端部は上へつまみ上げられており、外端面を持つ。調整は、外面は体部と口縁部の境に一部刷毛目が認められるがヨコナデ、内面は斜方向のヘラミガキである。(759)は脚部を欠失している。体部は杯底部から斜に伸び、口縁部は僅かに屈曲し、斜外に伸びる。体部と口縁部は明瞭ではない。杯底部外面は緩やかな曲線を描くが、内面は水平である。調整は内外面ともに不明である。(761)は杯体部及び口縁部を欠失している。杯底径10.1cm、脚端径15.5cm、脚高8.7cm、現存高10.3cmを測る。杯底部は斜外に伸び、体部は立ち上がる。杯底部内面は杯底部外面に添い、中央に径0.4cm、深さ0.3cmの穴がある。脚柱部は僅かに下へ広がり、脚裾部は屈曲して斜外に伸びる。脚裾部に円孔が4箇所ある。調整はほとんど不明であるが、脚柱部内面に絞り痕、脚裾部内面に横方向の刷毛目が認められる。(760)は脚裾部の破片である。脚端径15.7cmを測る。脚裾部は脚柱部から屈曲し、斜外に伸びる。裾部中央に凹線が回っており、段の名残りと考えられる。この僅か上に円孔が4箇所ある。調整は、外面が部分的に横方向のヘラミガキ、内面は不明である。

器台は小形と椀形の2種類ある。(750・751)はともに脚裾部を欠失している。口径9.4cm・11.0cm、椀高3.8cm・6.4cm、現存高5.0cm・6.5cmを測る。椀部は半球形を呈する。脚柱部はともに短い、(750)より(751)が僅かに裾広がりである。(750)は調整不明である。(751)は口縁部外面がヨコナデ、他は不明である。(752)は脚部の破片である。脚端径18.0cm、現存高4.3cm

を測る。脚柱部は短く、脚裾部は緩やかに曲がって斜外に伸びる。脚裾部中央に円孔が4個所ある。調整は不明であるが、脚裾部内面に刷毛目が僅かに認められる。(753)は脚台部の破片である。脚端径10.2cm、現存高5.0cmを測る。受け部との接合点から斜に伸びる。脚端部外面に内傾面を持つ。脚台部中央やや上方に円孔が4個所ある。調整は内外面ともに不明である。

<中層>から検出した遺物は完形品が多いのであるが、一個体まとまって壊れているものが大半を占める。壺(731)、壺底部(739・740)、甕(767・768・771・772~775・782・784・786・788・789・777・781)、高杯(762・764)、器台(766)、手焙形土器(765)で、鉢はないが、他の器種はほとんどある。

壺は口縁部がほとんどなく、完形品も1点だけである。(731)は完形品である。口径13.6cm、器高25.3cm、腹径21.8cm、底径4.3cmを測る。頸部は屈曲し、口縁部は斜上に僅かに外反する。球形の体部に僅かに突出する底部を持つ。体部の調整は、外面が縦方向の刷毛目の後にナデ、内面底部が縦方向の刷毛目、他は横方向の刷毛目である。口縁部は、外面が縦方向の刷毛目、内面頸部付近が横方向の刷毛目、内面上半及び端部外面がヨコナデである。(739)は底部破片である。底径5.2cm、現存高11.6cmを測る。球形の体部に突出する底部を持つ。底部中央は凹んでいる。調整は内外面ともに横方向の刷毛目である。(740)は、底部の破片である。底径6.0cm、現存高6.0cmを測る。体部の形状は不明であるが、割合直線的に底部へ繋がっている。底部は突出せず丸底風である。

甕はいわゆる庄内式(767・768・771・772~775・782・784・786・788・789)とそうでないもの(777・781)に大別される。(767)は完形品である。口径18.8cm、腹径25.7cm、器高26.8cmを測る。体部は下半が僅かに尖るような球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反し、外面は波状を呈する。口縁端部は内傾気味につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目、中央部以下が不明、内面上半が横方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(768)は口頸部の破片である。口径16.7cmを測る。体部の形状は不明である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は上につまみ上げられ、割合明瞭な外端面を持つ。体部の調整は、外面上端が左下りの叩目の後に右下りの叩目、内面上端が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデであるが、外面には右下りの叩目が残っている。(771)は底部を欠失している。口径13.8cm、腹径18.1cm、現存高18.0cmを測る。体部は下半が僅かに尖り気味の球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は上に僅かにつまみ上げられ、割合明瞭な外端面を持つ。体部の調整は、外面上半が右下りの細い叩目の後に部分的に縦方向の刷毛目、下半が左下りの細い叩目の後に縦方向の刷毛目、内面上・中部は横方向のヘラケズリ、下部は縦方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。外面に粘土紐の

継目が認められる。(772)は完形品である。口径15.9cm、器高20.7cm、腹径19.5cmを測る。体部は球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は上につまみ上げられている。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目、中央部が横・斜方向の刷毛目、下部が不明、内面上部が横方向のヘラケズリ、中部が斜方向のヘラケズリ、下部が縦方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。(775)は底部を欠失している。口径17.5cm、腹径20.1cm、現存高14.9cmを測る。体部はやや胴長の球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁端部は上につまみ上げている。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目、下半が縦方向の刷毛目、内面上半が横方向のヘラケズリ、下半が斜方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。外面に粘土紐の継目が認められる。(782)は底部を欠失している。口径15.5cm、腹径17.7cm、現存高15.6cmを測る。体部は下半が僅かに尖るような球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反し、外面は波状を呈する。口縁端部は上につまみ上げられており、明瞭な外端面を持つ。体部の調整は、外面上半が左下りの中細の叩目の後部分的に斜方向の刷毛目、下半は不明であるが部分的に縦方向の刷毛目を認める。内面上半は横方向のヘラケズリ、下半は不明である。(784)は底部を欠失している。口径15.9cm、腹径21.4cm、現存高21.3cmを測る。体部はやや胴長の球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反し、外面は波状を呈する。口縁端部は内傾気味につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目、下半が左下りの細い叩目の後に縦方向の刷毛目及びナデ、内面上半が横方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(786)は体部下半を欠失している。口径17.1cm、腹径23.7cm、現存高12.5cmを測る。体部は球形を呈するようである。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反し、外面は波状を呈する。口縁端部は上につまみ上げられ、割合明瞭な外端面を持つ。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目、下半が縦方向の刷毛目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。頸部外面はヨコナデである。(788)は完形品である。口径15.4cm、器高22.2cm、腹径20.6cmを測る。体部は下半が僅かに尖るような球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁端部は上につまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目の後部分的に斜方向の刷毛目、下半が縦・斜方向の刷毛目、内面上端が横方向のヘラケズリ、上半が斜方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(789)は体部下半を欠失している。体部は胴長の球形を呈するようである。頸部は曲線的に曲がり、口縁部は斜に僅かに外反する。口縁端部は上につまみ上げられている。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目の後に縦・斜方向の刷毛目、中部が縦方向の刷

毛目、内面上部が横方向のヘラケズリ、中部が縦方向のヘラケズリである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。頸部は内外面ともにヨコナデである。頸部内面は、体部内面のヘラケズリが頸部屈曲点より僅かに下までしかヘラケズリを行なっていないため、明確な稜を持たず曲線を描く。(777)は完形品である。口径15.5cm、器高12.2cm、腹径13.6cm、底径2.4cmを測る。体部は球形であるが、頸径は腹径より僅かに小さい程度で突出しない平底を持つ。底部は僅かに上げ底である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。頸部内面には稜がある。体部の調整は、外面上半が水平の粗い叩目の後に縦方向の刷毛目、下半が左下りの粗い叩目の後に斜方向の刷毛目及びナデ、内面上半は斜方向の刷毛目、底部はナデである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部内外面には刷毛目が残っている。(781)は完形品である。口径13.8cm、腹径19.9cm、器高20.8cmを測る。体部は肩と腰が張り尖底風の丸底を呈する。頸部は緩やかな曲線を描き、口縁部は斜上に伸びる。体部の調整は、外面上・中部が左下りの中細叩目の後に部分的にナデ、下部が上・中部よりも左下りの強い中細叩目の後に部分的にナデ、内面上部はナデ、中部は斜・縦方向の刷毛目、下部はナデである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部は内外面ともにヨコナデである。

高杯は少なく、完形品は1点しかない。(762)は杯体部・口縁部の破片である。口径22.1cm、杯底径7.9cm、現存高6.6cmを測る。口縁部は杯底部から斜に伸びる。外面は体部と口縁部の境に僅かな名残があり、体部は内彎気味で、口縁部は直線的であり、端部付近で僅かに内彎気味となる。内面は直線的に伸びる。調整は内外面ともにヨコナデである。(764)は完形である。口径23.2cm、脚端径16.1cm、器高17.2cm、杯高8.6cm、杯底径10.2cmを測る。杯底部は斜外に伸び、体・口縁部は屈曲して斜に伸びる。杯底部、体・口縁部は直線的である。杯底部内面は水平である。杯部の調整は、体部外面が斜方向の刷毛目、底部が不明。口縁部不明、体部内面が斜方向の刷毛目、底部はナデの後部分的にヘラミガキ、口縁部は不明である。脚柱部は僅かに裾広がりである。脚裾部は緩やかに屈曲し斜外方に伸びる。脚裾部には円孔が4個所ある。脚部の調整は、外面が不明、脚柱部内面下半がナデ、脚裾部は横方向の刷毛目である。脚柱部内面上部には絞り痕が認められる。

器台は椀形のみである。(766)は完形品である。口径12.8cm、器高10.0cm、脚端径18.7cm、椀高4.7cmを測る。椀部は半球形を呈する。脚柱部は、短く、僅かに裾広がりである。脚裾部は屈曲して斜外に大きく広がる。脚裾部に円孔が4個所ある。調整は内外面ともに不明である。

(765)の手焙形土器は完形品である。口径18.3cm、器高19.4cm、鉢部高8.3cmを測る。鉢は、体部が内彎しており、頸部が緩い曲線を描き、口縁部が斜上に伸び、底部が浅い皿状の丸底を呈する。体部と底部の境に段があり、稜がある。蔽部は斜に内彎し、端部は上に拡張され幅広い端面を持つ。鉢部外面の調整は、体・底部がナデ、口縁部がヨコナデである。内面の調整は、体・口縁部がヨコナデ、底部がナデである。蔽部外面は左下りの粗い叩目の後にナデである。内面

は、下半が部分的なヘラケズリの後にナデ、上半はナデである。

<上層>から検出した遺物は破片もあるが、完形品が多く体部に土のつまった状態のものが目立った。壺(727・728・730・735・736・738)、甕(780・783・785・790~792)、鉢(744・746)、高杯(763)があり、器台等の器種が一部欠けている。

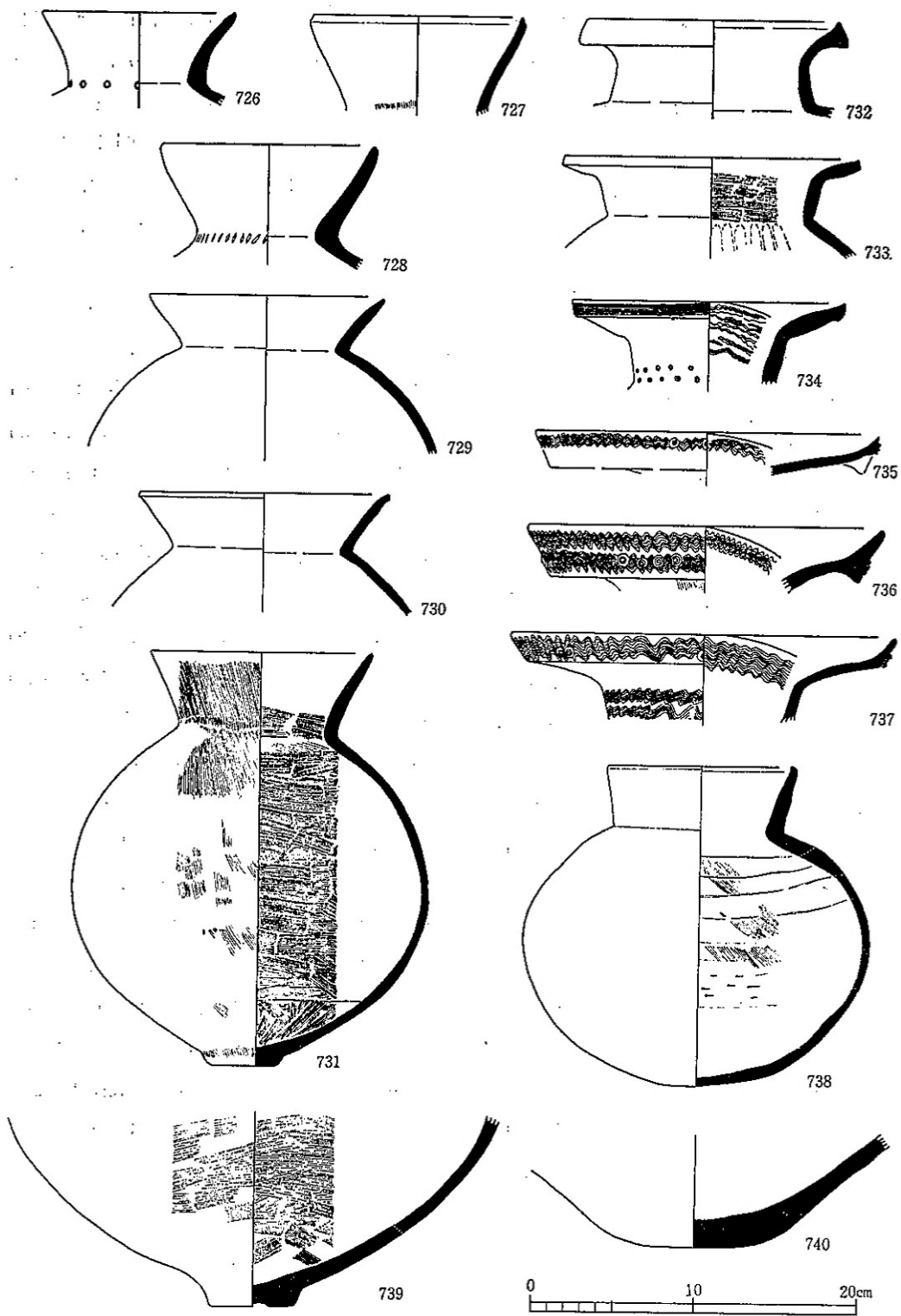
壺は完形品が少なく破片が多い。(727)は口縁部の破片である。口径12.7cm、頸径8.6cm、口縁高5.8cmを測る。口縁部は斜上方に僅かに内彎する。口縁端部は斜内へつまみあげられ外端面を持つ。器壁は(728)よりも僅かに薄く均一である。調整は、外面がヨコナデであるが頸部付近が一部刷毛目、内面が不明である。(728)は口頸部の破片である。口径12.9cm、頸径8.6cm、口縁高6.0cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に僅かに内彎する。頸部外面には刻目(刺突)紋が一帶巡っている。調整は内外面ともに不明である。(730)は口頸部の破片である。口径15.3cm、頸径11.0cm、口縁高3.5cm、現存高7.4cmを測る。体部は肩が低い。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に伸びる。口縁端部は僅かに外に屈曲し、外端面を持つ。器壁は割合薄く均一である。調整は不明である。(735)は口縁部の破片である。口径20.9cmを測る。口縁部は水平に近く伸びる。端部は上につまみ上げられ、下部に粘土紐を張り足し、幅広い外端面を持つ。二重口縁壺に属する。口縁部下端の張り足しを欠失している。外端面には波状紋と、竹管紋のある円形浮紋が施されている。口縁部内面には波状紋が施されている。調整は、外面がヘラミガキ、内面が不明である。(736)は口縁部の破片である。口縁部は斜上に外反をする。端部は上下に粘土紐を張り足し、幅広い外端面を持つ。二重口縁壺である。紋様の構成は(735)とほとんど同じである。調整は、外面が縦方向の刷毛目、内面が不明である。(738)は完形品である。口径11.5cm、腹径21.2cm、器高19.6cmを測る。体部はやや扁平な球形を呈する。頸部は屈曲し、口縁部は斜上にほぼ垂直に伸びる。口縁端部は僅かに外傾する外端面を持つ。体部の調整は、外面が不明、内面底部が不明、中央部が一部横方向のヘラケズリ、上部が一部斜方向の刷毛目である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。

甕はいわゆる庄内式(783・785・790・791)とそうでないもの(780・792)がある。(783)は完形品である。口径17.6cm、腹径23.0cm、器高24.7cmを測る。体部は下半が僅かに尖り気味の球形である。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。外面は波状を呈する。口縁端部は僅かに内傾気味につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目の後に部分的に刷毛目、中部が斜方向の刷毛目、下部がナデ、内面上部が横方向のヘラケズリ、中部が斜方向のヘラケズリ、下部が不明である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(785)は底部を欠失している。口径15.0cm、腹径18.4cm、現存高17.0cmを測る。体部は球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁部外面は波状を呈する。口縁端部は上方につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目、下半

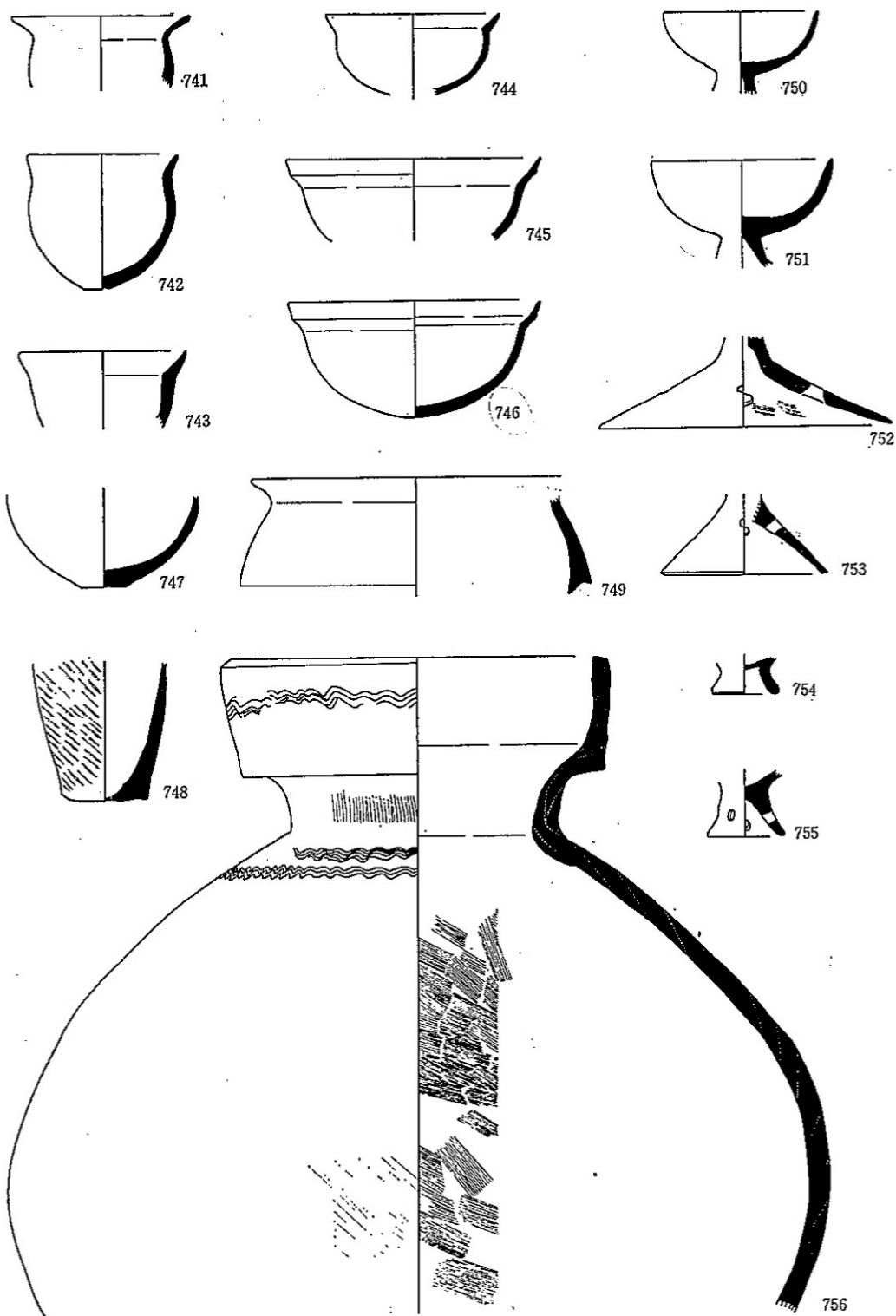
がナデ、内面上半が斜・横方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。(790)は完形である。口径13.5cm、腹径16.0cm、器高17.8cmを測る。体部はやや胴長の球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に伸びる。体部の調整は、外面上部が水平に近い細い叩目、中部が斜方向の刷毛目、下部が縦方向の刷毛目の後にナデ、内面上部が横方向のヘラケズリ、中部が斜方向のヘラケズリ、下部が縦方向のヘラケズリである。外面中部の刷毛目は、右上り・左上りが交錯する。内面上部のヘラケズリは頸部屈曲点より僅かに下までしか行なわれていない。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部は内外面ともにヨコナデである。(791)は底部を欠失している。口径16.2cm、腹径21.8cm、現存高18.4cmを測る。体部は球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に伸びる。口縁端部は僅かにつまみ上げられている。頸部外面は凹んでいる。体部の調整は、外面上半が左下りの細い叩目の後に部分的刷毛目、下半が縦方向の刷毛目、内面上半が横・斜方向のヘラケズリ、下半は不明である。内面のヘラケズリは頸部屈曲点の僅か下までしか行なわれていない。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデであるが、外面に一部刷毛目が認められる。頸部外面はヨコナデである。(780)は完形品である。茶黄色を呈する。口径14.4cm、腹径16.6cm、器高20.2cm、底径 2.6cmを測る。体部は胴長の球形を呈し、ほとんど突出しない底を持つ。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。調整は全く不明であるが、体部外面には僅かに粗い叩目痕が認められる。(792)は完形品である。いわゆる庄内式の胎土とは僅かに異なっている。口径13.0cm、腹径15.2cm、器高14.9cmを測る。体部はやや肩の上がった球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に伸びる。口縁端部は内面に僅かに肥厚する。体部の調整は、外面上部が不明、中部が横・斜方向の刷毛目、下部が縦方向の刷毛目、内面上端がナデ、上部が横方向のヘラケズリ、中部が斜方向のヘラケズリ、下部が不明である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部外面はヨコナデである。

鉢は小型のものばかりで大型品はない。(744)は口縁部から体部までの破片である。口径10.6cm、復元高 5.1cmを測る。体部は半球形を呈する。口縁部は斜上に僅かに内彎する。調整は不明である。(746)は完形品である。口径15.3cm、器高 7.1cmを測る。体部は半球形を呈する。口縁部は斜に伸び屈曲して上方へ立ち上がる。調整は不明であるが、口縁部内面はヨコナデである。

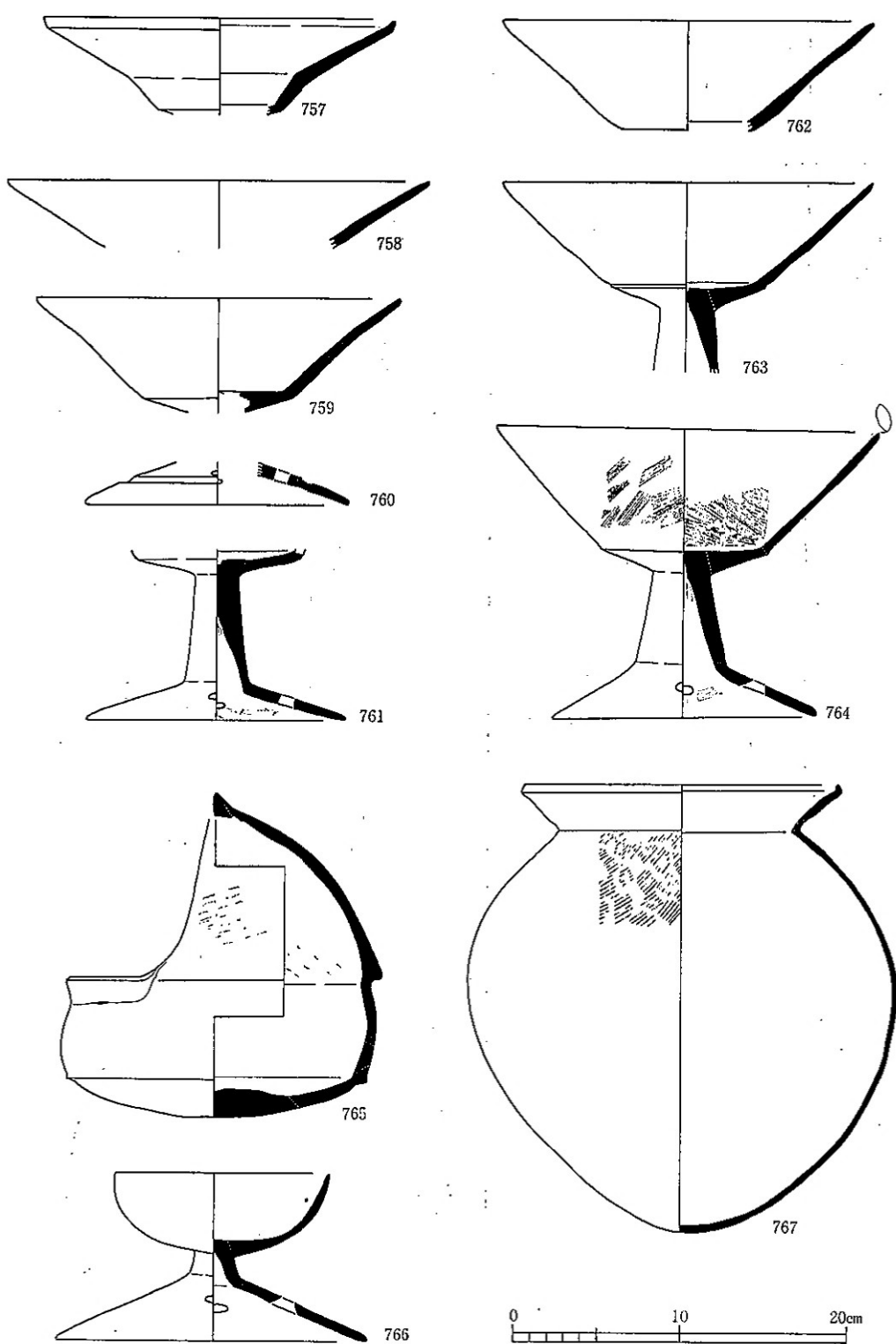
高杯は少なく、完形品もない。(763)は脚裾部を欠失している。口径22.5cm、杯底径 9.7cm、杯高 7.6cm、現存高11.3cmを測る。杯底部は斜外に伸び、段を境にして屈曲し、口縁部は斜に伸びる。脚柱部は下方で僅かに広がる。調整は不明である。



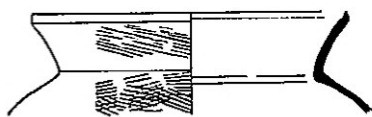
第143图 沟 224 出土土器



第144图 溝 224 出土土器



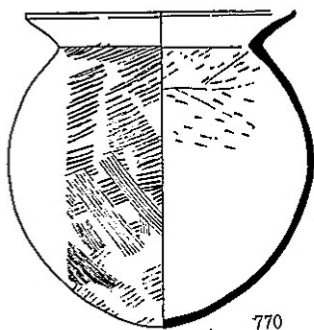
第145图 溝 224 出 土 土 器



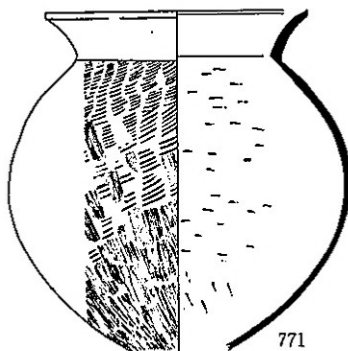
768



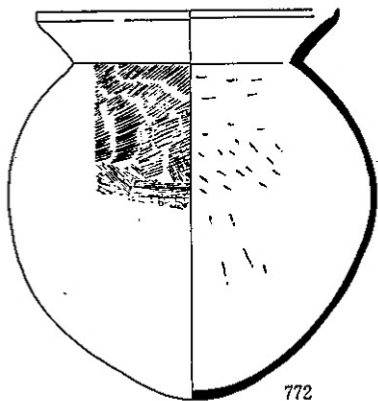
769



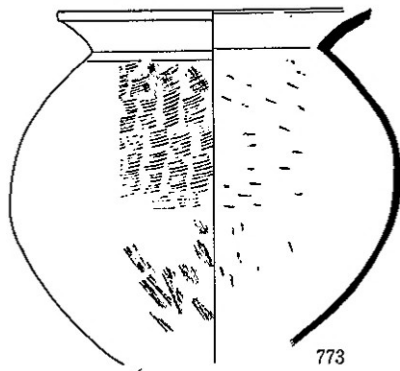
770



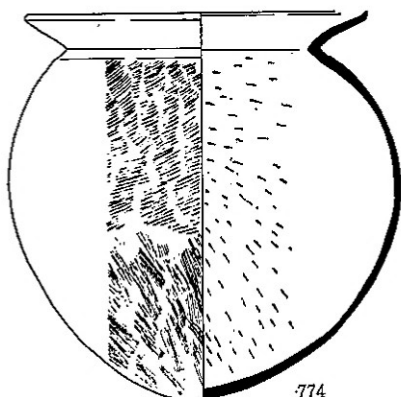
771



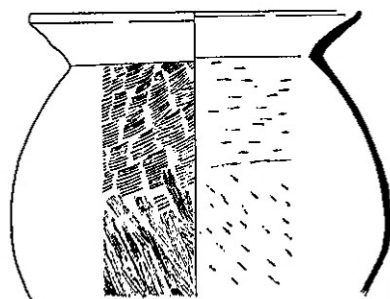
772



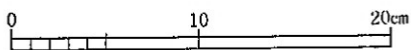
773



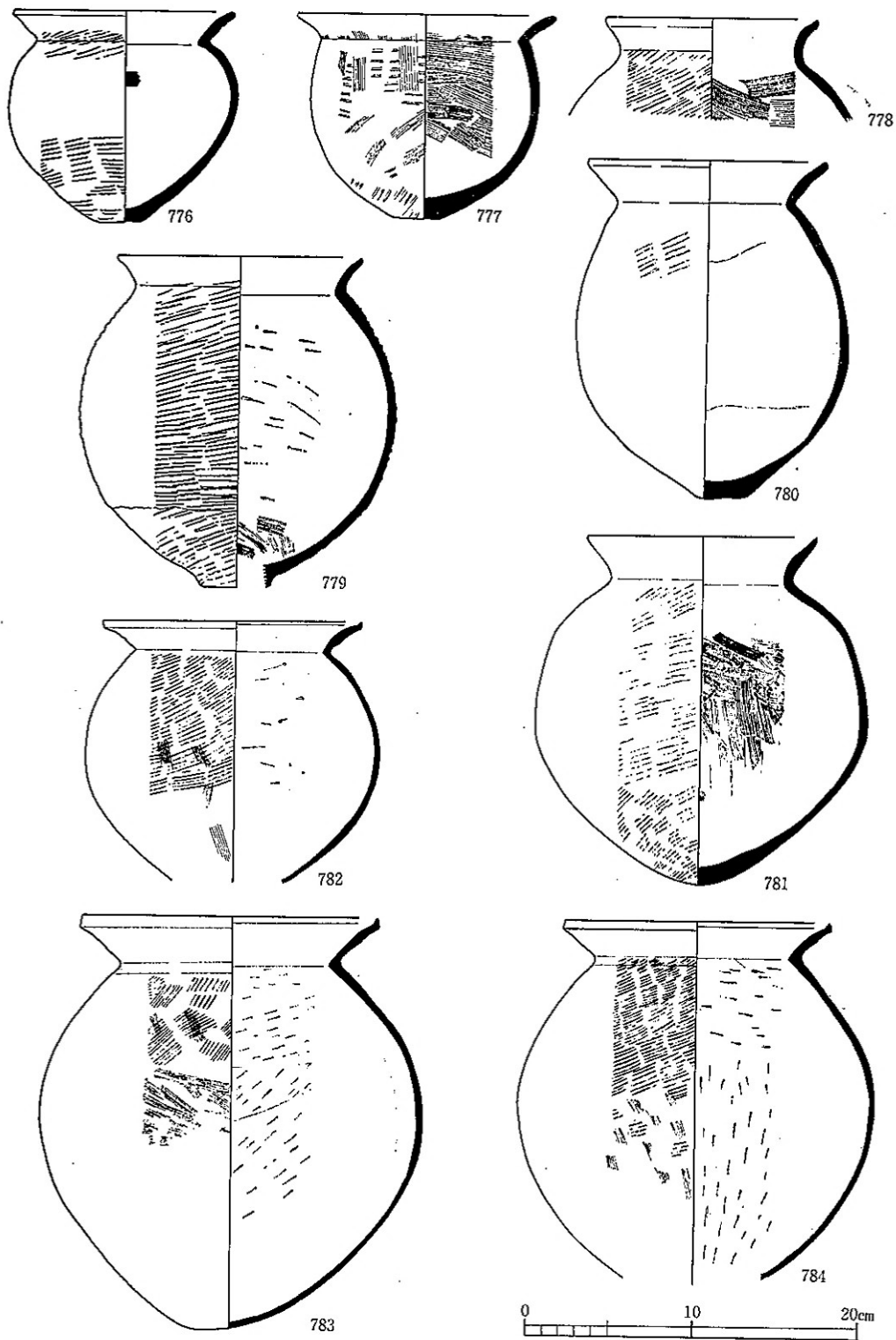
774



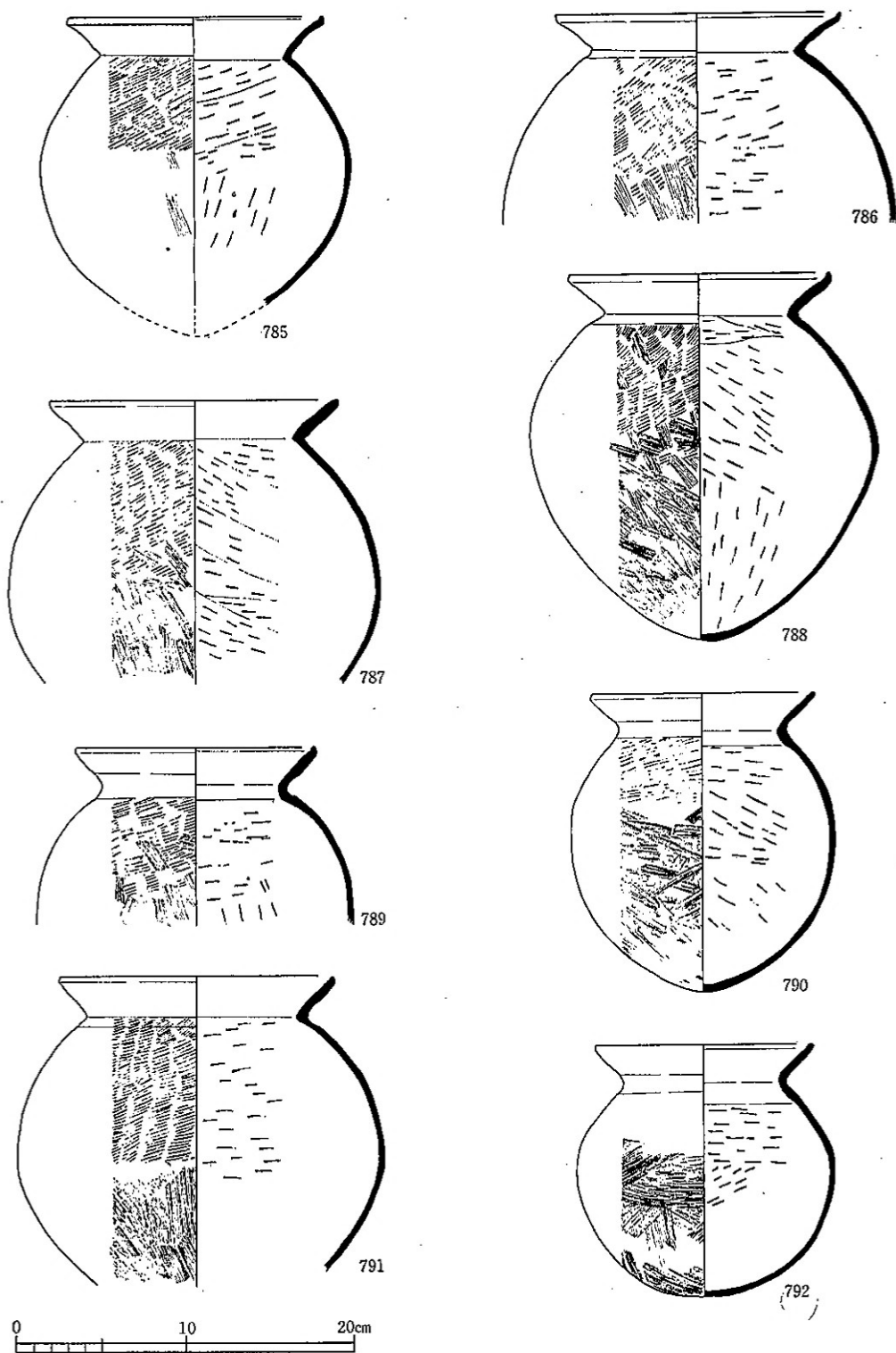
775



第146图 濠 224 出土土器



第147图 沟 224 出土土器



第148图 濠 224 出土土器

B 土器溜 1

この土器溜は、溝224に切られており、溝224よりも古い。埋土は3層に分けられ、中層はほとんど遺物を含まず、上・下2層から遺物を検出した。下層は遺物が少なく、上層が僅かに多い程度である。完形品はほとんどなく、破片が主である。

<下層>から検出した遺物は、甕(793)、鉢(795)、高杯(794)がある。

(793)は口頸部の破片である。口径19.8cm、現存高5.5cmを測る。色調は灰白色を呈するが、胎土は生駒西麓産のものである。体部は肩が張るようである。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁端部は斜外に僅かにつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面上部が左下りの細い叩目、内面上部が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。

(795)は口頸部の破片である。口径9.7cm、現存高3.4cmを測る。色調は赤茶色を呈する。体部は半球形を呈する。頸部は屈曲し、口縁部は斜に短く伸びる。調整は内外面ともに不明である。

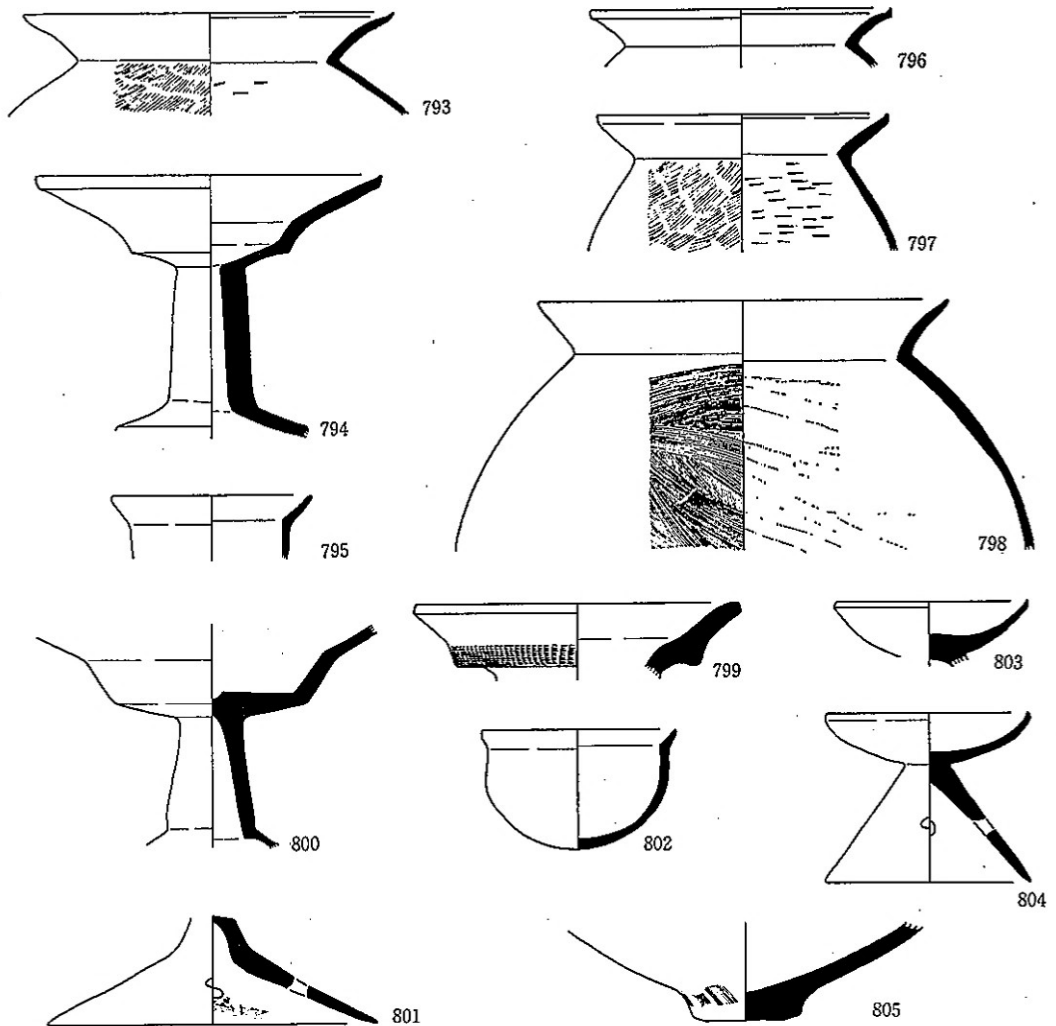
(794)は脚裾部を欠失している。口径18.3cm、杯底径8.4cm、杯高5.0cm、現存高13.6cmを測る。杯底部は斜上に外反し、体部との境には明瞭な稜を持つ。体部は斜に短く伸び、緩やかな曲線を描き、口縁部へと続く。口縁部は斜外に伸びる。口縁端部は僅かに上につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。内面の体部と口縁部の境には割合明瞭な稜を持つ。脚柱部は筒状である。脚裾部は屈曲して斜外に伸びる。現存部先端には段が認められ、内面には粘土紐の痕跡が認められることから杯を逆にしたような脚裾であったと考えられる。杯部の調整は不明である。脚部の調整は、脚柱部外面が縦方向のヘラミガキ、内面がナデ、脚裾部外面が不明、内面はナデである。

他の下層遺物は小破片であるが、簡単に説明する。「庄内式土器」は口縁部・体部破片が僅かにある。口縁部は斜上に外反し、口縁端部が上につまみ上げられるものが多い。調整は内外面ともにヨコナデのものと、内面に横方向の刷毛目の認められるものがある。庄内式でない甕は口縁部、底部破片が各1点ある。口縁部は外反し、端部は丸いが僅かに外面に肥厚する。底部はヘラケズリにより尖底風に作られている。色調は両者ともに茶黄色を呈するが同一個体かどうかは不明である。

<上層>から検出した遺物は、壺(799)、壺底部(805)、甕(796~798)、鉢(802)、器台(803~801)、高杯(800)等である。

(799)は口縁部破片である。口径17.2cm、現存高4.2cmを測る。口縁部は斜上に外反し、更に立ち上がって斜に外反する二重口縁壺である。口縁部に列点紋がある。調整は内外面ともに不明である。(806)は底部の破片である。底径5.8cm、現存高5.0cmを測る。突出した底部を持つ。外面底部附近には刷毛目が認められるが、他部の調整は不明である。

(796) は口頸部の破片である。口径16.0cm、現存高3.0cmを測る。頸部は屈曲し、口縁部は斜に外反する。口縁端部は上につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。体部の調整は不明である。口縁部の調整はヨコナデである。(797) は口頸部及び体部上半の破片である。口径15.5cm、現存高7.5cmを測る。体部は肩が下がっている。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に伸びる。口縁端部は上につまみ上げられている。頸部には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下りの細かい叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整はヨコナデである。頸部外面にも弱いヨコナデが認められる。(798) は口頸部及び体部上半の破片である。体部は球形を呈するようである。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が横・斜方向の刷毛目、内面が横・斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。



第149図 土器溜1出土土器(¼)

(802) は完形品に近い。口径10.3cm、器高6.4cmを測る。体部は半球形を呈する。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は斜上に短く内彎する。調整は内外面ともに不明である。

器台は小型(803・804)と椀型(801)の2種ある。(803)は受け部の破片である。口径10.0cm、受け部高3.0cmを測る。浅い皿状を呈する。端部は僅かに上につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。脚台は斜に伸びる逆漏斗状を呈するようである。調整は、口縁端部がヨコナデ、他は不明である。(804)は完形品である。口径10.7cm、器高9.0cm、受部高2.7cmを測る。受け部は浅い皿状を呈する。端部は僅かに上につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。脚は受け部との接点から斜に伸び、逆漏斗状に開く。脚部中央に円孔が4個所ある。受け部の調整は、内外面ともにヘラミガキ、口縁端部がヨコナデである。脚部の調整は、外面が刷毛目の後にナデ、内面がナデ、脚端部がヨコナデである。(801)は椀部を欠失している。脚端径17.4cm、現存高5.7cmを測る。脚柱部は短かく、僅かに裾広がりである。脚裾部は緩やかに屈曲し、斜外に長く伸びる。脚裾部中央に円孔が4個所ある。調整は、外面がヘラミガキ、内面が刷毛目の後にナデである。

(800)は口縁端部と脚裾部を欠失している。杯底部径10.3cm、杯部現存高4.9cm、現存高11.6cmを測る。杯底部はほぼ水平に伸びる。体部は斜外に伸び、屈曲し、口縁部は斜に伸びる。杯底部内面はほぼ水平であり、中央に径1.0cm、深さ0.4cmの凹みがある。脚柱部はやや裾広がり、脚裾部との接点付近で僅かに細くなる。脚裾部は屈曲して、斜外に伸びる。脚柱部内面は、脚柱部上部付近まで空洞である。

他の出土遺物は小破片が多い、庄内式土器は口縁部破片が僅かにあり、2種ある。頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁部が外反し、端部が上につまみ上げられたものであるが、(797)と良く似たものと、ほとんど同じであり口縁部外面が波状を呈するものである。体部破片は、上半が叩目の後に部分的に刷毛目、下半が刷毛目のものが多い。叩目は細く、浅いものがほとんどである。

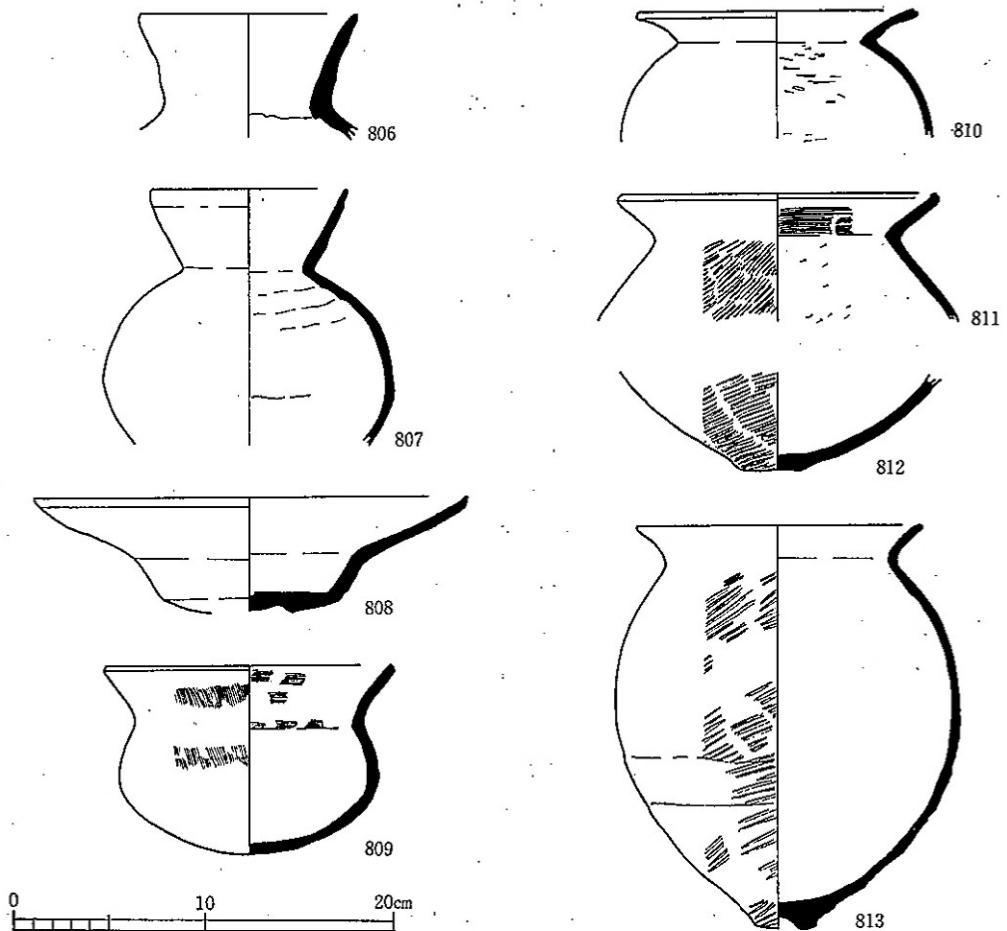
C 土器溜 2

この土器溜も溝224に切られている。埋土は一層である。破片が多いが完形品も僅かにある。壺(806・807)、甕(810~813)、鉢(809)、高杯(808)がある。

(805)は口頸部の破片である。口径11.4cm、頸径9.0cm、口縁高5.0cm、現存高6.3cmを測る。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は斜上に僅かに外反する。調整は内外面ともに不明である。(807)は底部を欠失している。口径10.2cm、口縁高5.4cm、腹径15.4cm、現存高13.5cmを測る。体部はやや扁平な球形を呈する。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に伸びる。口縁端部は上につまみ上げられ、僅かに内彎気味となる。体部の調整は、外面が横方向のヘラミガキ、内面がナデである。内面は粘土紐の継目が明瞭である。口縁部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面がナデ、端部がヨコナデである。

甕は庄内式(810・811)とそうでないもの(812・813)と2種ある。(810)は口頸部及び体部

上半の破片である。口径14.8cm、現存高7.0cmを測る。体部は球形を呈するようである。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が不明、内面が横・斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。(811) は口頸部及び体部上半の破片である。口径16.6cm、現存高 6.7cmを測る。体部は肩が下がっているようである。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に伸びる。口縁端部は内傾気味につまみ上げられており、明瞭な外端面を持つ。頸部は鋭い稜を持つ。体部の調整は、外面が左下りの細い叩目、内面が斜方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、外面及び端部がヨコナデ、内面は横方向の刷毛目である。(812) は甕の底部破片である。底径3.3cm、現存高5.3cm、器壁厚 0.7cmを測る。体部は球形を呈するようである、ほんの僅か突出する底部を持つ。底部は僅かに上げ底である。調整は、外面が左下りの中細の叩目を底部まで、内面は不明である。(813) は完形品の甕である。口径15.2cm、腹径18.3cm、器高21.3cm、器壁厚 0.5cmを測る。体部は卵形を呈しており、僅かに突出する底部を持つ。頸部は緩やかな曲線を描き、口縁部は斜に外反す



第150図 土器溜 2 出 土 土 器

る。体部の調整は、外面が粗い叩目痕、内面が不明である。外面下半部に粘土紐の継目が明瞭に認められる。口縁部の調整は内外面ともに不明である。

(808) は脚部を欠失した高杯である。口径22.8cm、杯底径9.3cm、杯高6.2cmを測る。杯底部は斜外に内彎気味に伸び、屈曲して体部へ続く。体部は斜上に伸び、再び屈曲して口縁部へ続く。口縁部は斜外に内彎する。口縁端部は上につまみ上げられている。杯底部内面は水平であり、中央に径0.6cm、深さ0.5cmの凹みがある。底部の調整は、外面が部分的にヘラミガキ、内面が放射状のヘラミガキ、体部の調整は内外面ともに横方向のヘラミガキである。口縁部の調整は、外面が縦方向のヘラミガキ、内面が斜方向のヘラミガキ、端部がヨコナデである。

(809) はほぼ完形の鉢である。口径14.8cm、腹径13.7cm、器高10.0cmを測る。体部は極端に扁平な球形である。頸部は緩やかな凹線を描き、口縁部は斜上に外反する。端部は明瞭な外傾の端面を持つ。体部の調整は、外面上半が縦方向の刷毛目、下半がヘラミガキである。口縁部の調整は、外面が縦方向の刷毛目、内面が横方向の刷毛目である。

他に庄内式の口縁部破片が数点ある。口縁部が外反し、端部がつまみ上げられているものが多く、同様に口縁部外面が波状を呈するものが若干ある。後者は端部のつまみ上げが内傾気味であり、明瞭な外端面を持つものが多い。体部破片の調整は、上半が叩目の後に部分的に刷毛目、下半が刷毛目のものがほとんどである。

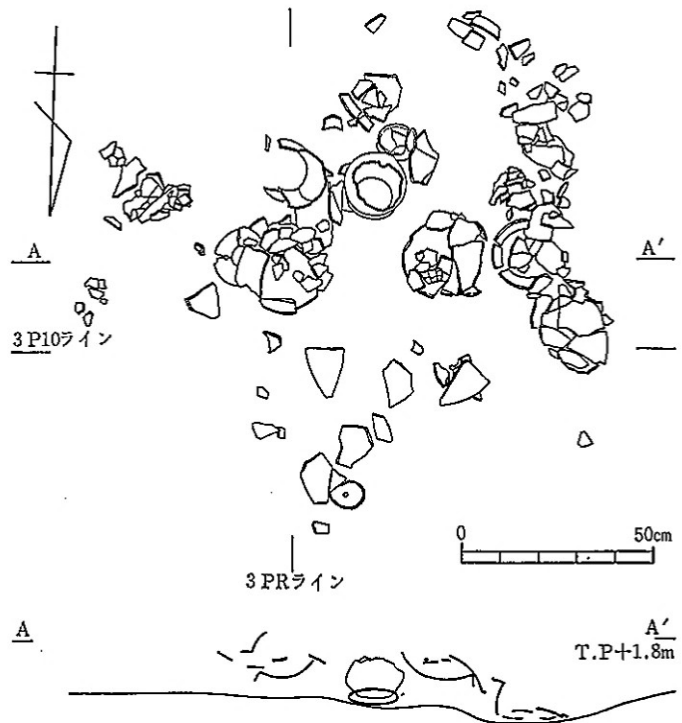
D 土器溜 3

この土器溜は遺構面Ⅱにおいて検出した遺構である。前述の各遺構は遺構面ⅠとⅡが分離できない面で検出したため、土器溜3と面での先後関係は決められない。他の遺構との切り合いが全くなく、遺構面Ⅰで検出した土壌330よりも新しいということしか明らかではない。遺物はほとんどが完形品で破片は少ない。壺はなく、甕(814~819)、高杯(820~823)、器台(824・825)がある。

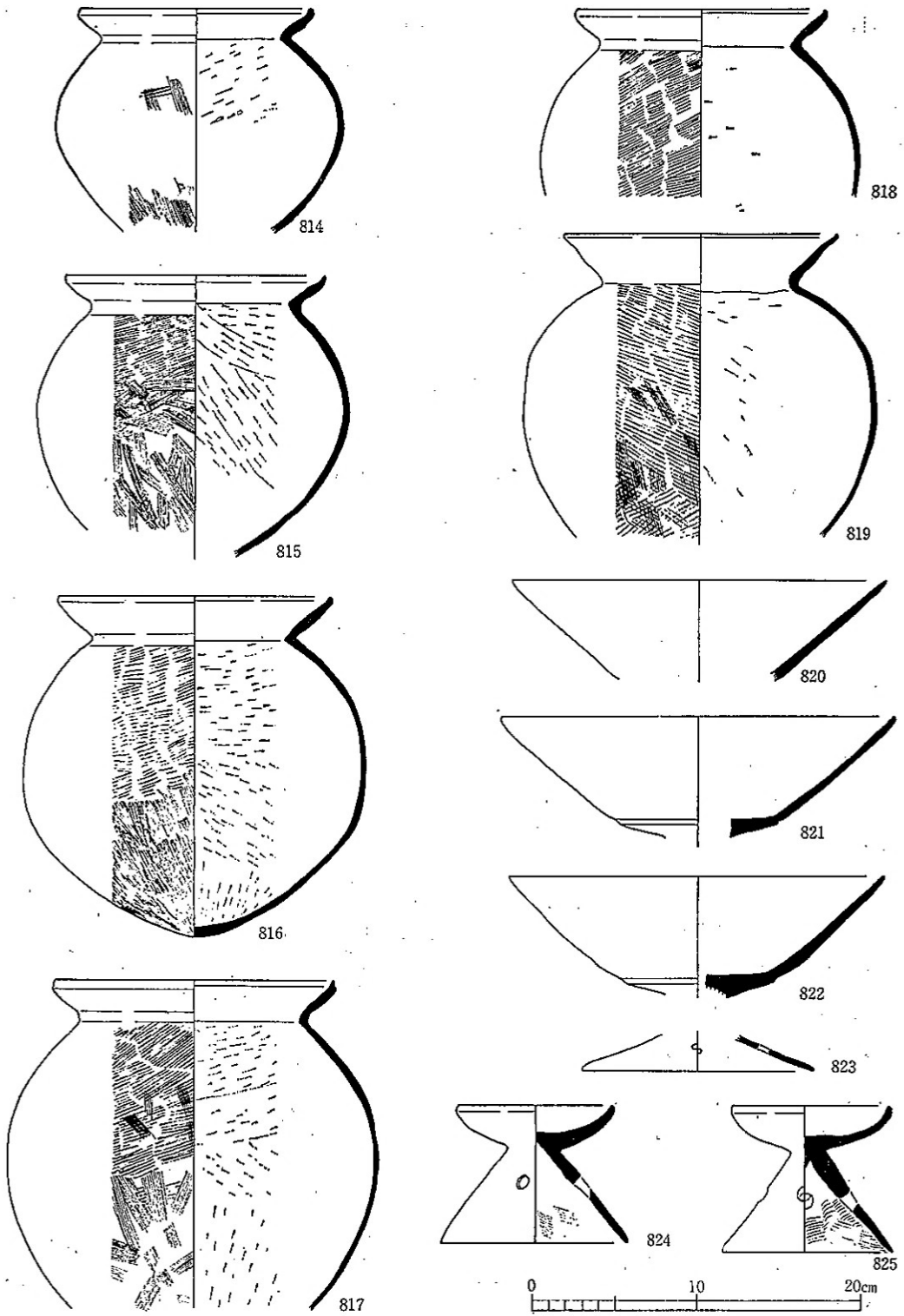
甕は破片もあるが完形品が多い。(814) は底部を欠失した甕である。口径14.0cm、腹径17.5cm、現存高13.7cmを測る。体部はやや扁平な球形で下半は僅かに尖り気味である。頸部外面は緩やかな曲線を描き、口縁部外面は斜上に内彎する。内面は外反している。口縁端部は上につまみ上げられている。頸部内面には稜がある。体部の調整は、外面上・中部が刷毛目の後にナデ、下部が刷毛目、内面上半が斜方向のヘラケズリ、下半は不明である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部外面はヨコナデである。(818) は体部下半を欠失した甕である。口径15.3cm、腹径19.6cm、現存高11.4cmを測る。体部は球形を呈するようである。口頸部の形状は(814)と同じである。体部の調整は、外面が左下りの細かい叩目の後に縦方向の刷毛目、内面が方向不明のヘラケズリである。口頸部の調整はヨコナデである。(815・817) はともに底部を欠失した甕である。口径15.8cm・16.9cm、腹径19.1cm・22.5cm、現存高18.3cm・19.8cmを測る。体部は球形であるが、下半が僅かに尖り気味である。(817) はやや胴長である。口頸部の形状は(814・817)

と同じである。体部の調整は、外面上半が左下りの叩目の後に部分的に刷毛目、下半が縦方向の刷毛目、内面上部が横方向のヘラケズリ、中部が斜方向のヘラケズリ、下部が縦方向のヘラケズリである。口縁部内外面及び頸部外面はヨコナデである。(819)は底部を欠失した甕である。口径16.8cm、腹径21.5cm、現存高18.7cmを測る。体部はやや肩の張る球形であり、下半が尖り気味になるようである。頸部外面は曲線を描き、口縁部は斜に伸びる。口縁部外面は波状を呈する。体部の調整は、外面上半が右下りの細かい叩目の後に部分的に縦方向の刷毛目、下半は縦方向の刷毛目の後にナデ、内面は上半が斜方向のヘラケズリ、下半が縦方向のヘラケズリである。内面上半のヘラケズリは、頸部の屈曲点より僅かに下までしか行われていない。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部外面はヨコナデである。(816)は完形品の甕である。口径16.7cm、腹径20.8cm、器高20.6cmを測る。体部は腰の張った球形で、下半が尖り気味である。口頸部の形状は(814)等と同じであるが、端部はつまみ上げられていない。体部の調整は、外面上半がほぼ水平の細かい叩目の後に部分的に縦方向の刷毛目、下半が縦方向の刷毛目、内面上半が横方向の刷毛目、下半が斜方向の刷毛目、底部が縦方向の刷毛目である。口頸部の調整は(814)等と同じである。

高杯には完形品はない。体部と口縁部との境は明瞭には認められない。(820)は体部及び口縁部の破片である。口径22.8cm、底径9.4cm、現存高6.1cmを測る。体・口縁部は底部から斜に伸びる。体部と口縁部の境は僅かに名残りを止める程度である。底部と体部の境には段があったようである。調整は内外面ともに縦・斜方向のヘラミガキである。口縁端部はヨコナデである。(821・822)はともに脚部を欠失した高杯である。口径23.8cm・22.8cm、杯底径10.0cm・9.4cm、杯高7.4cm・7.2cmを測る。底部は斜外に伸び、体部との境に段を持つ。体・口縁部は斜に内彎気味に伸びる。杯底部内面は水平である。(822)は中央に径1.0cmの穿孔がある。(821)と(822)では脚柱の取り付け方が若干異なっている。



第151図 土器溜3 遺物出土状況図



第152图 土器溜 3 出土土器

(823) は高杯の脚裾部の破片である。脚端径13.2cm、現存高2.2cmを測る。脚柱部から斜外に伸びる。中央部に円孔が4個所ある。調整は、外面がヘラミガキ、内面が不明である。

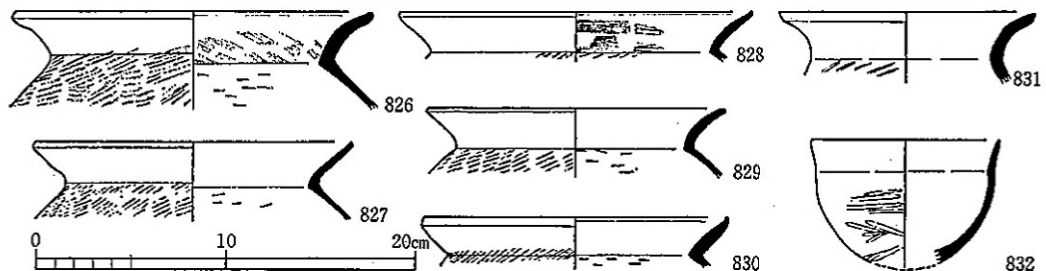
器台は2点ありともに完形である。(824・825) はほとんど同じ形態をしている。口径9.4cm・9.7cm、器高8.3cm・8.9cm、受け部高2.6cm・2.9cmを測る。受け部は浅い皿状で、端部はつまみ上げられており、外傾する端面を持つ。脚台部は斜に伸びる逆漏斗状を呈する。脚台部には円孔があり、(824) は3個所、(825) は4個所である。(824) は内彎気味であり、(825) は外反気味である。受け部の調整は内外面ともにヨコナデである。脚台部の調整は、外面がナデ、内面上半がナデ、下半が横方向の刷毛目である。

他に破片では庄内式の口縁部が僅かある。口縁部外面が波状を呈するものであるが、(819) とは異なり、端部が上につまみ上げられている。そして外面頸部直下に弱いヨコナデが認められる。

E 土坑 330

この遺構は遺構Ⅰにおいて検出したものである。埋土は3層に分けられたが、上・中層からはほとんど遺物を検出せず、下層からが主である。壺はなく、甕(826~831)、鉢(832)を検出した。遺物は破片ばかりで完形に近いものすらない。

甕は庄内式(826~830)とそうでないもの(831)とがある。(826) は口頸部の破片である。口径19.7cm、現存高5.0cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は僅かにつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部上端の調整は、外面が左下りの中細の叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は、外面がヨコナデ、内面が斜方向の刷毛目、端部がヨコナデである。頸部外面の調整は弱いヨコナデであるが、体部上端の叩目の続きが認められる。この甕は体部の器壁は薄い、口縁部は庄内式ではないような感じを与える。(827) は口頸部の破片である。口径16.8cm、現存高4.3cmを測る。頸部は緩やかな曲線を描き、口縁部は斜に伸びる。口縁端部は僅かにつまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下りの細い叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部外面の調整は弱いヨコナデである。(828) は口頸部



第153図 土坑 330 出土土器

の破片である。口径18.5cm、現存高 2.6cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は上につまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。口縁部の調整は、外面がヨコナデ、内面が横方向の刷毛目である。(829)は口頸部の破片である。口径15.6cm、現存高 3.6cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜に強く外反する。頸部内面には鋭い稜がある。体部上端の調整は、外面が左下りの細い叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。(830)は口頸部の破片である。口径15.9cm、現存高 2.6cmを測る。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部は斜上に内彎する。口縁部内面は外反している。口縁端部は僅かに斜内につまみ上げられ、明瞭な外端面を持つ。頸部内面には鋭い稜がある。体部の調整は、外面が左下りの細い叩目、内面が横方向のヘラケズリである。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。頸部外面には叩目痕が残っている。(831)は灰黄色を呈する甕の口頸部破片である。口径13.4cm、現存高 3.4cmを測る。頸部は曲線を描き、口縁部は斜上に外反する。口縁端部は明瞭な外端面を持つ。体部の調整は外面が左下りの粗い叩目、内面がナデ、口縁部の調整はヨコナデである。

(832)は小形の鉢の底部を欠く破片である。口径9.8cm、現存高6.7cmを測る。体部は半球形を呈する。口縁部はほとんど上へ伸びる。体部の調整は、外面が横、斜方向のヘラミガキ、内面は不明である。口縁部の調整は内外面ともにヨコナデである。

他にも小破片があり、庄内式の口縁部が数点ある。(828)に似た形状のものがほとんどであるが、口縁部内面に刷毛目を施すものは3点しかない。口縁部外面が波状を呈する甕も多少ある。

3) 土器の分類

甕は、土器量の半数以上を占め、また、用途から考えても最も消耗率の高い土器である。しかし、器形の変化に乏しいため、弥生土器の編年では常に壺に主体をうばわれてきた。だが、古墳時代前期になると壺が極端に減少してしまうために、編年の中で中心的役割を果すようになってきている。その原因の一つには「庄内式土器」(甕)の出現がある。庄内式土器は、「布留式以前」という論文の名称通り、弥生時代後期の土器と布留式(小若江北式)土器の間を埋める割合短い期間に使用された土器である。また、胎土、技法、形態が非常に特徴的であり、判別が簡単である。その為、庄内式土器を伴出する各地の土器編年は結構行なわれ、それに伴い庄内式土器の編年もある程度行なわれて来たが、庄内式の製作本拠地と考えられる生駒西麓の遺跡では明確な編年が行なわれていない現状である。各地で行なわれた庄内式土器の編年は搬出品の編年であり、実際の庄内式土器の編年ではない。ただ搬出品では編年できないという事ではなく、搬出品が実際の製作本拠地でどのような段階になるのかを明確にする必要があると考えられる。今回、瓜生堂遺跡で検出した庄内式土器も実際には搬出品と考えられる訳であるが、摂津、大和、和泉等の各地とは異なり、同じ河内平野内であり、弥生時代以来多量の生駒西麓産の土器を使用していることから、より生駒西麓に近い状況であると考えられる。そこで、各器種毎に分類可能な

ものは分類していくことにする。

A 壺の分類

今回の調査においても、壺は少なく、完形品は稀であり、ほとんどが破片である。壺は甕や高杯と異なり、形態が様々である。その為、形態分類を行なうと一つの形態が1～3点と非常に少なく、それらを分類するには若干の無理があるように思われる。しかし、2点あれば分類は可能であり、2・3の壺を分けてみることにする。

口径11～14cmの直口壺(726・728・731・806・807)を分けてみる。(807)は若干小型であるが、とりあえず同一として扱う。口頸部のみの破片がほとんどで、完形に近いもの(807)と完形品(731)が各1点あるのみであり、口縁部で分けてみる。器壁の厚いものA(726・728・731・806)と薄くて均一なものB(727・809)に分けられる。また口縁部が外反するものⅠ(726・731・806)と内彎するものⅡ(727・728・807)に分けられる。これを整理するとA-Ⅰ(726・731・806)、A-Ⅱ(728)、B-Ⅱ(727・807)となる。

甕かとも考えられる壺(729・730)があり、上記の直口壺とは形態的に異なるものではある。しかし、同一の分類を行くと(729)はA-Ⅰ、(730)はB-Ⅱとなる。

他に分類がある程度可能な壺としては二重口縁の壺がある。(735～737・799)の4点あり、器壁が厚く口径の小さいものA(799)と器壁が薄く口径の大きなものB(735～737)に分けられる。Bは幅広い外端面の作り方で分けられる。Ⅰ(735)端部下を拡張、Ⅱ(736)上下を拡張、Ⅲ(737)上を拡張するものに分けられる。

A(799)は口縁部途中で下を拡張している。

壺で分類可能なものは以上のとおりである。

B 甕の分類

甕には、茶褐色等を呈する生駒西麓産の胎土を有する庄内式と、淡黄褐色等を呈する瓜生堂遺跡及び周辺産(前項参照)の2種に大別できる。前者と後者の比率は溝224で64:30土器溜1で13:3、土器溜2で10:3、土器溜3で9:0である。%は、溝224で68%:32%、土器溜1で81%:19%、土器溜2で77%:23%、土器溜3で100%:0%である。全体では96:32、72%:28%である。前者が弥生時代中期の段階とは全く逆転しており、圧倒的に増えている。前者をA、後者をBとする。

Aは口縁部の形状で分けることができる。口縁部が外反するものA-Ⅰと内彎気味のものA-Ⅱとである。

<A-Ⅰ>は、口縁部が外反するもので頸部外面にヨコナデを行なわないものである。このタイプには(767～775・782～788・793・796・798・810・811・819・826～829)がある。口縁部が外反するが形状の異なるものがあり細分が可能である。口縁部が外反し、端部を上へつまみ上げるものa(768～774・793・798・810・826・828・829)と口縁部が外反し波状を呈するもので、端部

のつまみ上げが上または内傾気味に上へつまみ上げるものb (767・775・782~788・796・819・827)である。A-I aは口縁部外面を強くヨコナデするが1回であり、そのため、口縁部がきれいに外反するものである。A-I bは口縁部外面を強くヨコナデするが、2回に分けて行なうため、口縁部外面が波状を呈するものである。また、2回ヨコナデを行なうため、頸部直下にそのあたりが僅かにあり、弱くヨコナデされたようになっているものが多い。2回ヨコナデをすることでやがて、頸部ヨコナデに変わっていくものと考えられる。

A-I aの特徴は以下のようなものである。体部は球形又は下半が尖り気味の球形を呈し、口縁部が外反する。口縁部は上につまみ上げられている。頸部内面には鋭い稜がある。頸部外面はヨコナデされない。体部の調整は、外面上半が左下りの細かい叩目の後に部分的に刷毛目であるが中には僅かに粗いものもある。下半は刷毛目により叩目を消してしまったものが多いが、中には叩目を残すものもある。口縁部の調整は、外面から強いヨコナデの1回仕上げである。端部のヨコナデは内面から強くなる。口縁部内面には横方向の刷毛目を残すものがある。

A-I bの特徴は以下のようなものである。体部は球形又は下半が尖り気味の球形を呈する。口縁部は外反し、外面は波状を呈する。端部は上又は斜内につまみ上げられている。外面に明瞭な稜があり、外端面を持つものが多い。体部の調整は、外面上半が左下りの細かい叩目の後に部分的に刷毛目、下半が刷毛目で、内面はヘラケズリである。口縁部の調整は、外面から強いヨコナデの2回仕上げである。その為口縁部が波状を呈するものである。端部の調整は外面からヨコナデするものがあり、外端面が内傾するものもある。頸部外面にはヨコナデは行なわれないが、口縁部を2回ヨコナデするため、頸部は弱くヨコナデされるものがある。多くは頸部直下に弱いヨコナデが認められる。

<A-II>は、口縁部が内彎気味のもので、頸部にヨコナデを行なうものである。このタイプには(789~792・814~818)がある。口頸部の形状で3種に細分される。口縁部外面が内彎し、内面が外反するもので、頸部にヨコナデを行うものa (814~818)、口縁部が内彎し、端のつまみ上げがほとんどなく、頸部にヨコナデを行うものb (789~791)、口縁部が内彎し、端部が内面に僅かに肥厚するものc (792)である。

A-II aの特徴は以下のようなものである。体部の形態・調整はA-I bとほとんど同じである。口縁部の形態調整は、内面からの強いヨコナデの1回仕上げで、頸部外面にもヨコナデを行うため内彎気味である。頸部内面には鋭い稜がある。

A-II bの特徴は以下のようなものである。体部の形態・調整はA-I b・II aとほとんど同じであるが、刷毛目が体部の%以上行なわれるものがある。口縁部の形態調整はA-II aとほとんど同じであるが端部のつまみ上げのないものが多い。頸部外面にはヨコナデが行われている。内面のヘラケズリは頸部屈曲点より僅かに下までしか行なわれていないため、鋭い稜は持たない。

A-II cの特徴は以下のようなものである。体部は肩の低い球形である。頸部は緩曲線を描き、口縁

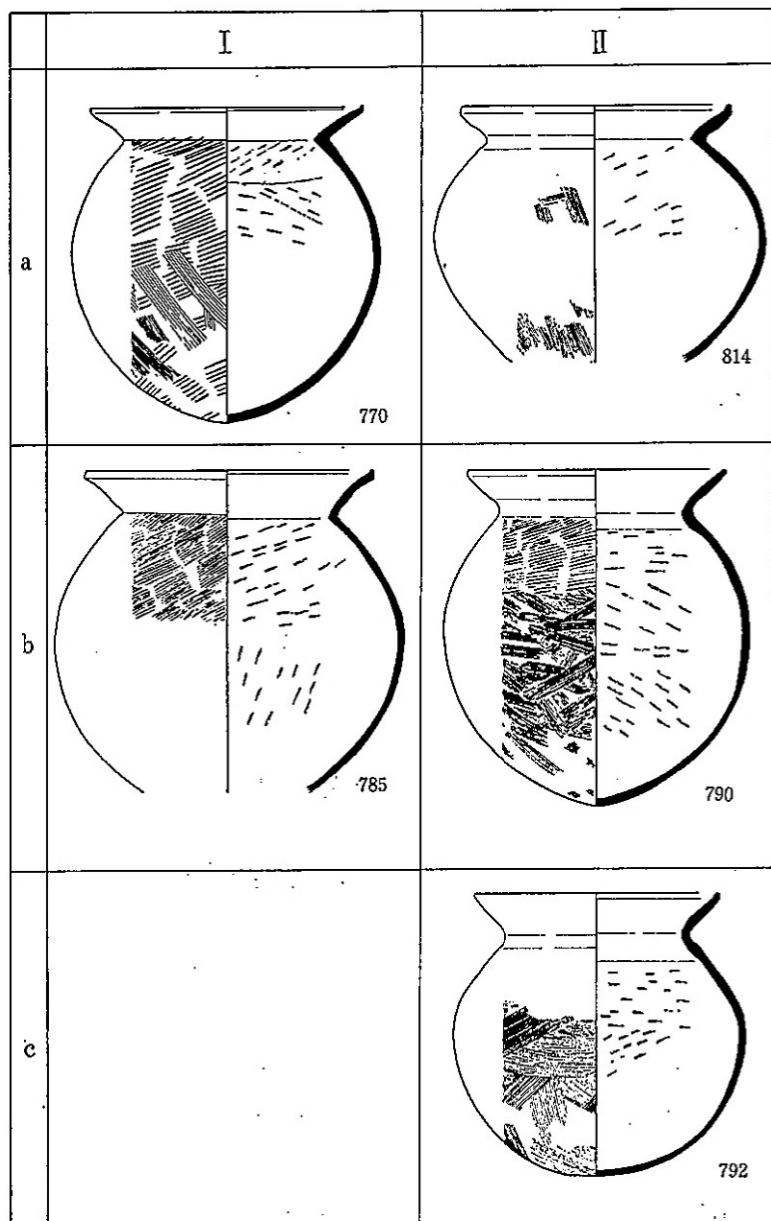
部は斜方向に僅かに内彎する。口縁端部は僅かに内面に肥厚する。体部の調整は、外面が刷毛目内面がヘラケズリであるが、頸部の屈曲点より僅かに下までしか行っていない。そのため、頸部内面には鋭い稜はない。口縁部は内面から強いヨコナデである。頸部外面はヨコナデである。

以上5種に細分したが、それぞれの間をつなぐような形態のものが数点ある。(811)は口縁部が僅かに波状を呈するようであり、端部の立ち上がりは稍内傾気味で明瞭な外端面を持つ。これはA-I aとA-I bをつなぐものと考えられる。同様のものには(769・775)がある。(797・

830)は口縁部内面が外反し、外面が内彎するものでA-I aとA-II aをつなぐものと考えられる。(797)は頸部に弱いヨコナデが施されており、(830)は頸部にヨコナデが施されていない。このことから各分類が時間差を表わすが重複が大きいものと考えられる。〈Bタイプ〉は、いわゆる瓜生堂遺跡及びその周辺産と考えられる甗であるが、量的にも少ないため、今回は細分は行なわない。

C 鉢の分類

鉢は小型のものが多く、大型品はない。色調は赤茶色を呈し、器壁も薄い。1点だけ灰褐色を呈し、器壁も僅かに厚いものがある。まず、胎土・色調・器壁で大別できる。胎土



第154図 甗分類図

が赤茶色を呈し、器壁の薄いものをAタイプ、胎土で灰褐色を呈し、器壁の僅かに厚いものをBタイプとする。Aタイプは、口径で2種に分けられ、10cm前後のものをA₁、15cm前後のものをA₂とする。

〈鉢A₁—Ⅰ〉は、腹径が頸径よりも大きく、割合深いものである。このタイプには(741・742)がある。口縁部の形状に若干の違いがあり、(741)は口縁部が斜上に外反し、(742)は口縁部が斜上に短く外反する。点数は少ないが2種に細分した。A₁—Ⅰ a (741)、A₁—Ⅰ b (742)である。(742)には径1.6cmの突出しない底がある。

〈鉢A₁—Ⅱ〉は、頸径が腹径よりも大きく、割合浅いものである。このタイプには(743・744・795・802・832)がある。この中でも深さや口縁部の形状等に違いがある。器高が口径の $\frac{1}{2}$ 前後のもの(743・795・802・832)と $\frac{1}{3}$ 前後のもの(744)がある。尚A₁—Ⅰ b (742)は $\frac{1}{2}$ である。口縁部が真直ぐ伸びるもの(832)と内彎気味のもの(743・744・795・802)があり、(832)の頸部内面は明瞭な稜がなく、他にはある。以上のことから3種に細分した。A₁—Ⅱ a (832)、A₁—Ⅱ b (743・795・802)、A₁—Ⅱ c (832)である。

A₁—Ⅱ aの特徴は、体部が半球形を呈し、口縁部が斜上に伸び、頸部内面に稜を持たない。

A₁—Ⅱ bの特徴は、体部が半球形を呈し、口縁部が斜に内彎気味に伸び、頸部内面に明瞭な稜を持つ。ただし、(802)は口縁部が短く内彎するため、別種と考えてもよいが一応ここに入れておく。

A₁—Ⅱ cの特徴は、体部が扁平な半球形を呈し、口縁部が斜に僅かに内彎し、頸部内面に明瞭な稜を持つ。

〈鉢A₂〉は(745・746)の2点である。僅かな違いはあるが、ほとんど同じ形態をしており、分ける必要はない。体部は扁平な半球形を呈しており、口縁部は斜に短く伸び、屈曲して更に斜上方向に僅かに外反する。

〈鉢B〉は(809)の1点だけである。体部は扁平な球形であり、頸部は緩やかな曲線を描き、口縁部は斜上方向に外反する。頸部内面には明瞭な稜がある。

以上、鉢をA・Bに分類し、AをA₁・A₂に分け、A₁をA₁—ⅠとA₁—Ⅱに分け、それぞれを細分した。AとBは製作地の違いとして捉えられる。A₁とA₂は同一器種内の容量の差として捉えられる。A₁—ⅠとA₁—Ⅱとは時間的な差として捉えられるが、それぞれの細分については時間的な差として捉えられる部分と併行関係として捉えられる部分があるようで、A₁・A₂と似たような捉え方をしなければならない部分もあるようである。ただ、A₂は2点しかなく細分は出来ないが、形態からはA₁—Ⅱ cに併行もしくは後出するものと考えられる。

D 高杯の分類

高杯は完形品が1点しかなく、破片が多いため、杯部を主として分類の対象とした。2種に大別できる。

<高杯Ⅰ>は、杯部を底部・体部・口縁部に3分することが可能で、口縁端部に明瞭な外端面を持つものである。このタイプには(757・794・808)がある。他にこのタイプと考えられるものには、口縁端部及び脚端部を欠失した(800)、体部及び口縁部を欠失した(761)、脚裾部破片の(760)があげられる。しかし、杯部の形状、杯底径、脚部の形状に若干の違いがあり、Ⅰタイプの中でも細分が可能なようである。杯部の形状は、体部と口縁部の境が緩やかに曲がる(794)と屈曲する(800)がある。(794)に近いものには(757・808)がある。(800)に近いものには(761)がある。杯底部と体部の境は、明瞭な稜をもつもの(794・757・808)を持たないもの(800・761)の2種ある。杯底部内面は、外面の曲線に添う(794)と外面に添わず水平な面を持つ(761・800・808)とがある。水平な面を持つものは中央に径約1cm、深さ約0.5cmの逆円錐形の凹みがある。中央にあることから杯底部内面の成形もしくは整形に関係あるものと考えられる。杯底径は、(794)が8cm以下、(757・808)が8～10cm、(800・761)が10cm以上であり、3種に分けられる。脚部の形状としては、脚裾部に段の有る(794)と真直ぐ伸びる(761)の2種類ある。(794)に近いものには(760)がある。以上、Ⅰの中でも種々の違いがあり、これらから3種に細分した。Ⅰa(794)、Ⅰb(757・808・760)、Ⅰc(761・800)である。

Ⅰaの特徴は以下のものである。杯部が、底部・体部・口縁部に3分される。口縁端部外面には稜があり、明瞭な外端面を持つ。杯底部内面は水平ではなく、回転を利用した成形も行なっていない。底部と体部の境には稜がある。体部と口縁部の境は曲線を描く。杯底径は8cm以下である。脚裾部には段がある。

Ⅰbの特徴は以下のものである。杯部が底部・体部・口縁部に3分される。口縁端部外面には稜があり、明瞭な外端面を持つ。杯底部内面は水平であり、回転を利用した成形が行なわれている。底部と体部の境には稜がある。体部と口縁部の境は曲線を描く、杯底径は9cm前後である。脚裾部には段の痕跡がある。

Ⅰcの特徴は以下のものである。杯部が底部・体部・口縁部に3分される。口縁端部は不明である。杯底部内面は水平であり、回転を利用した成形が行なわれている。底部と体部の境には明瞭な稜はない。体部と口縁部の境は屈曲する。杯底径は10cm以上である。脚裾部には段は多い。

<高杯Ⅱ>は、体部と口縁部が明確に分けられず、杯部を底部と口縁部に2分しかできないもので、口縁端部が尖り気味に丸く作られているものである。このタイプには(758・759・762～764・820～822)がある。他にこのタイプと考えられるものには脚裾部破片の(823)が上げられる。これも杯部に若干の違いがあり、細分が可能である。口縁部の形状は、体部と口縁部の境が僅かに痕跡として認められるもの(758・759・762)、真直ぐ伸びるもの(764)、僅かに内彎するもの(763・820～822)があり、3種に分けられる。杯底部と体部の境は、明瞭な稜を持つもの(959・762・764)と段を持つもの(763・820～822)の2種に分けられる。杯底部内面は、底部の遺存するものはすべて水平である。以上、Ⅱタイプの中でも僅かに違いがあり、3種に細分した。Ⅱa

(758・759・762)、Ⅱ b (764)、Ⅱ c (763・820～822) である。

Ⅱ a の特徴は以下のようである。杯体部と口縁部の境は、僅かに痕跡がのこる程度であり、不明瞭である。口縁端部は丸い。杯底部内面は水平である。底部と口縁部の境には稜がある。

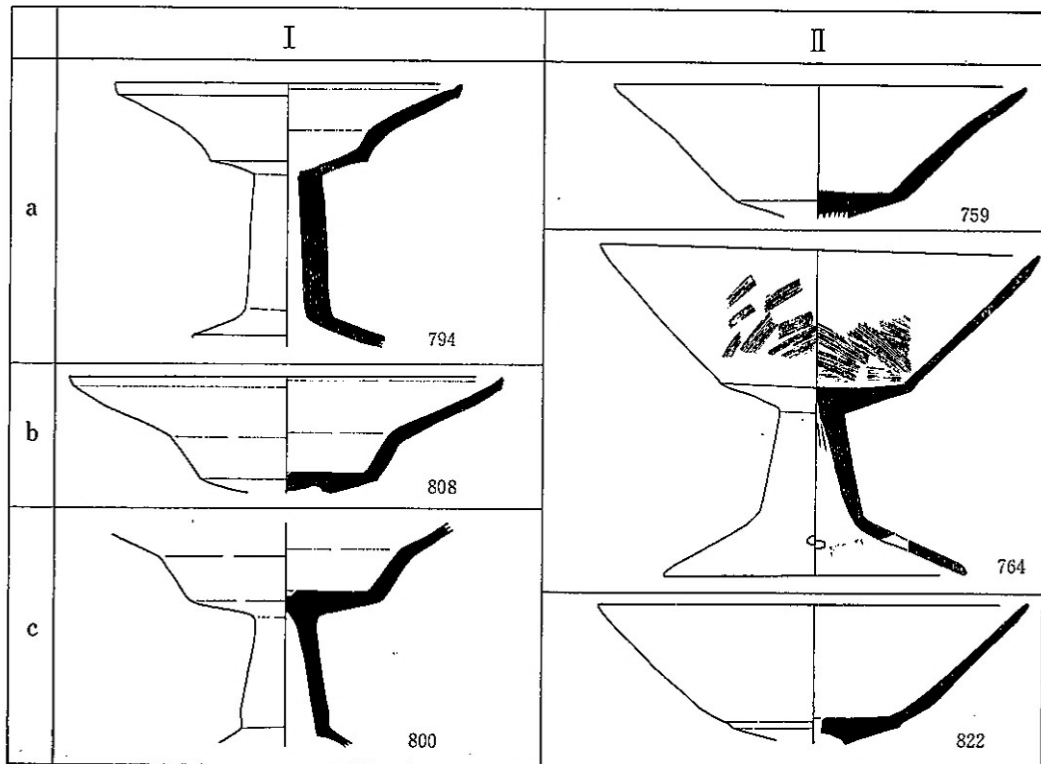
Ⅱ b の特徴は以下のようである。杯体部と口縁部の境はなく、口縁部は底部から斜方面に真直ぐ伸びる。口縁端部は丸い。杯底部内面は水平である。底部と口縁部の境には稜がある。

Ⅱ c の特徴は以下のようである。杯体部と口縁部の境はなく、口縁部は底部から斜方向に内彎する。口縁端部は丸い。杯底部内面は水平であり、中央に凹み及び穿孔がある。底部と口縁部の境には段がある。

以上、高杯をⅠ・Ⅱに大別し、それぞれを a・b・c に細分した。ⅠとⅡはある程度時間的な差として捉えられるが、それぞれの a・b・c については時間的な差として捉えられる部分と併行関係と捉えられる部分とがあるようである。

4) まとめ

遺物を各器種毎に分類した。分類における A・B は時間差ではない。しかし、Ⅰ・Ⅱはある程度時間差として捉えられるものである。これを各遺構の各層に当てはめると明確な時間差として現われるであろう。そこで、セット関係及び時間的先後関係を明らかにしたい。



第155図 高杯分類図

溝224下層から検出した土器は壺A-I、甗A-I a、鉢A₁-I a・I b、高杯I bである。中層から検出した土器は壺A-I、甗A-I a・I b・II b、高杯II a・II bである。上層から検出した土器は壺A-II・B-II、甗A-I b・II b・II c、鉢A₁-II c・A₂、高杯II cを検出した。

土器溜1下層から検出した土器は甗A-I a、鉢A₁-II b、高杯I aである。上層から検出した土器は甗A-I a・I b、鉢A₁-II b~c、高杯I cである。

土器溜2から検出した土器は壺A-I・B-II、甗A-I a・I b、鉢B、高杯I bである。

土器溜3から検出した土器は甗A-I b・II a、高杯II b・II cである。

土壙330から検出した土器は甗A-I a、鉢A₁-II aである。

これを整理すると、やはり土器量の多かった溝224が時間幅も長いようであり、溝224を中心に他の遺構と組合せてセット関係等を考えて見ることにする。まず、下層の甗はA-I a、中層はA-I a・I b・II b、上層はA-I b・II b・II cである。溝224でみる限り、A-I aが古く、A-I b・II bが続き、A-II cが最も新しいということしか判らない。土器溜1上層ではA-I a・I b、土器溜2も同様、土器溜3ではA-I b・II aである。A-I bは、A-I aよりも新しく、A-II a・II bよりも古い。次はA-II aとA-II bの関係であるが、土器溜3で見る限りはA-II aはA-II bよりも古い。しかし、A-I bとA-II bの間に無条件で入ってしまうのではないようであり、(816・819)を見ているとA-I bとA-II bは続くようであり、両者に重複してA-II aが存在したようである。また、(797・830)からは甗A-I aと甗A-II aが続くようである。ただし、甗A-I aは甗A-I bよりも、また甗A-II aは甗A-II bよりも古いものと考えられる。しかし、中間的要素を持つものも含めて考えれば、それぞれの重複は非常に大きくなるようである。これは一つには従来の編年時間幅よりも細分していると考えられ、甗A-Iと甗A-IIに2分するのが従来の細分時間幅に近いものといえよう。a、bの細分については、I・IIの中での先後関係を表わすようである。しかし、甗A-I aが古く甗A-I bと大きく重複し、甗A-I aに甗A-II aが続き、甗A-I bと重複している。甗A-II aは同様に重複しながらA-II bへと続くようである。なお、A-IとA-IIが別系統の製作によるものであり、時間的にはaからbへの先後関係しかないということは、上田町II式において甗A-I aと甗A-I bが共伴していることや、溝224の中層、土器溜1の上層、土器溜2の状況からも考えられない。

壺A-Iは、溝224下層、土器溜2で甗A-I a・I bと共伴している。壺A-IIは、B-IIとともに溝224上層で甗A-I b・II b・II cと共伴している。

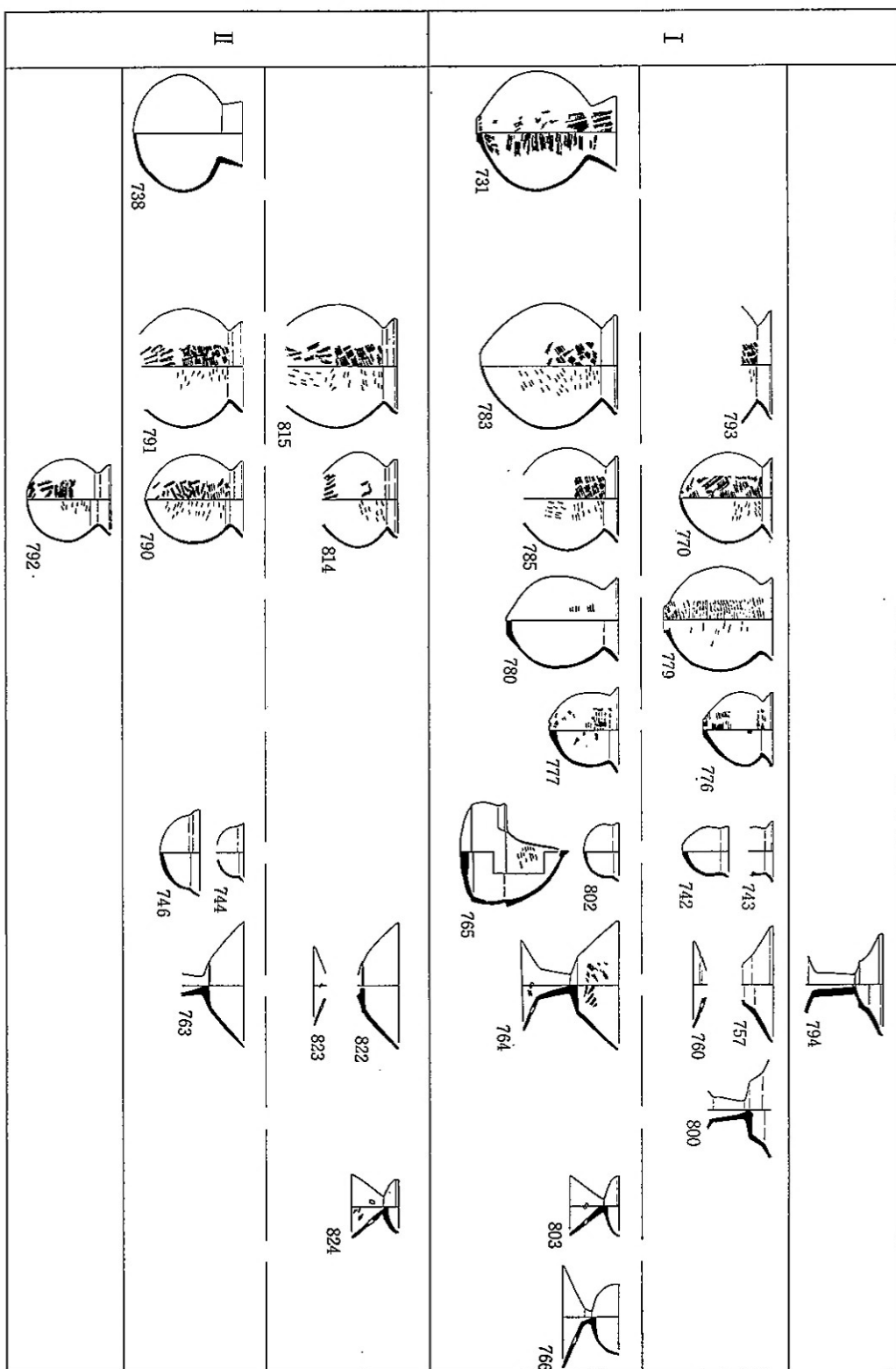
鉢A₁-I a・I bは溝224下層において甗A-I aと共伴、鉢A₁-II c・A₂は溝224上層において甗A-I b・II b・II cと共伴、鉢A₁-II aは土壙330において甗A-I aと共伴している。

高杯Ⅰ aは土器溜1下層で甕A-Ⅰ aと共伴。高杯Ⅰ bは溝224下層において甕A-Ⅰ aと共伴し、土器溜2において甕A-Ⅰ a・Ⅰ bと共伴する。高杯Ⅱ a・Ⅱ bは溝224中層において甕A-Ⅰ a・Ⅰ b・Ⅱ bと共伴する。高杯Ⅱ cは溝224上層で甕A-Ⅰ b・Ⅱ b・Ⅱ cと共伴する。高杯Ⅱ b・Ⅱ cは土器溜3において甕A-Ⅰ b・Ⅱ bと共伴する。

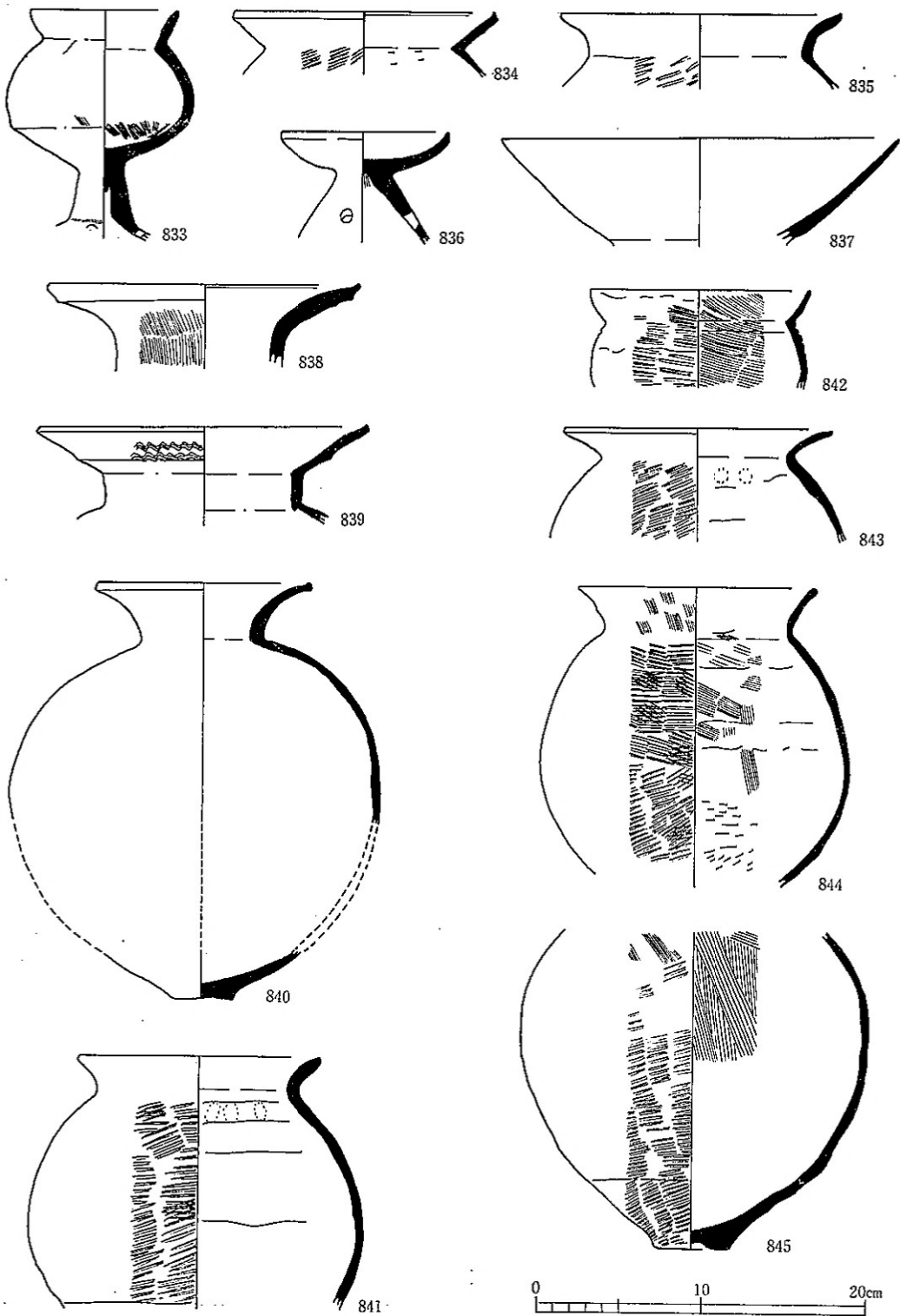
以上を総合すると第156図のようになる。セット関係及び時間的なズレはある程度明らかになった。また、甕A-Ⅱ aの始まりをもって庄内式の第Ⅱ期とし、以前を第Ⅰ期と分けることが可能と考えられる。

他には庄内式と在地の甕の組合せが若干の興味を引くぐらいである。庄内式の甕は大・中型の組合せであり、在地の甕と考えられるものは中・小型である。この関係が明瞭なのは甕A-Ⅰ a・Ⅰ bの段階だけであり、Ⅱ a・Ⅱ bに不明である。なお、在地の甕は分類のところで数値を上げた通り30%未満であり、庄内式甕は70%強である。このように甕に関しては庄内式が河内平野の中心部では圧倒的に増加するのである。しかし、他地域では弥生時代後期以前よりも量的には増加するものの当遺跡ほどではない。「庄内式土器は」畿内以西で最近相当数の遺跡で検出されているが、やはり量的には少ない。このように「庄内式土器」が急速に持ち運ばれていることは、この時期に畿内の影響が畿内以西に及んだことが十分に考えられる訳である。従って、広範囲に影響を与えたと考えることが可能であれば、それ以前とは社会構造に何らかの変化が生じたものと理解することができよう。弥生時代から古墳時代への変化を祭祀形態の確立をもって区分するよりも、社会構造の変化をもって区分する方が適当と考えられる。そうであれば、「庄内式土器」使用時にはすでに古墳時代（現在考古学で弥生時代と歴史時代（古代）の間を埋めている時代）に入っている、何ら不思議なことではないであろう。

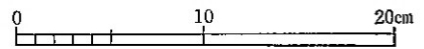
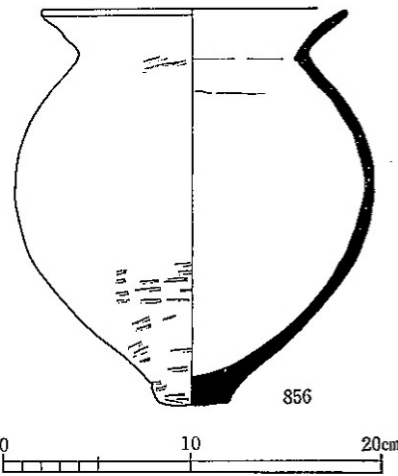
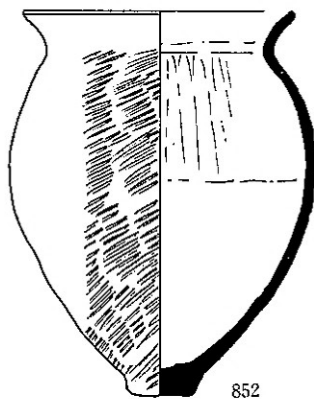
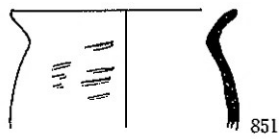
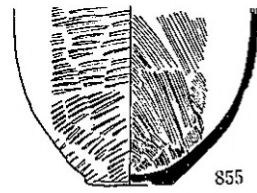
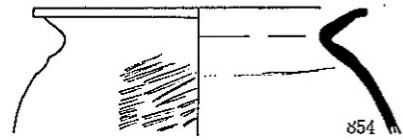
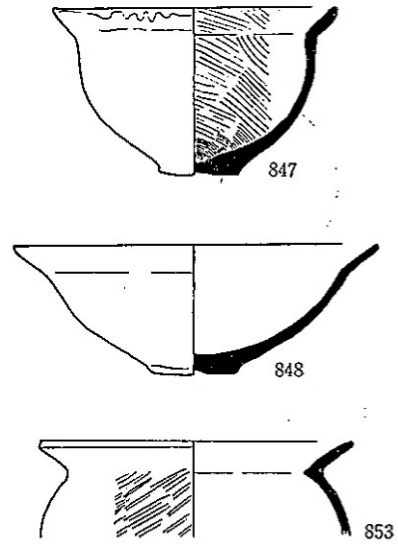
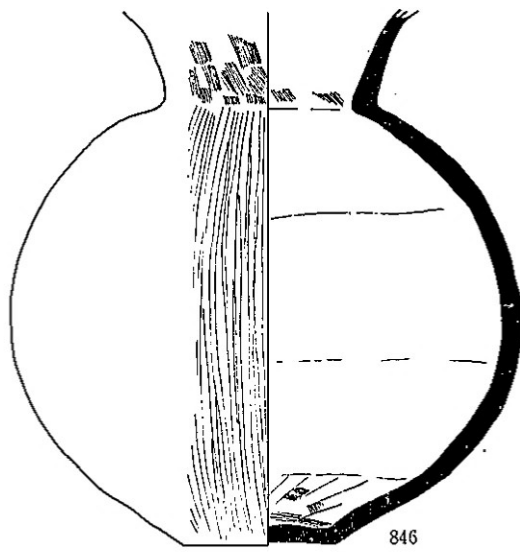
また、他遺跡との比較も本来行なわねばならないのであるが、今回は省いてしまった。ただ甕A-Ⅰ aが上田町Ⅱ式でありいわゆる庄内式であるが、甕A-Ⅱ c (792)は庄内式と布留式の接点にあたるものであろう。省略してしまったが、下層の遺物も多量にあり、弥生時代後期遺構面Ⅲとした遺構面との関係等も下層の遺物を詳細に調べれば、明確となるであろう。



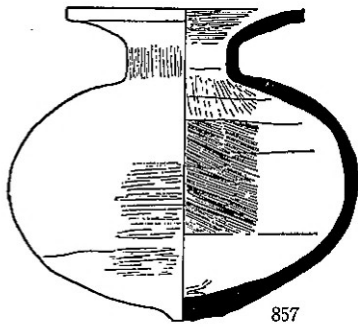
第156図 土器セット分類図



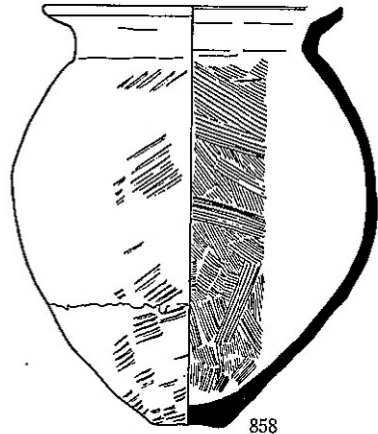
第157图 古墳時代前期包含層出土土器



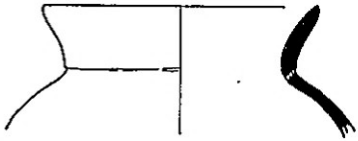
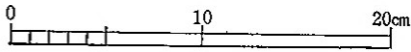
第158图 古墳時代前期下層出土土器



857



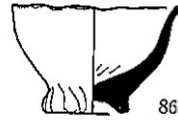
858



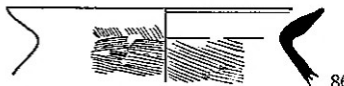
859



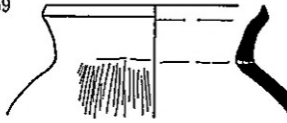
860



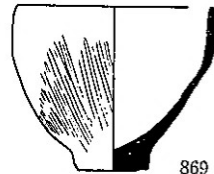
868



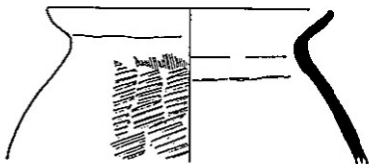
862



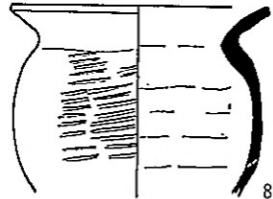
861



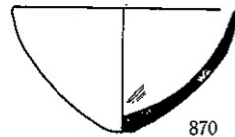
869



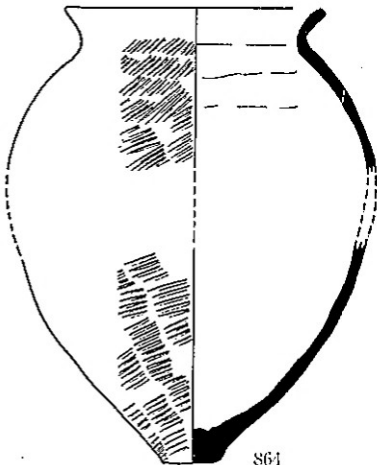
863



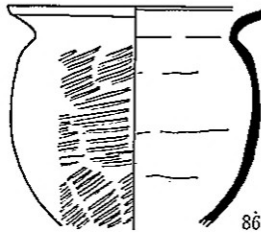
865



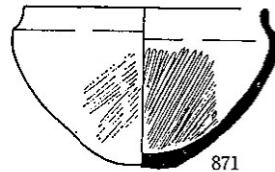
870



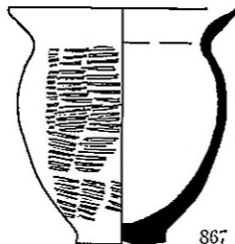
864



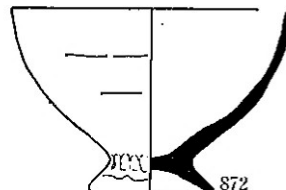
866



871

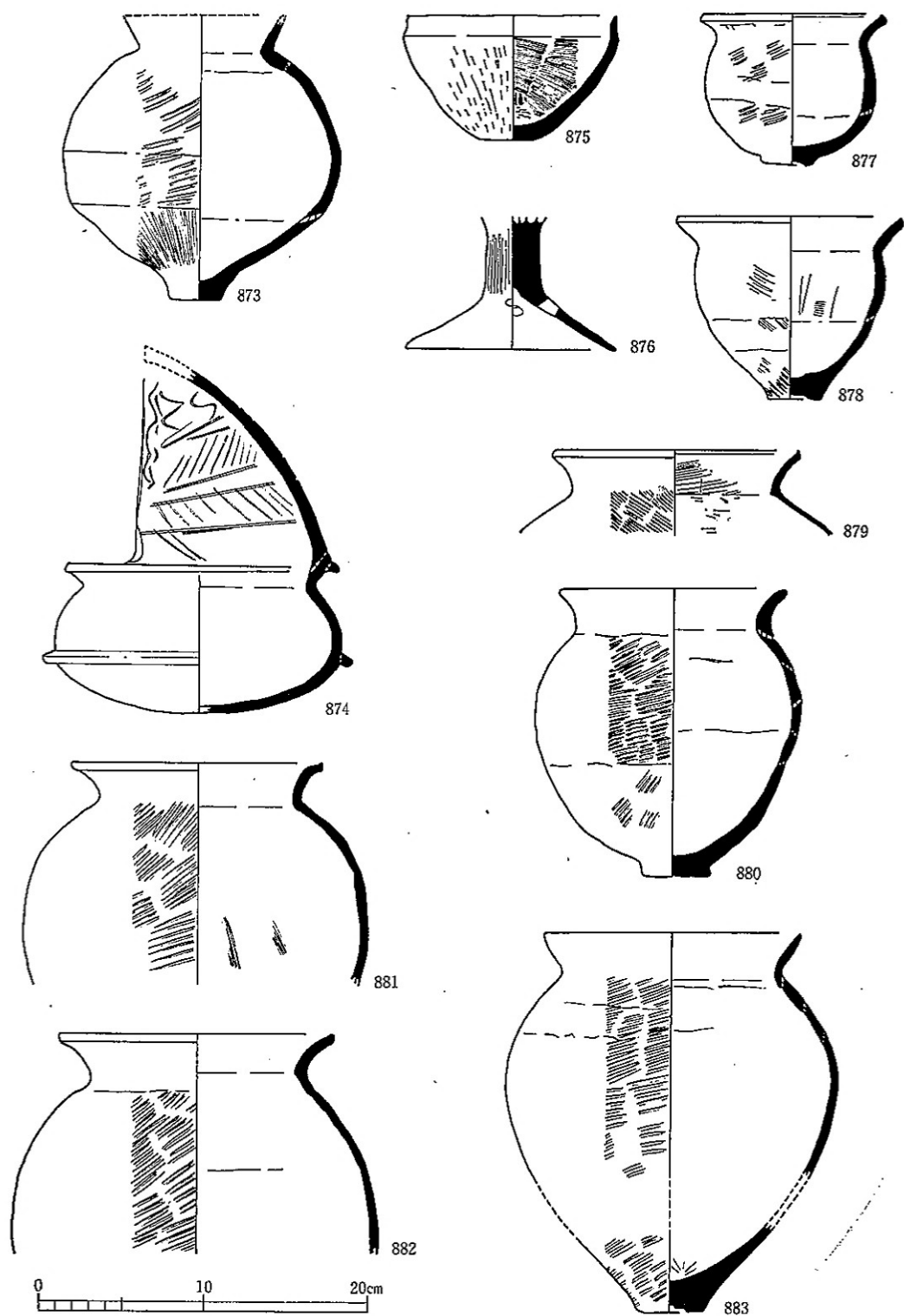


867

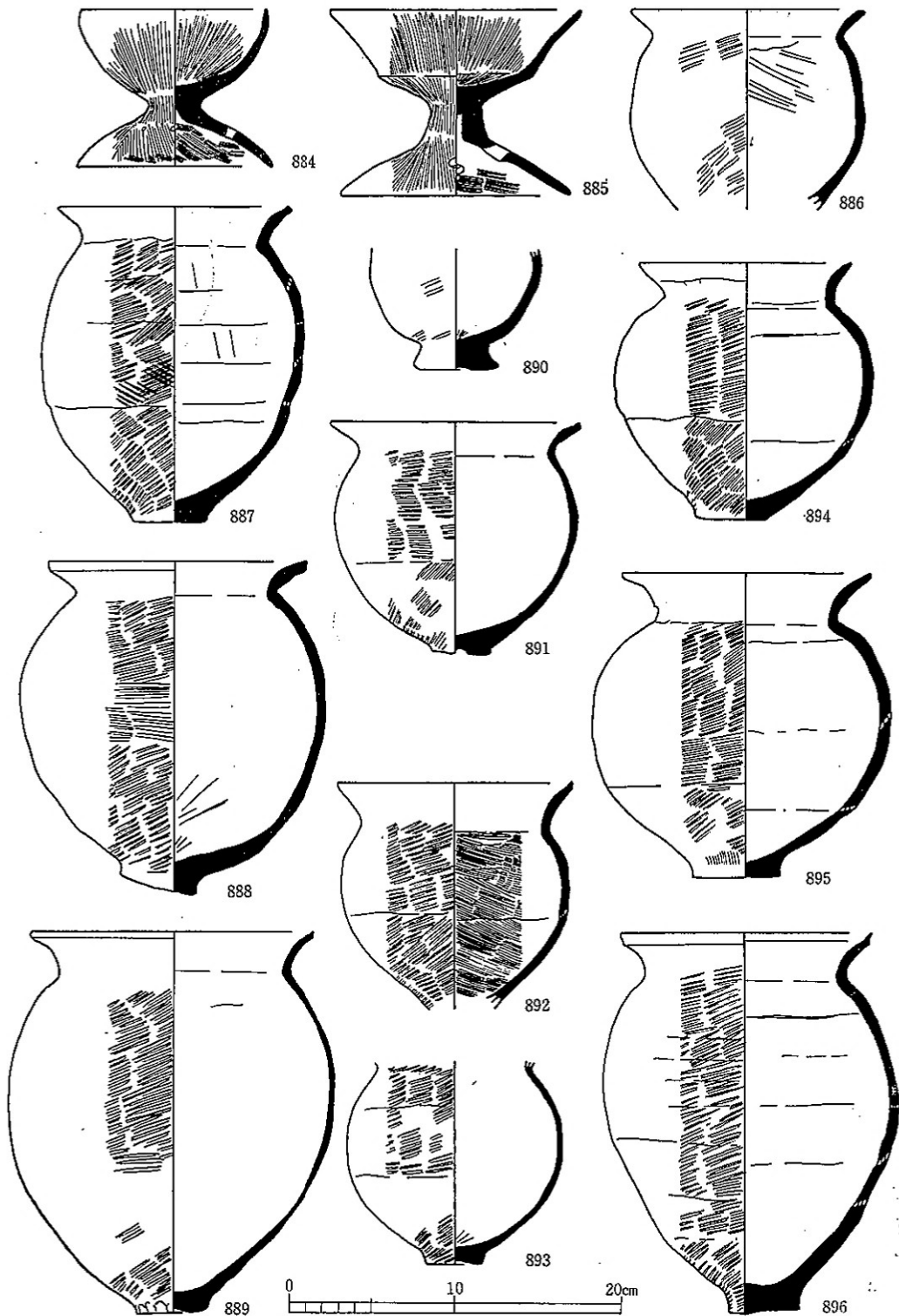


872

第159图 古墳時代前期下層出土土器



第160图 古墳時代前期下層出土土器



第161图 古墳時代前期下層出土土器

第3節 C地区の調査

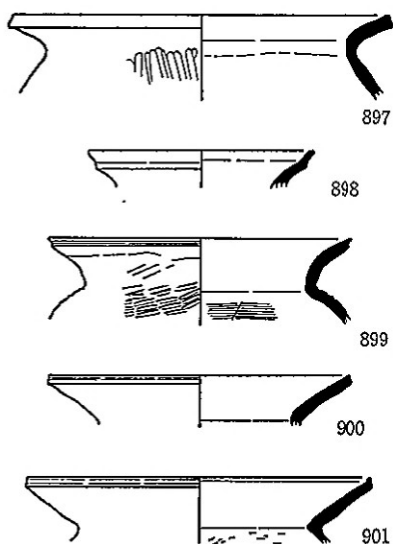
1 層序

今回の調査ではT. P. -0.3~1.3mの弥生時代中期の遺構面を最終遺構面とし、それ以下は幅1m、深さ1mのトレンチを各所に掘削して遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は全く検出されなかったが、次のような層序を観察することができた。確認した最下層は植物遺体を多量に含む茶褐色粘土層で、上面のレベルはT. P. -1.6~2.0mで北に向って下降している。その上には厚さ10~30cmの暗青灰色~暗灰色の粘土層があり、その上に植物遺体を含む暗褐色粘土層が10~30cmの厚さで堆積している。その上面のレベルはT. P. -0.7~1.7mで5D4~5ライン付近が最も高く、トレンチ北端が最も低い。その上に堆積する暗灰色粘土層はA地区で確認された弥生時代前期の包含層と同一のものと思われ、厚さ30cm前後である。上面のレベルはT. P. -0.5~1.6mで、やはり北端部で低くなっている。その上には青灰色ないし暗青灰色の粘土層が堆積し、その上に黄色砂層が5~20cmの厚さで堆積している。この黄色砂層の上面が弥生時代中期の遺構面であり、溝、土塋等多数の遺構が検出された。この面を弥生時代中期遺構面Ⅰと称する。

方形周溝墓は4基発見された。中期Ⅰの面上に盛土して墳丘を形成し、周溝は中期Ⅰの面を切り込む。これらの方形周溝墓は中期Ⅰの面より新しいことは明らかで、これを弥生時代中期遺構面Ⅱと称する。中期Ⅰと中期Ⅱは層位的には前後関係が明らかであるが、出土する土器には大差なく、いずれも畿内第Ⅲ様式後半~第Ⅳ様式を中心とする。中期Ⅱの面上には黒色砂質土が10~20cmの厚さで堆積しており、弥生中期(Ⅲ~Ⅳ様式)の土器を大量に包含している。トレンチ内のほとんど全域にはほぼ均等の厚さで堆積しており、黒色砂質土上面を検出した段階で方形周溝墓の盛土を予想することができる。レベルはT. P. -0.3m~1.2mで、北端部の最も低い部分では粘土分が多くなり、黒色粘質土と呼ぶ方がふさわしい。黒色砂質土から黒色粘質土への変化は漸移的で明確な境界をなさない。

黒色砂質土(中期包含層)の上には下から黒色粘土、暗灰色粘土が堆積している。暗灰色粘土の上面はT. P. +0~-1mで、その起伏は下層の黒色砂質土と同じく5D1~7ラインまではほぼ水平であるが、その中では5D4~5ライン付近が最も高く、5D1ライン付近から下降し、北端が最も低くなる。この面上には1Cトレンチで足跡が検出されている。時期は本地区では遺物は出土しなかったが、A・B両地区で弥生時代後期の土器が同一層から出土しており、この面を弥生時代後期遺構面Ⅰと称する。

トレンチ北半部の暗灰色粘土(弥生時代後期遺構面Ⅰ)上には、厚い砂層が堆積している。トレンチ北端部で厚さ80cm、上面のレベルがT. P. ±0m前後、トレンチ中央の5D3ライン付近で厚さ約40cm、上面のレベルはT. P. +0.3mである。この砂層には弥生時代後期の土器(V様



第162図 弥生時代後期(897~900)
古墳時代前期(901)包含層出土
土器(イ)

式後半)がきわめて少量含まれている(第162図897~900)。この層の最下部は有機質を多量に含んで黒色を呈しており、弥生時代中期包含層の黒色砂質土に極似している。トレンチ南半部では砂層はなくなり暗灰色粘土層になるが、この層の上面は砂層上面から続く一時期における生活面とみられる。砂層の部分では遺構は全くなかったが、暗灰色粘土上面ではトレンチ部の機械掘削の際、1個の小ピットの断面がみられた。切掘り部(3C、4Cトレンチ)は人力掘削を行ったが、遺構は検出されなかった。従って性格は明らかとはいえないが、この面も弥生時代後期の遺構面であり、弥生時代後期遺構面Ⅱとする。

弥生時代後期遺構面Ⅱの上にはさらに砂、粘土が堆積するが、T.P.+0.8m~1.2mのレベルの暗灰色粘土層(厚さ約15~30cm)は少量の庄内式土器を含み(第162図901)その上面には足跡が存在するので、これを古墳時代前期遺構面と称する。この暗灰色粘土層は5D1ライン付近から北は砂層によって断ちきられるが、そこから南の約25mはほぼ水平で黄斑を含むので水田であった可能性が強い。

さらにその上に砂、粘土の堆積が約0.5~0.7mあり、T.P.+1.3~1.6mの黄褐色の砂質土、粘質土の面がある。これもトレンチ部の機械掘削の際、断面に小ピットが2個観察されたが、切掘り部の調査の際には遺構は発見されなかった。時期は明確にできないが、Bトレンチで検出された古墳時代中期(布留式期)の面に続く可能性が考えられる。

その上のT.P.+2.0m前後の茶褐色砂質土の面が奈良時代後半~平安時代の遺構面である。トレンチ北端部を中心に溝、ピットが検出された。これはBトレンチ南半で検出された掘立柱建物や、それと同方向の溝と同時期のものであると考えられるが、Cトレンチでは建物は検出されなかった。また、これと同一面で大型の土壙数個が検出され、東西方向の溝数本も存在するが、これは中世のものと思われる。

以上まとめると、遺構面は弥生時代中期Ⅰ・Ⅱ、弥生時代後期Ⅰ・Ⅱ、古墳時代前期、古墳時代中期、奈良時代~中世の7枚存在することになるが、このうちトレンチ全面で遺構を検出したものは弥生時代中期Ⅰ・Ⅱ、奈良時代の3枚のみであり、部分的に遺構の広がりをとらえたものが弥生時代後期Ⅰ、古墳時代前期の2枚、他の2枚は断面からその存在が推定されるにすぎない。

2 弥生時代中期の遺構と遺物

弥生時代中期には2枚の遺構面が形成されている。すなわち、方形周溝墓がつくられた面と、方形周溝墓盛土下において溝や土壙等が検出される面である。後者を遺構面Ⅰ、前者を遺構面Ⅱと称する。遺構面Ⅰはトレンチ内の大部分では黄色砂層上面にあり、レベルが低いトレンチ北端部では黄色砂層がなくなり、黄色砂層下の青灰色粘土層が遺構面になる。遺構面Ⅱの方形周溝墓の盛土は黄色砂層に直接のっており、第12号方形周溝墓では黄色砂層を若干削り出した上に盛土を行ったようである。従って遺構面Ⅰは方形周溝墓をつくる際いくらかは削平されたと思われる。また遺構面Ⅰに属するものとした遺構の中にも、方形周溝墓盛土下以外のものには遺構面Ⅱの時期に属するものがある可能性はあるが、出土土器等から見ても明確に区別することはできないので、便宜上すべて遺構面Ⅰの中でとり扱うことにする。遺構面Ⅰの遺構はきわめて浅いものが多いが、これは方形周溝墓の盛土に使用するために削平を受けたと考えることもできる。

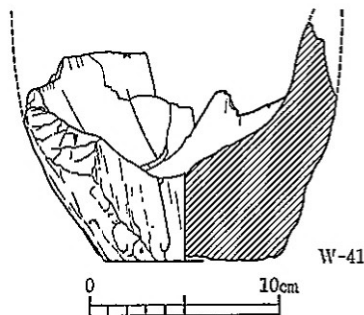
1) 遺構面Ⅰ

遺構面Ⅰは黄色砂層の上面であり、溝22条、土壙17基、ピット96個、落込2基を検出した(付図16)。しかし第11号方形周溝墓の墳丘を保存することになったため、その下の遺構は調査していない。いずれも上部をかなり削平されたらしく、浅いものが多い。遺構面のレベルは、第12号方形周溝墓盛土下の黄色砂層面が最も高く、T.P. -0.1~0.2mである。ここは小さなピットが密集し、柱根や根がらみと考えられる木片を含むものも多数あるので、何らかの建物が存在した可能性が大きい。周辺は第12号方形周溝墓の墳丘を削り出すために削平され、T.P. -0.5m前後である。この付近から南へはほとんど水平でレベル差はあまりないが、北へゆるやかに傾斜し、特に北端から10m付近からやや低くなって北端ではT.P. -1.2mほどになる。最もレベルが低い北端付近では黄色砂層も遺構もなくなる。これらの遺構の性格は不明な面が多いが、建物かとも考えられる柱穴群の存在からみて集落の一部であろうと思われる。

A 溝

<溝78> 1Cトレンチ北西隅でL字状に検出された。幅1.3~1.9m、深さ0.25~0.35mで、暗灰色の砂、粘土が互層をなして堆積していた。東辺部でややまとまって土器(第164図)や石庖丁(第192図255)が出土した。遺物は溝底よりやや上の灰黒色粘土層内、及びその上層下部に集中している。またコーナー部で木製容器(第163図)が出土している。

<溝79> 溝78南辺から南へのび、南端はやや西へ曲り、先端部は削平されている。幅0.8m~1.2m、深さ0.2mを測る。遺物はきわめて少ない。土壙143、144に切られ、溝81を切っている。



第163図 溝78出土木器

<溝80> 溝78東辺から派生して東にのび、途中南へ曲るが、削平されたため途中で消える。幅1.8m、深さ0.2mを測る。遺物はきわめて少ない。

<溝81> 1 Cトレンチ南部の南北方向の溝で、溝79に切られる。幅1.9~2.2m、深さ0.2mで、暗灰色砂、粘土の互層が堆積している。遺物は少ない。溝78~81は堆積土の状況等からみて人工の遺構である可能性はうすい。

<溝82> 2 Cトレンチ南端付近のほぼ東西方向のものである。幅0.6~0.8m、深さ0.2mで有機質を多量に含む暗灰色~灰黒色砂質土が堆積していた。遺物は散漫ではあるが、かなりの量の土器(第165、166図910~930)が出土した。

<溝83> 溝82、84に両端を切られる。幅0.6m、深さ0.1mである。遺物は少ない。

<溝84> 溝82の南約1mで平行にのびる。幅0.3m、深さ0.15m前後である。本来は2本の溝が中央付近で重なったものであるが、切合関係は確定できなかった。遺物(第167図937~942)は少ない。

<溝85~88> Cトレンチ中央部ではほぼ南北方向にのびるが、やや蛇行する。幅0.2m未満、深さ0.05m程度で、暗灰色砂が堆積している。遺物(第166図931~936)はきわめて少ない。

<溝89~92> 3 Cトレンチ中央部にあり、方向はさまさまである。溝85~88と同様に配置や方向に規則性はなく、細く浅いもので、遺物(第168図955)は少ない。

<溝93> Cトレンチ中央やや南の東西方向のもので、幅1.6~1.7m、深さ0.2mの断面皿状の浅いものである。土器(第167図943~947)はかなり出土した。

<溝94> Cトレンチ南部の南北方向のもので、幅0.5~1.9m、深さ0.2m、長さ約12mである。遺物(第168図950~954)は、面積あたりの含有率は低いが遺構自体が大きいのでかなりの量になった。

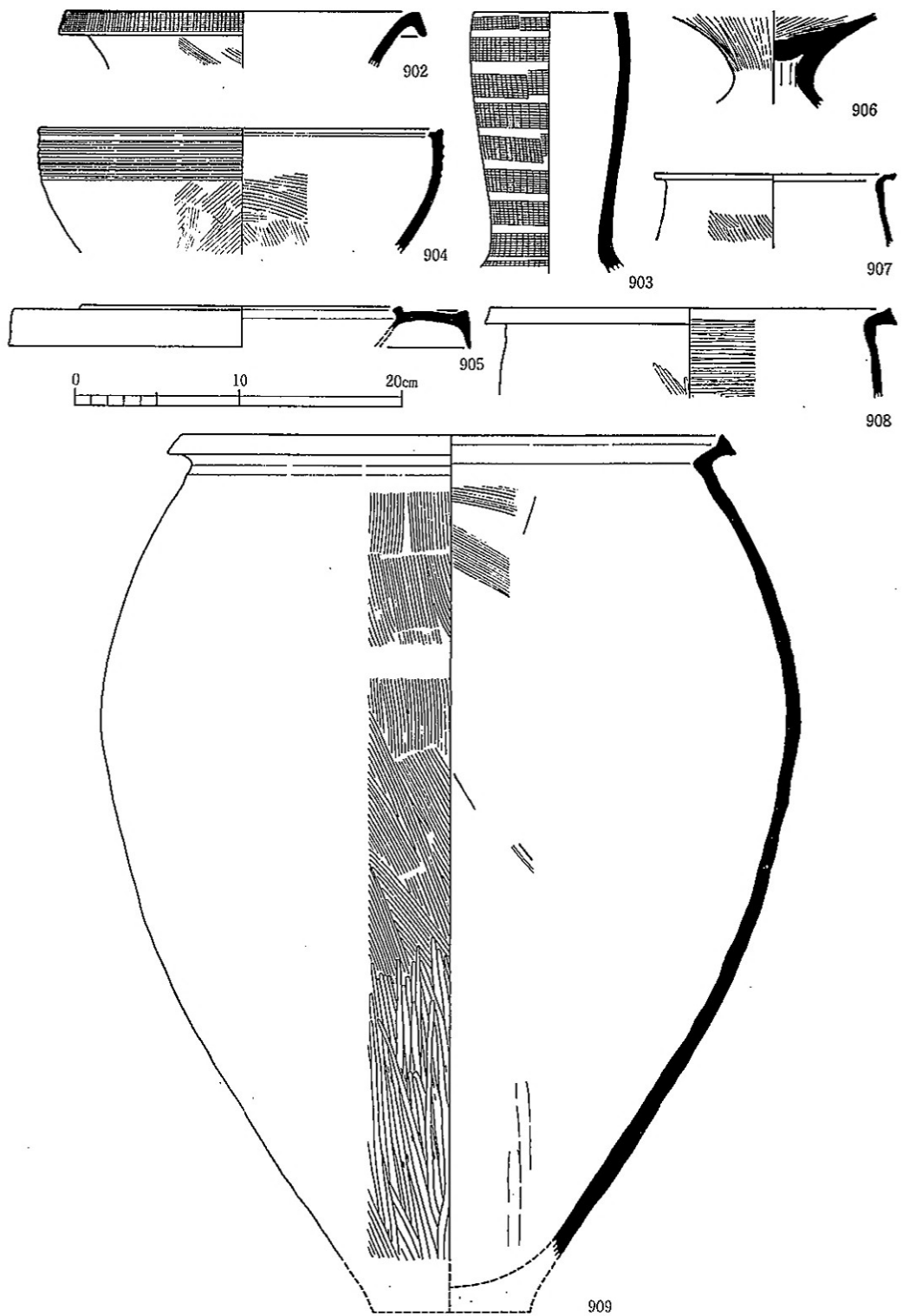
<溝95> 幅0.3m、深さ0.15mの直線的なものである。遺物は少ない。まわりの遺構よりやや高い面で検出された。

<溝96> Cトレンチ南端にあり、幅0.9~1.3m、深さ0.3、長さ5.5mである。遺物は少ない。西端は土壁155に切られる。

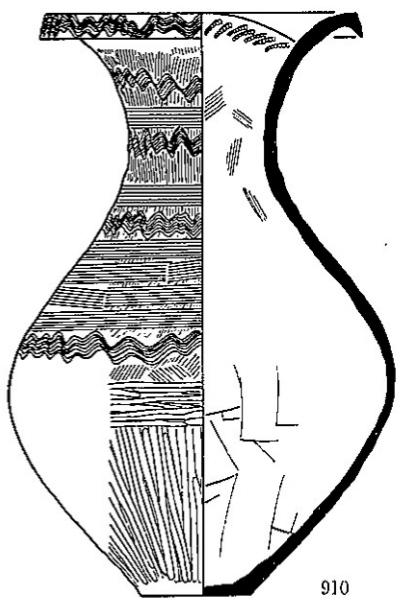
<溝97> 4 Cトレンチ北端の幅0.9~1.3m、深さ0.3mのもので、暗灰色砂、粘土が互層状に堆積している。遺物は少ない。

<溝98> 溝99に切られる。幅0.3~0.4m、深さ0.1mのもので、暗灰色砂が堆積している。遺物はきわめて少ない。

<溝99> 4 Cトレンチ北部の南北方向のもので、幅1.1~1.5m、深さ0.3m、長さ5.2mである。暗灰色砂、粘土が堆積しており、遺物(第168図948・949)は少ない。



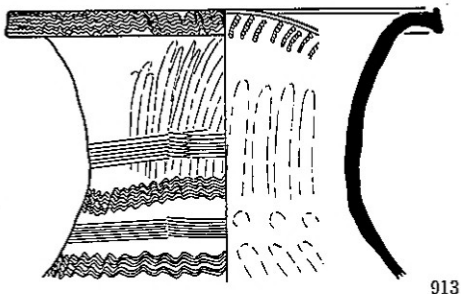
第164图 溝 78 出土土器



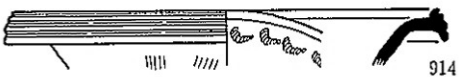
910



912



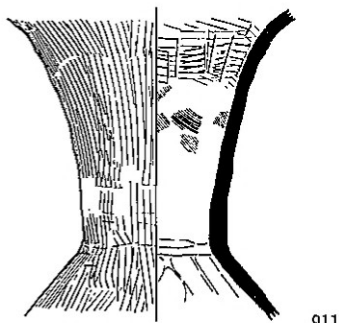
913



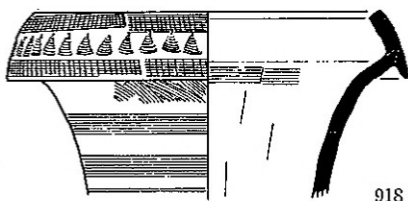
914



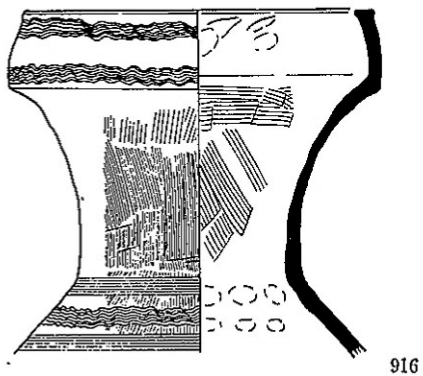
915



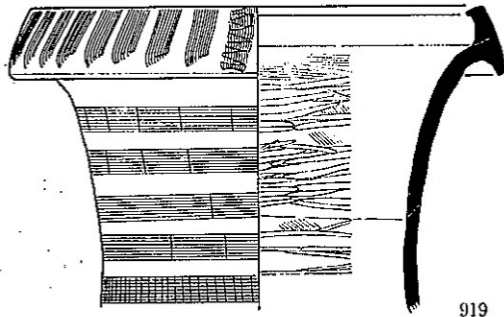
911



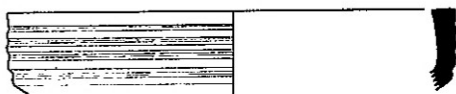
918



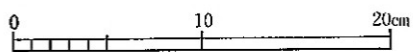
916



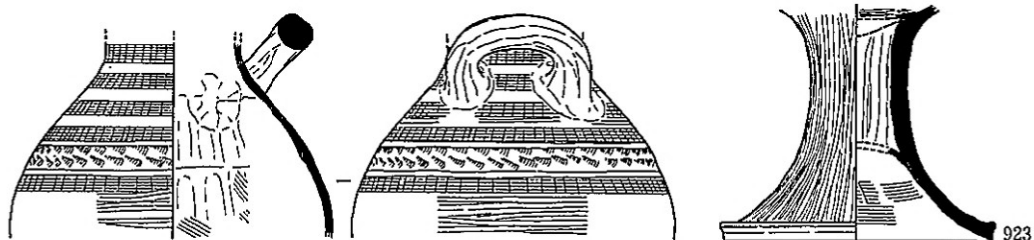
919



917

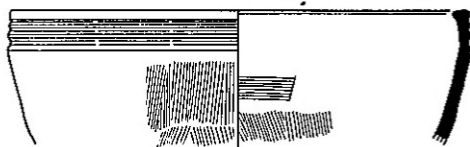


第165图 沟 82 出土土器

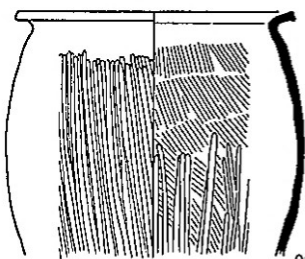


920

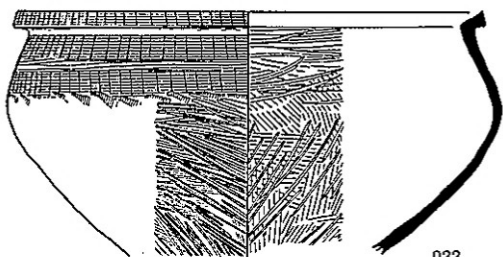
923



921



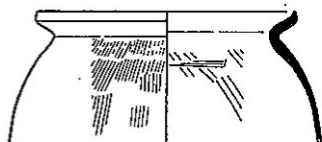
924



922



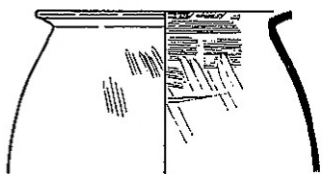
925



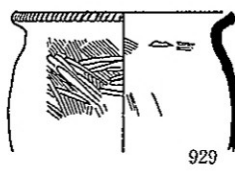
926



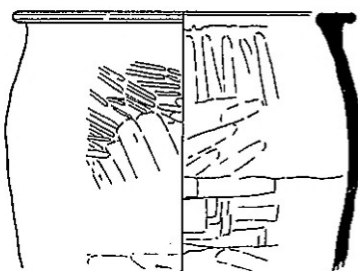
928



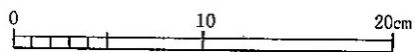
927



929



930



931



932



933



934

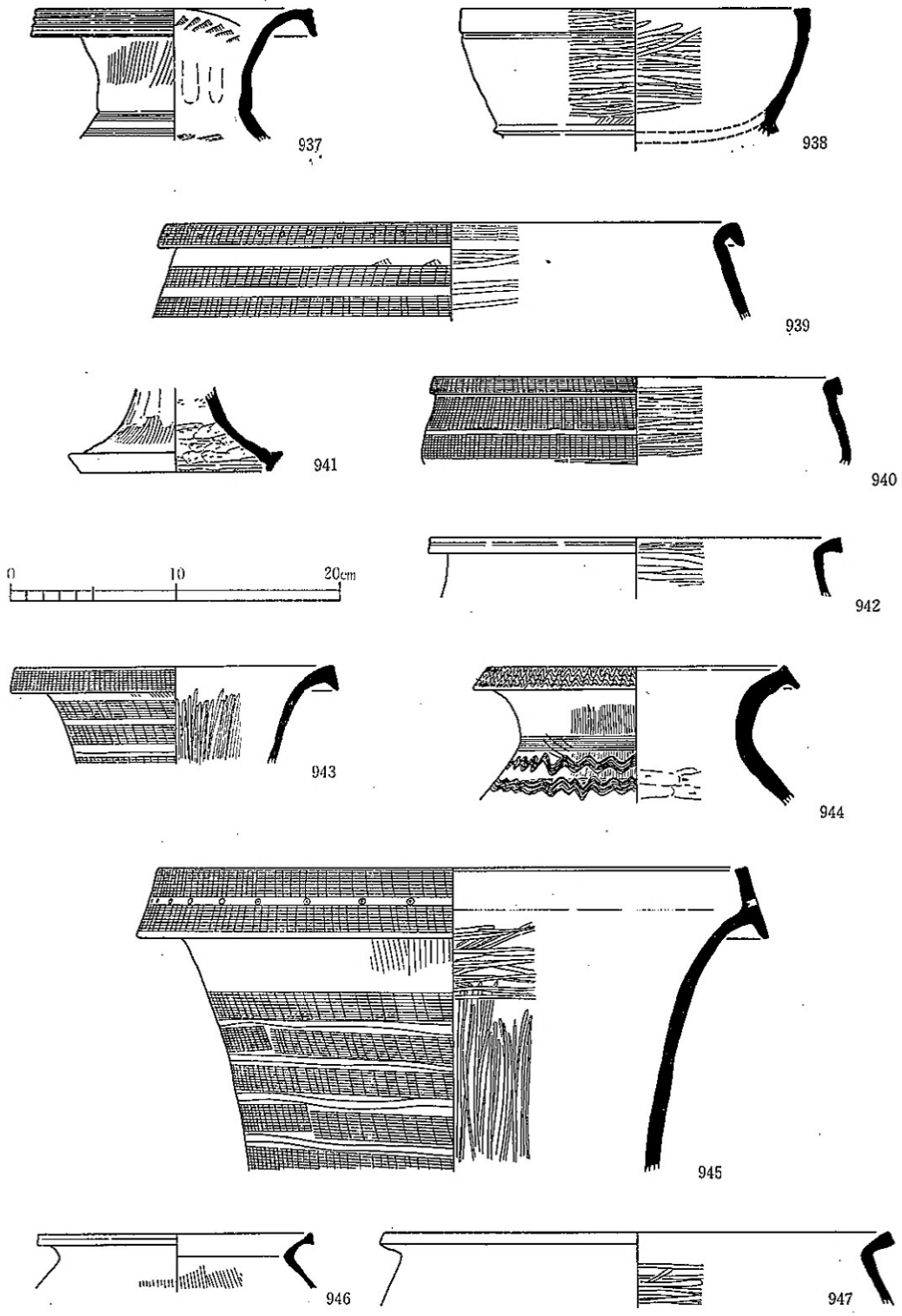


935

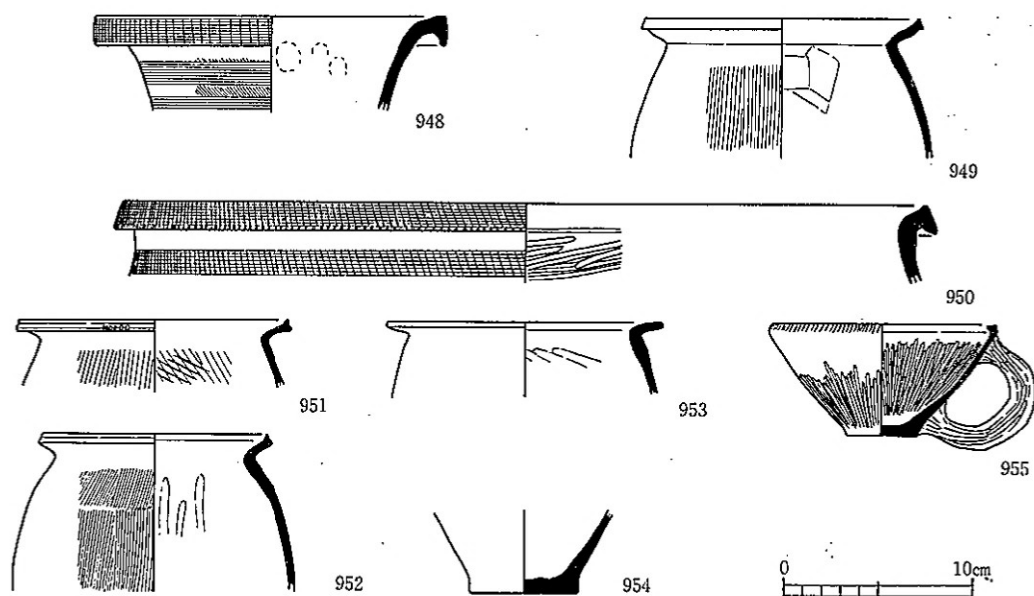


936

第166图 沟82 (920~930)、沟86 (931~936) 出土土器



第167图 溝84 (937~942)、溝93 (943~947) 出土土器



第168図 溝92 (955)、溝94 (950~954)、溝99 (948~949) 出土土器

B 土坑

<土坑 142> 1 C トレンチ南西隅でその一部が検出された。全形はわからないが、深さ0.25mで暗灰色砂、粘土が堆積しており、遺物(第170図971)は少ない。

<土坑 143> 土坑142の北東にあり、長さ2m、幅0.8m、深さ0.15mの楕円形のものである。遺物はきわめて少ない。

<土坑 144> 土坑143の南にあり、長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.15mの楕円形のものである。遺物はきわめて少ない。

<土坑 145> 3 C トレンチの北部にあり、第13号方形周溝墓の周溝に切られている。長さ1.9m、幅0.8m、深さ0.4mの楕円形のものである。暗灰色～灰黒色の粘土が堆積している。遺物はやや多い。

<土坑 146> 3 C トレンチの南部にあり、径1.3~1.5mのほぼ円形を呈す。深さ0.8m、暗灰色の砂・粘土が堆積しているが、途中に黒色炭化物の層がある。遺物(第170図965~970)はかなり多い。

<土坑 147> 3 C トレンチ南部の西端でその一部が検出されたもので、径0.8m、深さ0.3mを測り、ほぼ円形を呈す。遺物は少ない。

<土坑 148> 土坑147の南にあり、径1.1mの円形を呈する。深さ0.4mで、灰黒色砂質土が堆積しており、途中に炭化物層がある。遺物(第170図972)は少ない。

<土坑 149> 3 C トレンチ東南隅にあり、南辺矢板で一部が切られている。径1.9mの円形で、深さ0.2mである。遺物はやや多い。

<土坑 150> Cトレンチ南部にあり、長さ1.9m、幅0.7m、深さ0.2mの長楕円形である。主軸は南北方向である。

<土坑 151> 溝94内にあり、長さ2.9m、幅0.7m、深さ0.15mの長楕円形である。

<土坑 152> 長辺2.4m、短辺2.1mの隅丸方形のやや大きなもので、深さは0.45mである。暗灰色砂質土が堆積していた（第169図958～964）。

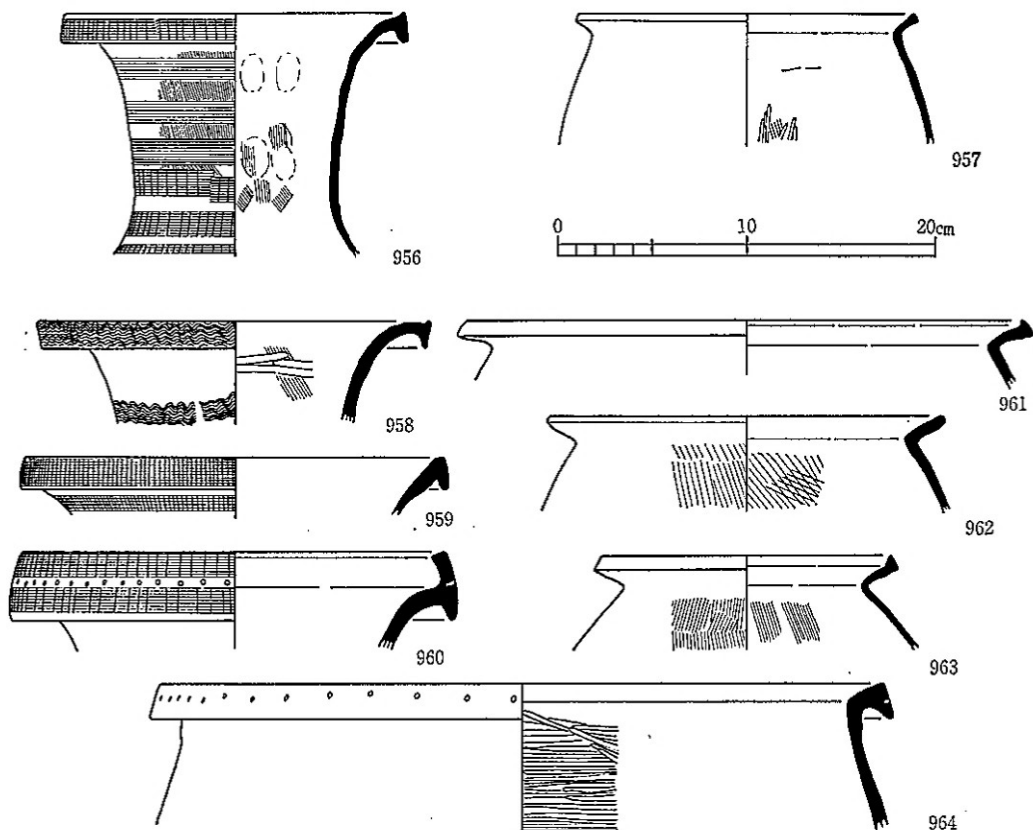
<土坑 153> 土坑152の南で切合っている南北方向の長楕円形のものである。長さ2.3m以上、幅0.9m、深さ0.2m、南端は一段深く0.25mである。土坑 152 との切合関係は確認できなかった。

<土坑 154> 溝94に切られている。径1.1～1.2mの不整形円で、深さ0.15mである。

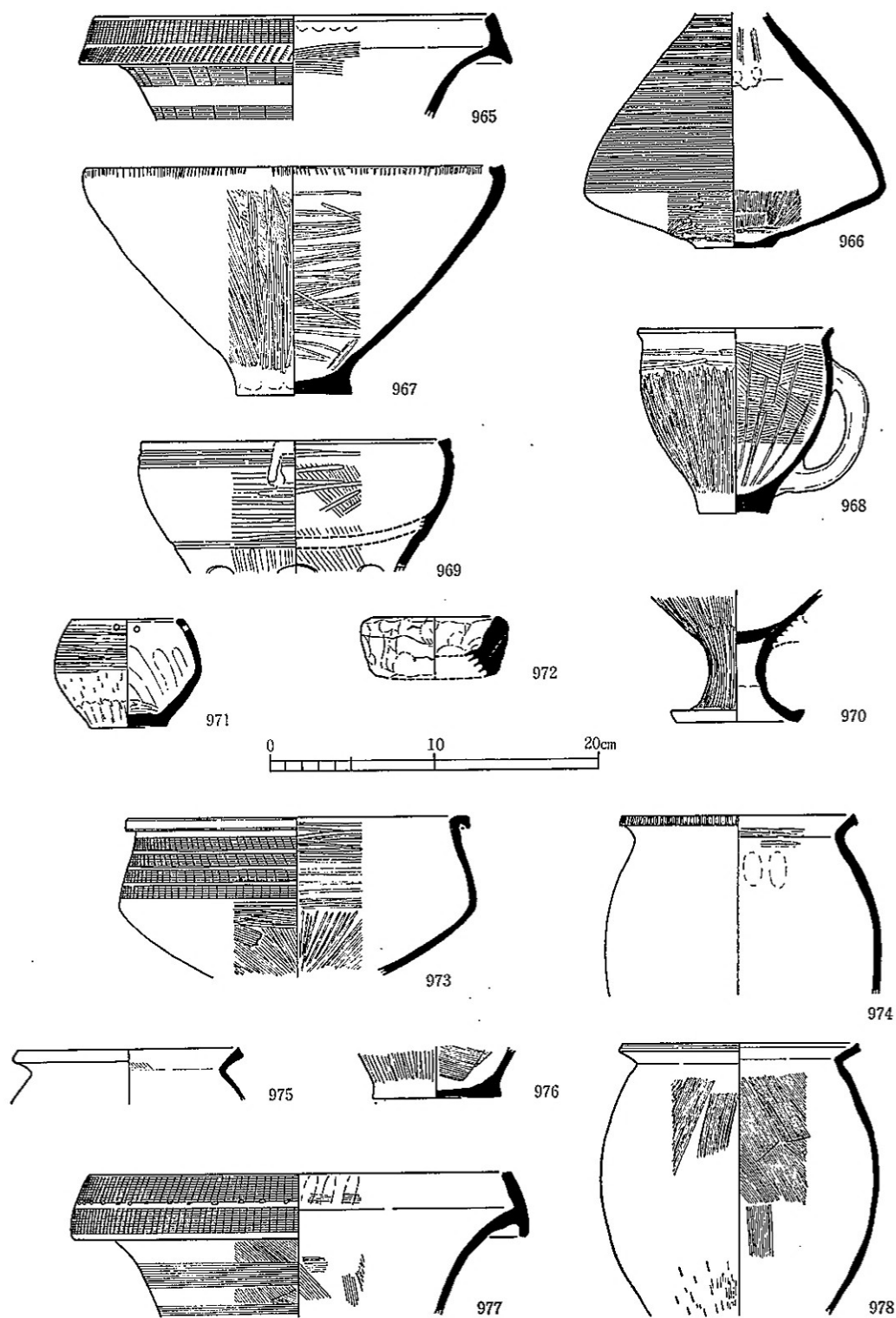
<土坑 155> 溝96を切っている。長さ 2.3m、幅0.65m、深さ0.15mの長楕円形で、主軸は東西方向。

<土坑 156> Cトレンチ東南隅でその一部が検出された。平面形は不明で深さ 0.3m、黒色砂質土が堆積しており、遺物は少ない。

<土坑 157> 4 Cトレンチ北部のピット群の東にあり、一部矢板にかかるが、長さ 2.1m、幅



第169図 土坑152 (958～964)、土坑157 (956・957) 出土土器



第170図 土壙142 (971)、土壙146 (965~970)、土壙148 (972)、ピット738 (977)、
ピット739 (973~976)、ピット767 (978) 出土土器

1 m以上、深さ0.3mの不整楕円形を呈す。木片、土器（第169図956・957）等多く出土した。

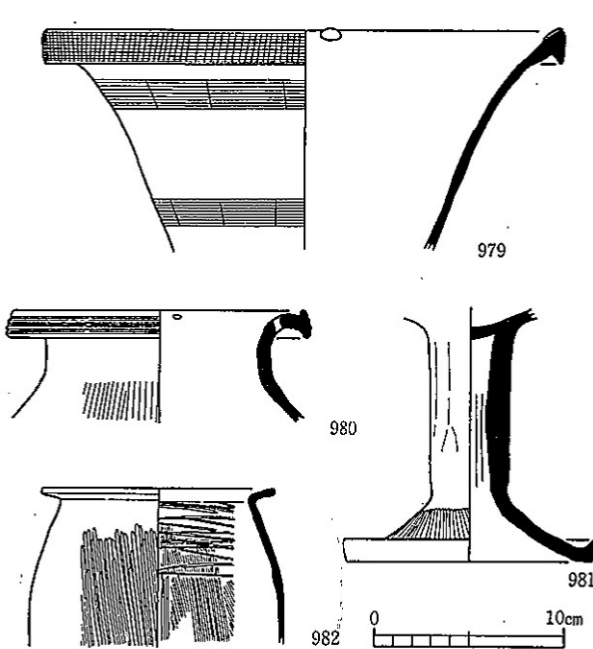
〈土坑 158〉 径1.2~1.4mの円形で、深さ 0.3m、灰色砂、粘土が互層状に堆積しており、遺物は少ない。

C ピット

全体で96個のピットを検出したが、位置関係に規則性はみられない。その中で若干注目されるのは4 Cトレンチ東北部に密集するピット群である。ここは第12号方形周溝墓築造の際、地山を削り出しているため、周囲にもピットがあったかもしれないが、ほぼ限定される範囲内にピットの密集がみられ、そのうち10個には木片が入っていた。それらの木片のうちには柱状に立っているものや、水平に根がらみ状に置かれたものもみられる。そしてピット 784、787、796、794、806、808はL字状にならぶものであり、これはなんらかの建物の跡である可能性が考えられる。そして近接して存在する土坑157の中からも多くの木片が検出された。

D 杭列

1 Cトレンチ南西部からCトレンチにかけて東北東—西南西の方向にならんでいる（杭列2）。ピット734のところでゆるい角度で折れる直線状に8本、線外に2本がある。間隔は一定しない。太さ約5 cmの丸太材、または断面扇形の割材を使用している。杭列のみで残存しているもので、他の遺構との関連はわからず、どのような機能のものかは断定できない。



第171図 落込4出土土器

E 落込 4 Cトレンチの南端部において、不定形の落込を2基検出した。

〈落込 4〉 第14号方形周溝墓の西裾の下部にあって、東西径4 m、南北径2 mの不定形を呈し、深さ 0.3mである。かなりの量の土器（第171図）が出土した。

〈落込 5〉 第14号方形周溝墓の盛土の下にあり、東西約 2.5m、南は矢板外に延びるため、南北長はわからない。不定形を呈しており、深さは 0.3 mである。ここからも若干の土器が出土している。

2) 遺構面Ⅱ

方形周溝墓4基を検出した（付図17）。第11号方形周溝墓はCトレンチ東辺の中央部で検出され、その西端の一部が調査区内に入ったにすぎない。橋脚の位置をずらして墳丘を保存されるこ

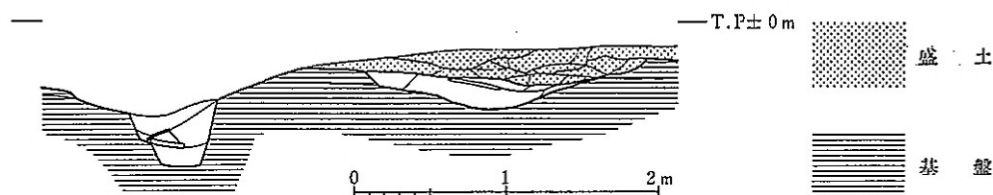
とになった。そのため周溝の調査のみにとどめ、墳丘盛土は一部を除き掘削していない。第12号方形周溝墓は4 Cトレンチ北半で検出され、北辺、南辺は調査区外になる。主体部は木棺が1基検出された。周溝は明確ではないが、盛土の保存状態は良く、高さ0.7mほど残っていた。第13号方形周溝墓は3 Cトレンチの南部3分の2を占める。主体部は甕棺1基、土壙墓2基が検出された。第14号方形周溝墓は4 Cトレンチ南端でその一部が検出された。1972年東大阪市公共下水道工事に伴う調査の際、5 D T～U 9 地区で発見された土壙墓、木棺墓は、この方形周溝墓の主体部であるとみられる。

〈第11号方形周溝墓〉 Cトレンチの中央からやや北で、西端部の一部のみを調査した。方向はほぼ南北である。規模については不明な面が多いが、一辺10～12m程度と思われる。第12号方形周溝墓との位置関係からみても第11号方形周溝墓の西辺が13mをこえることはあり得ない。

周溝は北周溝の西端部と西周溝を調査した。北西隅は浅く、陸橋部の様相を呈す。周溝内には下部に灰黒色粘土、上部に黒色粘土が堆積している。西周溝からは多量の土器が出土した(第177～180図)。これらの土器は周溝の肩部から灰黒色粘土層上面にかけてのっており、その上に灰黒色粘土層が堆積している。さらに、墳丘側の土器群は厚い黒色灰層とともに堆積しており、この層内からはかなりの炭化米が出土した。土器の分布は溝中央には少なく、主として盛土側の周溝肩部に面をそろえて約3.5mにわたって集中している他、南半部では周溝の外側の肩部にも分布する。外側のものには灰層はともなわない。土器は小さな破片が多く、完形品はほとんどない。このような出土状態からみて、これらの土器は供献されたものがそのまま倒壊したといったものではない。盛土側の土器群は、肩部に面をそろえて敷かれたような状態であり、人為的なものであることはまちがいないが、その性格を断定することはできない。

盛土の規模は西南隅を確定することができなかつたため正確にはわからないが、南北約10～12m程度で、東西は不明である。盛土は約30cm残存している。遺構面Ⅰの黄色砂上に直接土を盛っており、地山が砂層であるためか、主として暗灰色～灰黒色の砂質土を盛っているが、下底部では特に周溝近くで暗灰色粘質土がみられる。周溝底は青灰色粘土層に達しており、周溝を掘った土を周溝近くに盛った後に、全体をさらに周辺から集めた土で盛ったと考えられる。

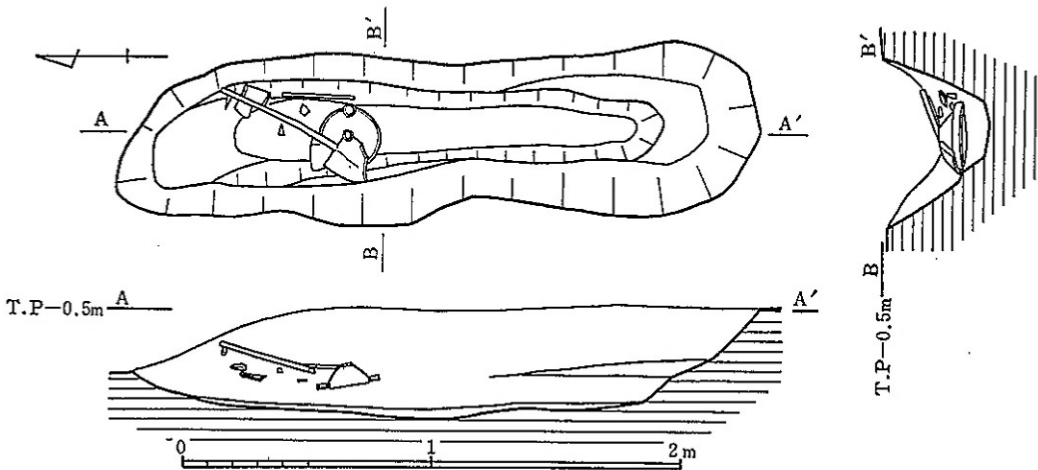
本方形周溝墓は墳丘が保存されることになったため、盛土のすべてを掘削せず、なるべく原形を残した。そのため墳丘の一部しか調査されなかつたこともあって、主体部は検出されなかつた。



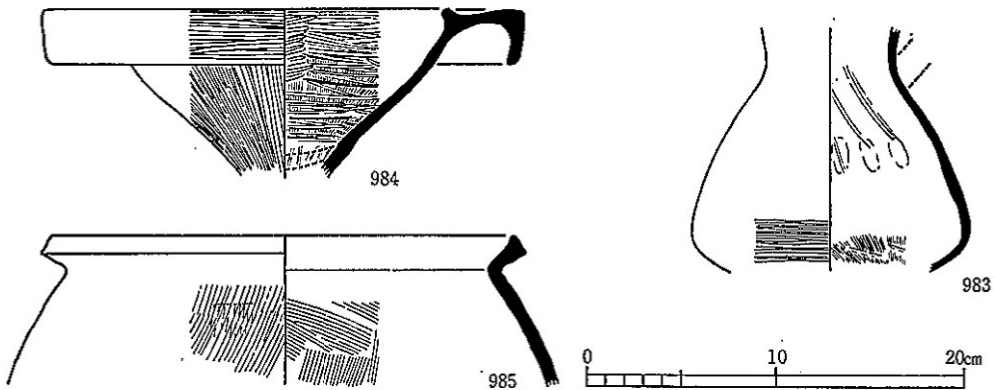
第172図 第11号方形周溝墓墳丘断面図

た。

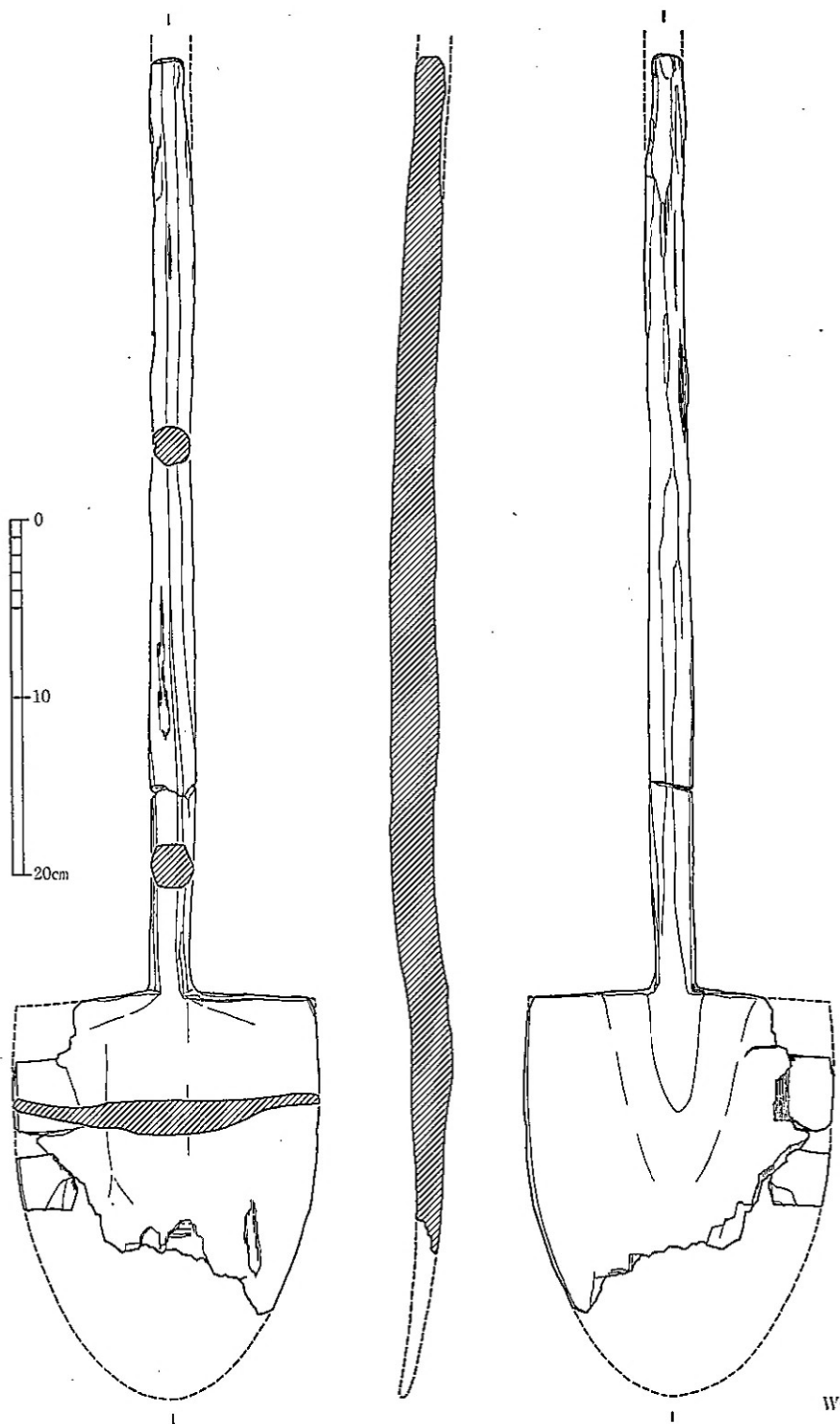
西周溝は南端で一段上って浅くなるが、その肩部から約 0.2mはなれて隅丸方形の 1 号土壙があり、1 号土壙の南に長楕円形の 2 号土壙がある。1 号土壙は一辺約 0.7~0.8m の隅丸方形で、深さ 0.6m である。下から暗灰色砂、暗灰色（混粘土ブロック）砂、暗灰色砂、暗灰色粘土の順に堆積し、その上には周溝の上部と同様黒色粘土が堆積していた。遺物はきわめて少なく、土器片が少量出土したのみである（第 174 図 985）。2 号土壙はその北端が 1 号土壙の西南端に接するような位置にあり、南北長 2.6m、東西幅 0.6~0.7m の長楕円形で、深さは約 0.4m である。壙底には灰色砂が堆積するが、この中には遺物はほとんど含まれない。その上を覆う暗灰色砂層中には遺物が多く、高杯杯部（第 174 図 984）や、この高杯の上に接するように木製鋤（第 175 図）が出土している。土壙はこの後灰黒色粘土が堆積し、その上部は盛土から流れてきたとみられる灰黒色粘質砂土によって埋没してしまう（第 173 図）。



第 173 図 第 11 号方形周溝墓西裾 2 号土壙平面、断面図



第 174 図 第 11 号方形周溝墓西裾 1 号土壙 (985)、2 号土壙 (983・984) 出土土器



W-42

第175图 第11号方形周沟墓西裾2号土坑出土木器

土器はコンテナ3杯分出土したが、口縁部が残存し形態の明らかなものについて分類した。器種は、広口壺形土器・細頸壺形土器・無頸壺形土器・壺用蓋形土器・水差形土器・鉢形土器・高杯形土器・甕形土器で構成される(第14表)。生駒西麓産の土器が75%を占め、瓜生堂産の土器がない器種もある。瓜生堂産の土器の中には便宜的に搬入品も含めている。

広口壺形土器A(986・987)は、口縁部端面を下方にのみ拡張する。内面には面をもつものもある。(986)の体部は最大腹径が下方にある。口縁部内面を横方向に刷毛目調整し、体部外面に横方向のヘラミガキを施す。紋様は、口縁部端面・頸部に簾状紋を施す。頸部紋様間に篋磨研線を加えたものもある。口縁部内面に円形浮紋を施すものもある。また外面に煤の付着したものも多い。(993)は体部内面に朱が付着する。

広口壺形土器B(988~990)では、壺Aの口縁部を上方に拡張した生駒西麓産のもの(988・989)、口縁部からゆるやかに曲折し上方に立ち上がるもの(990)がある。拡張部に簾状紋・列点紋を組合せて施し、さらに円形浮紋・刺突紋を加える。(990)は口縁部外面の上端に凹線紋を1本巡らせ、頸部には篋氏痕紋突帯を施す。

広口壺形土器C(991・992)は、太く短い頸部から外反する口縁部をもつ。口縁部端面は上下に拡張する。外面は刷毛目調整され、煤が付着する。

第14表 第11号方形周溝墓周溝内土器群出土土器器種構成表

器種	産地	瓜生堂産		生駒西麓産		計	
		個数	%	個数	%	個数	%
広口壺形土器	A	0		8		19	36.6
	B	1		2			
	C	4	39.0	0	25.6		
細頸壺形土器		0	0	2	5.1		
無頸壺形土器	A	1		0		19	36.6
	C	0	7.5	1	2.6		
壺用蓋形土器		1	7.5	3	7.7	4	7.7
水差形土器		0	0	2	5.1	2	3.8
鉢形土器	A	0		4		12	23.1
	B	0		1			
	C	2	15.0	5	25.6		
高杯形土器	A	0		1		2	3.8
	B	0	0	1	5.1		
甕形土器		4	31.0	9	23.2	13	25.0
計		13	25.0	39	75.0	52	100

頸頭壺形土器（994）は外開きのやや太い頸部に内彎する口縁部をもつ。下端は面をもち、口縁端部は内方に突出している。内外面とも刷毛目で調整され、口頸部には簾状紋、肩部の紋様帯下端には幅の広い波状紋を施す。榊原体を波の上下で方向転換させている。

無頸壺形土器はA・Cともに小破片である。

水差形土器は生駒西麓産である。頸部から斜めに開く口縁部をもつ。把手の残存する体部破片があり、簾状紋を施紋後把手を付けている。

壺用蓋形土器は生駒西麓産では、平坦なつまみをもつもの、端部を上方に拡張したもの、わずかに上方に返ったものがある。2孔1対の紐孔をもつものもある。

鉢形土器A(995)は直口の口縁部と斜め上方に広がる体部をもつ。上端は面をもち、わずかに内方へ突出する。紋様は口縁部端面の外端ないしは両端に刻み目、外面に列点紋、簾状紋などを施す。調整は、施紋部以下をヘラミガキ、内面には刷毛目を施す。簾状紋間を磨研したものもある。

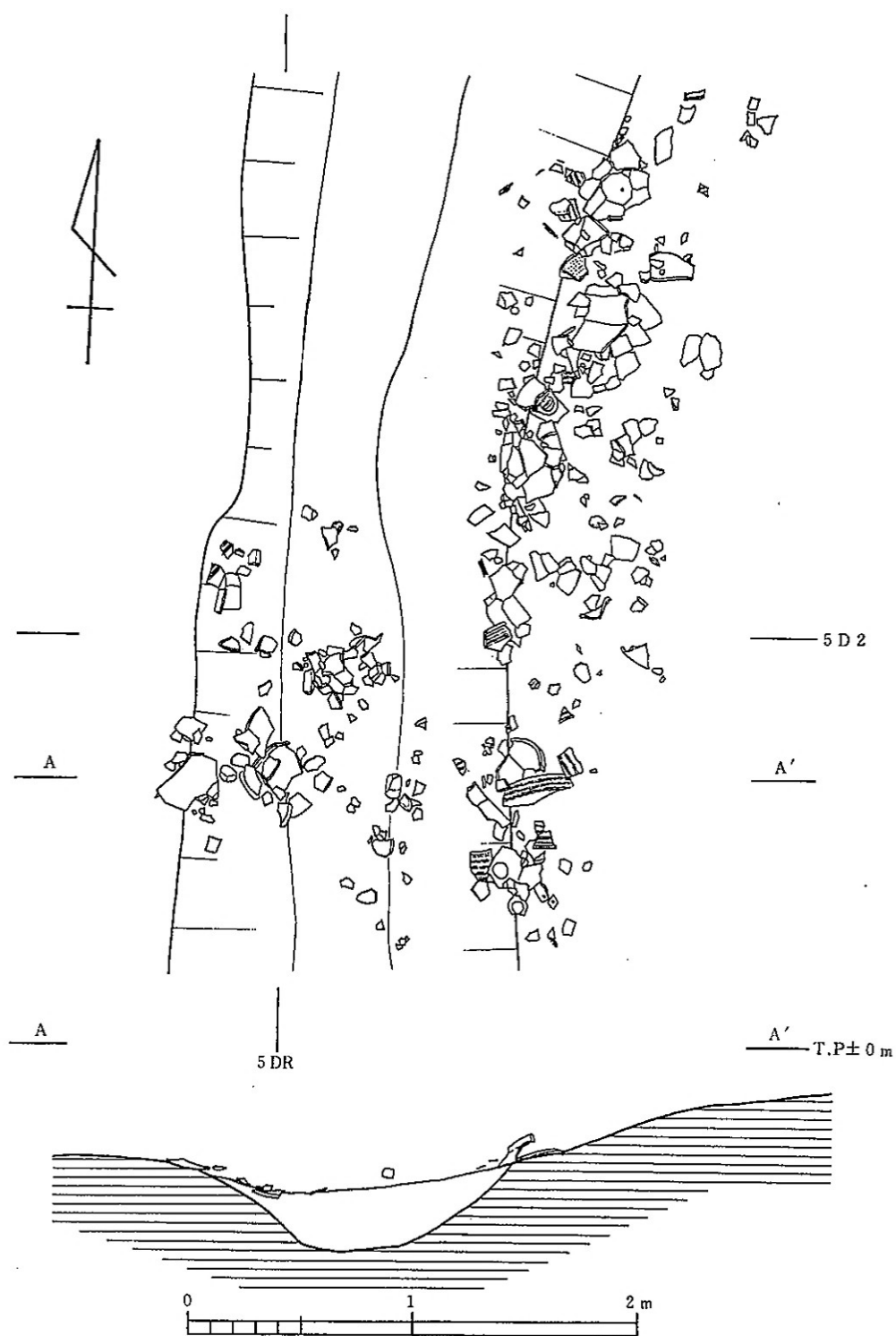
鉢形土器Bは、腰に稜をもち、内傾して立ち上がる口縁部をもつものである。口縁端部は短く外反し下方に拡張する。

鉢形土器C（996～998）は、段状口縁をもつ。腰の曲折部分がゆるやかに立ち上がる口縁部をもつ大型品である。（997）は、施紋部下方と体部内面を刷毛目、外面下半を下から上にヘラケズリによって調整される。紋様はどちらもほぼ同じであるが、体部の曲折部分に凹線紋が1本巡らされるもの（996）がある。この2点は胎土に若干の差が認められる。（998）は斜め下方にのびる脚台をもつ台付鉢形土器である。脚裾端は上方に立ち上がる。調整は鉢部の内外面、脚台部外面にヘラミガキが施される。口縁部端面に列点紋、外面に簾状紋・列点紋を施す。成形は円板充填法を用いる。口縁部端面に簾状紋を施したもの、紋様帯間に筥磨研線を引いたものもある。

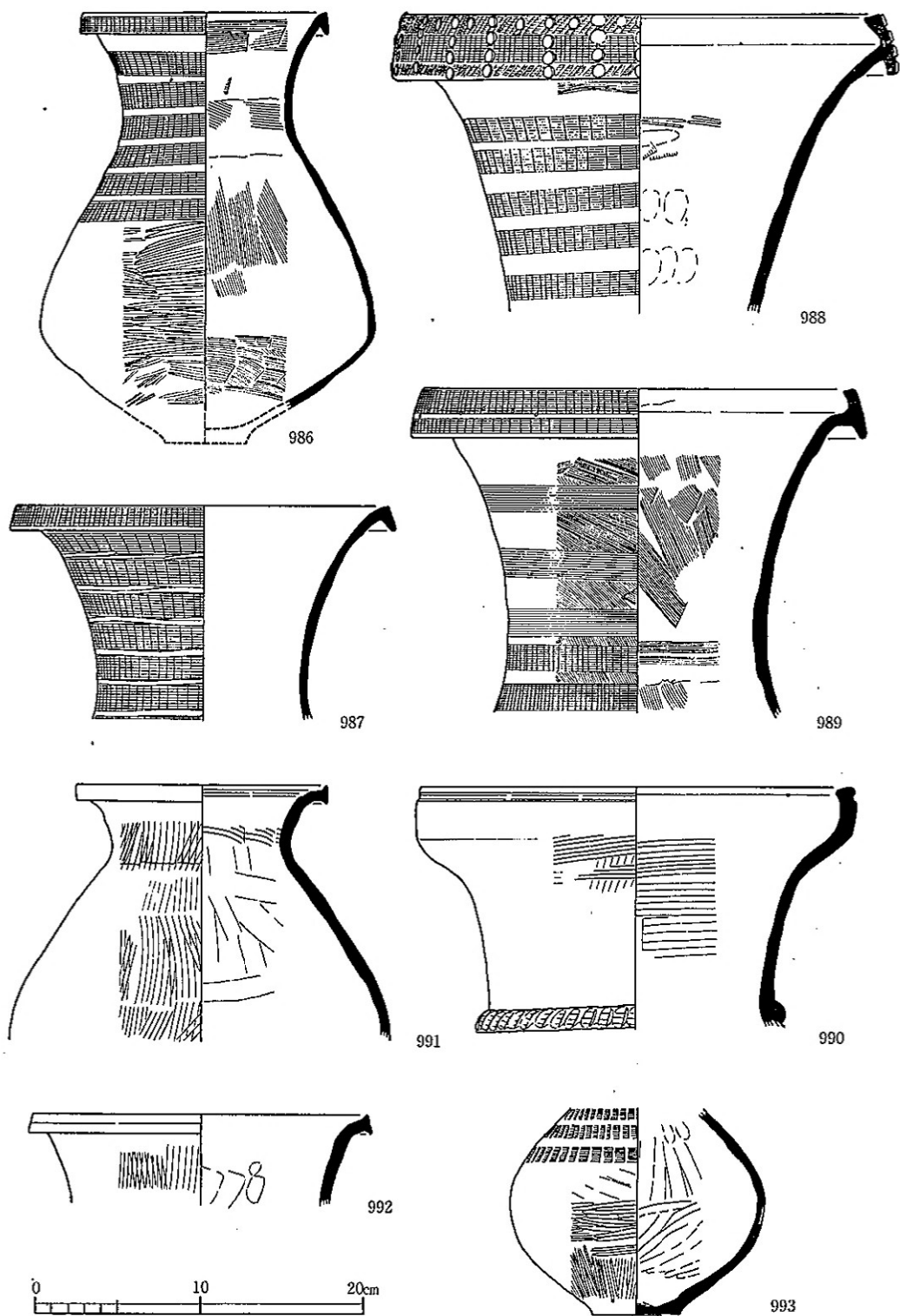
（999）は体部が欠損しており口縁形態は不明である。斜めに広がる脚台は、裾で斜め上方に立ち上がる。外面には小竹管紋を施す。これらはすべて生駒西麓産である。

高杯形土器にはA・Bがあり、どちらも生駒西麓産である。A（1000）はなだらかな曲線を描く直口の杯部である。調整は外面と口縁部内面にヘラミガキ、杯部内面に刷毛目後間隔をあけてヘラミガキを施す。Bは水平口縁の内部に断面四角形の凸帯を一本巡らす。外端は垂下する可能性がある。杯部内面の調整は、刷毛目後ヘラミガキが施されている。

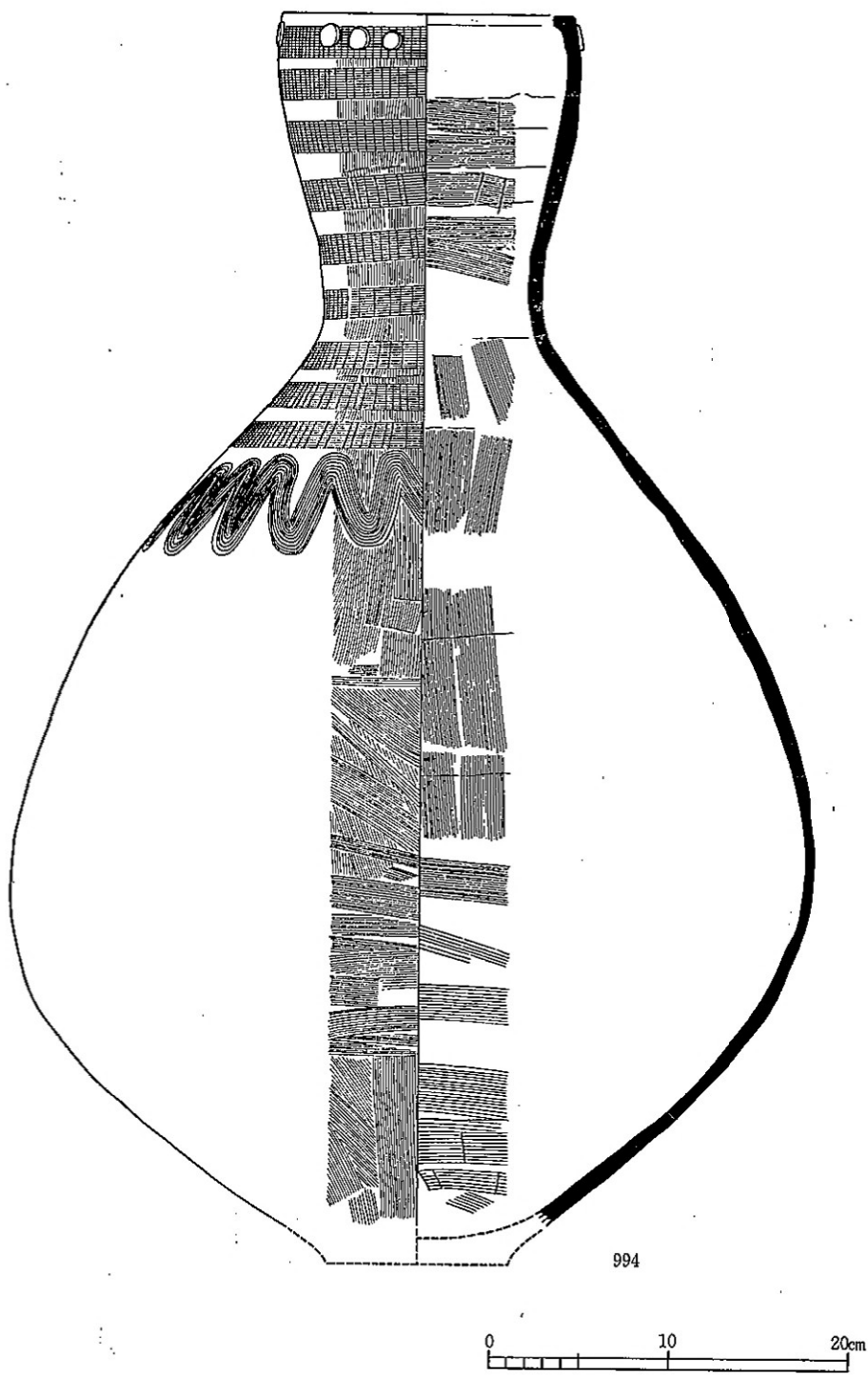
甕形土器（1002～1008）は、生駒西麓産が約70%、その他が約30%の割合である。口縁部は屈曲して外反するものと、丸みをもって外反するものがある。生駒西麓産には口径15～17cmのものが多く、口径約10cmの小型のもの、口径約31cmの大型のものがある。口縁部端面は丸くおわる。外面調整は縦方向のヘラミガキが主流をなすが、（1003）は肩部をヘラミガキ、中位を刷毛目、下方をヘラケズリで調整する。（1002）は口縁端部に面をもち、端面に刺突紋を施す。瓜生堂産のもの口径は約14～16cmで口縁端部はすべて上方に拡張し、強くナデる。（1006）は外面に刷毛目調整を施す。いずれも外面に煤が付着する。



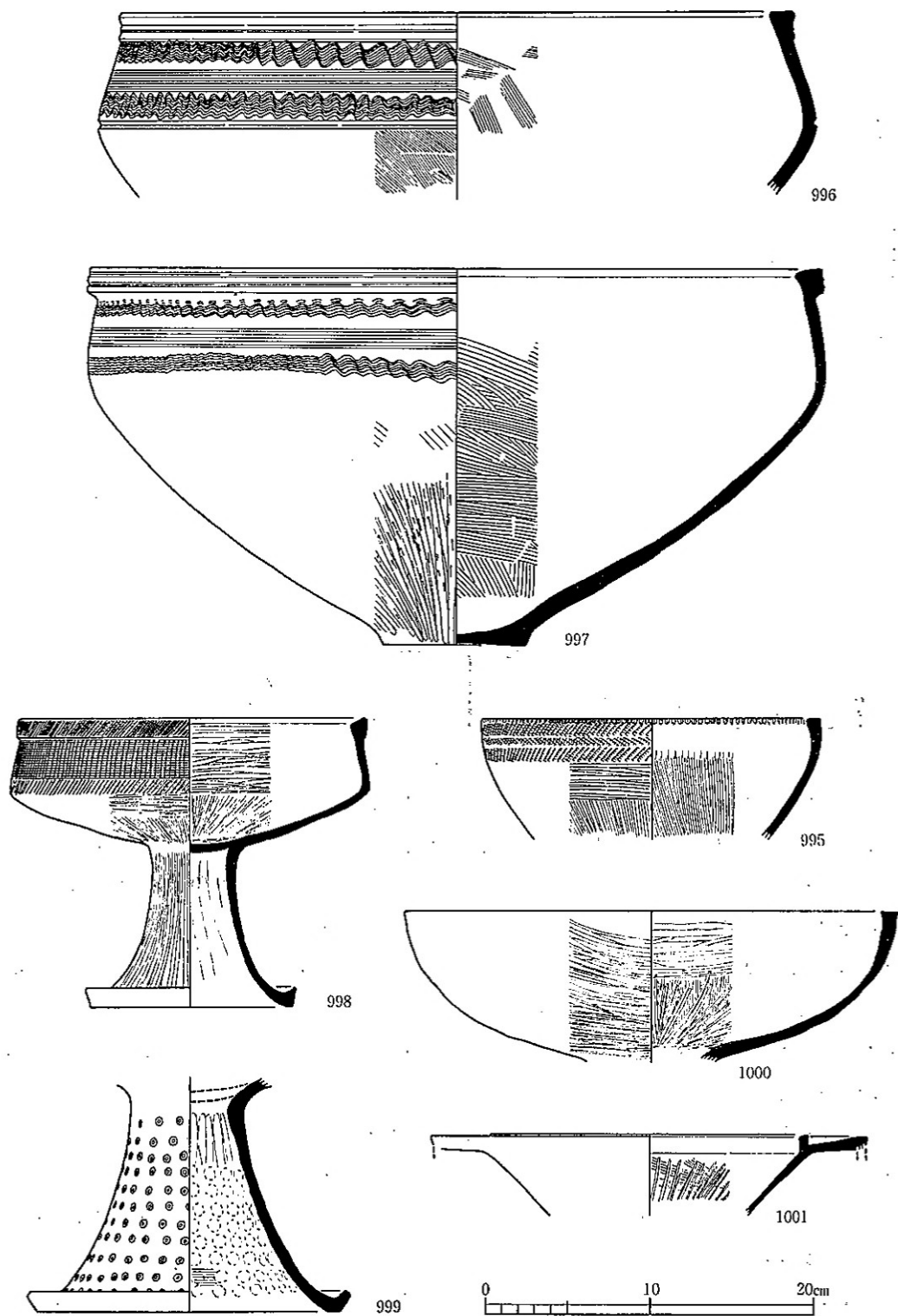
第176图 第11号方形周溝墓周溝内遺物出土狀況平面、断面図



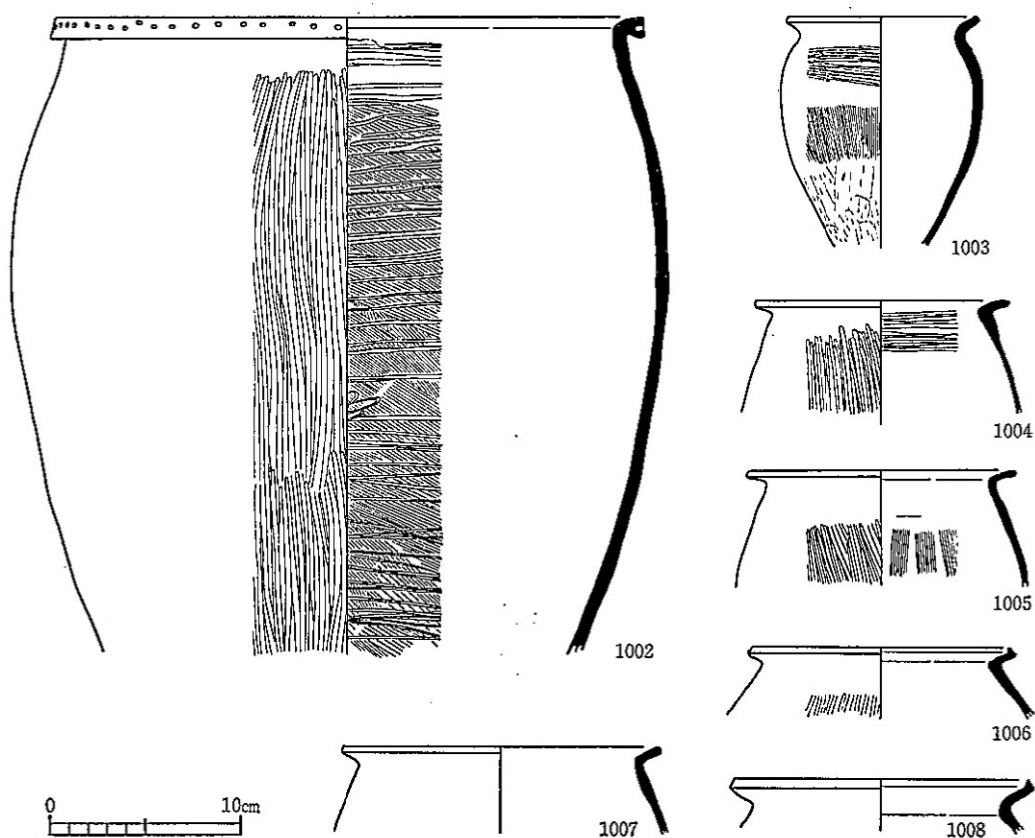
第177区 第11号方形周溝墓周溝内出土土器



第178图 第11号方形周溝墓周溝内出土土器



第179图 第11号方形周溝墓周溝内出土土器



第180図 第11号方形周溝墓周溝内出土土器

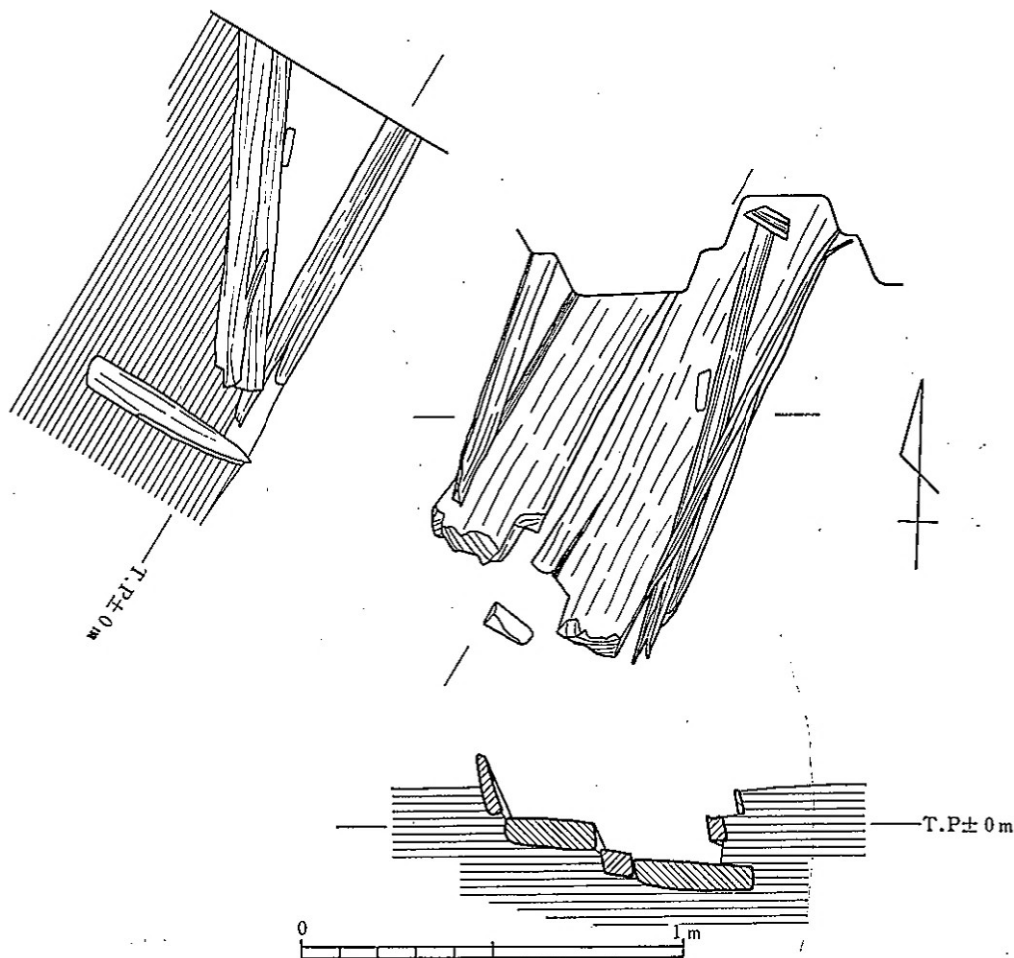
壺形土器など施紋される土器の紋様は、生駒西麓産では簾状紋が主体となる。凹線紋は、広口壺形土器Bの口縁部外面、鉢形土器の口縁部端面および腰の部分に施されているが、出土数は少ない。また、生駒西麓産の土器が目立ち、遺構としての特殊性を表わすものと考えられる。

〈第12号方形周溝墓〉 4Cトレンチ北半で検出された。北辺、東辺は調査区域外になるため、全体の規模はわからない。しかし第11号方形周溝墓との位置関係からみて、南北は約12m程度であろうと思われる。東西は調査した範囲で約8mである。墳丘の残存高は約0.7mで今回調査されたものの中では高い部類に属するが、そのかわり明瞭な周溝を持たない。墳丘はまず黄色砂層を約0.4mの高さまで削り出した上に盛土を行っており、盛土は約0.3m残存していた。盛土は一部に炭化層を含むが、ほとんどが暗灰色～暗黄褐色の砂質土である。盛土内からは土器片(第182図)の他、石廬丁(第192図251、257)が出土した。壺形土器(1011)の肩部に刻点があるが、4個単位になっており、獣類の爪跡と考えられる。また図示できなかったが、口縁部上端にも同様の刻点が認められた。

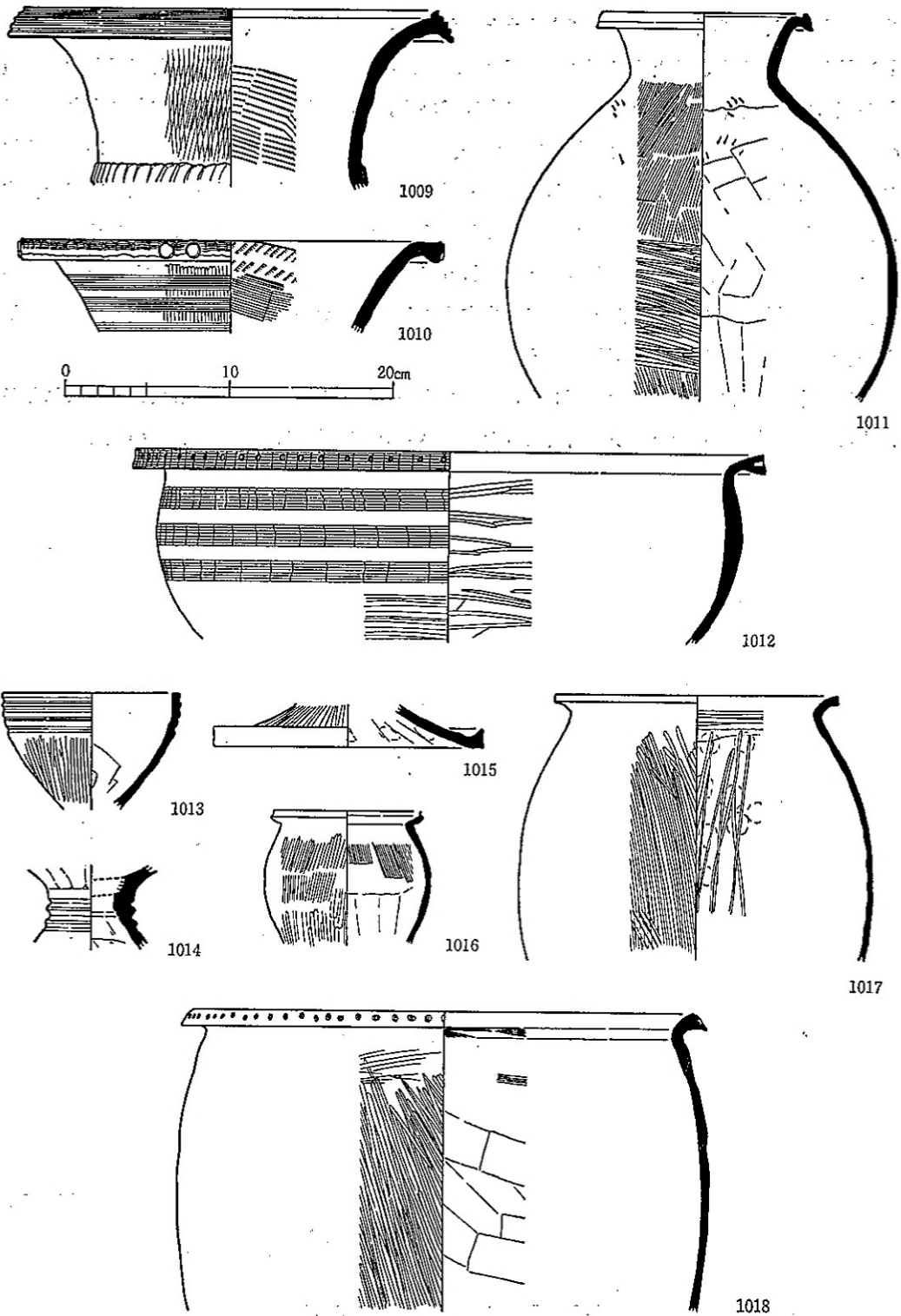
主体部は木棺1基と土壙3基を検出した。木棺(第181図)はトレンチ北壁の鋼矢板によって切断されるとともに、鋼矢板に押し下げられて底板は斜めになっている。棺材は厚さ10cmに近い

立派なもので、恐らくコウヤマキであろうと思われる。両側板と底板、及び小口板を押さえたらしい杭が残っており、蓋と小口板は残っていなかった。底板は鋼矢板に切断されて長さ約150cmしか残っておらず、さらにほぼ中央で縦にさけている。幅は約55cmである。小口部は中央に幅20cm、深さ15cmの抉りがあり、その部分に幅15cm、厚さ10cmの断面長方形の杭が垂直に立っており、恐らく小口板の押さえの用をなしたものである。西側板は厚さ約5cmで高さ約20cm、約70cm残存している。東側板は厚さ2~3cmしかなく、そのため容易に切断されたらしく、水平を保っている。本来は1枚の板であったと思われるが、現状は幅7~8cmの板2枚に分かれている。掘方は棺材が動いているため明瞭に検出することはできなかった。底板上で人骨片を検出したが、性別、年齢等は鑑定不可能である。

土壙は中央部で3基検出した。第3土壙→第2土壙→第1土壙の順に掘られている。これらが確実に埋葬主体であるかどうかは断言できない。第1土壙は長さ1.5m、幅0.8mの長方形で深さ



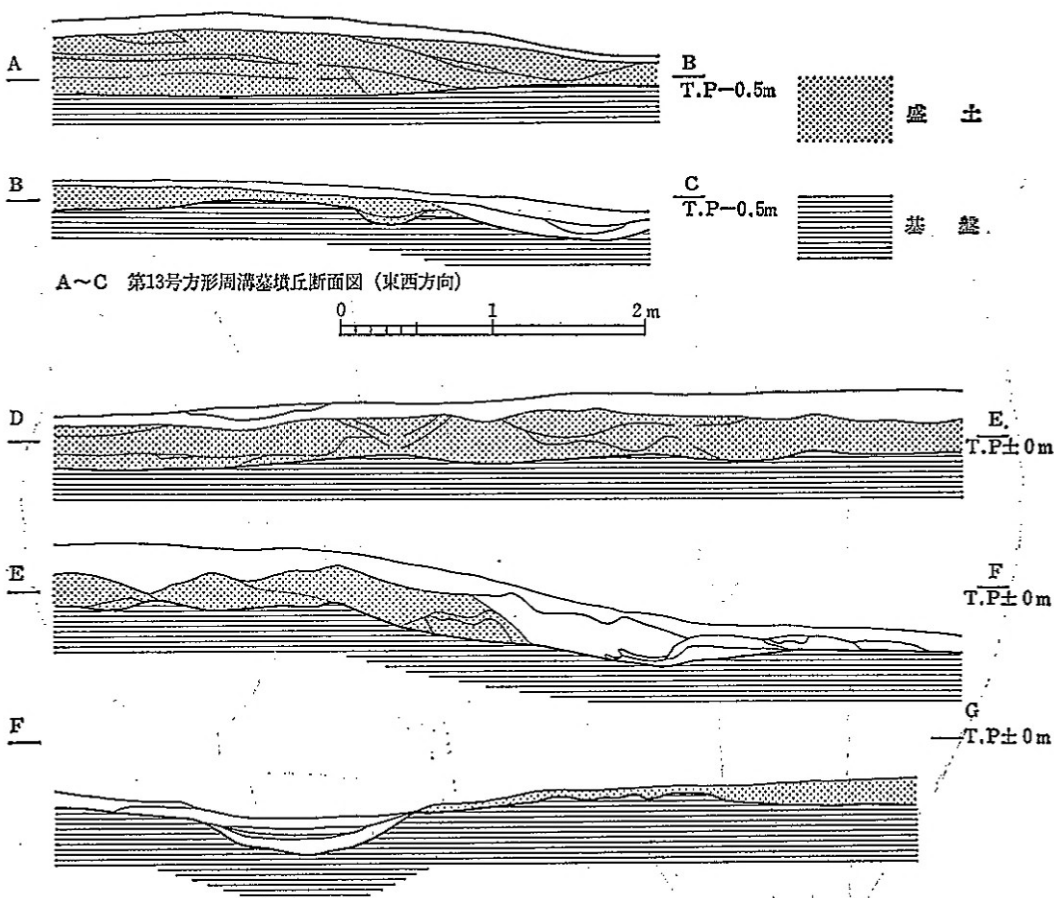
第181図 第12号方形周溝墓第1主体部平面、断面図



第132图 第12号方形周溝墓盛土内出土土器

は0.3m、断面U字形で箱形を呈さない。第2土壙は北端を第1土壙に切られており、現存長0.8m、幅0.7mの長方形で、深さ0.3m、断面U字形である。第3土壙は北端を第2土壙に切れ、径0.6~0.7mの不整円形で深さ0.2mの摺鉢状のものである。遺物はいずれも土器片少量が出土したのみである。

<第13号方形周溝墓> 盛土と思われる土層は0.3~0.4mしかなく、墳丘の立ち上りもはっきりしないが、L字状にめぐる溝内の盛土と思われる層内で甕棺等が検出されたため、方形周溝墓と判断した。南に隣接する5D0~Q29地区は1972年に調査され(『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会1973.3)「5DQ9地区に肩部幅2.3~3.3m、底部幅1.5~2.4m、深さ30~60cmをそれぞれ掘り、方向を南北にする溝がみとめられる。この溝の西の肩部では包含層の厚さが約80cmあるのに対して、溝に流れ込んでいる東肩部の東2m程の包含層は約10cmから20cmの厚さで非常にうす



A~C 第13号方形周溝墓墳丘断面図(東西方向)

D~G 4Cトレンチ東壁断面図(D~F第12号方形周溝墓、F~G第14号方形周溝墓)

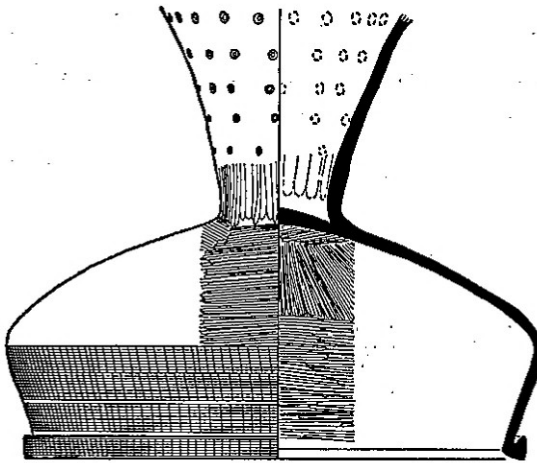
第189図 第12、13、14号方形周溝墓墳丘断面図

い」と記述されている。この調査の時点では包含層と盛土の区別が十分ではなく、後述するように第14号方形周溝墓の盛土と思われる部分で発見された人骨も包含層中にあるものと認識されている。従ってこの80cmあるとした包含層が方形周溝墓の盛土である可能性も持っている。しかし溝は今回検出したものとはつながらず、これを方形周溝墓と断定するには若干疑問が残る。

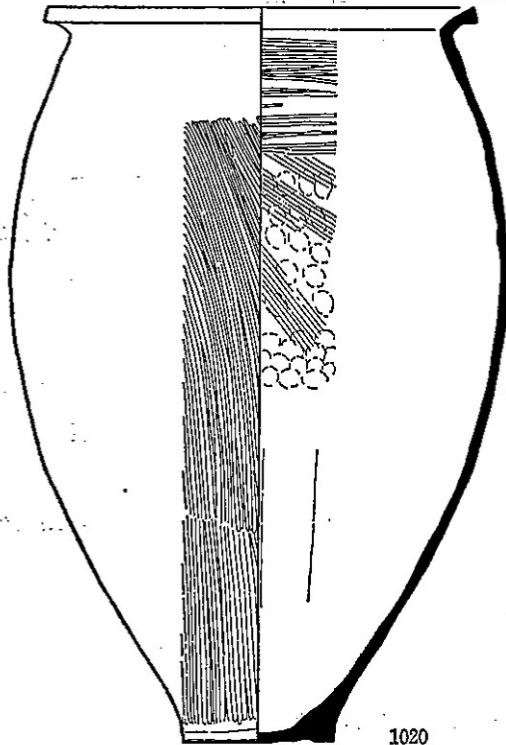
周溝は北側では2重になっており、内側のものが古い。しかしこれが墳丘を拡張したとは土層をみる限り断定できず、内側のものは遺構面Iに属する可能性がある。土器が若干出土した（第

188図1037・1038）。盛土の規模は南北13m以上あり、5D09地区まで延びるとすると20m近くになる。周溝の幅は0.8～1.3m程度で、深さ約0.4m、暗灰色砂質土、灰黒色粘土が堆積している。周溝内には土器片（第186・187図）がかなり含まれていたが、供献されたと思われる完形品になる土器の出土はなかった。

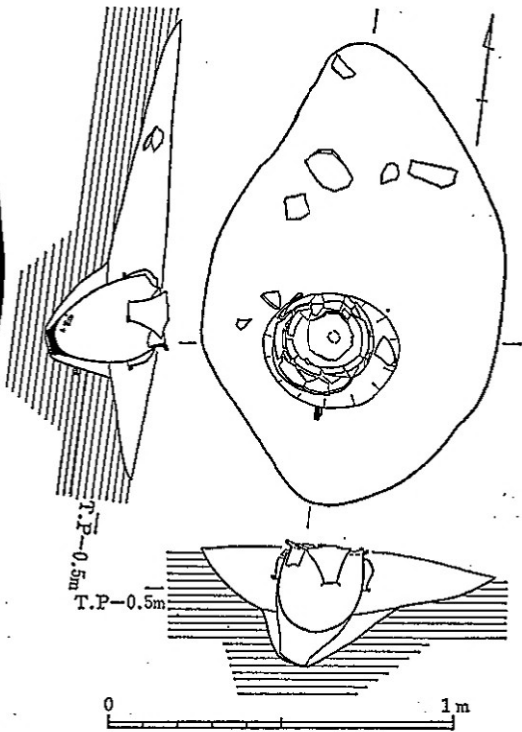
墳丘は周溝肩からの比高が0.5mしかなく、



1019



1020



第184図 第13号方形周溝墓第3主体部甕棺(切)

第185図 第13号方形周溝墓第3主体部平面、断面図

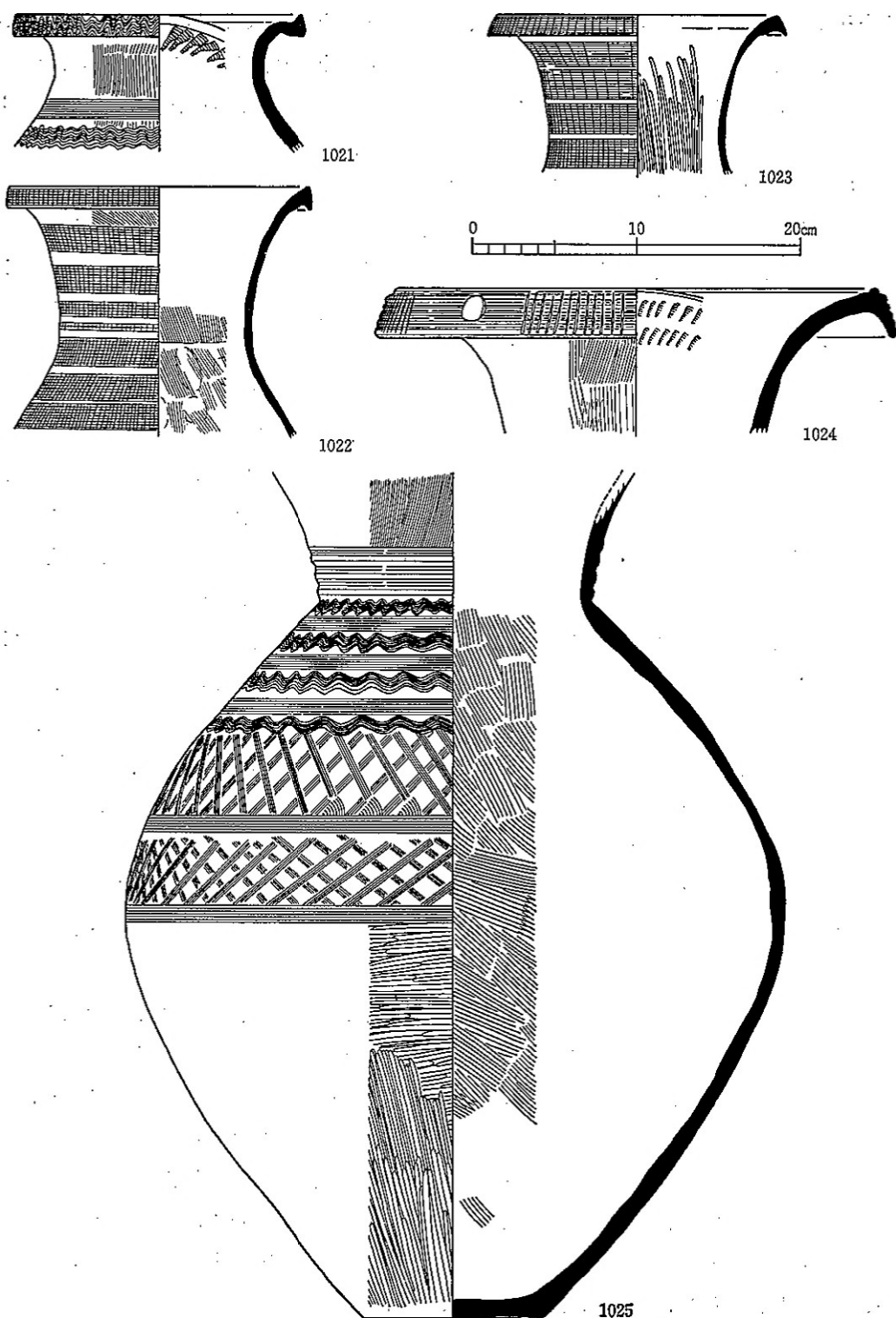
立上りもゆるいものである。盛土は暗黄褐色や暗灰色の砂質土であり、ところどころに黒色の有機質層や地山に由来する黄色砂層がレンズ状に入っている。土層の判別は困難であり、墳丘築造のあとを復元することはむずかしい。地山面である黄色砂層の面は必ずしも平坦ではなく、第12号方形周溝墓のように墳丘の基部を削り出した形跡はない。

主体部は土壙2基、甕棺1基を検出した。第1主体部は墳丘の北寄りにあって長さ1.4m、幅0.75mの土壙で、検出面からの深さは0.2mほどである。主軸はほぼ南北方向である。人骨は全く検出されず、木片も全く残存していなかった。第2主体部は第1主体部の約3.5m南にあって長さ2m、幅1mの土壙で、深さは0.1mしか残存していない。主軸は約20°西へふれる。土器片が若干出土したが、人骨、木片等は全く検出されなかった。土器片の出土状態から見て埋葬主体ではない可能性もある。第3主体部である甕棺(第185図)は口径22.3cm、高さ38.7cmの甕形土器の上に台付鉢形土器をかぶせたもので、台付鉢形土器は土圧のため陥没しており、脚台部は甕形土器内にはいつていた。甕は約30°傾いている。掘方は甕の下半では器形に合せた形であるが、上部はひろがり、浅い皿状になる。甕底から人骨が検出されたが、これらは池田次郎教授の鑑定によると新生児の骨で、頭骨片、下顎骨、大腿骨、脛骨、その他長骨破片、寛骨破片が含まれているとのことであった。人骨はすべて動いており、原位置を保つものはなかった。

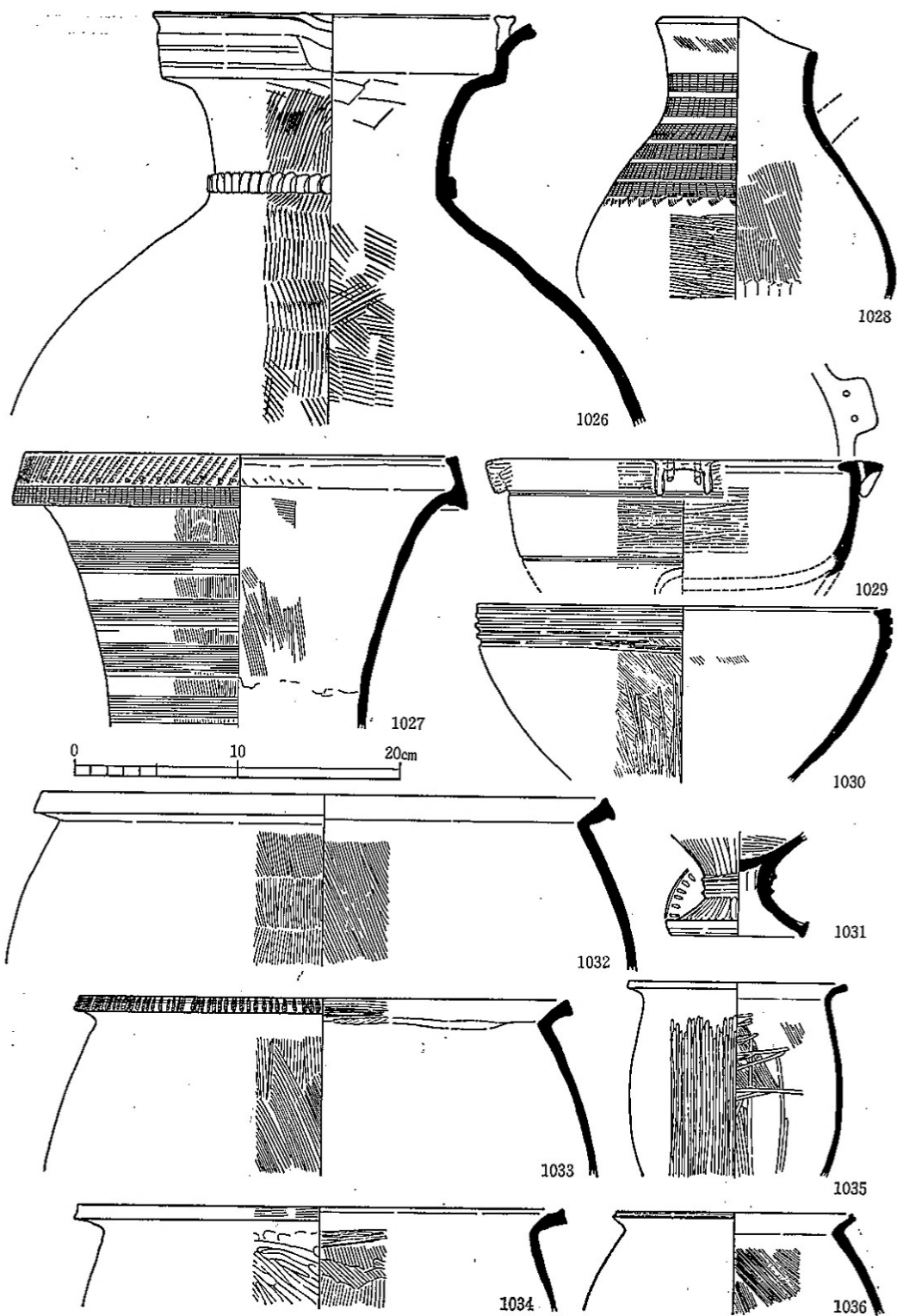
甕棺の身として使用される甕形土器(第184図1020)は、胴のあまり張らない器体に屈曲して外反する口縁部をもつものである。口縁端部は面をもつが上下には拡張されない。調整は、口縁部端面、外面、頸部外面がヨコナデである。体部外面は縦方向のヘラミガキによるが、上半部から中央部までと、下半部との2段構成になっている。まず下半部から施したのち、上半部に施す。口縁部内面は横方向の刷毛目、頸部から体部上半の内面は斜め方向の刷毛目後、頸部内面に間隔のあいた横方向のヘラミガキを施す。内面の下半部は調整が不明である。底部外底面は平行にヘラミガキを施す。色調は茶褐色を呈し、小砂粒を含む胎土である。外面の肩部以下底部まで煤が付着し、特に下半部に厚い。また内面は底部から約 $\frac{1}{3}$ の位置に黒色の付着物がある。穿孔はされていない。

蓋として使用される台付鉢形土器(第184図1019)は、口径約26cm、残存高23.6cmを測る。腰にやや丸みがあり、内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は屈曲して外反し端部を下方に拡張する。脚台は斜め下方に広がるが、脚裾端が欠損している。欠損面は丸く摩滅しており、意図的な打ち欠きをされた可能性がある。鉢部の調整は口縁部内面をヨコナデする以外は、すべてヘラミガキである。底部内面は平行にヘラミガキを施す。脚台部は外面の上方を縦方向のヘラミガキ、内面の上方を縦方向のナデによって調整される。成形は円板充填法を用いる。紋様は口縁部端面、体部に簾状紋を施すが、紋様帯間の筥磨研線はない。脚部には小竹管紋を施す。色調は茶褐色を呈し、胎土は0.1~0.3cm大の砂粒を多く含む。

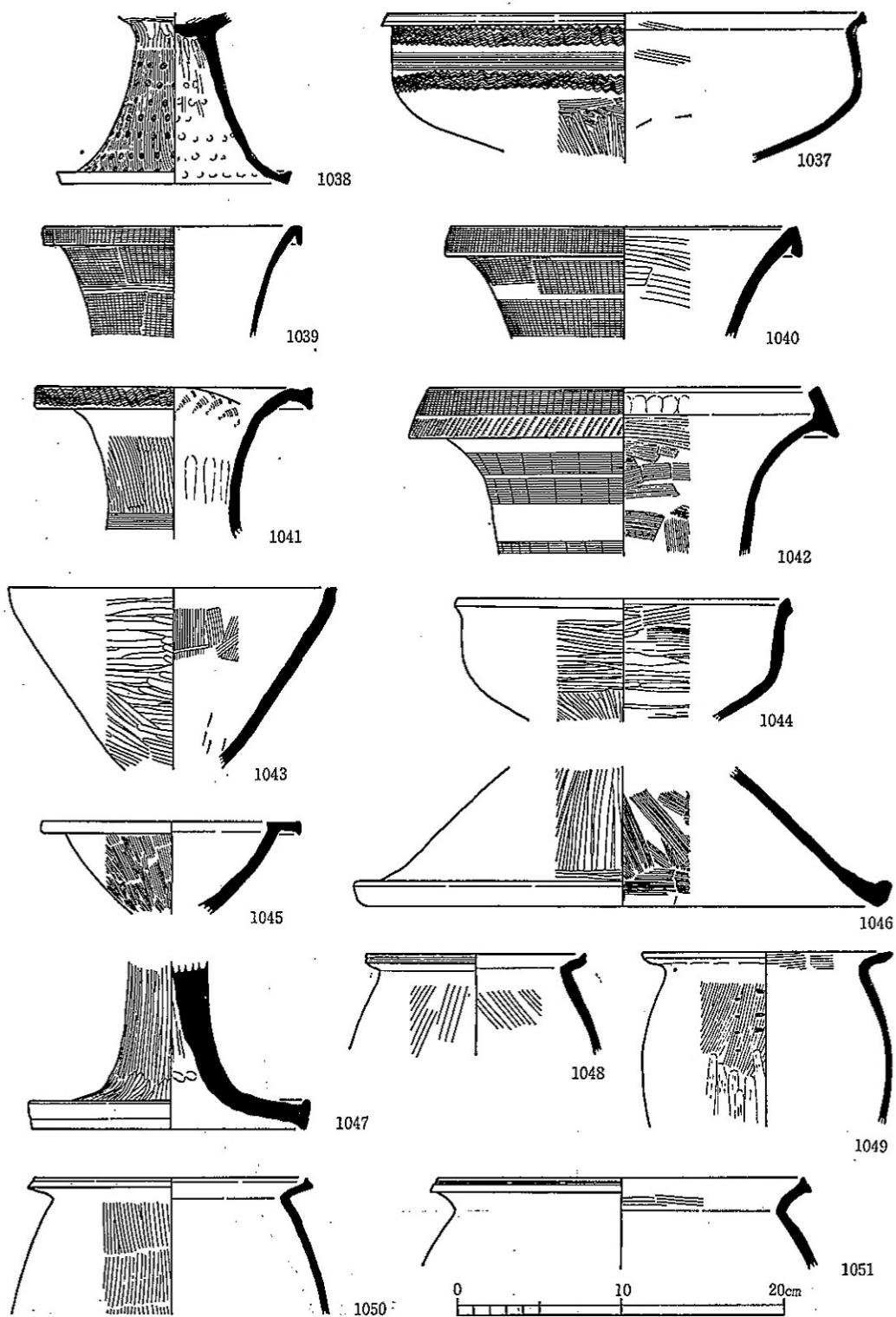
甕棺は身、蓋ともに生駒西麓産の土器であり、第Ⅲ様式後半に属するものであろう。



第136图 第13号方形周溝墓周溝内出土土器



第187图 第13号方形周溝墓周溝内出土土器



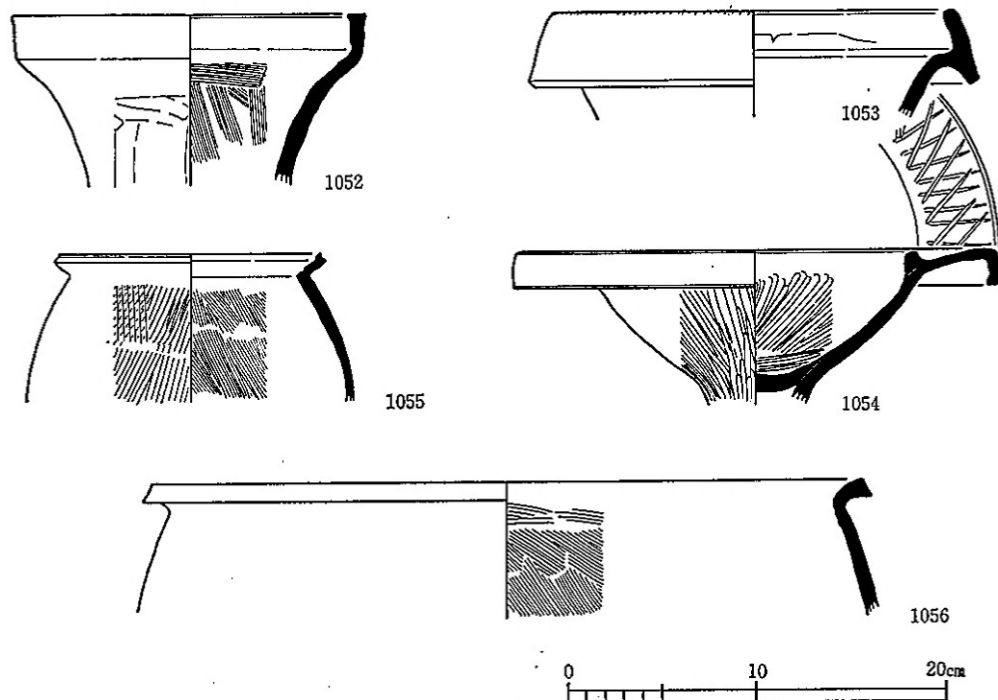
第188图 第13号方形周溝基周溝内 (1037・1038)、及び盛土内 (1039~1051) 出土土器

〈第14号方形周溝墓〉 4Cトレンチの南端で、墳丘の一部と北側の周溝が検出された。1972年に調査された南接する5DT~V9地区では土壙墓2基と木棺墓1基が検出されている。（『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会1973.3）この木棺墓、土壙墓は包含層中にあると記述されており、木棺墓の西約5mのところの5DVラインで南北方向の段落ちが検出されている。包含層と盛土はどちらも黒色に近い砂質土で見分けが困難であり、この「包含層」が盛土である可能性は高い。従ってこれらの木棺墓、土壙墓は第14号方形周溝墓の主体部であり、5DVラインの南北方向の段落ちが墳丘の東端部にあたると思われる。

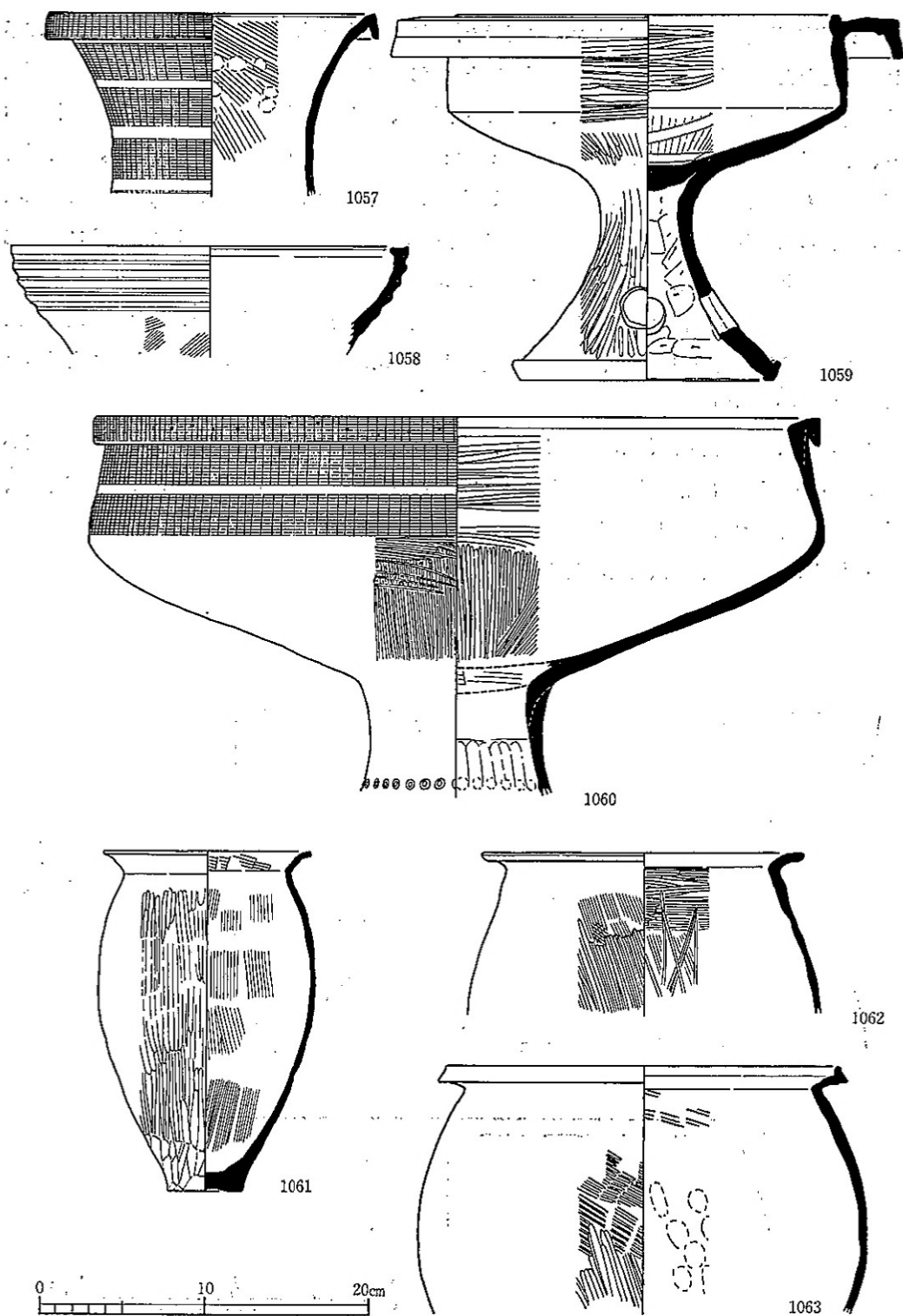
墳丘は5DVライン付近を東端とすると東西15m前後で、南北の長さはわからない。調査した範囲では盛土は約0.2mしかなく、周溝肩からの比高も0.3mにすぎない。盛土最上部で磨製石戈（第195図304）が出土した。

周溝は幅1.6m前後で深さ0.3m強であり、断面形は浅い皿状を呈し、灰黒色粘土が堆積している。灰黒色粘土層内でかなりの土器片を出土した（第190図）。C地区の他の方形周溝墓と同様、完形品が供献されていたという状態ではない。

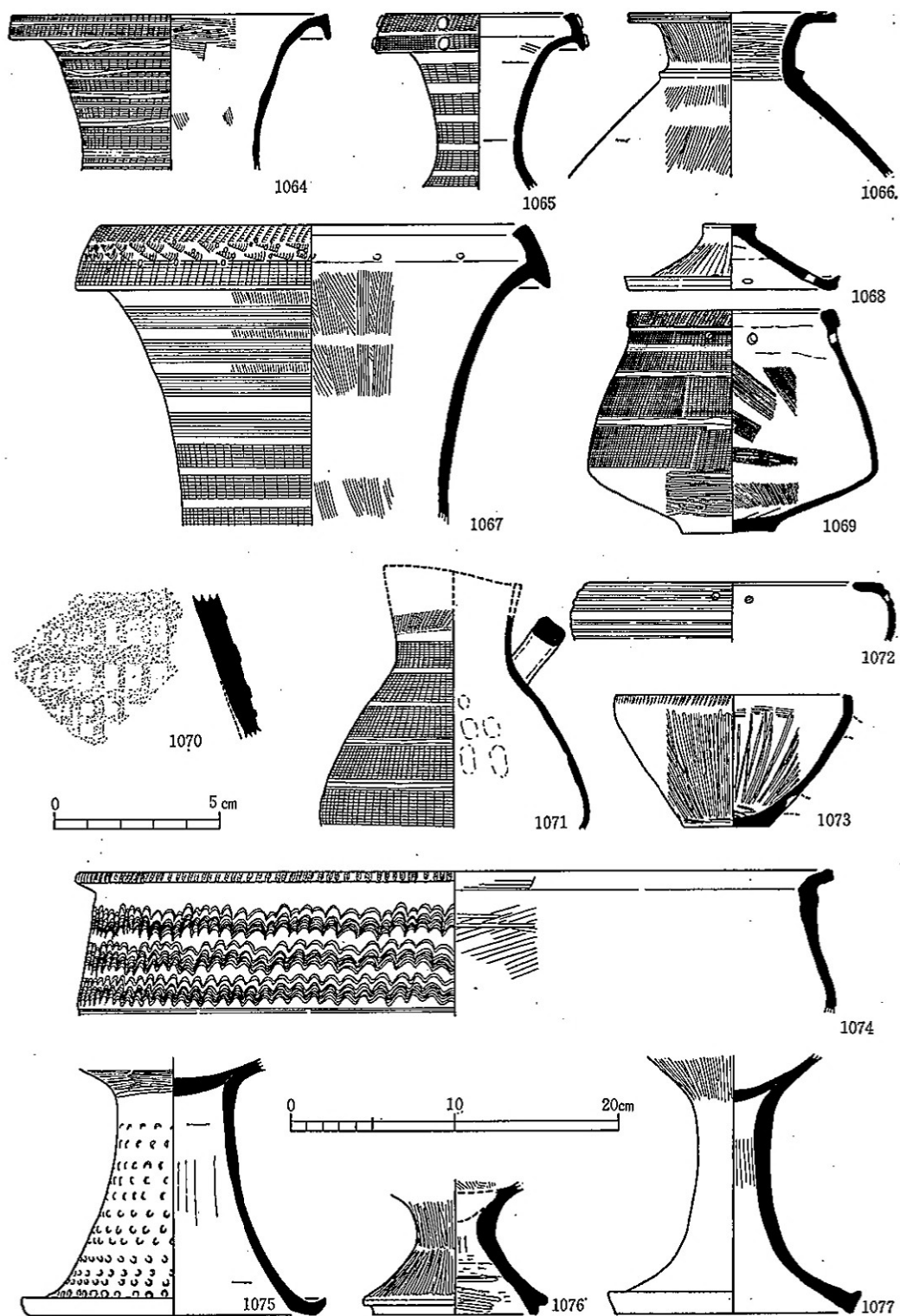
主体部は今回の調査範囲内では全く検出されなかった。



第189図 第14号方形周溝墓盛土内出土土器



第190图 第14号方形周溝墓周溝内出土土器



第191图 弥生時代中期包含層出土土器

3) 小結

弥生時代中期の遺構は上下2面に分かれて検出された。遺構面Ⅰでは多数の土壙、ピット、溝等が検出され、集落址的な性格が考えられる。遺構面Ⅱでは方形周溝墓4基が検出され、墓地が営まれるようになる。このようなあり方はC地区に限らず、A地区南半からE地区にかけて共通してみられるものである。方形周溝墓の盛土は遺構面Ⅰを削平した土砂を使用した可能性があり、周溝内にも盛土や遺構面Ⅰの土器が混入したことが考えられる。しかしこれらの混入した可能性がある土器を除外しても、両遺構面の土器には明確な差はみられず、ともにⅢ様式後半～Ⅳ様式に属するとみられる。もちろん層位的には両遺構面の時期差は明確であり、土器にも例えば鉢形土器の口縁部は、遺構面Ⅰでは短かく外反し、下方へ拡張するもの(鉢B)が多く、遺構面Ⅱでは段状口縁のもの(鉢C)が多い等の部分的な差異がみられるが、現状では全器種にわたって弁別の特徴を指摘することは不可能である。

遺構面Ⅰでは多数の遺構を検出したが、性格の明らかなものはほとんどない。わずかに第12号方形周溝墓下で検出したピット群が、建物とみられるのみである。なおC地区北端では遺構面のレベルが低くなり、遺構もみられず、B地区以北の遺構群との境界をなしているようである。ここはその後古墳時代に至るまで低地、あるいは河川として、瓜生堂遺跡内を区分する境界のひとつとして機能し続けたらしい。

遺構面Ⅱでは4基の方形周溝墓を検出した。その配置には規則性を見出すことは困難であるが、主軸の方位はほぼ南北、あるいは東西を指す。第11、14号方形周溝墓は墳丘の小部分しか調査されなかったこともあり、主体部は検出されなかった。もっとも第14号方形周溝墓は以前の調査で木棺と土壙が各1基発見されている。第13号方形周溝墓では甕棺1基と土壙2基が検出された。第12号方形周溝墓では木棺が1基発見されたが、これも墳丘の中央ではない。つまりこれらの方形周溝墓はすべて複数の主体部を持つべく構築されたと言いうことができる。一方、方形周溝墓の周辺には土壙墓は全く検出されず、これはA～C地区に共通するひとつの特徴である。これに対してD地区では方形周溝墓の周辺で土壙墓が検出されているが、そこでみられるような方形周溝墓と土壙墓が混在するあり方は、小阪ポンプ場内でみられる方形周溝墓と土壙墓が明確に分離して占地するあり方とは異なる。瓜生堂遺跡の調査も部分的なものに過ぎない現状では墓地の形成過程をあとづけることは困難だが、このようなあり方の差がどういう原因によるものか今後検討を要する課題である。

前述したようにC地区の方形周溝墓は、主軸が南北、または東西を指すが、南のD地区では約45°傾いており、方形周溝墓周辺に伴う土壙墓の有無でも区別できる。一方B地区との間には低地の無遺構帯があって境界となっている。このことからC地区の方形周溝墓群はB、D地区の墳墓群からはある程度独立して墓地を構成するひとつの単位を形成していると考えられる。

第14号方形周溝墓の盛土から出土した磨製石戈は類品が東奈良遺跡で出土している(『考古学雑

誌」63—2)。東奈良遺跡のものは包含層からの出土であり時期がはっきりしなかったが、本例はその使用年代の一端が中期後半にあることがはっきりした。その作りは青銅製品を忠実に模しており、B地区出土の磨製石剣とともに畿内の青銅利器の年代を推定する重要な資料となろう。

4) 石器類及び土製品

C地区約 1,000m²の調査区域中から59個の石器類及び土製品が出土した。ほとんどが弥生中期後半に属するものである。1 m²あたりの出土個数は、0.059個と非常に少ない。

石器類及び土製品の内訳は、農具の石庖丁が13個、紡織具の石製紡錘車が1個、土製紡錘車が2個、土製円板が4個、工具の石錐が6個、砥石が6個、叩き石が3個、凹み石が1個、利器の不定形刃器が13個、武器の石鏃が2個、石槍が5個、磨製石剣が2個、磨製石戈が1個である。その他、サヌカイト剥片・細片類が53個出土した。以下、主要な遺物について略述する。

石庖丁は、4個の完形品以外はすべて破損品である。材質は、北摂産の黒色粘板岩製のものが3個、他は紀州産の緑色片岩である。形態は、背部が丸くなるものと直線状のものがある。刃部は、直線・内彎・外彎するもの等があるが、すべて片刃である。未製品のS—249は完形品で打ち欠きによって整形し、表裏面に磨きを加えている。何故に仕上げなかったのか理解に苦しむ。石庖丁は、出土個数も多く、破損品も多いことから使用頻度の高い道具であったと推定されるが、事実、4孔の石庖丁(S—253)などは、後尾が欠けたものを紐穴の位置をずらして使用するため4孔となったものである。穿孔には錐部の太い石錐を使用したらしく、先端部側縁に回転線状痕を留めるものがある。小半弓を横に使い、高速回転させたものだろう。

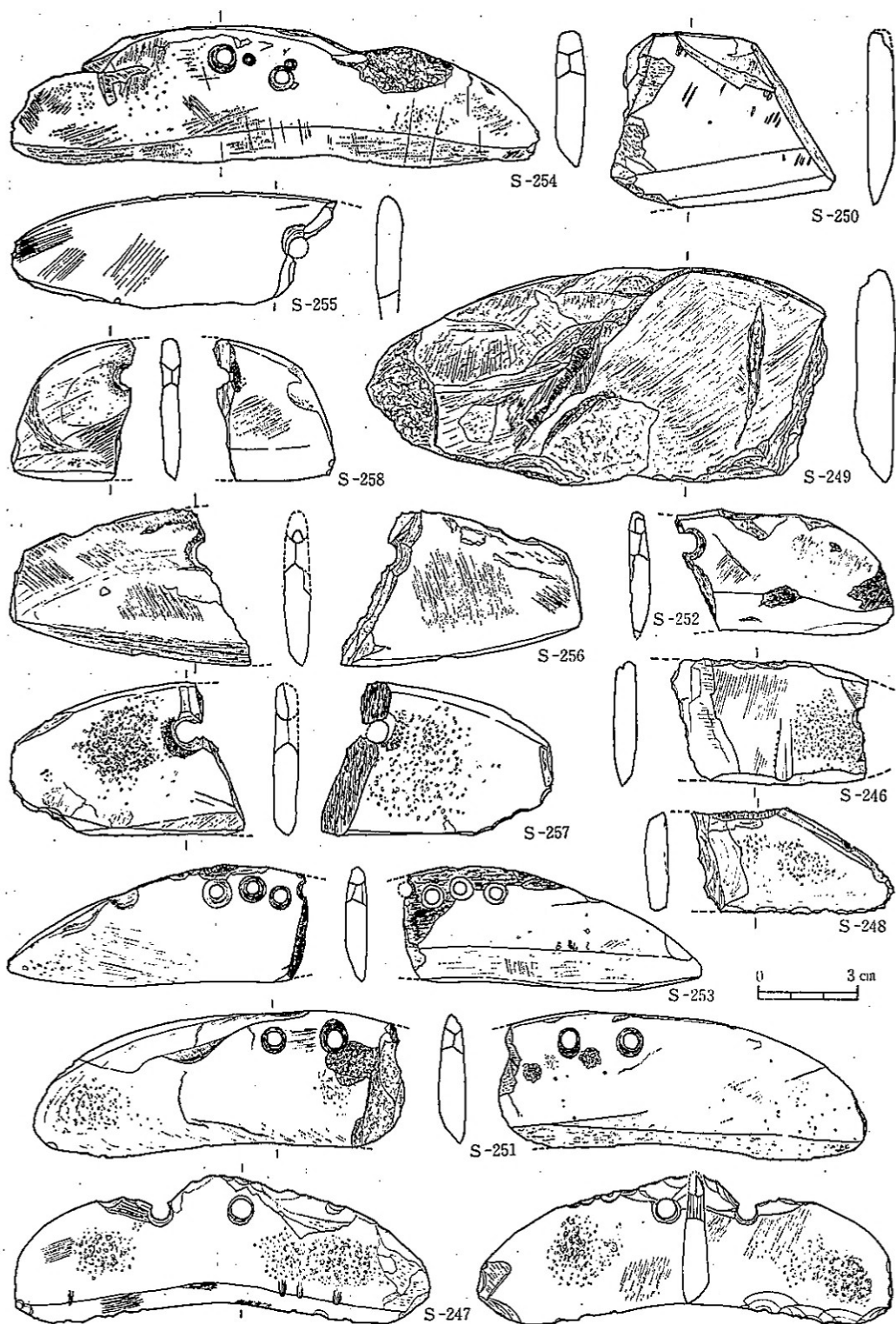
古墳～奈良時代に属する石製紡錘車(S—259)は、北摂に産する石英斑岩を使用し、幅 6.7 cm、重さ半欠で48.7gと非常に大きく、厚く、重たいものである。類品は少ない。

石鏃は、2個が共に有茎式で、S—295は極めて丁寧な打調によって作られた優品である。

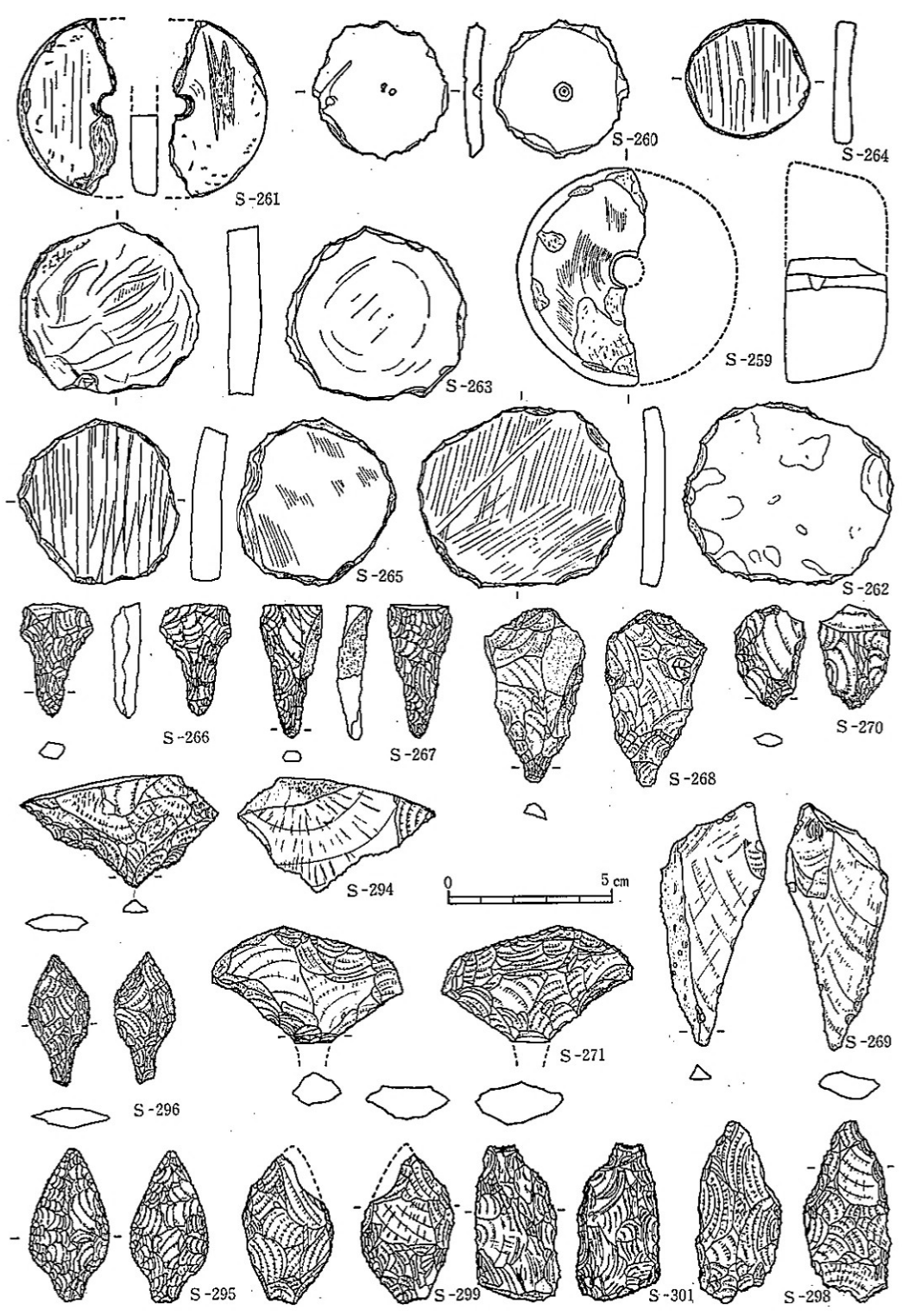
石槍は、小型と中型に分かれ、中型のS—300は先端部を欠くというも15cmに達するものである。このような中型石槍の素材となるサヌカイト剥片は瓜生堂遺跡から出土せず、また製作もよほど熟練しないと不可能なことから、これらの製作地は他所が考えられ、瓜生堂には当初より製品として搬入された可能性が高い。事実、近畿地方で唯一のサヌカイト原産地たる二上山北麓の地には、大型石槍のみを作った石器製作址が発見されている。

また石剣(S—303)と石戈(S—304)もすべて黒灰緑色の硬い石灰質粘板岩製で、作りがとても丁寧で薄く身を研ぎ出す技術など非常に難しいことから、やはり、原石産出地付近で極めて特定の専門工人達によって作られた可能性が高い。こちらは、どこで作られたのか、製作地は不明である。

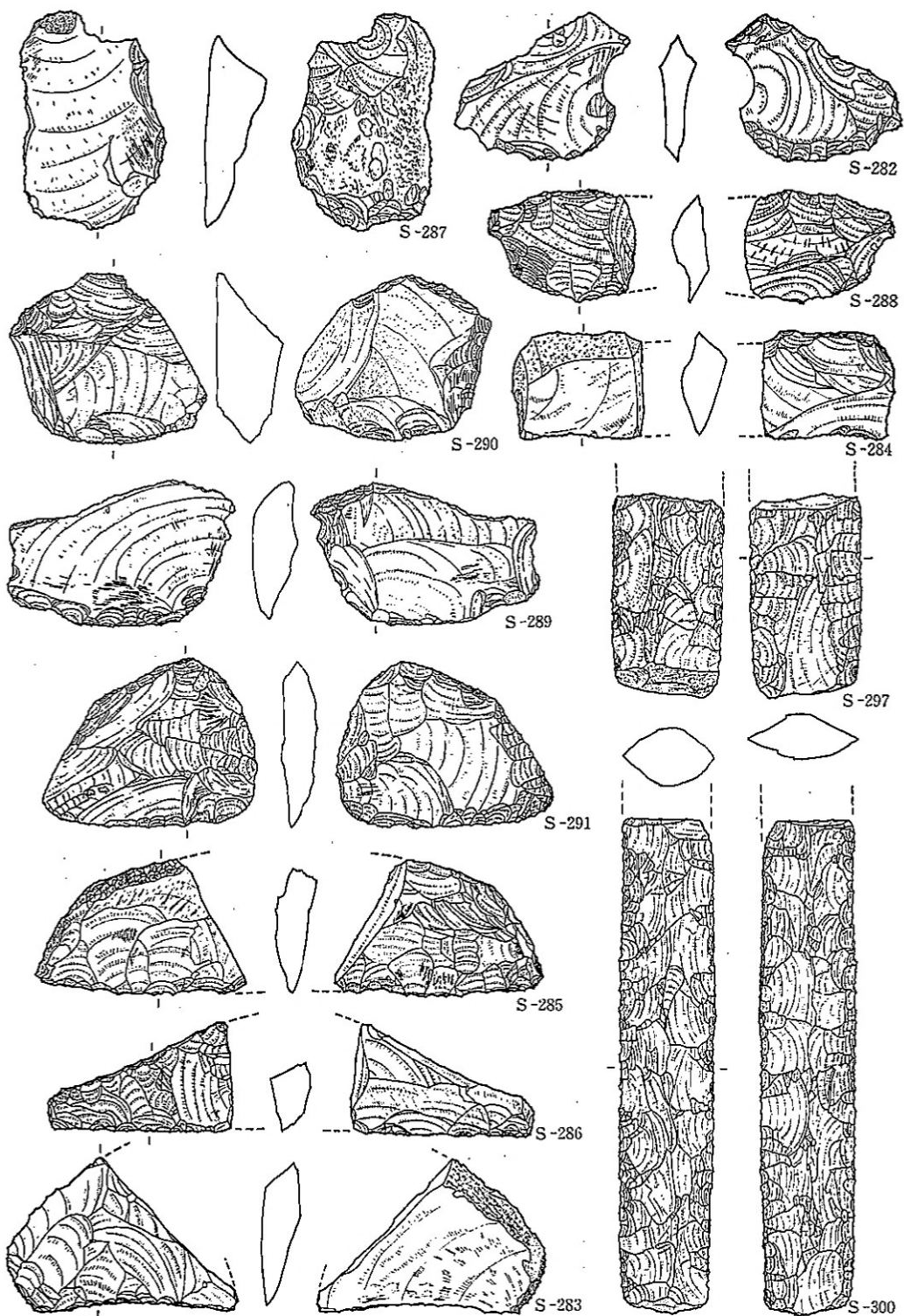
総じて、今後の石器類に関する課題として、ひとつは、瓜生堂においては石器の原材料となる石を産出しない訳であるから、そこに運び込まれた石器の製作地を順次解明してゆくことであり、他の木器や土器の研究と相俟って、当時の物質の流通関係や交易関係を明らかにすることである。



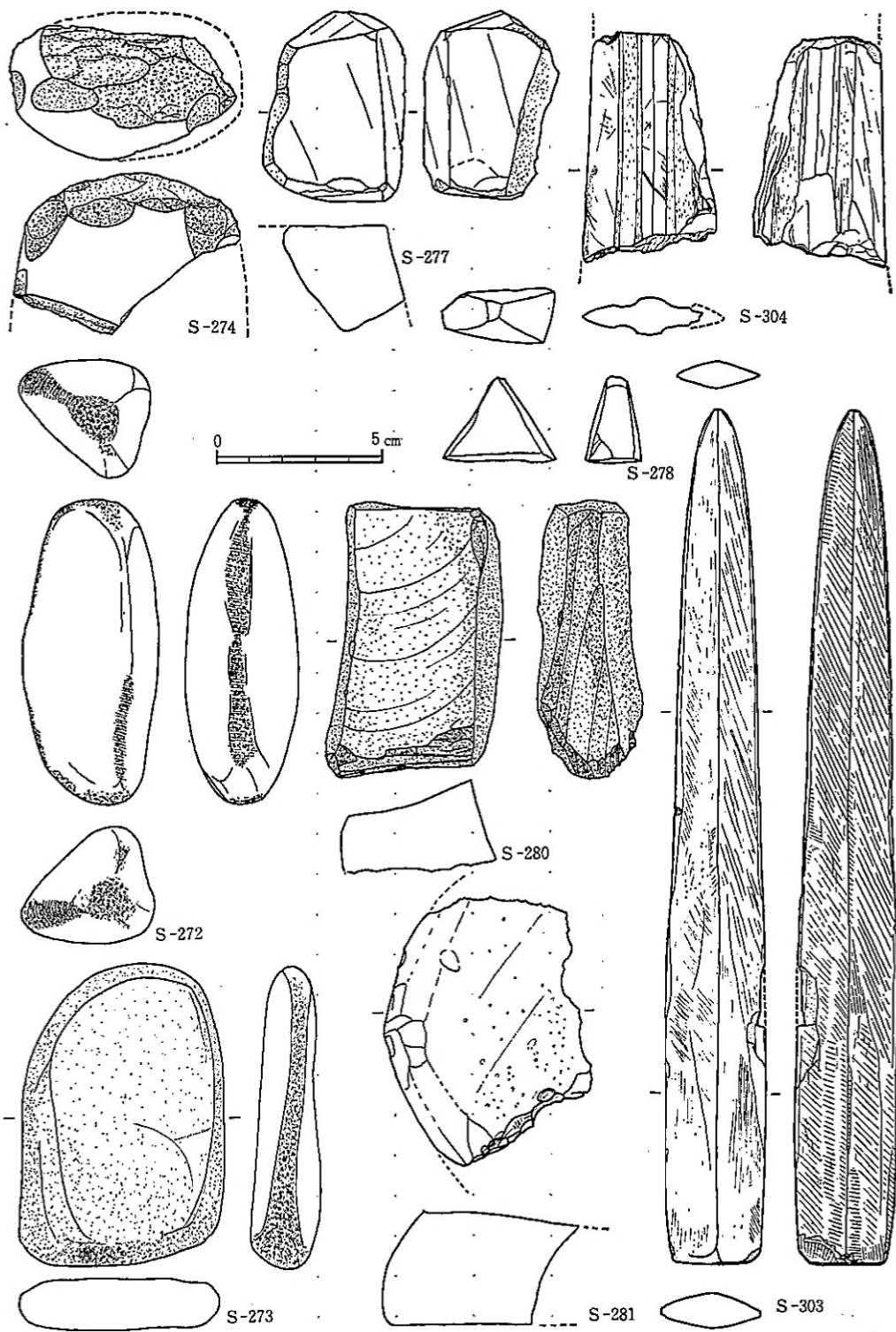
第192图 C地区出土石器(1)



第193图 C地区出土石器(2)、土製品



第194图 C地区出土石器(3)



第195图 C地区出土石器(4)

第15表 C地区出土石器類及び土製品一覧表(1)

番号	種類	材質	大きさ (cm)			重さ (g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
246	石 庖 丁	結 晶 片 岩	3.8	6.0	0.7	25.0	包含層
247	"	"	12.6	3.9	0.8	61.0	"
248	"	"	3.2	6.1	0.7	19.6	最終面直上
249	"	"	6.6	14.0	1.2	163.0	13号墓、未製品
250	"	粘 板 岩	5.3	6.8	0.7	41.0	13号墓盛土、大型石庖丁
251	"	結 晶 片 岩	4.4	11.2	0.8	58.5	12号墓盛土
252	"	"	3.8	6.6	0.6	23.0	12号墓盛土
253	"	"	3.7	9.1	0.6	31.4	13号墓盛土
254	"	粘 板 岩	4.3	16.0	0.9	85.2	"
255	"	"	3.5	9.8	0.8	37.7	溝78
256	"	結 晶 片 岩	4.7	7.3	0.8	33.6	13号墓盛土
257	"	"	4.6	7.0	0.8	34.1	12号墓西裾
258	"	"	4.3	3.7	0.6	13.1	溝99
259	石製紡錘車	石 英 斑 岩	6.7	3.9	3.1	43.7	落込28、半欠
260	土製紡錘車	土 器 片	4.0	4.0	0.5	10.3	包含層、穿孔途中
261	"	"	5.4	3.0	0.8	15.4	溝99、半欠
262	土製円板	"	5.5	6.3	0.6	29.1	包含層、周縁打ち欠き
263	"	"	5.2	5.4	1.0	39.6	溝96、"、土器の底部
264	"	"	3.6	3.7	0.6	9.4	12号墓盛土、"
265	"	"	5.0	4.8	0.9	24.6	13号墓盛土、"
266	石 錐	サヌカイト	3.4	2.1	0.8	4.7	11号墓内土器群、回転線条痕
267	"	"	4.1	1.9	0.8	5.2	11号墓周溝内
268	"	"	5.4	3.0	1.6	21.5	"
269	"	"	7.4	3.1	1.8	23.3	溝96、全体が極度に磨滅
270	"	"	3.1	2.2	0.4	6.1	12号墓盛土
271	"	"	3.6	5.9	1.2	24.5	12号墓3号土壙
272	叩 き 石	硬 質 砂 岩	9.1	4.0	3.5	163.0	溝93
273	"	"	9.1	6.1	2.1	175.0	溝92
274	"	閃 緑 岩	4.8	6.7	3.9	135.0	包含層、蛤刃石斧の転用
275	凹 み 石	硬 質 砂 岩	11.8	7.7	4.7	610.0	落込28、古墳~奈良
276	砥 石	花 こ う 岩	10.2	7.0	5.5	600.0	包含層
277	"	砂 岩	5.6	4.1	3.2	92.0	"

第15表 C地区出土石器類及び土製品一覧表(2)

番号	種類	材質	大きさ (cm)			重さ(g)	出土場所・備考
			長さ	幅	厚さ		
278	砥石	砂岩	2.5	3.4	1.7	8.5	11号墓盛土
279	"	泥岩	5.9	4.4	1.1	599.0	12号墓盛土
280	"	砂岩	8.2	5.3	3.1	124.0	包含層
281	"	"	8.0	6.2	3.4	218.0	13号墓周溝、一部焼ける
282	不定形刃器	サヌカイト	4.4	5.3	1.1	16.8	12号墓盛土
283	"	"	4.6	7.0	1.1	29.3	12号墓盛土
284	"	"	3.3	3.9	1.3	20.7	14号墓溝内
285	"	"	4.1	6.3	1.0	30.3	最終面直上
286	"	"	3.3	5.5	1.8	16.8	"
287	"	"	6.6	4.3	1.7	49.0	12号墓盛土
288	"	"	3.4	4.4	1.0	18.2	"
289	"	"	4.3	6.9	1.3	38.1	包含層
290	"	"	5.1	5.9	2.0	54.2	最終面直上
291	"	"	5.1	6.4	1.0	38.7	12号墓盛土
292	"	"	4.5	4.6	1.5	38.0	包含層
293	"	"	3.6	5.4	0.9	16.8	"
294	"	"	3.4	6.1	0.4	23.3	排土
295	石鏃	"	4.6	2.3	0.6	5.8	11号墓盛土
296	"	"	4.0	1.8	0.5	3.3	包含層
297	石槍	"	6.1	3.3	1.4	34.7	包含層
298	"	"	5.5	2.6	0.8	18.6	包含層
299	"	"	4.5	2.8	1.0	14.3	12号墓1号土壌
300	"	"	15.0	2.9	1.7	97.0	13号墓盛土
301	"	"	4.7	2.5	1.2	18.8	12号墓3号土壌
302	磨製石剣	石灰質粘板岩	4.1	2.5	0.7	10.2	12号墓盛土
303	"	"	25.6	3.0	1.0	91.0	包含層
304	磨製石戈	"	6.8	4.0	1.1	38.8	14号墓盛土

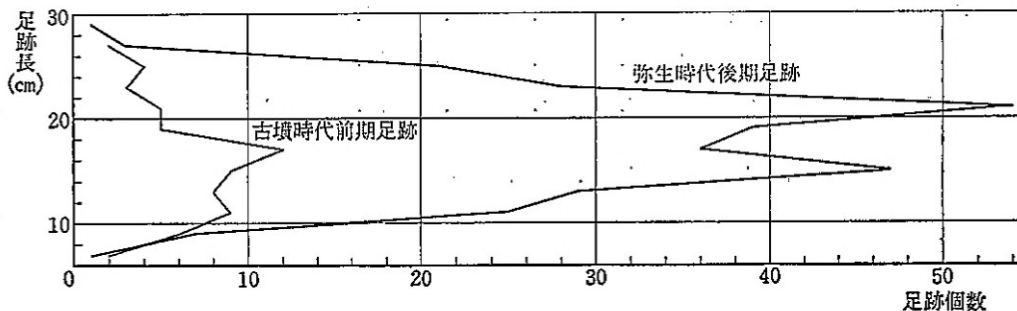
他に、サヌカイト割片・細片が53個 590.9g出土した。

3 弥生時代後期の足跡

弥生時代中期の包含層である黒色砂質土層の上には黒色粘土層、暗灰色粘土層が堆積しており、1Cトレンチでは暗灰色粘土層上面で人間の足跡を検出した。他の地区でも足跡は存在していたと思われるが、今回の調査で足跡が注意される以前に掘削を終えていたため検出されなかった。この暗灰色粘土層、黒色粘土層からは本地区では遺物を検出することができなかったが、他地区の調査結果から弥生時代後期の層であると推定される。足跡は暗灰色砂層上面から踏みこまれ、底は黒色粘土層に達する場合もある。足跡内には暗灰色粘土層直上の層と同じ暗灰色砂が流れ込んでいる。暗灰色粘土層上面のレベルはトレンチ南端でT.P.-0.35m前後、北端では-0.6m位で北に向って傾斜しており、低い部分には足跡は少ない。足跡は不確定なものも合すると総計539個を検出した。3P25ラインとトレンチ東壁の交わる点から北西コーナを結ぶ線の東北側には足跡はほとんど存在せず、東南コーナーから中心付近にかけて最も密集している。足跡の分布は極めて乱雑であり、単一人間の歩いた跡をたどることができるものはほとんどなく、断片的に数歩分をたどれるものがいくつかあるにすぎない。足跡の大きさは数cmから20数cmまでいろいろあり、下表のような分布を示す。これらの足跡がつけられた面の性格については判断する材料もないが、畦等は検出されなかったし、足跡面の傾斜等からみても水田址の可能性は少ない。花粉分析等の結果を待ちたい。

4 古墳時代前期の足跡

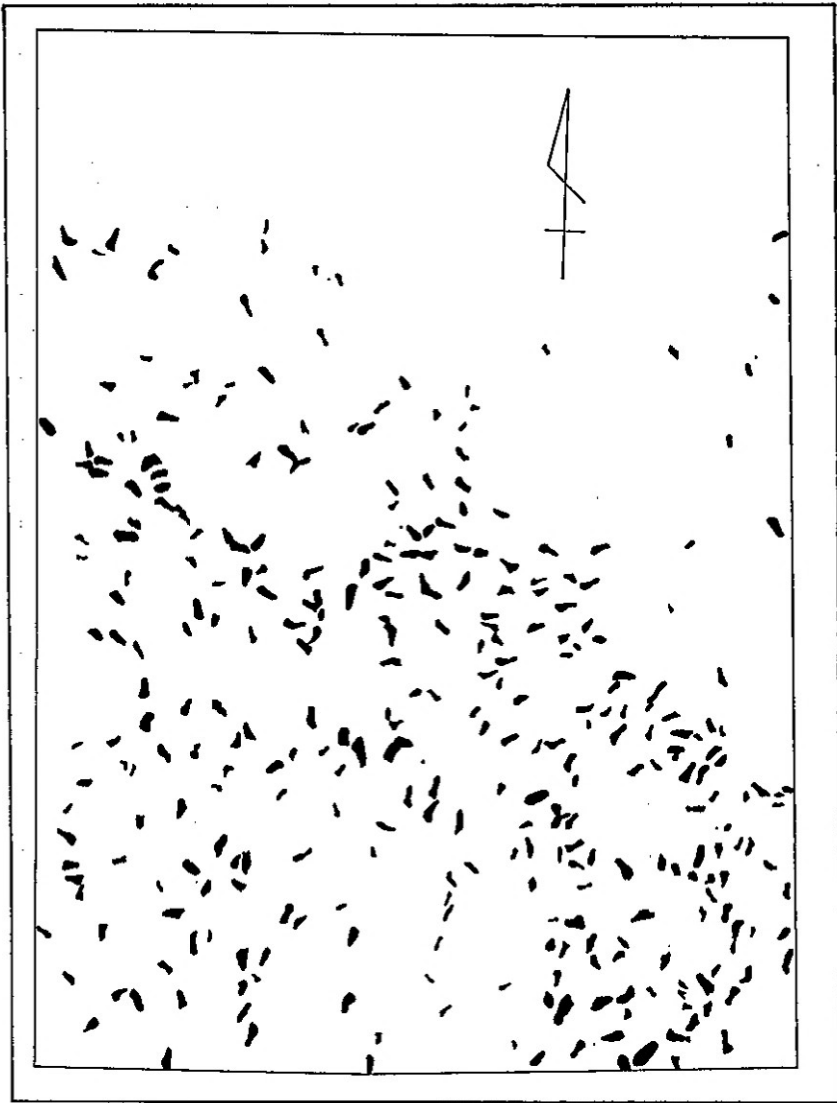
弥生時代後期の粘土層上にはやはり後期の砂層が厚く堆積しているが、T.P.+0.9~1.0m前後に暗灰色粘土層があり、その上面でも足跡を検出した。この層は3Cトレンチで庄内式甕形土器の破片を検出しており(第162図901)、その時期が知られる。トレンチ北部には段落があり、西北コーナーには大きな落込がある。足跡はトレンチ中央から東辺にかかる南北6m、東西4mの範囲内で97個を検出した。そのなかには人間ではなく、偶蹄類のようなものも含まれている。この面でも足跡の分布は乱雑であり、歩いた跡をたどれるものはほとんどない。畦は検出しなかったが、この層には黄白色の斑文が含まれており、水田であった可能性もある。巨摩庵寺遺跡下層から北に同じ時期の水田が連続して検出されており、それと一連のものと考えられる。



第196図 1Cトレンチ出土足跡長出現頻度数分布グラフ

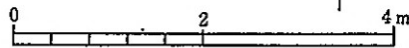
3P0

3P1

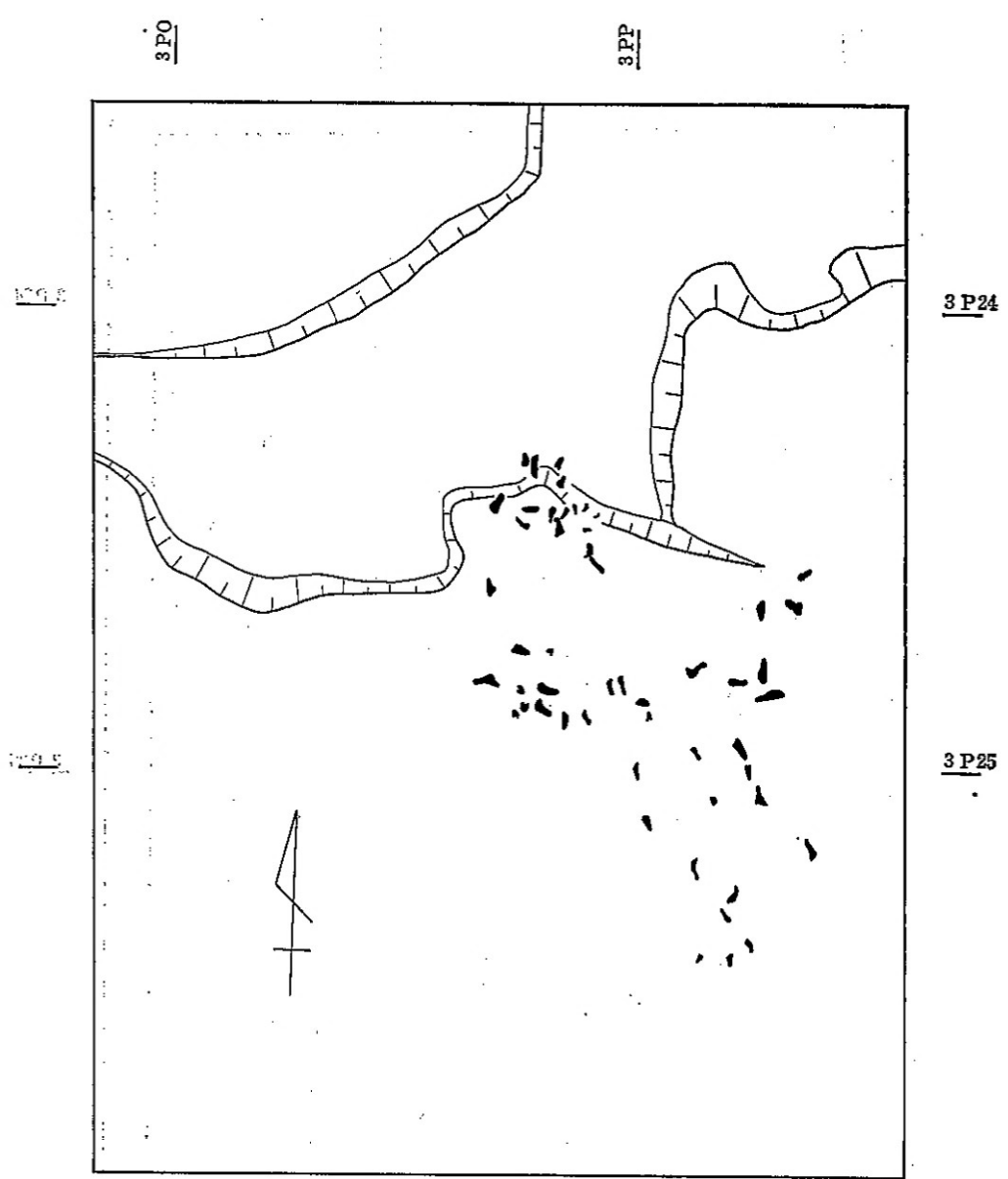


3P24

3P25



第197図 1Cトレンチ弥生時代後期足跡面平面図



第198図 1Cトレンチ古墳時代前期足跡面平面図

5 奈良時代以降の遺構と遺物

1) 遺構

奈良時代の遺構を検出した面において、中世以降の遺物も検出したので、ここで一括して記述する。

奈良時代の遺構は調査区の北端付近にのみあり、5D-1ライン以南には存在しない。遺構の種類は溝、ピット、落込があり、溝15、ピット17、落込1を検出した。溝やピットからは遺物はほとんど出土せず、時期の判断はむずかしいが、落込から奈良時代初頭～中葉の土器がかなりの量出土した。

溝は真北から約15°東にふれるものと、それに直交する角度のものがある。幅0.5～0.6mのもの、幅0.3m前後のもの2種類あり、南北方向のものは大きいものが多く、東西方向のものはほとんどが小さいものである。深さはいずれも0.1～0.2mの浅いものである。これらの溝の方向はB地区南半で検出された建物群と大体同じようなもので、おそらくその建物群と関係するものと思われるが、その機能を推定することは困難である。

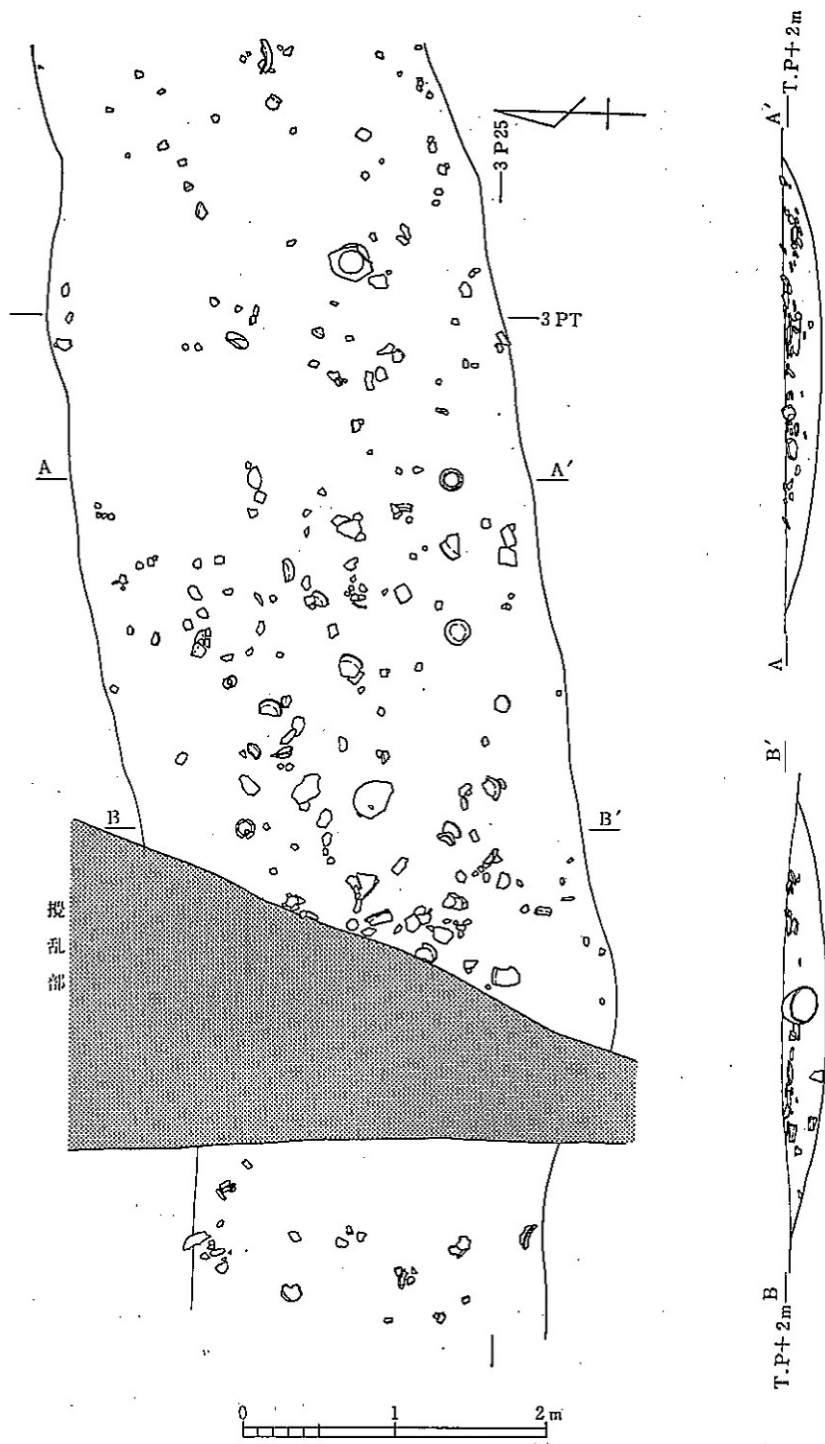
ピットは17個あり、その内の3個ほどには柱根が遺存していたが、建物にまともなものはなかった。恐らくこの地域は建物群の南端部にあたり、主要な建物は存在しなかったものと思われる。

2Cトレンチで検出された落込28は、建物群のはずれという位置にふさわしく、土器その他の廃棄場の様相を示す。幅3m前後で長さ9m以上のこの落込は、深さがせいぜい0.3m前後で、浅い皿状の断面形を呈しており、かなりの土器を含んでいた(第199・200・201図)。それらの土器の中には6世紀代の須恵器もかなり含んでいるが、それらを除けばほぼ「平城Ⅲ期」平行のものであって8世紀中葉に比定できる。B地区南半の建物群から出土した遺物は必ずしも豊富とはいえず、この落込出土の土器はこれら建物群の年代の一端を示すものとして評価されよう。

中世以降の遺構はC地区北半では大型の土塋があり、南半では東西方向の溝、及び大小のピットがある。さらに2CトレンチからCトレンチにかけて検出された溝は現代のものである。

土塋349～351は径3～4mに達する不整形、ないしは隅丸方形の大きなもので、深さも1mをこえる。遺物がきわめて少ないため明確に時期を限定することはできず、その機能も明確ではない。土塋352は井戸の可能性はあるが、奈良時代か中世以降のものかははっきりしない。

5D4ライン付近から南には東西方向の溝3本といくつかのピットがある。東西方向の溝はまばらにしか検出しえなかったが、F、G地区で検出されたものと同様の所謂「鋤跡」かと思われる。これらの溝にともなっていくつかのピットが検出されたが、それぞれ出土遺物はきわめて少なく、時期、性格については不明な点が多い。調査区南端に近づくにつれてレベルが低くなり、それとともに遺構面である黄褐色シルト～粘質土層がなくなり、砂層が表面にあらわれて、遺構もほとんどみられなくなる。



第199图 落込28遺物出土状況平面、断面図

2) 奈良時代<落込28>出土土器

落込28の出土土器は、口縁部が残存するもので土師器145個、須恵器45個ある。時期的には奈良時代の土器が大部分を占め、古墳時代の土器は少量含まれるのみである(第200・201図)。

土師器には、杯・皿・鉢・高杯・壺・甕・埴・罎・罎釜・甕などの器種がある。杯・皿が最も多く、甕・罎釜も比較的多い。胎土・色調はほぼ2種類に分けられる。杯・皿・高杯などは砂粒をほとんど含まず、明褐色・淡褐色を呈している。甕・埴・罎釜は砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。

杯は口径15cm前後、器高3.5cm前後のものである(1084~1086)。底部より丸みをもって立ち上がり端部でわずかに外反する口縁部をもつ。口縁部内外面はヨコナデで調整される。(1084)は口縁部外面に粗いヘラミガキを加え、底部外面はヘラケズリである。口縁部内面は斜方射状暗紋、底部内面に螺旋状暗紋が施される。(1086)は底部に丸みをもつやや深めの杯である。(1085)は口縁部が内彎気味で端部が内方に肥厚する。底部内面に右まわりのナデを施す。どちらも底部外面に指押えが残る。この土器は、既報告(『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973.3)の当遺跡出土の土器に類似すると思われる。

皿は口径15cm~20cm前後、器高2.5~3.5cm前後のものである(1078~1083・1087)。ほぼ平坦な底部からやや曲折して斜め上に開く短い口縁部をもつものが多い。口縁部は上半がわずかに外彎し、端部が内側に肥厚する。調整は口縁部内外面をヨコナデ、底部外面をヘラケズリによる。口縁部内面に斜方射状暗紋を、底部内面に螺旋状暗紋を施す。底部外面に焼成後刻線紋を施したものが(1080・1081)、2~6本の線が交叉する。口縁部の一部に煤が付着したものは(1082・1087)、灯火器として使用されたものと考えられる。

高杯は杯部が欠損する(1092)。脚は多角形(11面)に面取りした脚柱から横方向に広がる脚裾部をもつ。脚裾端は欠損しており不明である。柱状部外面は下方から上方にヘラケズリされる。脚裾外面、柱状部内面はヨコナデ、脚裾内面はナデ調整による。

壺は口径9.6cm、器高6.7cmで、扁平な器体に短く外反する口縁部をつけたものである(1090)。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリを施す。

甕は体部より短く外反する口縁部をもつもの(1088・1089)、体部から強く外反する口縁部をもつもの(1093・1094)がある。前者は口縁端部を外側に折り曲げており、口縁部内外面にヨコナデを施す。後者の口縁端部は上方に肥厚し頸部外面の曲折部分は丸みをもつ。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、体部外面を縦方向の刷毛目で調整される。内面は横方向の細かい刷毛目調整のもの(1093)、ヘラケズリ後刷毛目調整したもの(1094)がある。

埴は丸みをもつ器体に外反する口縁部をつけたものである(1091)。口縁端部は内方へ肥厚する。口縁端部外面はヨコナデ、体部は横方向のヘラケズリ、内面は口縁部から頸部を横方向の刷毛目、下方を斜め方向の刷毛目で調整される。口縁部外面に煤が付着し、体部内面には炭化物が

付着する。

罎釜(1095)は、ゆるやかに外反した口縁部をもち、頸部の周囲にはほぼ水平にのびる鏝を巡らす。口縁端部は下端に丸みをもち、内面はわずかな凹みをもつものが多い。口径は28~31cmあるものが普通で、23cmのやや小型のものもある。鏝の端部は丸みをもつ。口縁部外面から鏝の下方までヨコナデ、口縁部内面に横方向の刷毛目を施し、体部外面に縦方向の刷毛目を施したものが一般的である。胎土は角閃石・金雲母を含むものに限定される。

図示していないが、斜めに内彎気味に開く口縁部破片がある。粗製で砂粒を多量に含み茶褐色を呈している。形態・手法などにより製塩土器と考えられる。

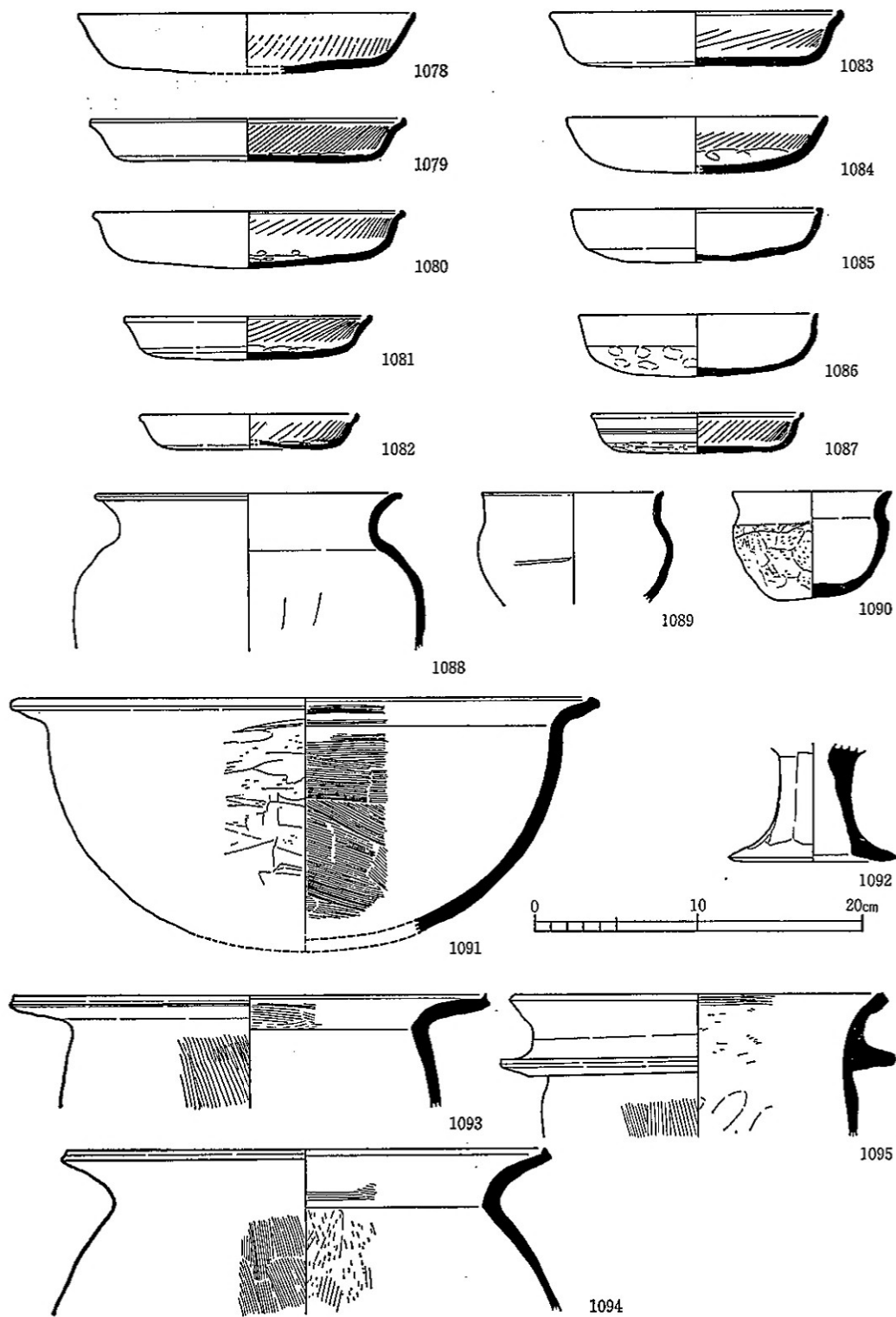
古墳時代の須恵器としては杯・蓋・高杯などがある(1096~1101)。杯身は内傾するたちあがりをもつ。内外面は回転ナデによるが、回転ヘラケズリ調整が底体部外面の約 $\frac{1}{4}$ にみられ、内面中央に同心円と考えられる叩き目が残ったものもある(1098)。蓋の口縁部はわずかに下下方に下がり、口縁端部の内側は浅く凹む。内外面は回転ナデによって調整され、天井部と口縁部の曲折部分下方に凹みがみられる。高杯は杯部の小破片で、外面にわずかに突出した稜をもつもの(1100)、内面中央に同心円の叩き目が残るもの(1101)がある。

奈良時代の須恵器としては杯・蓋・甕などがある。杯は平坦な底部から斜め上方にのびる口縁部をもつ(1102~1107)。端部は丸くおわり、やや外反するものもある。口縁部内外面、体部内面は回転ナデにより調整される。底部外面にヘラ切り痕が残るもの(1102)がある。底部に高台を付したのも器形・調整ともに共通する。底体部内面に一定方向のナデを施すもの(1103、1105)、下面に回転ヘラケズリを施すもの(1105)がある。蓋は、口縁部が端部で内方あるいは直下に屈曲しているもので、口縁端部は凹む(1108・1109)。天井部に丸みをもつもの、平らに近いものがあり、外面は天井部の $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{2}$ を回転ヘラケズリによって調整する。内面の約 $\frac{1}{2}$ に不整方向のナデを施す。つまみ周囲はナデ調整。甕は肩の張った体部から屈曲して斜め上方に外反する口縁部をもつ(1111~1114)。口縁部端面が外傾するもの、内傾し内側が凹むものなどがある。

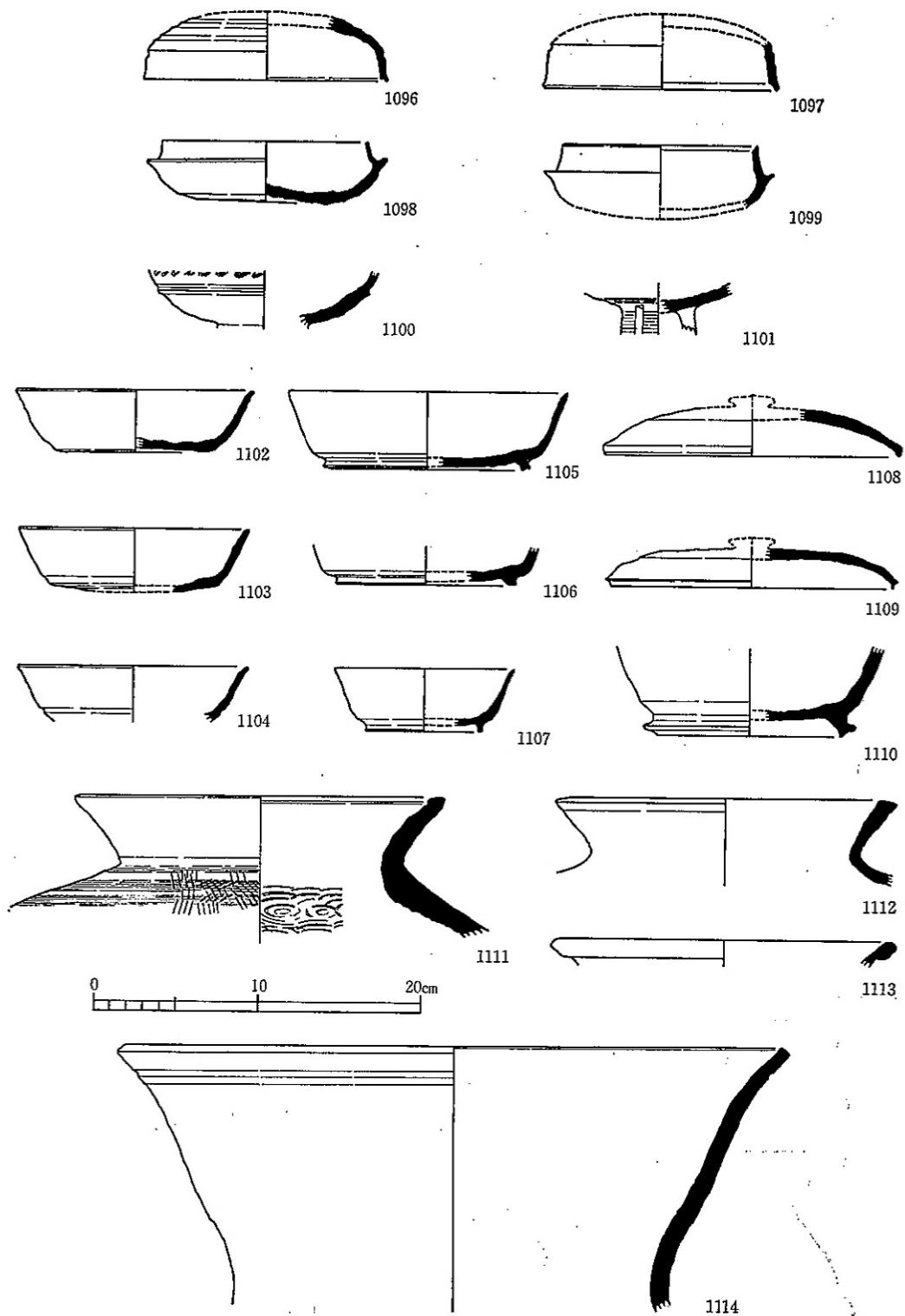
他に内彎する口縁部をもつ無頸壺、長頸壺の底部(1110)、俵形の横瓶の体側部分などもある。

以上主な土器について記述した。土師器の杯・皿については、底部外面をヘラケズリで調整したものが多く、杯の口縁部外面にヘラミガキを施すものもある。暗紋は口縁部に一段の斜方射状暗紋、底部内面に螺旋状暗紋を施す。須恵器については、杯底部外面にヘラ切り痕が残るものがある。これらの土器は、セット関係が明確でなく、若干の6世紀後半の土器の混入もみられるが、おおむね「平城Ⅲ期」に平行するものと考えられる。

土器以外に、凹面に布目のある平瓦の破片があり、当遺跡と周辺遺跡との関連を考える上での要素の一つとして提示しておく。



第200图 落达 28 出土土器



第201图 落达 28 出土土器

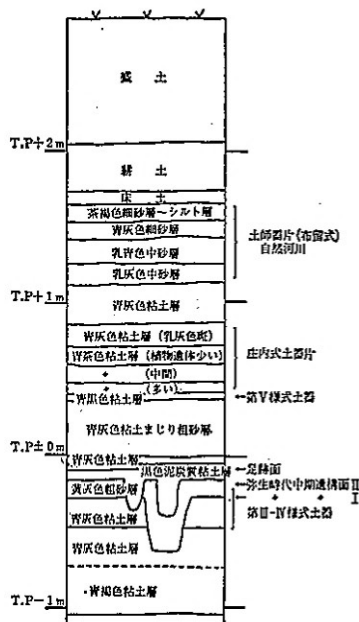
第4節 D地区の調査

1 層序 (第202図)

D地区の層序は南北約50m、東西約30mの狭い範囲内ではあるが、粘土層や砂層が全体的にかなり安定した面的な広がりを知ることができた。ここで述べる標準土層は、T.P.+1.7m前後の茶色～褐色の土層とT.P.+1.3m～T.P.+0.7mにある黒灰色粘土層(上位)、T.P.+0.3mの灰黒色粘土混り細砂層(炭・粘土多し)、T.P.+0.7～0.5mの黒色粘土混り砂層(弥生時代第Ⅲ～Ⅳ様式土器包含層)の4層で、A～H地区との土層の対比から、それぞれの所属する時代の推定が可能である。茶色～褐色土層からは布留式土器、黒灰色粘土層からは庄内式土器、灰黒色細砂層(炭多し)からは弥生時代第Ⅴ様式土器が出土している。以上述べた土層に検出された遺構を加えて、本地区の土層を説明してゆくと以下のようなになる。

層序は現地表より下へ、第1層盛土、第2層旧地表、床土、第3層黄茶色砂層、第4層青灰色細砂層、乳青色中砂層、乳灰色中砂層(河川)、第5層黒灰色(青灰色)粘土層、第6層青黒色粘土混り細砂層、第7層青灰色粘土混り粗砂層、第8層青灰色粘土層、第9層黒色粘土層(植物遺体非常に多し)、第10層黒色粘土混り砂層、第11層青黒色粘土混り砂層、第12層青白色粗砂層、第13層青灰色粘土層、第14層青褐色粘土層、第15層青灰色粗砂層と続いている。この中で第4層と第6層の一部は、河川及び低い所に堆積した土砂のため途切れており、高い所(方形周溝墓のマウンド部等)には堆積していない。それに、第5層の土層は、乳灰色斑文のある土層を中間に含むため、上位～下位に区別することができ、さらに非常に薄い植物遺体層(1～3cm)をはさみ、この土層上部から下部にかけて、植物の根茎が伸びているのが、良く観察できた。このような植物遺体層は全般の土層に認められるが、本土層で特に著しく、本地区では、第9層においても一部で顕著に認められた。

砂層の堆積状態は、第3層、第4層、第7層、第12層、第15層で観察できた。この中で、最も大きな礫(径約10mm)を含む砂層は、第3層、第4層である。しかし、第4層は、本地区中央部約10mの間で顕著に認められるにすぎず、周囲の土層は、細砂層から、シルト層へと移行し、南側では、畦畔状遺構を覆っていた。第7層、第12層、第15層の粗砂層は、径約5mm程度の礫を含むものの、整然としたラミナーを示しているのが特徴的である。



第202図 D地区土層断面模式図

遺物を含む土層は、第3層に布留式土器、第5層に庄内式土器と、鞘状木製品・槌・田舟・三脚盤等の木製品、建築部材、加工木等、第6層・第7層に第Ⅶ様式土器、第10層・第11層からは第Ⅲ～Ⅳ様式土器が、出土している。第5層・第10層の出土遺物を除けば、数量的には、さほど多くない。

遺構は、第5層の断面観察で畦畔状遺構、第8層上面で足跡、第11層上面で方形周溝墓、大溝4条等の遺構、第12層上面で、井戸、大溝3条、多数のピット等を検出した。

2 弥生時代中期の遺構と遺物

D地区の遺構は、本調査地区を南西から北東に流れる4条の大溝と多数の井戸、ピットと大溝に平行ないしは直交する方向でつくられた9基の方形周溝墓と1基の壺棺墓に要約される。これらの遺構は、地点によって若干土層が変化するものの、遺構面では上下関係にあり、明確に新旧の関係、遺構の性質等を知ることができた。そしてピットや土壌が数多く検出された中で2個所のピットが組合わされるのを除けば他は溝、井戸を中心とした生活遺構が下層に多く（遺構面Ⅰ）、方形周溝墓と大溝（溝201）等が上層の遺構（遺構面Ⅱ）である。主な出土遺物の説明は、各遺構と共におこなう。

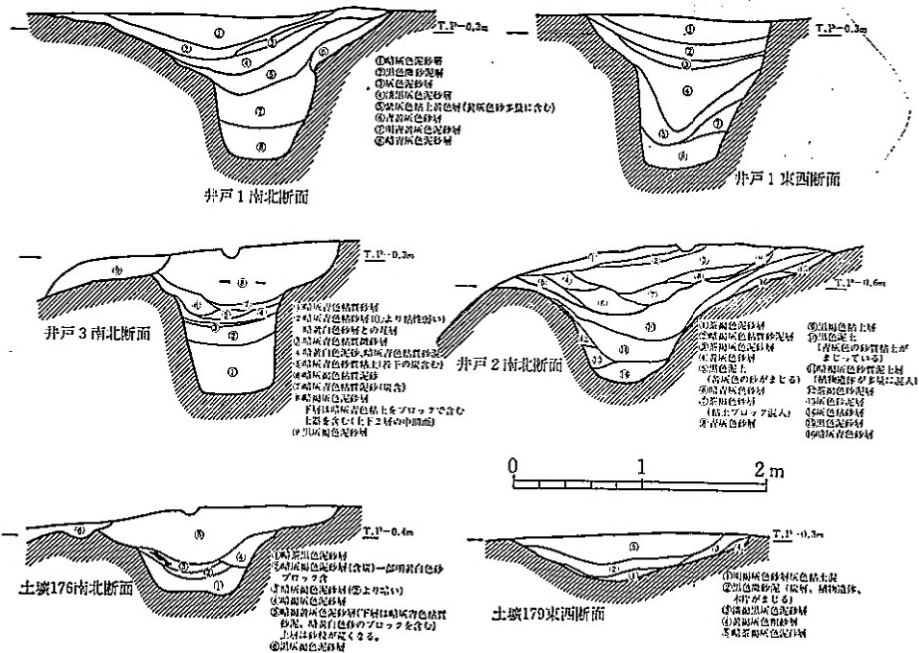
1) 遺構面Ⅰ（付図19）

遺構面Ⅰは、方形周溝墓群が形成される以前の遺構面である。主な遺構としては、溝、井戸、多数のピット、土壌群が確認された。本項では、溝と井戸を中心に報告する。

A 溝 ここでは2条の規模の大きな溝について説明する。ほぼ平行して南西～北東に走るこれらの溝は、北から溝111、溝112である。2条の溝の掘削時期の前後関係は不明であるが規模、形状等は、溝111は幅約3.3m、深さ約0.7mでゆるいU字形の断面を示し、溝112は幅約2.2m～3.5m、深さ約0.7mで、逆台形の断面を示しゆるく南東へ彎曲している。埋土は2条の溝とも砂層、粘土層が互層となって整然と堆積しており、その中に土器、炭、灰、植物遺体、加工木等が含まれていたが、数量的には非常に少ない。

B 井戸 <井戸1> 東側約3分の2を調査した。開口部径2.6mを測る。二時期の井戸が重複しており、深さは、ともに約1.2mである。底部は、新しい時期の井戸が長径0.65m、短径0.4mの楕円形、古い時期の井戸は一边約0.6mの隅丸方形になるものと推定される。新しい時期の井戸は、古い時期の井戸よりやや東南によせて掘削されており、その壁面が、古い井戸の埋土にあたる部分については、粘土を貼り付けることにより、壁の崩壊を防ぐように工夫がなされたようである。

<井戸2・3> 井戸2は開口部最大径約3m、底部は、長径0.65m、短径0.35mの楕円形で、深さは、約1.1mである。この井戸2の北に、井戸3を検出した。この井戸は井戸2に切られており、開口部推定最大径約2m、底部は0.5mの円形で深さは約1.2mを測る。ともに大溝に切られて存在し、底はいずれも、粘土層を抜いて砂層に達する。



第203図 弥生時代中期遺構面 I 遺構断面図

C その他 <土壌 169> 一辺約 2m の隅丸方形のプランを持ち、深さ約 0.3m の浅い摺鉢状の土壌である。底部のほぼ全面に厚さ約 0.1m の炭化物が非常に多い砂泥層がある。把手付鉢（第204図1119）および石庖丁を出土した。

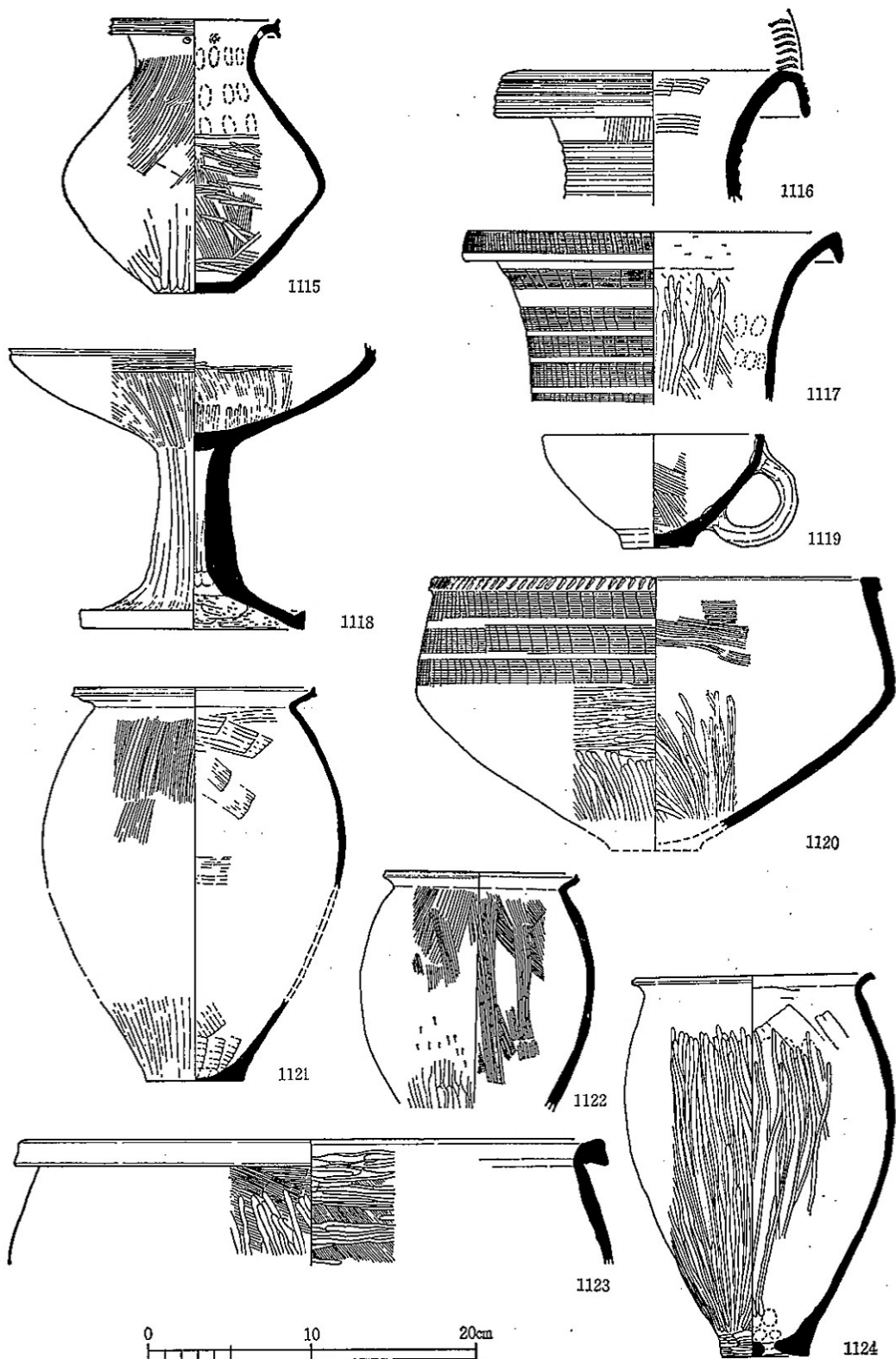
<土壌 176> 井戸 3 を切る土壌 176 は、井戸 3 と同様のプラン及び掘方を持つが、浅く、底を砂層面まで掘抜いていない為、井戸とするには疑問も残る（第203図）。

<土壌 179> 溝201の南肩によって切られている。推定長径約 1.2m、短径約0.8mのプランを持ち、深さは約0.5mである。甕（第205図1133）が出土している。

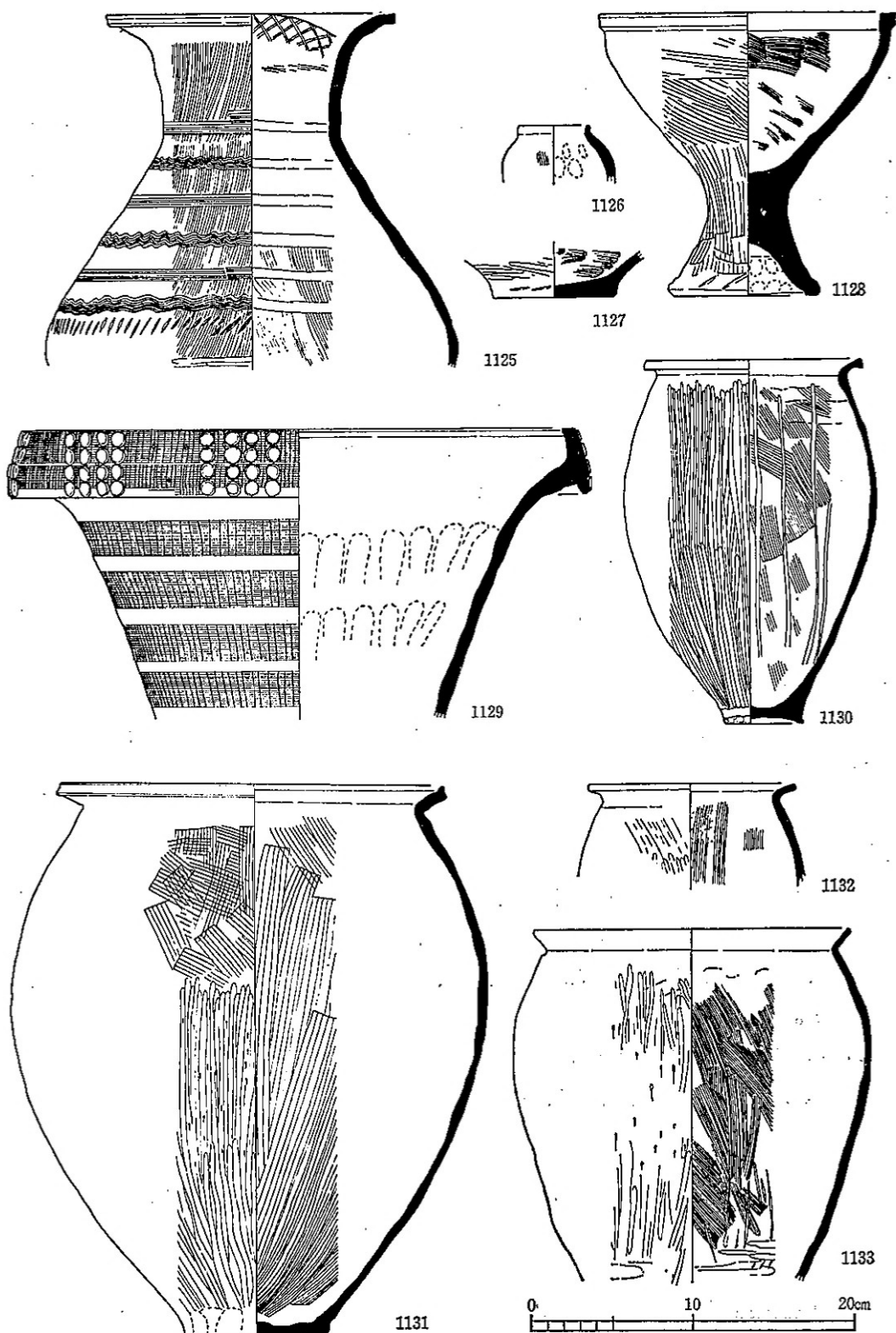
<溝109・110> 1Dトレンチの東南隅、第23号墓の下層において検出した。両者とも細長い土壌とも考えられ、底部全面に、黒色砂泥層がみられた。トレンチ矢板際のためその全容を明らかにするには至らなかった。

D 土器

井戸 2 の甕（第 204 図1124）、大型甕（同1123）は、生駒西麓の胎土であるが、この他の井戸 1 の甕（同1121）、井戸 2 の白褐色を呈する広口壺 A（同1116）、鉢 C（同1120）、井戸 3 の淡褐色を呈する広口壺 C（同1115）、暗茶褐色を呈する甕（同1122）は他地域の胎土である。上記の広口壺 C は体部はそろばん玉形を呈し、口縁端面に 2 条の凹線が巡り口縁直下に 2 孔一対の孔のある完形品である。外面全体に煤が付着している。甕形土器はともに体部上半に最大径をもち、器高の高い小型甕である。また、甕（同1121）、甕（同1124）は器壁が非常にうすく、甕（同1122）は小型のわりに器壁があつくポッテリとしている。3点とも煤の付着が著しい。甕の



第204図 井戸1 (1118・1121)、井戸2 (1116・1120・1123・1124)、井戸3 (1115・1122)、
土壙169 (1119)、土壙176 (1117) 出土土器



第205图 土城179 (1133)、沟110 (1126·1127·1132)、沟111 (1128)、沟112 (1130)、
 遗构面 I 小沟 (1129)、遗构面 I 包含层 (1125·1131) 出土土器

底部の穿孔は、錐による両面からの回転穿孔である。

土壙 169 の把手付鉢A (同1119)、土壙 179 の甕 (第 205 図1133)、土壙 176 の広口壺A (第 204 図1117) は 3 点とも、生駒西麓の胎土である。広口壺Aは頸部内面にヘラミガキ調整が施されている。

溝110のミニチュア無頸壺 (第 205 図1126)、溝111の台付鉢C (同1128) は白褐色を呈し、他地域の胎土である。広口壺B (同1129)、溝110の壺底部 (同1127)、甕 (同1132)、溝112の甕 (同1130)は生駒西麓の胎土である。台付鉢Cは、目の粗い刷毛目調整が全面に施されており、脚柱部も中実である。おそらく北摂からの搬入品であろう。溝112の甕は、炭化物の付着が著しい。

この他に、遺構面Ⅰの包含層より検出された広口壺A (同1125) は、口縁端部に拡張のみられない形態である。茶褐色を呈し、胎土には白色微砂粒が含まれ、肉眼ではみえないが、顕微鏡で観察すると、角閃石の粒子が含まれている。いわゆる生駒西麓の胎土とは様相を異にする胎土である。甕 (同1131) は、外面全体煤が付着し、下半部内面にも炭化物が付着している。淡茶褐色を呈し、生駒西麓の胎土である。

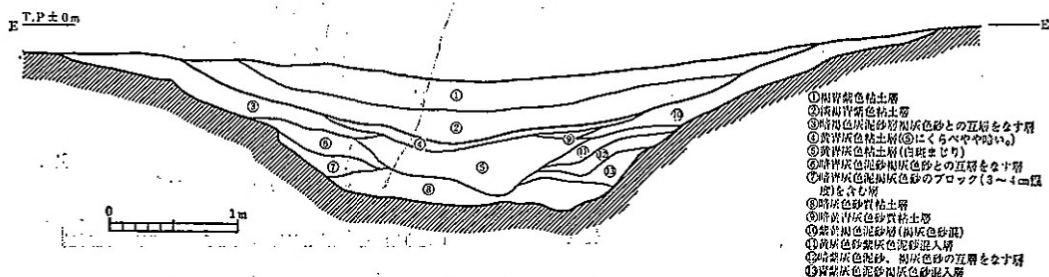
遺構面Ⅰにおいて井戸 2、井戸 3 の間に切合関係が認められることから、井戸 3 の広口壺C (第 204 図1115)、甕 (同1122) は比較的古いとみられるが、遺構面Ⅰ全体としてほぼ同一時期と考えてさしつかえないと思われる。

遺構面Ⅰ出土土器の胎土のうち、生駒西麓の胎土と他地域の胎土の割合は、約 3 : 2 になる。全体の器種構成を考慮した上でないと性急な結論はさけねばならないが、大体の目安となるのではないだろうか。

2) 遺構面Ⅱ (付図19)

A 大溝 (溝 201) D地区のほぼ中央を、東北—西南の方向に南側に向かってわずかに外彎して流れる大規模な溝である。幅約 5~7 m、深さ約 1.5 mを測り、底面は約 2 mの幅でほぼ平坦な面をもつ。両側斜面は上になるほど緩傾斜となり、両側の堤状の高まりへと続く (付図19・20、第206図)。

この溝201は南の溝111と約 2~3 mの間隔で平行するが、前者の堤状の高まりは、後者の埋没後に盛られたものであることが、層位の観察結果から、あるいは付図20の、中期包含層上面の等



第206図 大溝 (溝 201) 土層断面図

高線図から明らかである。すなわち、この大溝の開削時期は、中期遺構面Ⅰに属する溝111より新しく、後述する方形周溝墓のうち、第17号、第20号、第23号墓また壺棺墓など、遺構面Ⅰの上層の遺構面Ⅱに属する墓群に先行すると考えられる。上記の墓は、この溝の堤上に点々と築かれていったことになる。

溝内の埋土の状況は、おおむね粘土層であり、この溝がかなり長期にわたって機能し、静水に近い状態にあったことがわかる。この溝は、隣接するE地区で検出された溝115と、規模、方向等で共通性を持ち、同じ頃に開削されたのではないかと考えられるが、断面の形状、埋没の状況などの相異点もみられる。

大溝開削の目的としては、区画・防禦的機能、交通、用排水などの諸機能が考えられるが、判断を下せるだけの材料はない。しかし、溝の存在が、周囲の墓群の配置・方向性と関連していることは明らかで、重要な遺構であると考えられる。

溝201から出土した大量の土器は、層位的に下位と上位に大別できる。広口壺(第207図1134)、ミニチュア小壺(同1136)、把手付台付鉢(同1137)は下位であり、大型広口壺(同1142)、器台(第208図1144・1145)、台付鉢台部(第207図1139)、甕(同1138)は上位であり、脚付無頸壺C(同1140)、水差(同1141)、器台(同1143)は上位でも包含層に接する部分である。第207・208図の中で1136、1137、1143の3点は生駒西麓の胎土であり、他の9点は、他地域の胎土である。

ミニチュア壺(同1136)は口縁部と肩部に段をもち、前期の形態を示す。他に前期の土器片は出土せず、大溝からなぜこの様な土器が出土したのか検討を要する問題である。

広口壺A(同1134)は白褐色を呈す。

近江系のミニチュア台付甕(同1135)は白褐色を呈し、内外面に朱の痕跡が認められる。

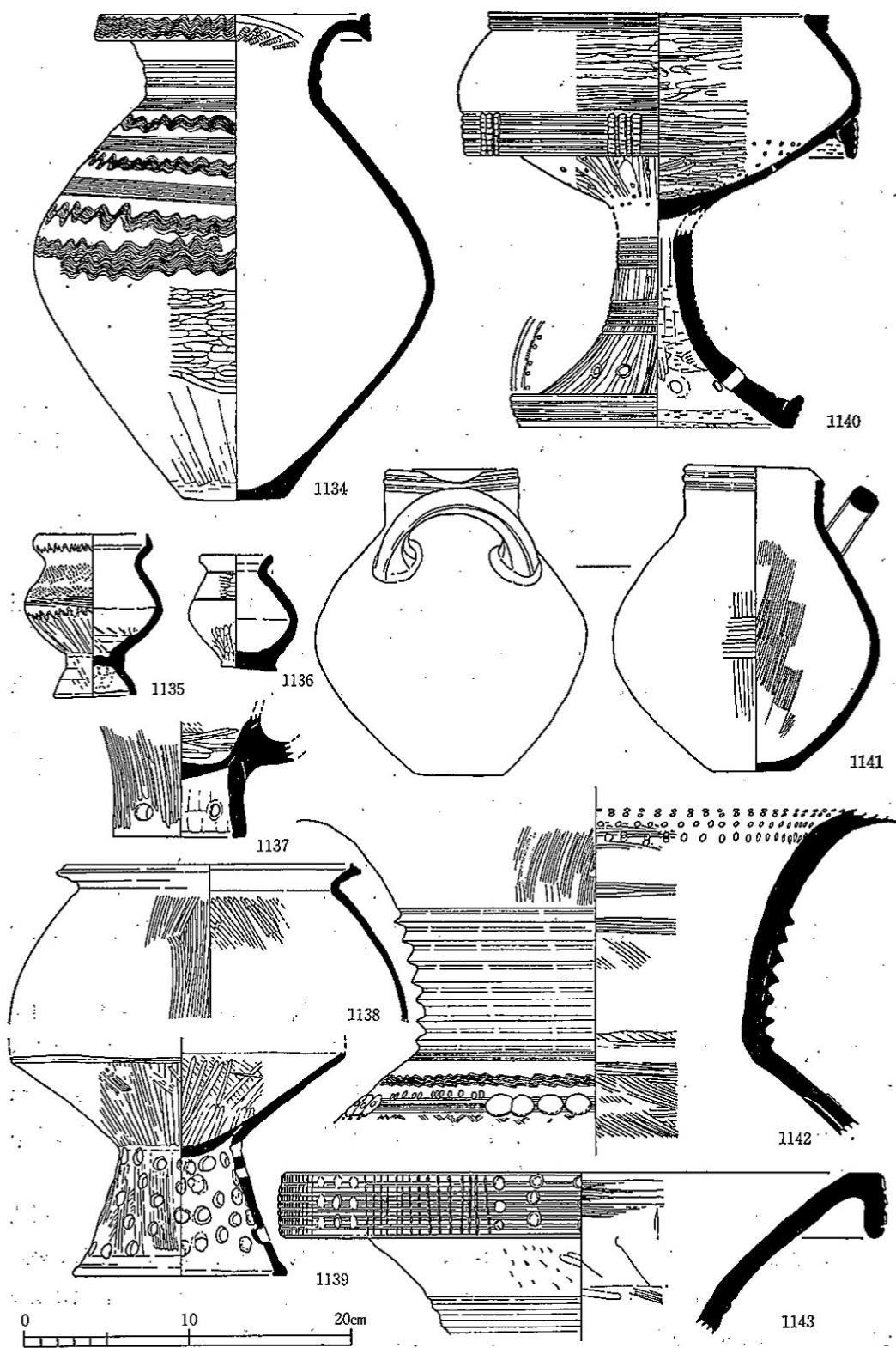
大型広口壺は白褐色を呈し、実測図に見るように著しく装飾された壺である。北摂の搬入品であろう。

第208図1144の器台は淡茶褐色を呈し、中央部に6条の凹線紋、上下両端面に3・4条の凹線紋が巡り、上端面には円形浮紋と10本の篋描縦線紋が交互に施紋され、口縁部内面には列点紋が施紋され、体部下半には四方に円孔のある器台である。角閃石粒子を含むので、河内地方の胎土であろう。同1145の器台は白褐色を呈し、体部中央に16条の凹線紋が巡り、下半部には八方に小さな円孔のある器台である。内面に煤が付着する。

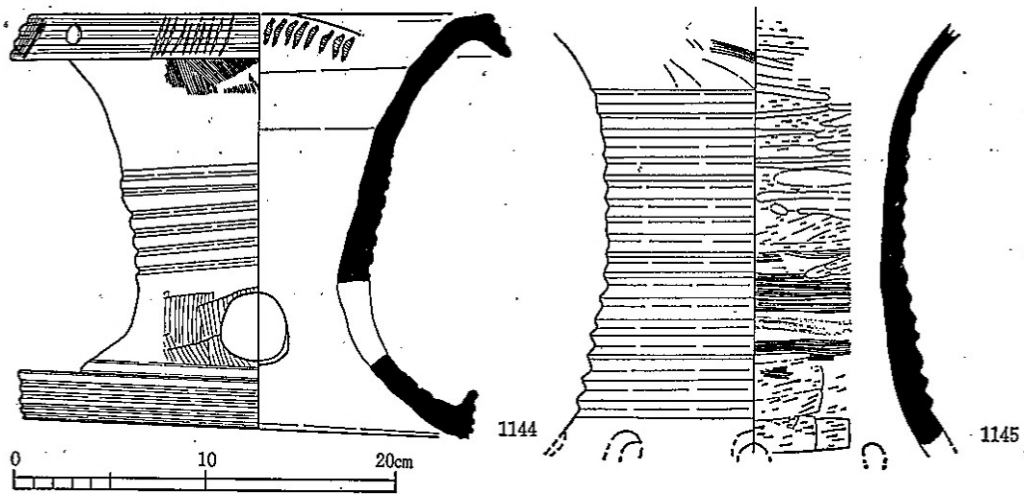
台付鉢台部(第207図1139)は白褐色を呈し、台部には多数の円孔を全面に穿っている。円孔は完全に穿孔しておらず台部内面に凸部となって残る部分もあり、穿孔後の調整はみられない。

甕(同1138)は、「く」の字形に外反した短かい口縁部の端部は立ち上がり、端面には3条の凹線紋が巡り肩部の張りが大きい。淡茶褐色を呈し、煤が付着している。

脚付無頸壺C(同1140)は無頸壺Cと器台が結合された形態の装飾性の豊かな丁寧な仕上げら



第207图：大溝（溝201）下位（1134・1136・1137）、上位（1135・1138~1143）出土土器



第208図 大溝（溝201）上位出土土器

れた土器である。体部下半には、刺突による多数の孔がある。淡褐色を呈し、搬入された土器である。脚部には煤が付着している部分もある。類例は兵庫県伯母野山遺跡⁽¹⁾、和歌山県太田黒田遺跡⁽²⁾、瓜生堂遺跡⁽³⁾などで出土しているが、このように均整のとれた、体部下半に刺突紋のあるものは類例がない。

水差（同1141）は淡褐色を呈す。表面の剥落が著しい。器台（同1143）は大型で茶褐色を呈し、胎土に金雲母や角閃石微砂粒を含む。河内の胎土であろう。

溝201の土器では、他地域の胎土の比率が多くなる。下層と上層では形式差がみられ、上層では凹線紋の土器の割合が大きくなる。

B 方形周溝墓 大溝（溝201）以北から6基、以南から3基、合計9基の方形周溝墓と壺棺墓1基を検出したが、全容を知ることができた周溝墓は少ない。本地区の方形周溝墓の方向は、並存していた大溝が走る方向と強く関連しているため、トレンチ方向に対してすべて斜向している。このような大溝と第15号～第23号方形周溝墓の方向性の相関関係は、弥生時代中期包含層上面の状態からある程度推測されたものの周溝の配置で判別できたのは、第15号、19号、21号墓の3基にすぎず、他は墳丘が不明瞭であり、コンター図（付図20）に依拠した所が多い。一方、第23号方形周溝墓は、大溝を掘削した土砂が、溝の南側へ堤状に盛り上げられた個所から調査中に木棺が出土したことによって確認されたが、コンター図にも東側に墳丘が延びている様子が現われている。また同図によれば壺棺墓も、溝の堤上の部分をマウンド的に利用した方形周溝墓であった可能性が考えられるが、土層断面からマウンドを確認することはできなかった。

本地区の方形周溝墓で、第15号、16号、17号の3基、第18号、19号、20号の3基が、相互に周溝またはマウンドを接しているのが認められたが、他の方形周溝墓相互の間には、幅2m内外の空白地が認められる。

〈第15号方形周溝墓〉 本墓は、南西側に長さ約6.2m、幅約1.1m、深さ約0.6mの周溝をもち、高さ0.4mの盛土を施した墓である。北西の周溝は、幅約1.2m、深さ約0.1mと浅く掘り込んでいるのが認められ、周溝中に2点の供献土器が転倒していた。南コーナーは、第17号方形周溝墓の北西コーナーと接し、南西周溝は、第16号方形周溝墓の北東周溝と接している。

盛土は、下層の遺構の上に周溝の掘削土砂等を薄く水平に積み重ねて高く盛り上げ、盛土層の中間部には青灰色粘土層が厚さ5cm~10cm位敷きならされていた。この土層の上下に、下層の遺物包含層や灰白色粗砂層を、墓の中央から四方へほぼ水平に積み上げ、最後にマウンド表面を被覆するために、粘土と砂のまじった土を用いて盛土を終えている(第210図)。

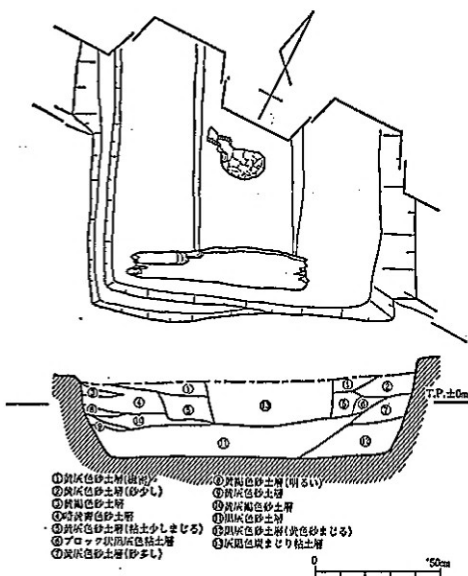
第1主体部は、鋼矢板で切断された木棺墓である(第209図)。木棺は幅約0.9m、長さ約0.8m以上、深さ約0.5m、長軸が南西から北東の方向を指す掘方の中に、幅70cm、高さ40cm、厚さ

8cmの小口板が残存していた。側板、底板は、痕跡を残すのみであったが、木棺の幅は内法約55cm、深さ約30cm以上と推定される。主体部の掘方とマウンドの盛土の前後関係は、先に盛土しその後主体部を掘り込み埋葬している。

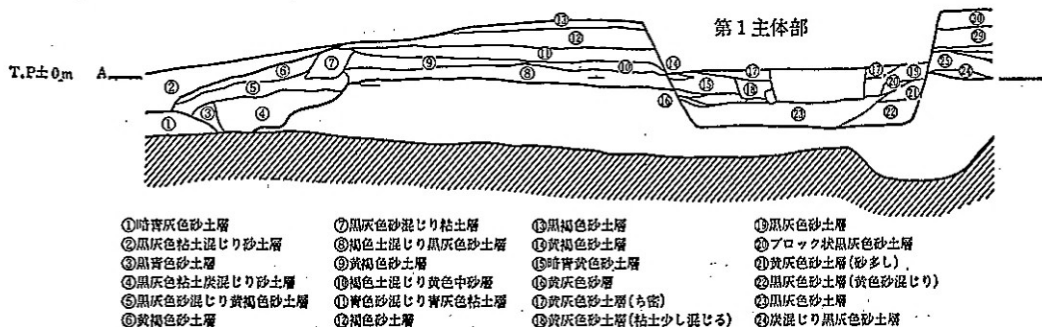
木棺に埋葬された遺体は、頭部は南西に向き、下顎骨は、相当動いていたが、歯や頭蓋骨の保存状態は良好であった。人骨の鑑定結果は付章Ⅳのとおりで推定年齢30才台の男性とみられる。

なお、南西周溝の北端部から長さ約1.5m、幅約1.1m、深さ約0.1mの長方形プランの主体部とみられる土壌1基(第2主体部)を検出している。

北西周溝より検出された2点の供献土器は、広口壺である。口縁部が欠損しているが、広口壺Aと考



第209図 第15号方形周溝墓第1主体部



- | | | | |
|-----------------|----------------|-------------------|------------------|
| ① 暗青灰色砂土層 | ⑦ 黒灰色砂混じり粘土層 | ⑬ 黒褐色砂土層 | ⑲ 黒灰色砂土層 |
| ② 黒灰色粘土混じり砂土層 | ⑧ 褐色土混じり黒灰色砂土層 | ⑭ 黄褐色砂土層 | ⑳ ブロック状黒灰色砂土層 |
| ③ 黒青色砂土層 | ⑨ 黄褐色砂土層 | ⑮ 暗青灰色砂土層 | ㉑ 黄灰色砂土層(砂多し) |
| ④ 黒灰色粘土炭混じり砂土層 | ⑩ 褐色土混じり黄色中砂層 | ⑯ 黄灰色砂土層 | ㉒ 黒灰色砂土層(黄色砂混じり) |
| ⑤ 黒灰色砂混じり黄褐色砂土層 | ⑪ 青色砂混じり青灰色粘土層 | ⑰ 黄灰色砂土層(ち密) | ㉓ 黒灰色砂土層 |
| ⑥ 黄褐色砂土層 | ⑫ 褐色砂土層 | ⑱ 黄灰色砂土層(粘土少し混じる) | ㉔ 炭混じり黒灰色砂土層 |

第210図 第15号方形周溝墓

えられる（第211図1146）。生駒西麓の胎土である。（同1148）の広口壺Aは、茶褐色の河内の胎土であり、口頸部の上半に叩き目がみられる。

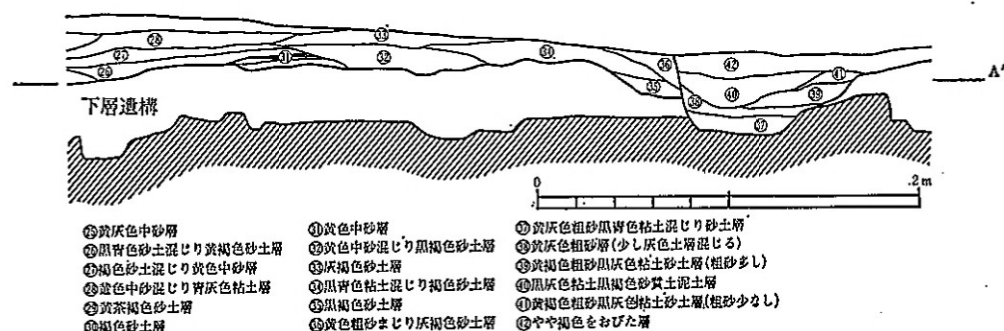
〈第16号方形周溝墓〉 四方に周溝がめぐり、北西と南西の周溝は、長さ約3.5m～4.5m、幅約0.7m～0.9m、深さ約0.2mに掘り込み、北東と南東の周溝は隣接する墓の周溝と切り合うが、本墓の周溝の方が後に掘られている。主体部は墓のほぼ中央に盛土の上から掘り込まれており、長辺約1.5m、短辺約0.7m、深さ約0.15mの土壙である。盛土は、ほとんど認められず、中央が若干盛りあがる程度で約5cm～10cmにすぎない。マウンド、周溝内から供献土器は認められなかった。出土土器は盛土内と主体部の埋土中に混入していたものである。

〈第17号方形周溝墓〉 本墓は、溝201の北西肩部から第15号墓までの約5m余の空間に、約0.3mの盛土を施してつくられた低平なマウンドの方形周溝墓である。検出した北西周溝は、幅約2.0m、深さ約0.1m、長さ約6.0mを測る。主体部や供献土器等は検出されなかった。

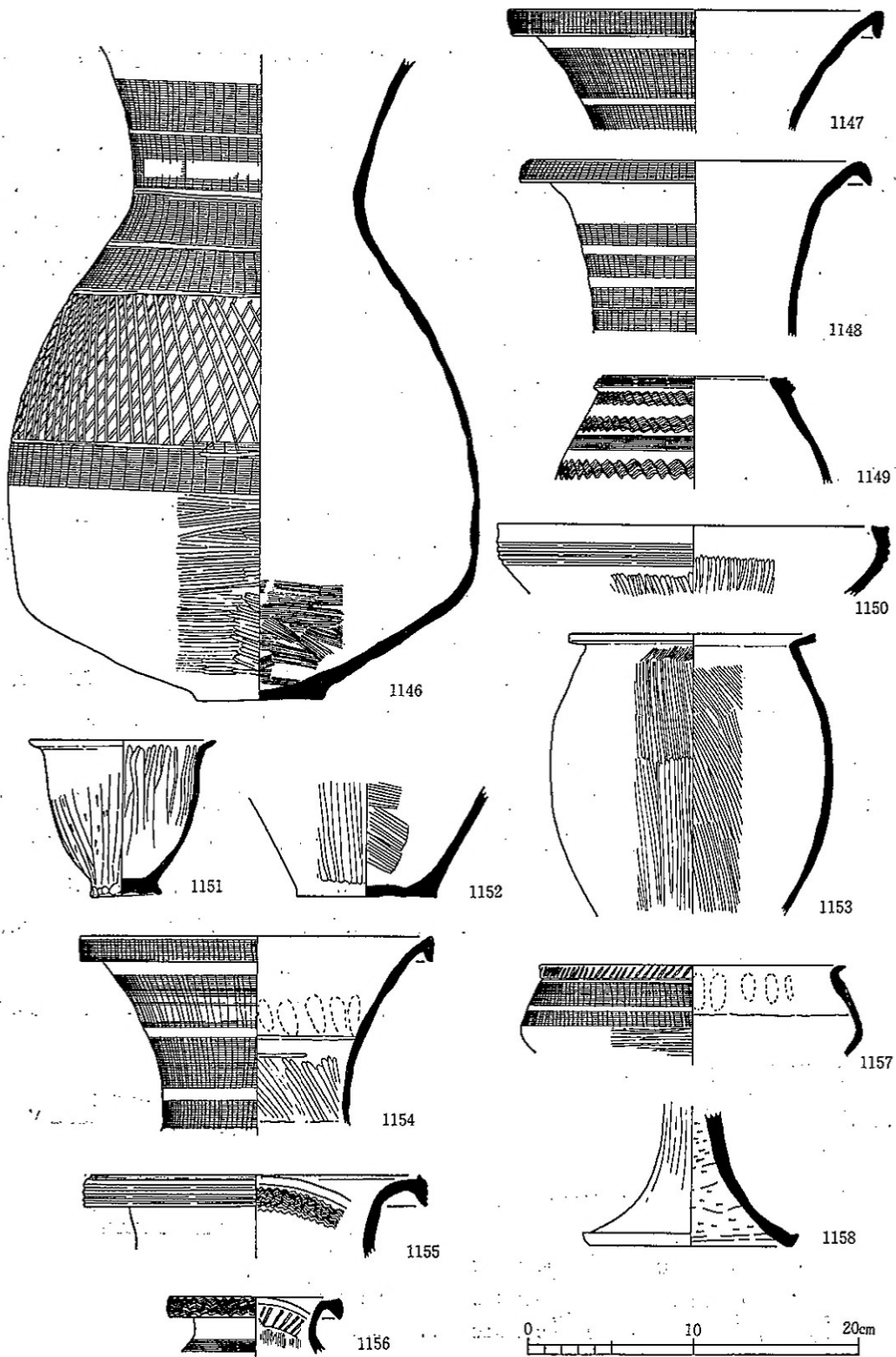
〈第18号方形周溝墓〉 本墓は周溝の一部を確認した。長さ約5.0m、幅約1.0m以上、深さ約0.4mで、第15号墓の南西周溝と同様に深く掘り込まれている。溝内の灰白色砂層や黒色灰混り土層等の埋土中から少量の土器が出土したが、いずれも破片である。

〈第19号方形周溝墓〉 第18号墓と第20号墓の間にある。調査部分は、北東周溝、南東周溝、マウンドの東側コーナーの一部とそれに続く陸橋部である。両周溝は幅約2m、深さ約0.2mで、長さは3m以上である。陸橋部は周溝の一部を掘り残して造り出したもので、マウンドから陸橋部へはなだらかなスロープ状となっている。

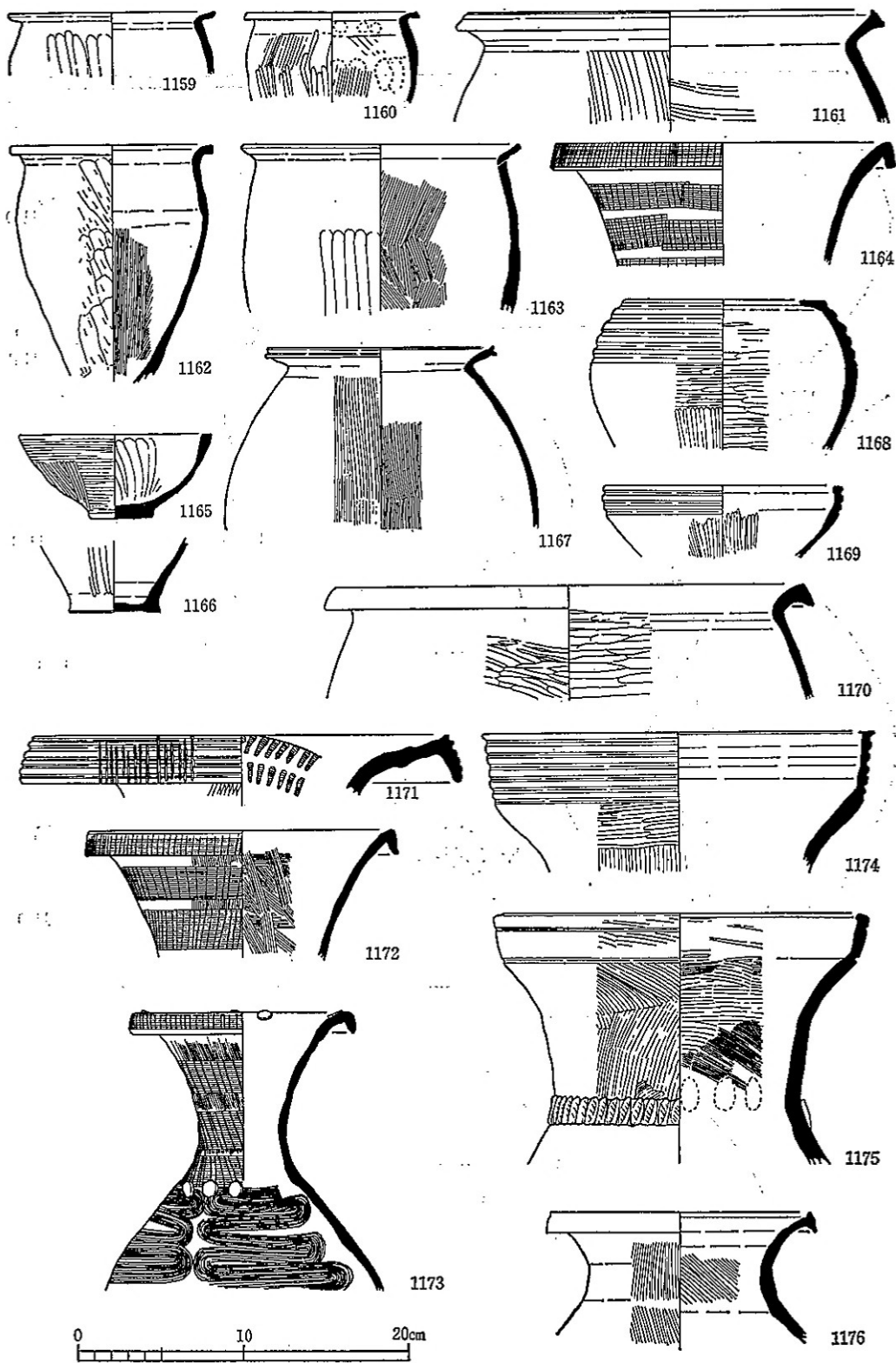
マウンドの盛土は、第15号墓と同様に下層遺構の土壙の上に土砂を水平に薄く積み上げ、約0.4mの高まりを示す。主体部と考えられる土壙は本墓のマウンド裾部から周溝内にかけて4基認められたが、出土遺物は少ない。第1主体部は、長さ約1.3m、幅約0.7m、深さ約0.3mの長方形のプランである。第2主体部は、長さ約0.8m、幅約0.5m、深さ約0.2mの卵形のプランで、舟底状の断面になっている。第3主体部は、長さ約1.8m、幅約1.3m、深さ約0.4mの長方形のプランである。第4主体部は、第3主体部によって西半部を切りとられ、長さ約0.5m、幅約0.7



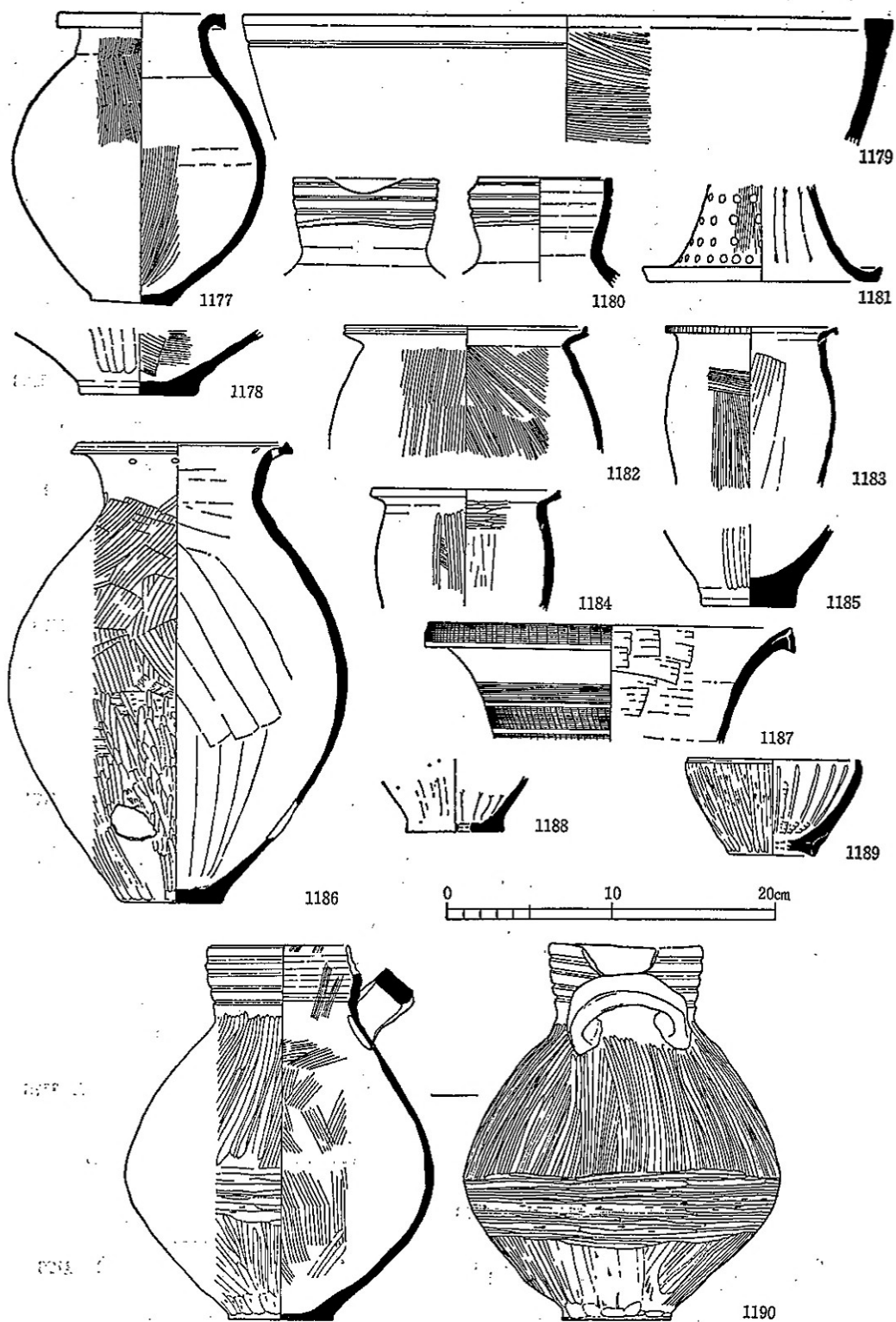
土層断面図



第211图 第15号方形周溝墓(1146~1153)、第16号方形周溝墓(1154~1158)出土土器



第212图 第16号墓(1159~1161)、第17号墓(1162·1163)、第18号墓(1164~1170)、第19号墓(1171~1176)出土土器



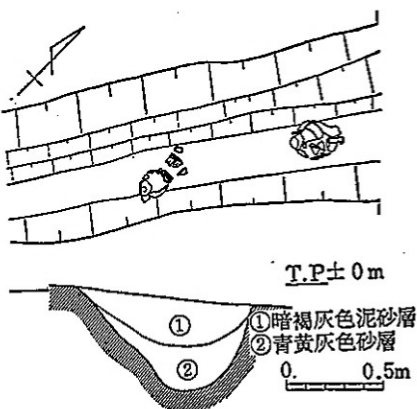
第213图 第19号墓(1177~1185)、第20号墓(1186~1190、1186·1190供献土器)出土土器



第214図 第20号方形周溝墓土層断面図

m、深さ約 0.2mの長方形のプランが残っているだけである。

〈第20号方形周溝墓〉 トレンチ部および拡張部の結果を総合すると、長辺約12m、短辺約 6.5mで長方形のマウンドを持つものと推定される。0.2m~0.3m程度の盛土がなされており(第214図)、南西辺には、幅約 1m、深さ約 0.4mの周溝を伴う。南東辺は、大溝の肩部上にマウンド盛土がなされており、大溝掘削後に営まれ、一時期共存していたことがわかる。



第215図 第20号方形周溝墓 供献土器出土状況

南西周溝内から、供献土器と思われる穿孔のある壺、および水差形土器各1点が出土した(第213図)。穿孔

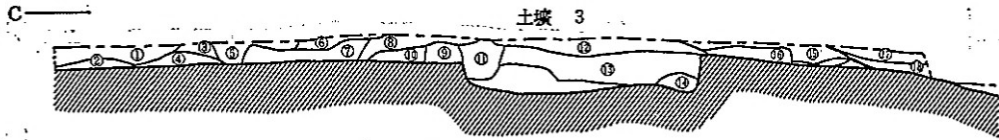
のある広口壺C(同1186)は、体部が長い形態で、口縁部に2孔一対の3組の穿孔がある。体部中央の接合部分に、叩き目成形の痕跡が残っている。この部分にのみ成形の際に叩きが施されたと考えられる。体部下半部には打ち欠きによる穿孔があり、明らかに供献土器といえる。外面には煤の付着がみられる。白褐色を呈し、生駒西麓以外の地域の胎土である。水差(同1190)は、口頸部に4条の凹線が巡る。広口壺Cと同じく白褐色を呈し、胎土も同じである。甌(同1188)は、両面から錐により回転穿孔されている。

またマウンド上で、2箇所土壌を検出したが、主体部と断定するには至らなかった。

〈第21号方形周溝墓〉 本墓は、D地区南端に位置し、大半が調査区域に含まれる。長辺14.3m、短辺12mのほぼ長方形を呈する方形周溝墓である。四辺共に周溝によって区画され、それによって囲まれたマウンド上および周溝内に後に述べるように多数の埋葬施設が存在する。特筆すべき事として、第21号墓の築造当時の形は一辺約12mのほぼ正方形を示していたが、東北辺部に約3mの拡張が行なわれた結果、現状の規模になったものと考えられる。

周溝を除いたマウンドは、長辺(東北-西南方向)約12m(拡張前約9m)、短辺約7.5mを測り墳頂部で約0.2m、墳端部で約0.15mの盛土が見られ、調査時にはわずかな高まりが認められた程度であった。

第21号墓の東北部分には、築造当初には、長さ約7.3m、幅約1.4m、深さ約0.4mの、U字溝である旧東北側周溝により限られ、第1号土壙(径約2.5m、深さ約0.4m)、第2号土壙(径約2.8



- | | | |
|-----------------|-----------------|-----------|
| ①暗黄茶褐色砂土層(やや粗い) | ⑧⑤と同質でやや暗い | ⑮黒色砂質土層 |
| ②暗茶褐色砂土層 | ⑨暗茶褐色砂土層(④より暗い) | ⑯淡黄茶褐色砂土層 |
| ③暗茶灰色砂土層 | ⑩同上やや明るい | ⑰暗茶黒色砂土層 |
| ④暗茶灰色砂土層 | ⑪暗黄褐色砂土層 | ⑱同上やや暗い |
| ⑤暗褐色砂土層 | ⑫灰黄黒色細砂土層 | ⑲黒茶褐色砂土層 |
| ⑥⑤と同質でやや明るい | ⑬灰青黒色細砂土層 | ⑳淡青灰色砂土層 |
| ⑦暗黄褐色砂土層 | ⑭同上やや暗い | ㉑淡黄灰色砂土層 |

第216図 第21号方形周溝墓

m、深さ約0.6m)のほぼ円形をなす2基の土壙が、それぞれ西北周溝と東南周溝の終りとなり、同東北周溝と2基の土壙との間は2個所の陸橋部となっていたと考えられる。また、平面実測図(付図19・Ⅱ)に見られる旧周溝南端と2号土壙の間の新周溝に向かって落ちる段状の部分は、当初の墳丘コーナー肩部の名残りであると考えられる。

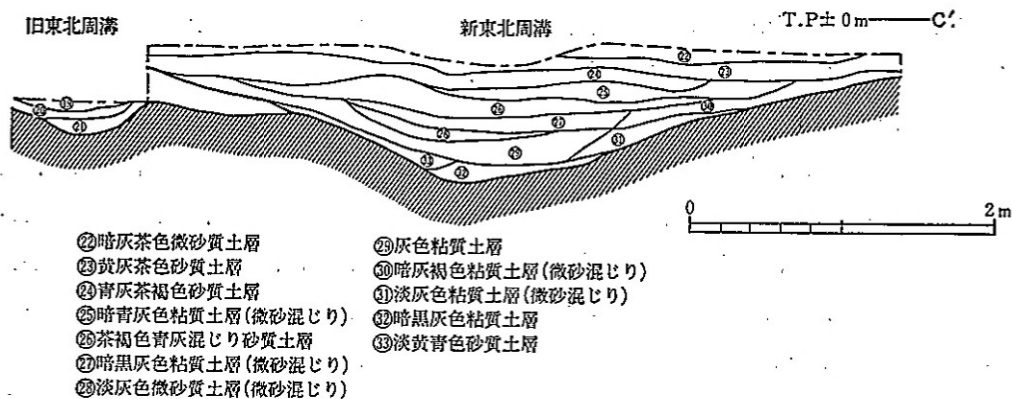
その後、墳丘を拡張するため、西北—東南方向の第1号溝(幅約2.5m、深さ約0.4m)を掘削して、これを新たな東北周溝とし、また東南周溝も東北の方向に延長して、墳丘を幅約2.5mにわたり拡大した結果となっている。第1号溝は、周溝をそのまま延長した特異な形となっているが、墳丘の北コーナー横で、溝の東肩部に屈曲する個所が見られ、周溝部と延長部との間に、掘削時期の差があるようにも思われる。また東側コーナー部の周溝外側は調査区外で不明だが、第1号溝が、東南周溝と分岐して、更に東南に向かって延びている可能性も考えられる。拡張とはほぼ同時に、旧周溝は埋められたものと思われる。

第216図の土層断面図には、旧周溝から立ち上がる当初の墳丘斜面や、新周溝の掘削の状態を観察することができる。拡張後の、旧周溝上にあたる位置には、後述のように供献土器と考えられる壺(第222図1195)が出土し、その破片が新周溝下層にも見出されていることも、以上の考察と矛盾しない。

ここで、この拡張が何の目的でなされたのかが、問題となる。ここではこの第21号墓の主体部が、次に述べるように、多数にのぼるため、墳丘が狭くなったという可能性を指適するに留めておく。拡張された部分には、第8主体部と呼ぶ土壙を検出している(B地区第8号墓参照)。

南東周溝は、幅約2.3m、深さ約0.6mを測り、東北、西南の両端は、調査区域外にある。この溝は、拡張時に土壙12を切って周溝を東北の方向に延ばしたものと思われる。

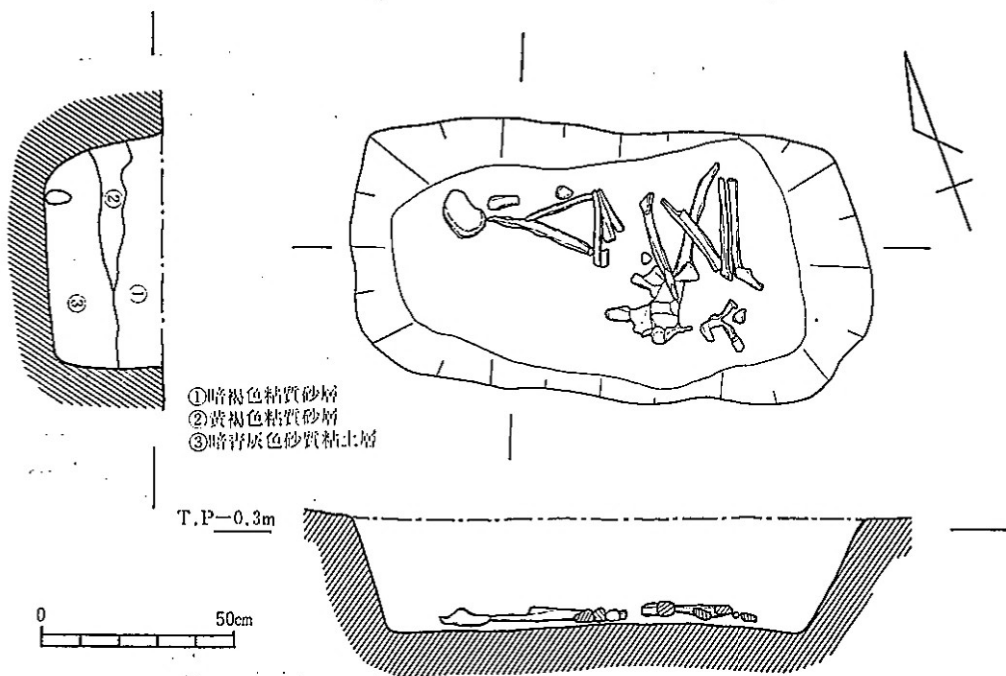
西側コーナー部も、陸橋部を形成している。西北周溝は、西は墳丘隅部で途切れ、東側は約9.5m延び、その先は土壙やピットと複雑に切合っている。溝内と肩部とに2基の土壙をもつ。陸橋部を挟んで西南周溝がある。周溝部から3基の土壙を検出した。



土層断面図

第21号墓に伴うと考えられる埋葬施設として、15基の土壙を検出した。ただ第3号土壙(幅約2.8m、深さ約0.3m)はマウンド内に存在するが、他の土壙と異なり円形を呈している事、埋土の状況等から、埋葬施設としては疑問が残るので、主体部としては扱わなかった。

第1主体部と第2主体部は切合って存在し、土層観察から後者が新しいことがわかる。木棺は第2主体部に使用されているが、第1主体部はその痕跡を認めることができなかった。第1主体部は長径約1.4m、短径約1.0m、深さ約0.24m、第2主体部は、長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約0.45mを測る。第3主体部は、主軸を南北方向に向け、南側の矢板に切られているため、全



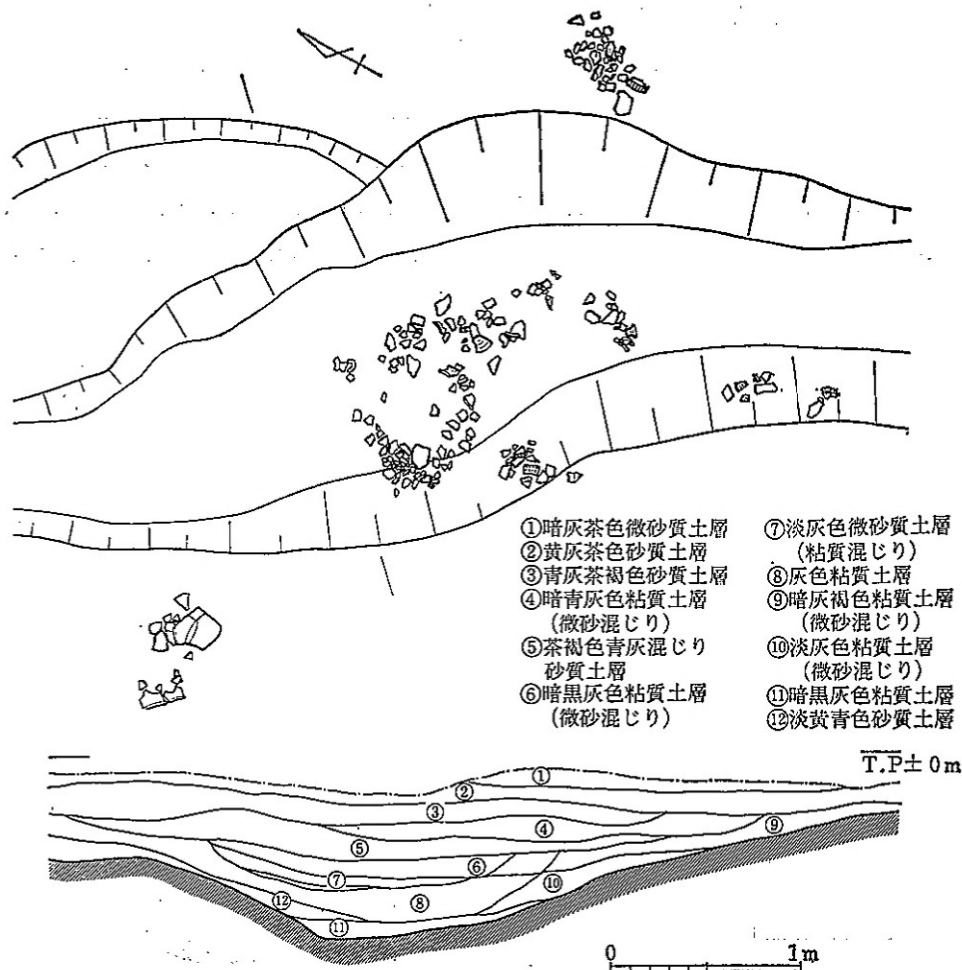
第217図 第21号方形周溝墓第4主体部 人骨出土状況

体を把握するには至らなかった。これは、幅約0.8m、深さ約0.3m、検出長1.2mを測る。

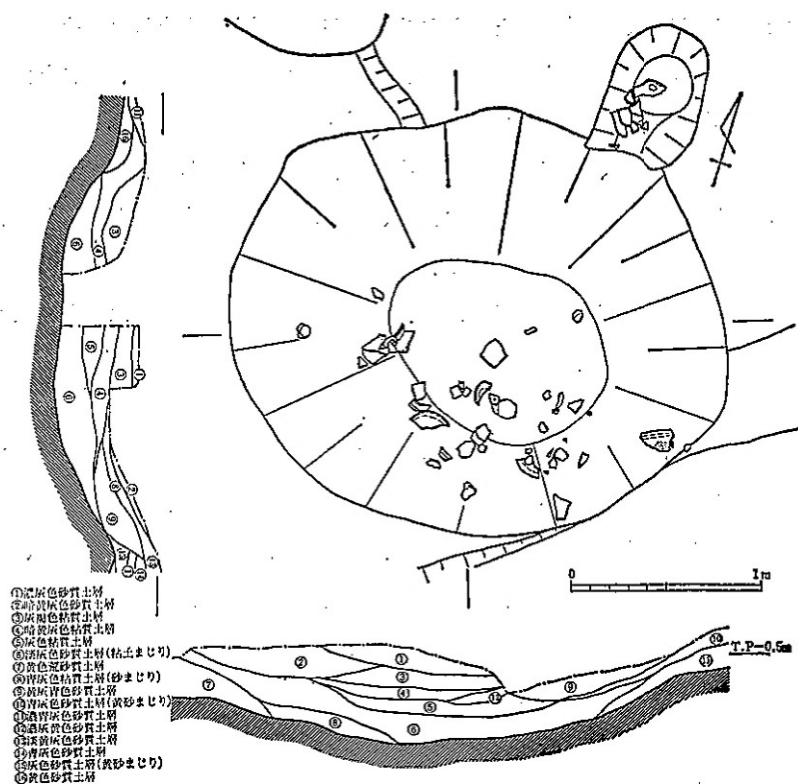
第4主体部（第217図）は、第21号墓の中で唯一、人骨が検出されたものである。これは第21号墓のほぼ中央に位置し、主軸を東西に向け、長さ約1.3m、幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。土層観察等の結果では、木棺などの内部施設は用いられなかったものと思われる。内部には、頭頂部を東に向け、右を上にした横向きで手と足を折り曲げた状態（屈葬）で、人骨を埋葬していた。また第4主体部は、第21号墓墳丘の中央部にあることを考えると、中心主体と思われるが、土壌が小さいこと、木棺等の内部施設がないことなど、中心主体と考えるには疑問の点も残る。人骨については付章Ⅳの鑑定結果を参照されたい。

第5主体部は、主軸をほぼ南北に向け、長径約0.7m、短径約0.52m、深さ約0.2mを測る。土層観察の結果、木棺などの内部施設は使用していないものと思われる。

第6主体部は、長さ約0.8m、幅約0.7m、深さ約0.3mである。



第218図 第21号方形周溝墓東北周溝 遺物出土状況



第219図 第21号方形周溝墓第1号土壙 土器出土状況

第7主体部は、主軸をほぼ東西に向け、長径約1.0m、短径約0.8m、深さ約0.3mを測る。土層観察から木棺を使用していたものと考えられる。

第8主体部は、主軸をほぼ南北に向ける隅丸長方形の土壙である。これは、長径約1.4m、短径約0.7m、深さ約0.46mを測る。

第9主体部は、東北周溝の東側にあり、第21号墓に伴う埋葬施設の中では唯一、周溝外にあり、長径約2.2m、短径約0.7m、深さ約0.25mを測り、平面形で隅丸長方形を呈す。土層観察から木棺は使用されていないものと思われる。

その他、西北・西南周溝内に、第10～14主体の5基の土壙が並ぶ。いずれも直接、埋葬施設であることを示す根拠は得られなかったが、それぞれ主体部の1つと考えたい。

土器の出土状態は東北・西南周溝、および第1号土壙上面の暗灰色粘質砂土層から、多量の土器が土器溜り状を呈して出土した(第218、219図)。器種もバラエティーに富むが、完形品となるものはほとんどない。これから推測するなら、周溝及び土壙がほとんど埋まった状態で、土器が放棄、または供献されたと思われる。またこれらの土器の内、甕のほとんどは外面に煤の付着が認められること、ほとんどの土器が堆積土層の上位層に存在すること、完形品が少ないことなど、積極的にこれらを供献土器とすることには疑問が残る点もある。

また、マウンド上面から、供献土器と思われる土器が2箇所より出土した。その1つは、拡張前の旧東北周溝が埋まった後の埋土上で供献された壺（第222図1195）で、これと同一個体の破片が新東北周溝の下層からも検出されているので、新・旧の周溝の先後関係を明らかにできる資料となっている。他の1つは、第21号墓東南辺中央部付近より出土した、鉢と甕のセットである（第221図）。これは当初甕棺墓かと思われたが、明瞭な掘方が検出されなかった点、東南周溝下層より同一個体が出土したことなどにより、一応第21号墓に伴う供献土器とした。ただ甕が大きいこと、また甕と鉢のセットであることから、甕棺墓の可能性も捨てがたいと考える。

第21号墓出土遺物については、次のとおりである。

マウンド上の旧東北周溝上面より供献土器として、広口壺A（第222図1195）が検出された。またマウンド南東辺部・南東周溝にかけて供献土器と考えられる鉢C（第221図1191）と大型甕（同1192）のセットが検出されている。広口壺Aは、淡茶褐色を呈し、生駒西麓の胎土である。大型鉢Cは大型甕とともに淡褐色～白褐色を呈し、金雲母とか白色微砂粒が含まれ、顕微鏡で拡大すると角閃石の粒子が含まれており、河内地方の胎土であると思われる。

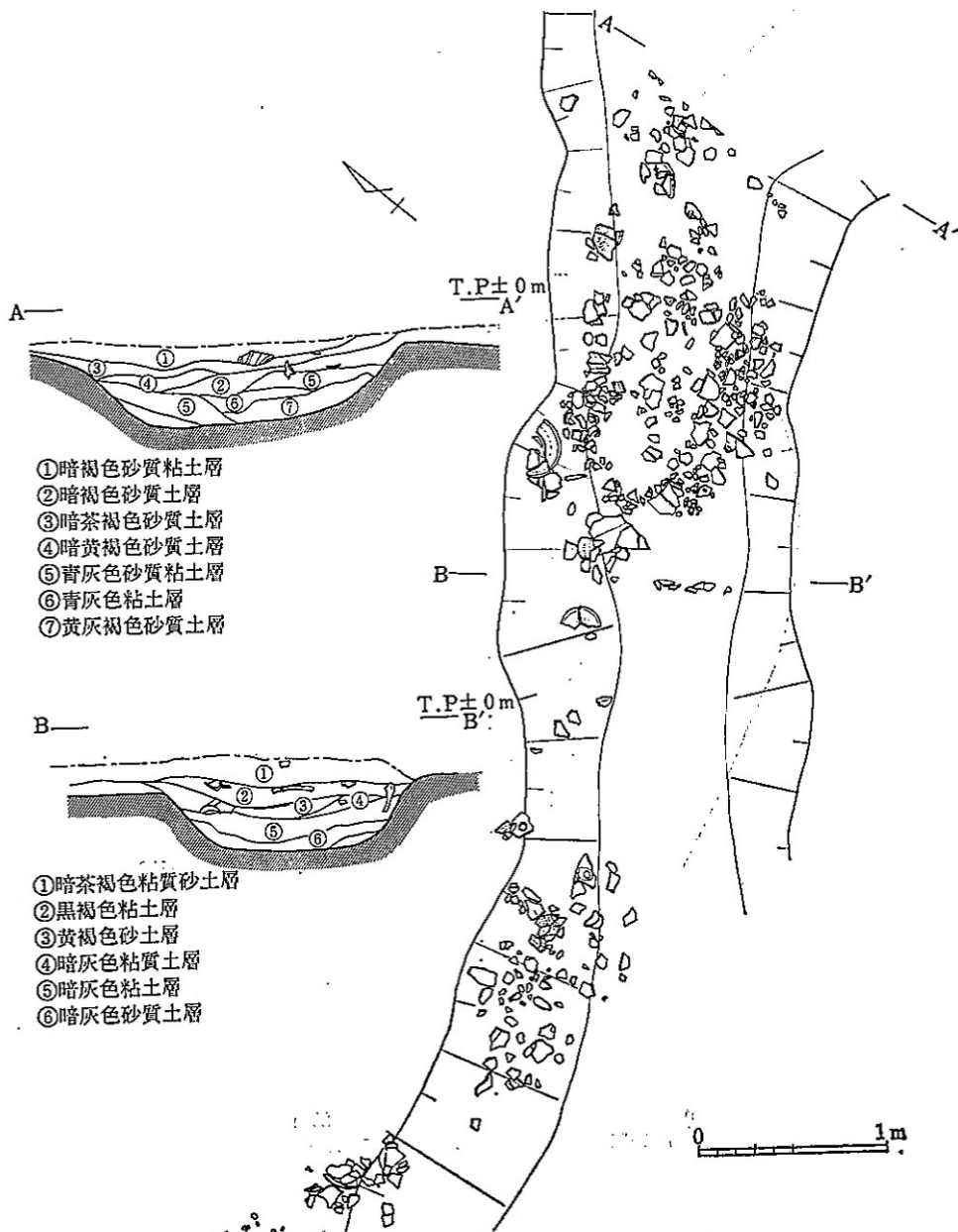
新東北周溝から出土した広口壺A（第222図1194）、広口壺B（同1193・1196、第223図1212、第225図1230）、鉢A（第222図1200）、鉢C（同1201、第223図1213）、高杯A（第225図1233）、甕（第222図1199・1204・1205、第223図1211、第226図1247）などの14点が生駒西麓の胎土であり、広口壺A（第222図1197）、高杯脚部（同1198）、口縁部に4条の凹線紋の巡る台付鉢A（第225図1232）、底部に1条の凹線の巡る器台（同1231）、甕（第222図1203）、蓋（同1202）の6点は白褐色、淡茶褐色を呈する他地域の胎土である。広口壺B（同1196）には口縁端面の簾状紋の上に「川」のヘラ描きによる絵画紋がある。この他に高杯Bがあり、口縁部が特に長くのびて、円形浮紋3個1組3列単位で貼付されている。生駒西麓の胎土である。

新東北周溝につながる第1号溝から出土した土器のうち、1点は他地域の搬入品、他の4点は生駒西麓の胎土である（第223図）。広口壺A（同1206）は淡褐色を呈し、他地域の胎土で、外面に煤が付着している。図示した土器以外では、内外面朱塗りの台付鉢Aがある。黒茶褐色を呈し、生駒西麓の胎土である。口縁部に2段の櫛目列点紋が施され、その間にヘラミガキ1条があり、口縁端部に刻み目紋の巡るものである。

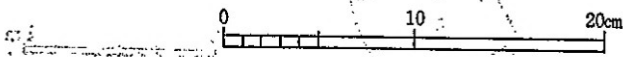
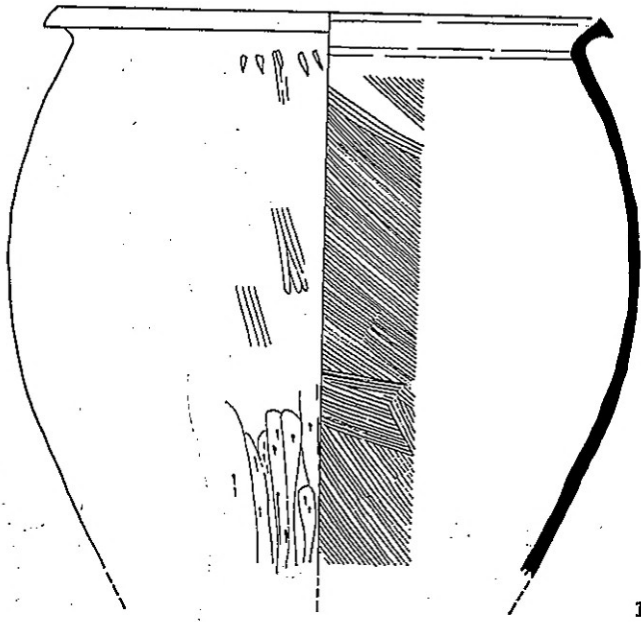
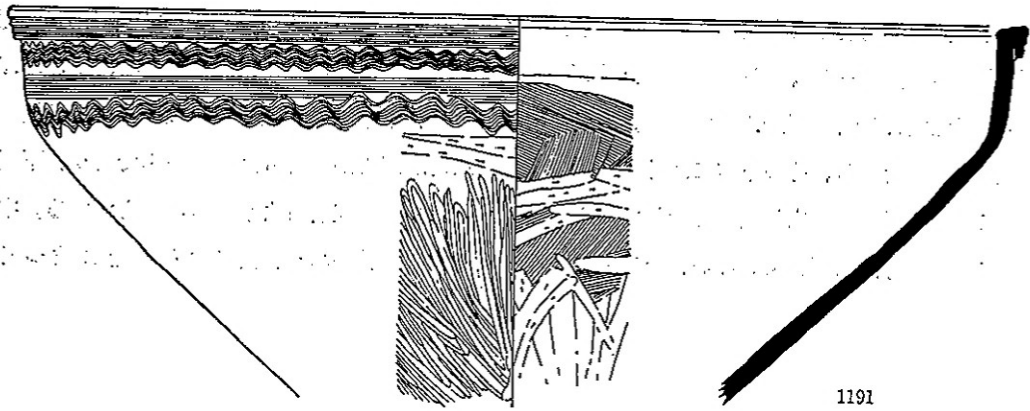
東北周溝東端部の第1号土壙出土の土器（第224図）の中で、1214～1217・1219・1222～1226・1228・1229の12点は生駒西麓の胎土であり、1218・1221・1220・1227の4点は白褐色、暗茶褐色を呈する他地域の胎土である。この他に、白褐色を呈する叩き目をもつ破片も検出されている。1215・1216の広口壺Bは、形態だけをみると北摂の広口壺Bと考えられるが、暗茶褐色を呈し、生駒西麓の胎土を使用している。

第21号墓の東北周溝はそのまま北流する第1号溝とつながり、第1号土壙ともつながっているが、遺物から見ても様式的にも違いはないと考えられる。

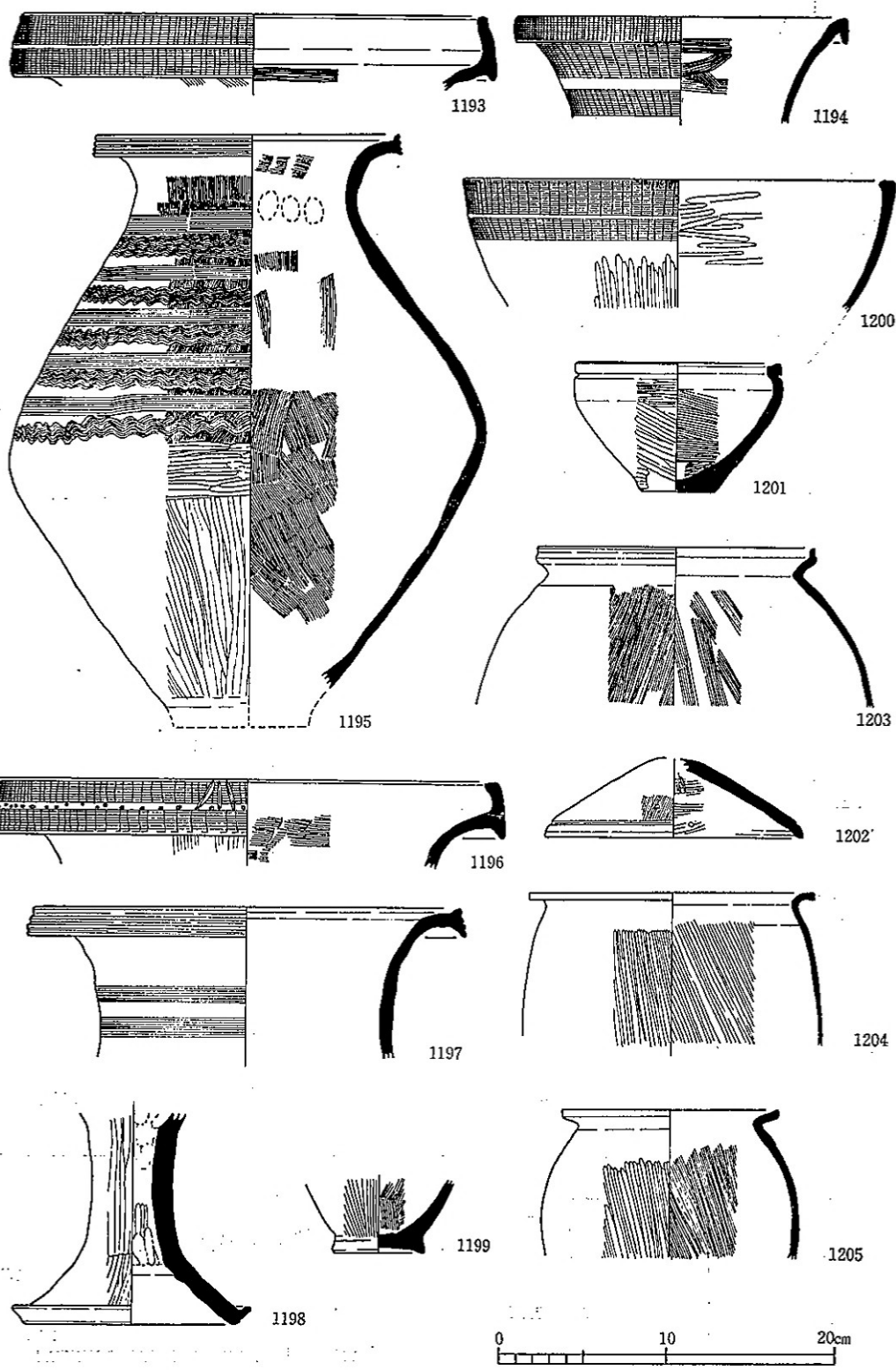
その他の遺物として東北周溝より鞘状木製品（第238図W-43）、第1号土壙より「あかかき」状木製品（同W-44）、旧東北周溝より鋤先（同W-51）が検出された。鞘状木製品は、長さ21.7cm、復元幅3.4cm、厚さ0.8cmである。中央に横溝があり、下半部には鋭く細いもので斜格子状の幾何学模様を施し、その下方にはくさび状の小さな三角形がむかいあった形に刻んであり、下端部には三角形の浮き出し模様を施している。裏面は両刃の剣が収まるような形に凹んでいる。中央部分で縦方向に割れているが、上方中央の割れ口断面に穿孔があり、同様のものを2枚つく



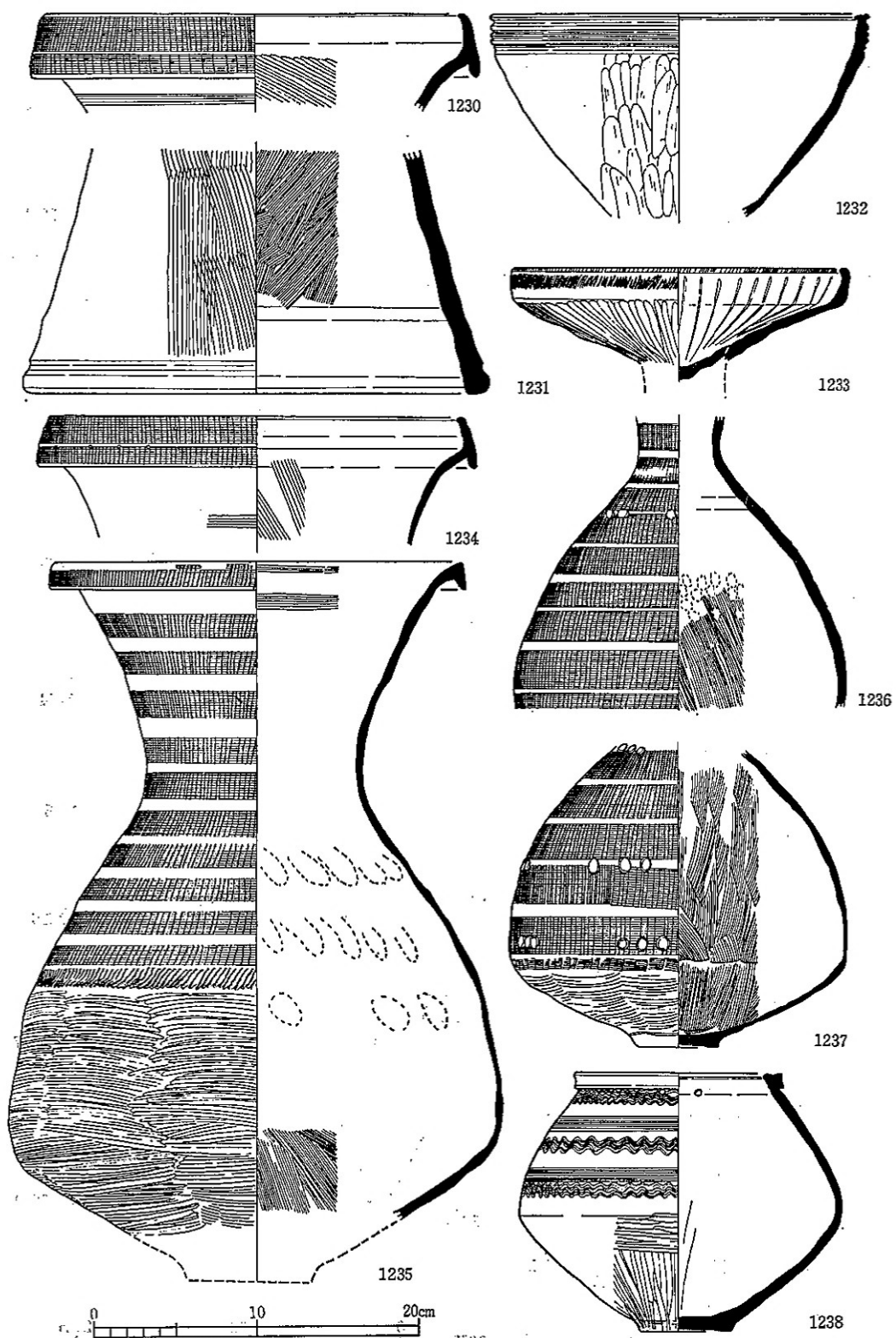
第220図 第22号方形周溝墓西南周溝 遺物出土状況



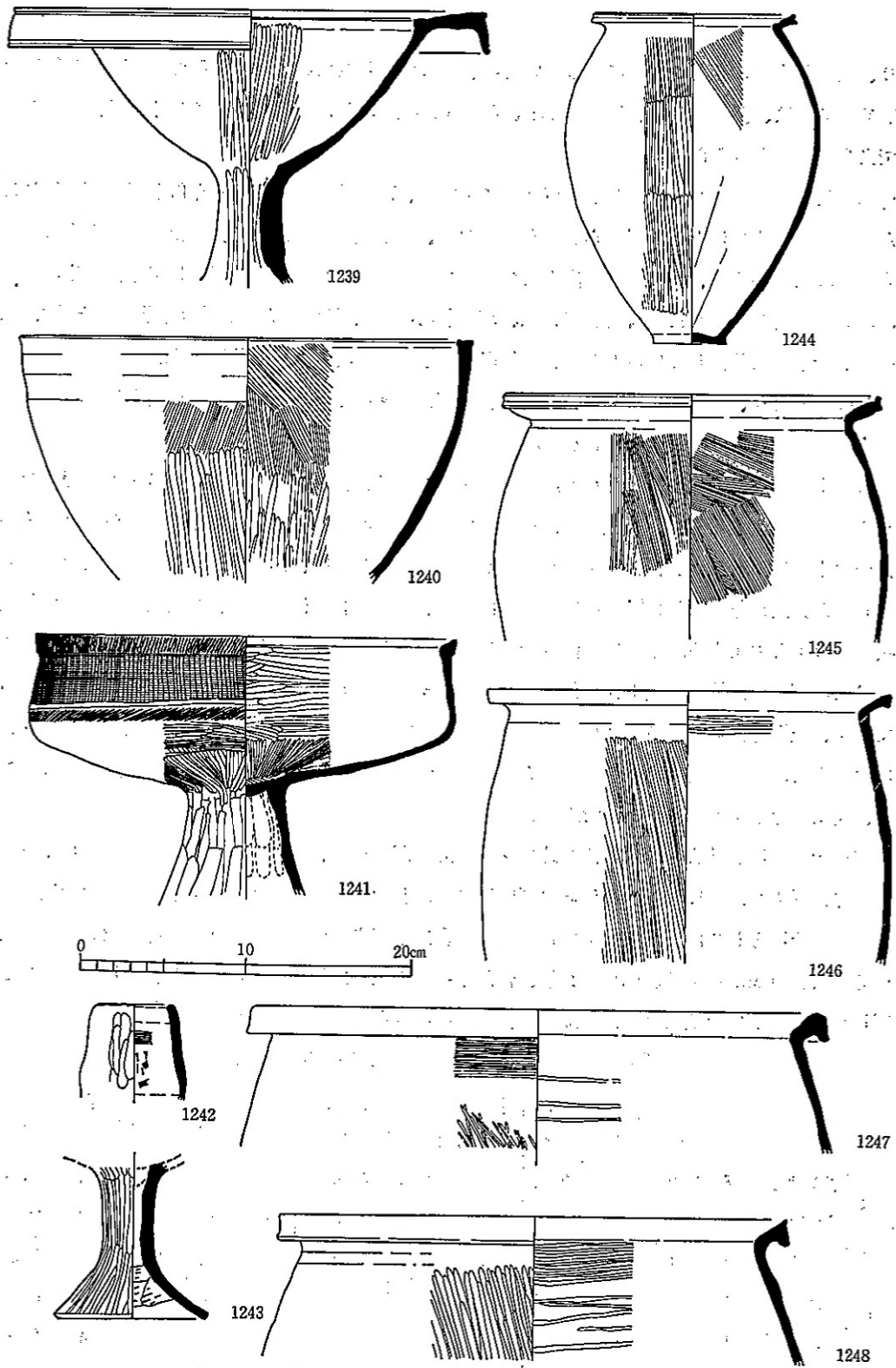
第221图：第21号方形周溝墓填丘上供献土器



第222图 第21号方形周溝墓填丘上供献土器(1195)、土壙5(1193)、東北周溝(1194·1196~1205)出土土器



第225图 第21号方形周溝墓東南周溝 (1230~1233)、第22号方形周溝墓周溝中層 (1238) 上層 (1234~1237) 出土土器



第226图 第21号墓東北周溝 (1247)、第22号墓周溝中層 (1244・1246)・上層 (1239~1243・1248) 出土土器

り、上端部中央の孔と、真中にある浅い溝を利用してあわせていると考えられる。裏面の剣身を収める凹面は、長さ約19cm、復元幅3cm、厚さ0.5cmになり、金属製の剣でなく、磨製石剣の鞘である可能性も考えられる。

〈第22号方形周溝墓〉 東拡張部の東北隅において、西南周溝の一部と考えられる溝を検出した。墳丘の盛土はほとんど認められなかったため、方形周溝墓ではなく、単独の溝である可能性も残されてはいるが、溝内遺物の出土状況（第220図）等から方形周溝墓として報告する。周溝は調査地区内の延長約7.5m、幅約1.5m、深さ約0.4mで、第21号方形周溝墓東北周溝と約3.5mの間隔で平行に位置していることも、D地区の方形周溝墓群の配置と共通する。

この周溝より、各種の土器・磨製石剣・石庖丁破片・砥石等の大量の遺物が出土した。

土器の器種構成は第16表のとおりである。

壺形土器では、簾状紋で飾られる広口壺A・Bが多く、他に細頸壺・無頸壺C・水差把手などがある。暗茶褐色を呈し、肉眼で角閃石の砂粒が認められる生駒西麓の胎土のものが多い。その他の胎土の広口壺Aは、白褐色を呈し口縁端部に3条の凹線紋、口縁上面に櫛描列点紋を施紋するものと、茶褐色を呈し口縁端部に3条の凹線紋、頸部～体部にかけて、6段以上の直線紋と波状紋を施すものである。中層にも同様な広口壺Aがある。茶褐色を呈し、頸部～体部にかけて4本単位の幅狭い直線紋8段＋同単位の波状紋3段＋直線紋5段＋櫛描列点紋が施される。外反してのび、上下方向に拡張された口縁端面には3条の凹線紋の上に、7～8本の篋描縦線があり、口縁部上面には櫛描列点紋のある壺である。その他の胎土の広口壺Bは、頸部に圧痕紋凸帯をもち、淡褐色を呈する北撰の土器である。

鉢形土器では、鉢A・台付鉢Aと鉢C・台付鉢Cがみられ、鉢B・台付鉢Bはみられなかった。鉢A（第226図1240）、台付鉢C（同1241）などは生駒西麓の胎土である。その他の胎土をもつ鉢形土器としては、淡褐色を呈し口縁部～台部下端まで内彎して終り、台部に円孔の入る台付鉢Aで、口縁部に1条、体部に2条、台部下端に1条の凹線紋の入るものと、茶褐色を呈し肥厚した口縁端部に施紋はなく、体部に簾状紋と櫛描列点紋を配する鉢Cなどである。

第16表 第22号方形周溝墓周溝出土土器器種構成表

		広口壺			細頸壺	無頸壺			水差	鉢			台付鉢		高杯	壺	蓋	その他	合計	比率		
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C							
上層	生駒西麓	8	7	0	3	0	0	2	2	3	0	0	0	0	1	1	0	19	2	1	49	68%
	他地域	3	1	1	0	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	2	11	1	0	23	32%
	計	11	8	1	3	0	0	3	2	3	0	2	1	0	1	1	2	30	3	1	72	100%
中層	生駒西麓	1						0	0									1	4		6	60%
	他地域	1						1	1									0	1		4	40%
	計	2						1	1									1	5		10	100%

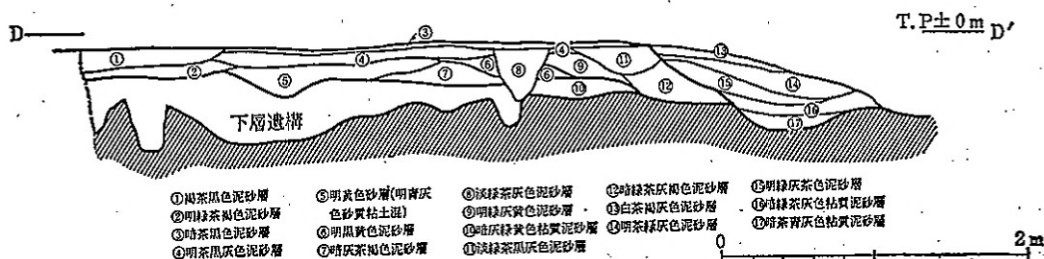
高杯形土器は、高杯A・Bともあり、高杯B（同1239）は茶褐色を呈し、屈折してのびる口縁端部には凹線状の強いヨコナデ調整が施される。白色微砂粒、金雲母が含まれる。しかし肉眼では見えないが、拡大すると角閃石の粒子が認められる生駒西麓以外の河内の胎土である。

甕形土器は数量的に最も多い。その中で、暗茶褐色を呈する生駒西麓の胎土の甕で、口頸部が「く」の字形に屈曲し口縁端部が立ち上がらず丸味をもつか、あるいはわずかに立ち上がるもので、体部外面に縦方向のヘラミガキ調整が施されるもの（9点）と、ヘラミガキ調整は施されず刷毛目調整やヨコナデ調整のもの（4点）とがみられた。この生駒西麓の胎土以外の甕では、口縁端部が立ち上がり肩部外面、体部内面に刷毛目調整の施された甕が9点ある。この甕は暗茶褐色を呈すが、胎土には黒雲母や金雲母や多量の白色微砂粒が含まれるのが特徴であり、同1245はこの例である。中層出土の甕では同1244はその他の地域の胎土の甕の例であり、口縁端部の立ち上がりがしっかりしており端面は凹線状を示す。頸部内面に横方向のヘラミガキ調整はなく、体部内面はナデ調整でヘラミガキ調整は施されない例である。中層からは生駒西麓の胎土の甕は4点で、頸部内面に横方向のヘラミガキ調整の施されるものは2点で、その施されないものも2点である。煤の付着する甕は上層では19点、中層では5点全部である。

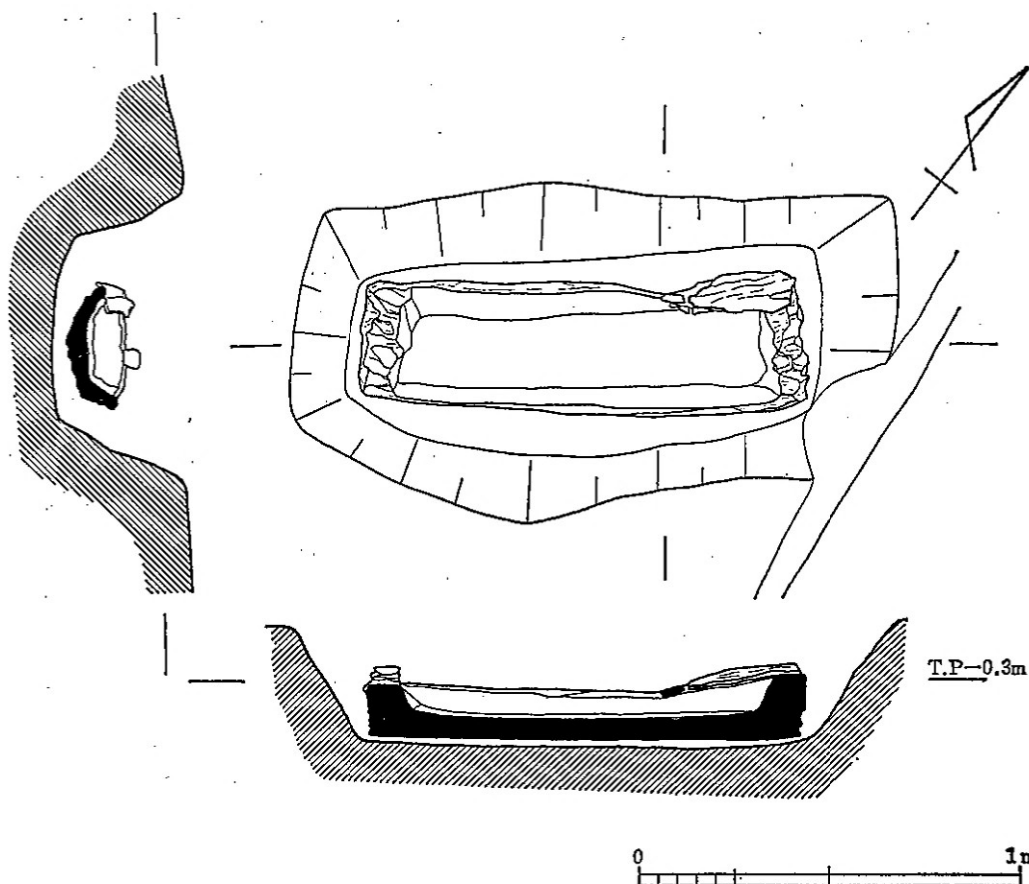
大型甕は2点出土しており、1点（第226図1248）は生駒西麓の胎土で、口頸部が短く屈曲し、端部が下方へ拡張しており、肩部外面には縦方向のヘラミガキ調整、頸部には横方向のヘラミガキ調整の施されたものであり、もう1点は白褐色を呈し、口頸部は同様に短く屈曲し、端部は上方へ立ち上がり、肩部内外面とも刷毛目調整の施される甕であり、ともに煤の付着は認められない。

第16表にみるように、生駒西麓の胎土のものが全体の約70%を占め、他地域の胎土は約30%である。この中に前述した他地域の胎土の中で、茶褐色を呈する広口壺Aや高杯Bや甕（第226図1244・1245）の胎土のように、肉眼では多量の白色微砂粒や金雲母、黒雲母などの細砂粒は認められるが、角閃石の砂粒は認められず、顕微鏡で拡大すると角閃石の微粒子と思われるものが認められる一群がある。生駒西麓の胎土とは角閃石の砂粒の大きさが全く異っており、肉眼では別の胎土のようにみえる。現在、産出地を断定することは難しいが、胎土の中に角閃石が含まれていることから、河内地方の中限定できるのではないかと考える。

なお、器種構成は、口縁部のみで整理したが、この他に底部が36点あり、その内18点は生駒西



第227図 第23号方形周溝墓土層断面図



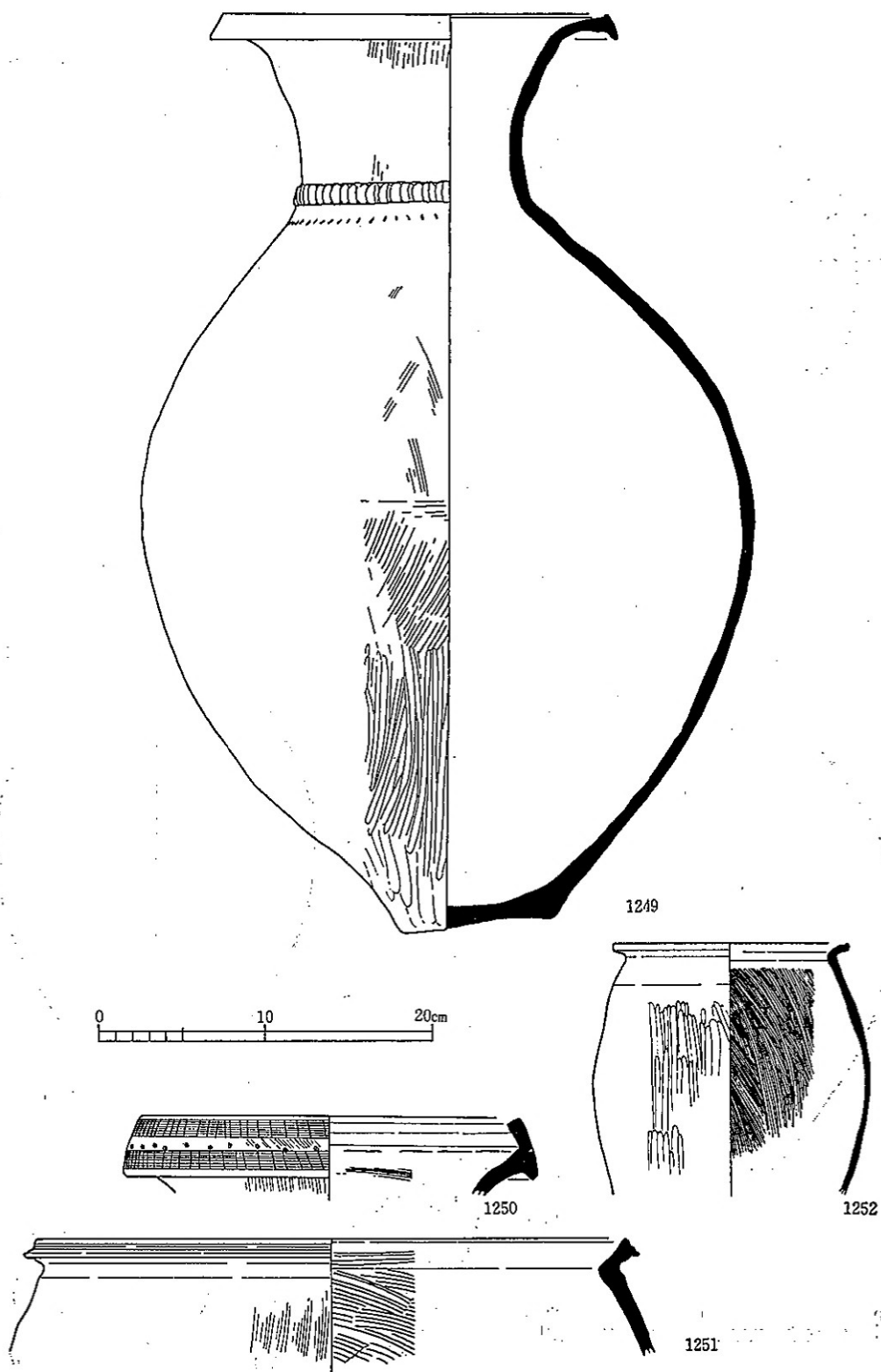
第228図 第28号方形周溝墓主体部 木棺出土状況

麓の胎土である。また脚台部は16点で、その内生駒西麓の胎土は5点である。この内台付鉢の台部が4点あり、高杯脚部には茶褐色のいわゆる河内の胎土と考えられるものが多い。

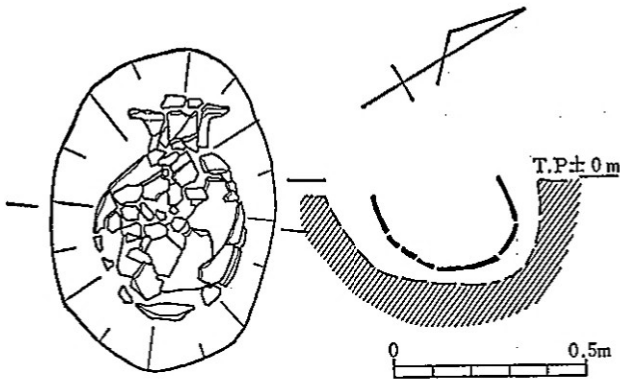
第22号方形周溝墓の周溝は、上・中・下の3層に区分され、下層より遺物は検出されなかった。上層と中層は遺構の層序の点では区分できたが、土器の整理作業上、上層と中層の土器で接合するものがあり、形式的にも明確な前後関係は認められない。同じ様式と考えてさしつかえないと考えられる。

〈第23号方形周溝墓〉 本墓は大溝（溝201）の南岸縁に位置し、本来、壺棺墓と境を接して配置されたものと思われる。トレンチ部においては、前述のようにコンター測量図ではわずかに高まりをみせていたものの、マウンド・主体部とも確認することはできず、東側拡張部の調査に入ってからマウンド西北部と主体部1基とを検出した。マウンドの規模は、7m×7m程度と推定される。西南側には、幅約1.5m、深さ約0.5mの周溝が存在することが、断面観察により推定された。盛土高は約0.5mを測る（第227図）。

主体部として、長辺を本墓北西辺とはほぼ平行に持つ、約1.6m×0.8mの隅丸長方形の墓壙を検



第229图 第23号方形周溝墓 (1250~1252)、壺棺墓 (1249) 出土土器

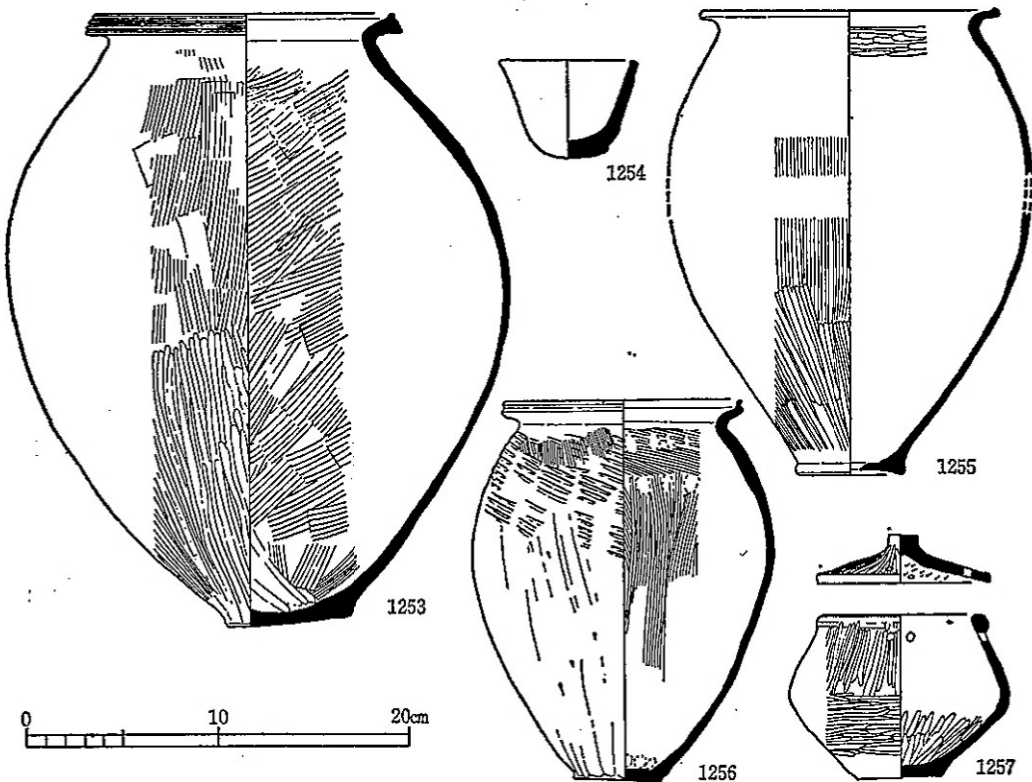


第230図 壺棺出土状況

っていたこともあり、本墓の主体部の木棺として使用されたものと推定される。

＜壺棺墓＞ 本墓も、コンター図によるとおよそ8m×5m程度に溝の堤状部分を利用した墳丘をもつ方形周溝墓であった可能性も考えられる。しかし、墳丘を確認することはできなかったため、本書では一応壺棺墓として扱う。壺棺は大溝（溝201）の南側堤上、肩部より1mの地点で検出されたもので、長径0.82m×短径0.58m、深さ0.23mの楕円形の掘方内に口縁部を南西に向

出した（第228図）。この墓壙中に、長さ1.16m、幅0.34mの、田舟を転用したと思われる特異な木棺を検出した。この木棺は、縦に半截した丸太（コウヤマキ）の両木口部を残し、削貫いたもので、内面は平滑にされているが、外面には加工のあとは見られなかった。内部には人骨等埋葬を直接示す様子は見られなかったが、部分的に板状の蓋の断片が残



第231図 弥生時代中期包含層出土土器

けて横倒しに埋置されていた。

この壺棺(第229図1249)は、広口壺Aである。復元寸法は、高さ55.3cm、口径23.1cm、体部最大径37.2cmである。口縁部は無紋で、頸部の付根に圧痕紋凸帯が巡り、その下方肩部に篋先による列点状の紋様が施される。白褐色を呈し、他地域の胎土である。穿孔の有無については不明である。表面にはかすかに朱彩の痕跡がみられる。

3) 石器、土製品

D地区から計83点の石器が出土した。武器として、石鏃7点・石槍4点・磨製石剣5点、工具

第17表 D地区出土石器類及び土製品一覧表(1)

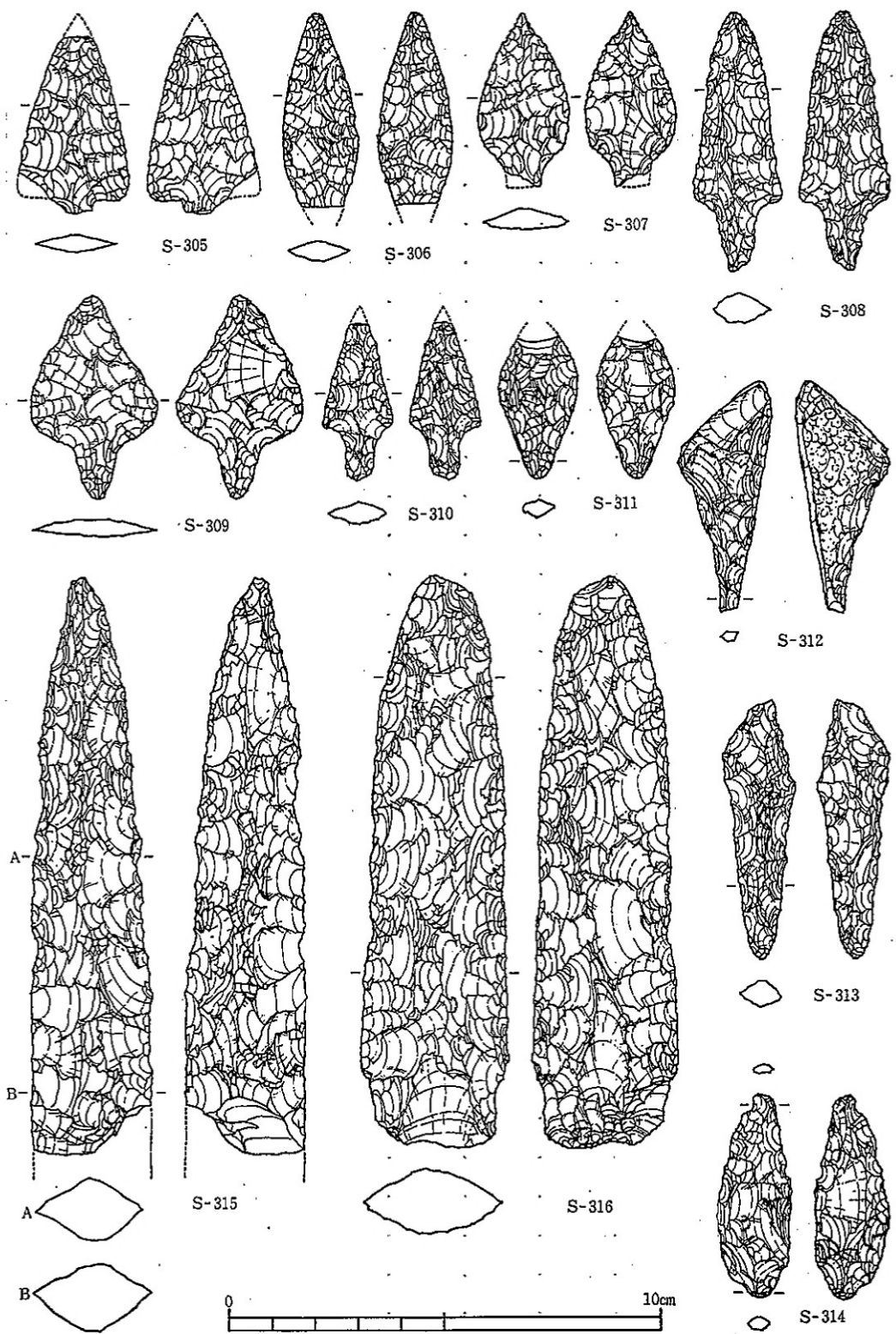
番号	種類	材質	法 量 (現法量)				出土場所・遺構・層位	備 考
			長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)		
905	石 鏃	サヌカイト	41.0	25.6	4.8	4.4	第19号方形周溝墓西北周溝 黒色炭植物遺体混粘土層	大型凸基有茎式
906	石 鏃	サヌカイト	44.7	17.4	4.8	3.7	第21号方形周溝墓東北周溝	尖基無茎式
907	石 鏃	サヌカイト	40.8	21.2	4.9	3.7	第23号方形周溝墓主体部掘方	凸基有茎式
908	石 鏃	サヌカイト	60.2	20.6	7.6	7.5	第21号方形周溝墓盛土上面	大型凸基有茎式
909	石 鏃	サヌカイト	47.3	29.2	4.5	4.5	黒灰色泥砂層	大型凸基有茎式
910	石 鏃	サヌカイト	41.0	16.2	5.2	2.3	溝201	凸基有茎式
	石 鏃	サヌカイト	40.8	15.1	5.8	3.4	第20号方形周溝墓マウンド	
915	石 槍	サヌカイト	134.5	28.6	16.9	63.8	溝201 青緑色斑文混粘土層(下位)	
916	石 槍	サヌカイト	133.7	34.5	15.0	78.3	第18号方形周溝墓東溝(中位)	
917	石 槍	サヌカイト	42.2	32.2	15.0	28.1	溝201内揚土 包含層中位	
	石 槍	サヌカイト	41.8	30.6	9.8	13.8	黒色砂粘土混土層	
918	磨製石剣	ホルンヘルス	169.0	23.0(刃部) 25.9(基部)	10.9(刃部) 12.0(基部)	76.8	第22号方形周溝墓西南周溝 炭粗砂混青黒色粘土層	完形品
919	磨製石剣	ホルンヘルス	88.8	21.6(先端部) 29.4(基部)	8.1(先端部) 8.6(基部)	29.2	溝201	
920	磨製石剣	黒色片岩	73.1	25.4	8.5	23.5	第22号方形周溝墓西南周溝内	
	磨製石剣	黒色片岩	37.5	34.2	4.8	3.0	第19号方形周溝墓南溝内 中位	
	磨製石剣	黒色片岩	38.9	22.8	3.5	8.5	溝201内南側面~肩部 灰褐色粗砂粘土混土層	
921	大型蛤刃 石斧	緑色岩類	120.8	64.3	40.4	460.0	黒色炭粗砂混粘土層	
932	扁平片刃 石斧	石英安山岩 か流紋岩	81.3	57.0	18.7	160.0	溝201内(北肩部~側面) 灰褐色粗砂粘土混土層	
912	石 錐	サヌカイト	54.0	20.5	10.0	9.6	黒灰色泥砂層	
913	石 錐	サヌカイト	60.2	16.7	9.4	7.2	第15号方形周溝墓西溝北端 上部	
914	石 錐	サヌカイト	47.4	17.6	7.8	7.0	第21号方形周溝墓旧東北周 溝	両端に回転痕あり 石鏃の転用品
	石 錐	サヌカイト	39.7	30.5	9.3	9.5	黒灰色泥砂層	
	砥 石	砂 岩	38.4	24.9	20.7	21.4	第22号方形周溝墓西南周溝 上層	
	砥 石	石英安山岩	62.1	29.8	7.0	13.8	井戸2	
	砥 石	頁 岩 か	40.3	14.7	8.3	6.7	第21号墓西北周溝	

第17表 D地区出土石器類及び土製品一覧表(2)

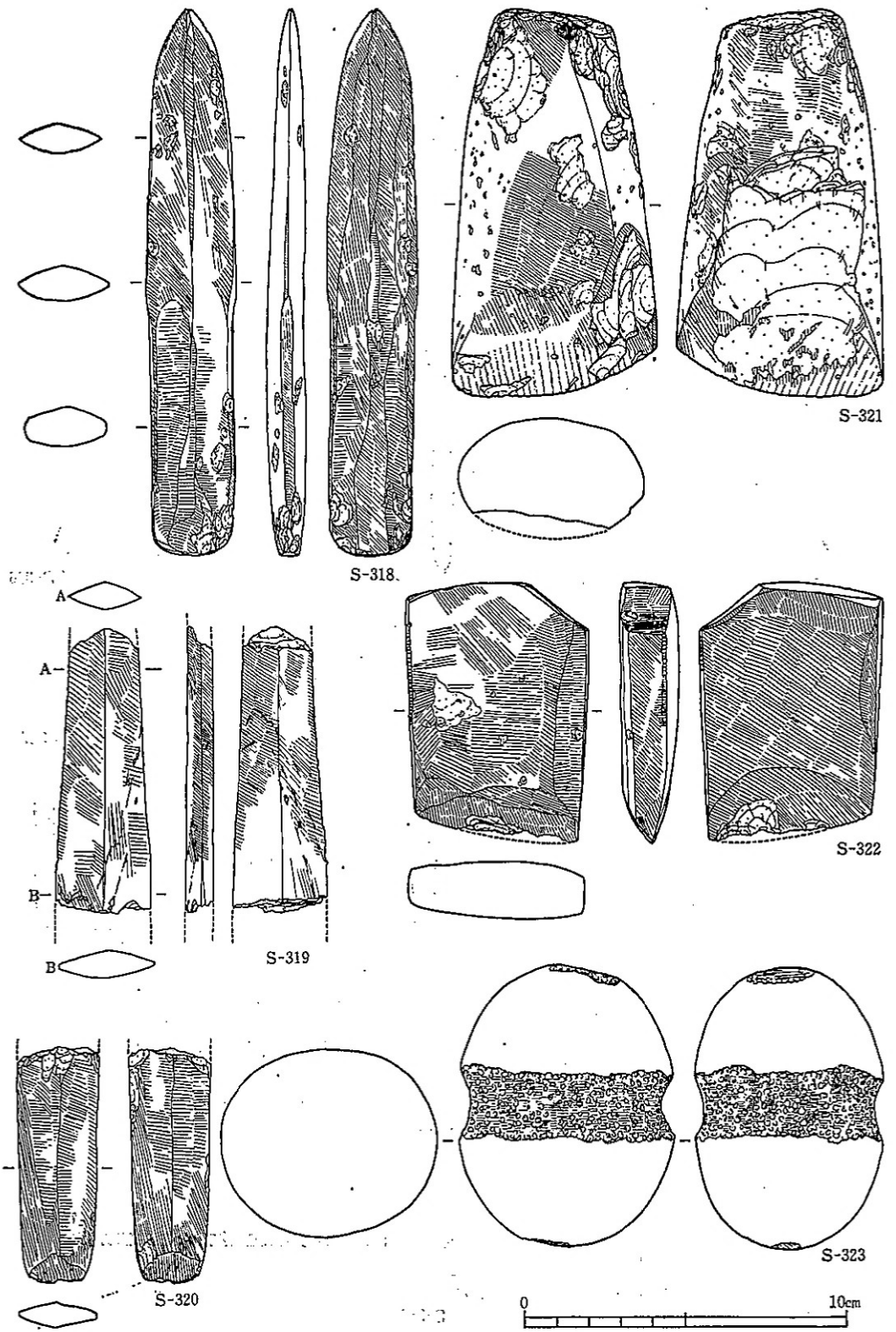
番号	種類	材質	法 量 (現法量)				出土場所・遺構・層位	備 考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
	砥石	頁岩か	49.4	14.2	17.9	10.8	溝201(北肩部~側面)	
324	石庖丁	緑色片岩	124.3	55.5	8.7	78.3	黒色砂混粘土層	杏仁形態
325	石庖丁	緑色片岩	101.5	20.0	5.0	61.0	土壙169	杏仁形態
326	石庖丁	緑色片岩	107.0	42.0	7.2	50.4	弥生中期遺構面(上面) 茶褐色砂質層	直刃半月形態
	石庖丁						弥生中期包含層 茶褐色砂質土層	上記の石庖丁 と接合
327	石庖丁	緑色片岩	103.8	36.5	9.2	49.7	(南北)小溝内 黒灰色炭粘土粗砂混土層	形態不明
328	石庖丁	緑色片岩	129.5	51.5	7.5	60.0	黒色砂混粘土層	内彎刃形態
329	石庖丁	緑色片岩	85.0	42.0	6.5	34.0	第21号方形周溝墓西北周溝 黒色炭混粘土層	直刃
330	石庖丁	緑色片岩	55.0	45.0	8.8	27.5	溝201南肩上面	直刃
	石庖丁	緑色片岩	38.4	23.0	7.2	6.5	第21号方形周溝墓第1号土 壙	
	石庖丁	緑色片岩	48.1	28.8	6.3	7.5	第22号方形周溝墓西南周溝 黒色炭粗砂混粘土層	
	石庖丁	緑色片岩	25.0	33.8	6.1	4.3	第21号墓東北裾部~溝中 黒色炭粗砂混粘土層	
	石庖丁	スレート	67.2	32.1	6.0	16.4	溝201北肩部内	
	石庖丁	緑色片岩	33.5	20.0	3.3	2.6	褐灰青色泥砂層	
	石庖丁	緑色片岩	73.2	35.9	8.2	34.2	弥生中期包含層	直刃
323	石 錘	アルコース 砂岩	88.0	67.2	58.4	492.0	溝201北側 弥生包含層上面	
331	石製紡錘車	黒色片岩	49.2	48.9	5.1	22.1	溝201下位	
337	不定形石器	サヌカイト	57.8	25.3	8.0	11.5	溝201下位	尖頭器
338	不定形石器	サヌカイト	55.4	26.0	12.3	16.2	第21号方形周溝墓盛土内東 コーナー	尖頭器
339	不定形石器	サヌカイト	43.0	61.2	10.4	32.2	溝201(南側面南肩部) 灰褐色粗砂粘土土層	刃器
340	不定形石器	サヌカイト	57.5	55.4	20.5	64.9	黒灰色泥砂層	刃器
341	不定形石器	サヌカイト	85.0	43.8	12.7	44.0	表採	
342	不定形石器	サヌカイト	88.4	112.6	23.8	243.0	弥生中期包含層上面	刃器
	不定形石器	サヌカイト	27.3	67.7	12.4	24.6	第15号方形周溝墓西溝(上 位)中央部	刃器
	不定形石器	サヌカイト	34.6	37.3	17.6	20.4	西小溝 黒色砂混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	33.8	81.8	15.0	43.7	第17号方形周溝墓マウンド 裾部内・北西溝内	刃器
	不定形石器	サヌカイト	36.9	35.1	12.6	19.7	溝201下位	
	不定形石器	サヌカイト	23.5	47.7	6.3	6.4	溝201下位	
	不定形石器	サヌカイト	92.9	75.6	18.9	120.0	溝201下位	
	不定形石器	サヌカイト	26.9	18.6	6.2	6.6	(落込内包含層上位) 黒灰色炭・有機物混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	49.0	65.4	25.1	80.3	溝201南肩~第21号方形周 溝墓北側	
	不定形石器	サヌカイト	37.8	37.6	7.4	12.7	第21号方形周溝墓マウンド 盛土上位~東北周溝上位	

第17表 D地区出土石器類及び土製品一覧表(3)

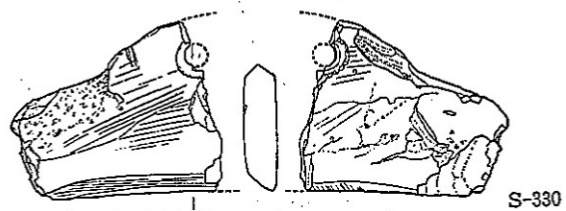
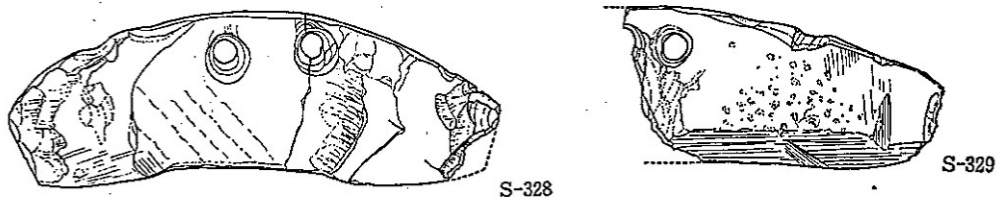
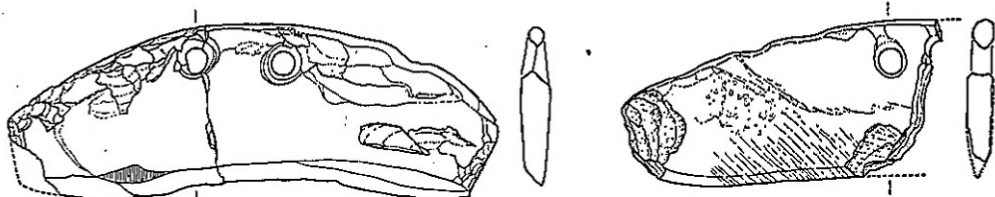
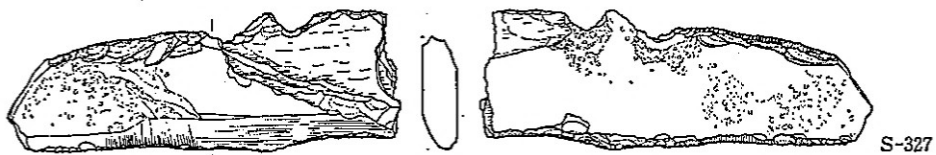
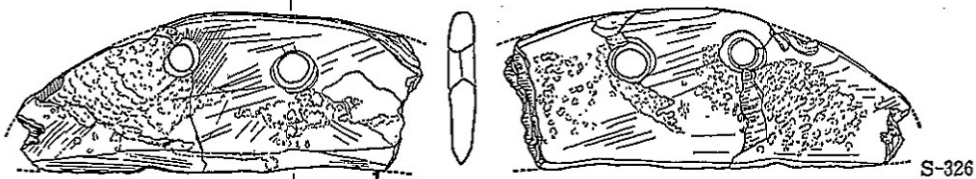
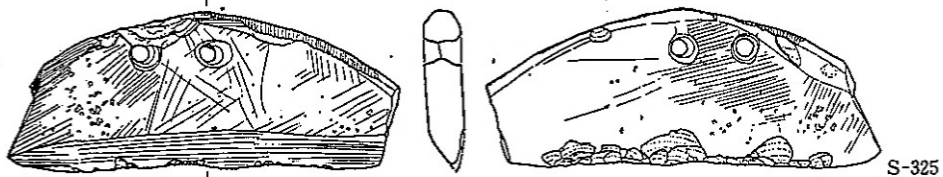
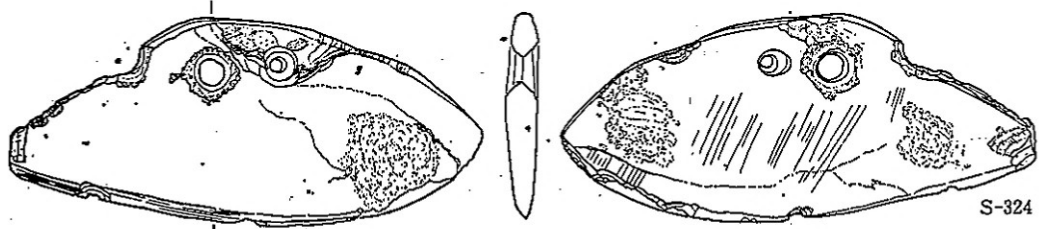
番号	種類	材質	法 量 (現法量)				出土場所・遺構・層位	備 考
			長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重量(g)		
	不定形石器	サヌカイト	56.4	78.6	19.1	49.8	溝112上位 黒色炭混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	34.3	44.0	5.2	6.6	第21号方形周溝墓東北周溝 黒色炭混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	39.9	30.5	8.7	11.9	第21号墓東北周溝 黒色炭混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	47.3	79.4	16.6	53.0	黒色炭混粘土層(包含層)	刃器
	不定形石器	サヌカイト	50.8	44.9	21.6	29.0	南北土層断面畔内	
	不定形石器	サヌカイト	21.5	28.2	6.8	3.2	南北土層断面粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	42.8	82.2	15.3	46.5	第20号方形周溝墓北東裾部 黒灰色灰粗砂混粘土層	刃器
	不定形石器	サヌカイト	22.1	35.3	6.6	5.2	第17号方形周溝墓盛土内 (上位~中位)	
	不定形石器	サヌカイト	32.0	69.9	17.4	30.8	第17号方形周溝墓盛土内 (上位~中位)	
	不定形石器	サヌカイト	53.0	70.6	13.3	34.6	弥生中期包含層中位	刃器
	不定形石器	サヌカイト	42.0	67.5	8.2	19.2	弥生中期包含層中位	刃器
	不定形石器	サヌカイト	45.5	75.4	23.2	56.2	溝201上位	
	不定形石器	サヌカイト	58.6	109.3	5.7	128.0	溝201内(下位) 黒灰色粘土混粗砂層	刃器
	不定形石器	サヌカイト	31.3	45.3	17.6	24.7	第21号方形周溝墓東北周溝 第1号土城内	刃器
	不定形石器	サヌカイト	58.6	44.2	20.3	52.4	井戸1 下層	
	不定形石器	サヌカイト	39.0	46.7	11.7	22.5	表採	刃器
	不定形石器	サヌカイト	53.0	33.5	14.3	19.6	第21号方形周溝墓東北裾部	
	不定形石器	サヌカイト	54.1	34.0	10.0	18.5	第21号方形周溝墓東北裾部 ~溝内黒色炭粗砂混粘土層	
	不定形石器	サヌカイト	49.6	32.4	9.8	14.9	井戸1	刃器
	不定形石器	サヌカイト	33.7	34.1	7.0	8.2	第20号方形周溝墓	
	不定形石器	サヌカイト	46.0	27.6	11.9	16.1	土壌276	
	不定形石器	サヌカイト	40.4	58.5	14.4	40.0	弥生中期包含層上面	
	不定形石器	サヌカイト	47.8	40.8	14.1	32.0	第20号方形周溝墓周溝内 上層	
	不定形石器	サヌカイト	56.8	87.0	12.6	66.0	第23号方形周溝墓マウンド 盛土	
	不定形石器	サヌカイト	45.4	51.9	15.6	36.9	溝201(北肩部~側面) 灰褐色粗砂粘土混土層	
	不定形石器	サヌカイト	59.0	90.9	14.3	68.5	第20号方形周溝墓盛土上位	刃器
	凹み石	砂 岩	132.5	67.2	69.5	820.0	溝状落込	
332	紡錘車	生駒西麓の 胎土	40.7	40.5	10.9	21.1	黒色炭混粘土層	
334	紡錘車	生駒西麓の 胎土	40.7	44.5	7.9	18.5	黒灰色泥砂層(中期包含層)	
335	紡錘車	他地域の胎 土	44.1	23.8	4.0	5.2	第21号方形周溝墓盛土内	
336	紡錘車	生駒西麓の 胎土	27.4	24.8	5.3	3.8	第20号方形周溝墓周溝 上層	
333	円 板	生駒西麓の 胎土	44.8	45.4	7.0	16.3	褐灰青色泥砂上面	



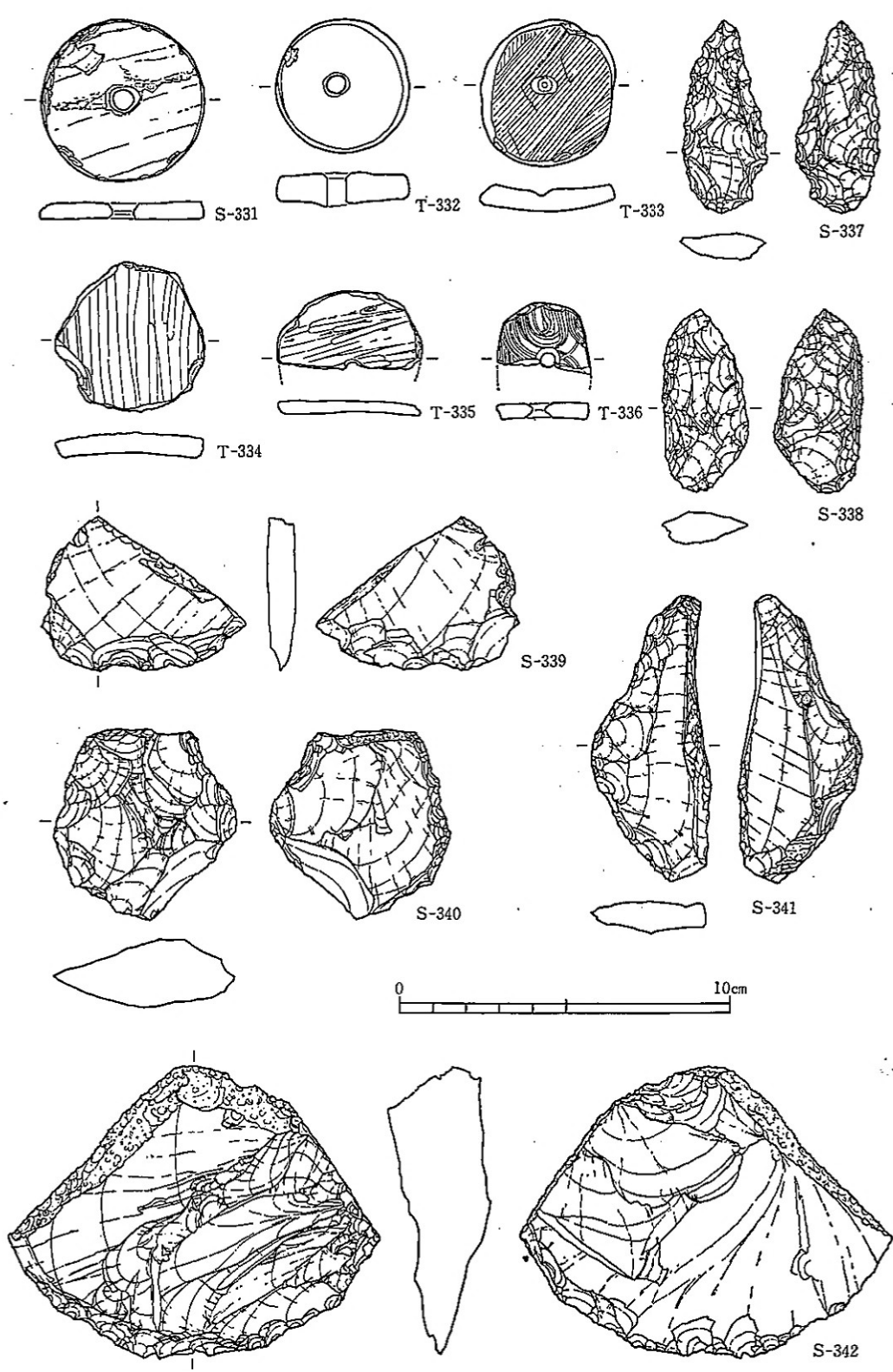
第232图 D地区出土石器(1)



第233图 D地区出土石器(2)



第284图 D地区出土石器(3)



第295图 D地区出土石器(4)、土製品

として、大型蛤刃石斧1点・扁平片刃石斧1点・石錐4点・砥石4点、収穫具として、石庖丁13点、漁撈具として、石錘1点、紡織具として、紡錘車1点、その他不定形石器41点（その中に尖頭器状石器2点、刃器14点を含む）、凹み石1点である。

石鏃は、3.5g以上の凸基有莖式石鏃が大半を占める。第22号方形周溝墓より検出された磨製石剣は短剣形の完形品で、一見サヌカイトにみえる硬質のホルンフェルス製である。

不定形石器の中に類別された尖頭器状石器とは、石鏃よりも大型で作りの粗いものである。また刃器とは、一辺に自然面を残す不定形の剝片に剝離調整を施して刃部を作りだし、自然面を背面とし、その面に敲打を加えてエッジを丸くした断面三角形形状のものである。剝片の鋭利なエッジをそのまま利用したものもある。

この他にサヌカイトのフレイク、チップが96個体、総重量1,436g出土している。サヌカイト製の石器が、56点検出されているが、製品と剝片の割合は、大体2:3位と考えられる。

D地区出土の土製品は5点あり、紡錘車が4点、円板が1点である。この内土器の破片に加工を施して紡錘車としたものが3点あり、円板もまた同じ意図のもとにあると考えられる。

4) 遺構・遺物の検討による小結

遺構面Ⅰ、大溝（溝201）、遺構面Ⅱの方形周溝墓群、包含層より出土する土器は、中期後半即ち第Ⅲ-Ⅳ様式である。

遺構面Ⅰの土器に特徴的なことは、甕の形態が、口縁部が「く」の字に屈曲し、体部上半に最大径をもつ細長い形態であることと、すでに凹線紋が表われており、広口壺A（第204図1116）口頸部、広口壺C（同1115）口縁部、高杯（同1118）などに施紋されていることがあげられる。この遺構面Ⅰの包含層には、広口壺A（第205図1125）がある。口縁端部の拡張がない形態であり、第Ⅲ様式の伝統を示す。広口壺Bは、口縁端面に簾状紋が施紋されるものがある。

遺構面Ⅰの上面に第20号方形周溝墓が作られ、その周溝より広口壺C（第213図1186）、水差（同1190）の供献土器が出土している。広口壺Cは胴長の体部で、体部中央に叩き目成形の痕跡が残っている。水差は口頸部に4条の凹線紋が巡る。ともに第Ⅲ-Ⅳ様式の後半期の土器である。

また第21号方形周溝墓には、広口壺A（第222図1195）が供献されており、（第221図1191、1192）はおそらく甕棺と蓋ではないかと考えられる。広口壺Aは口縁端面に凹線がめぐり、体部には直線紋と波状紋の施紋される第Ⅲ-Ⅳ様式の前半の土器であり、鉢C（第221図1191）も同様に口縁に凹線がめぐり、甕（同1192）の胴部は、口径と比較して大きく張っておらず、同様に第Ⅲ-Ⅳ様式の前半の土器と考えられる。土器形態からいえば、第21号方形周溝墓と遺構面Ⅰの土器は類似性が強い。

また、第22号方形周溝墓周溝出土の器種構成を調べると、壺全体の中で簾状紋で代表される生駒西麓の胎土のものは、周溝全体で32点中23点を占める程、簾状紋が盛行している。そして凹線

紋による器形の変化は考えられない。つまり、第Ⅲ-Ⅳ様式前半期と考える。第21号方形周溝墓東北周溝と第1号土壙と第22号方形周溝墓周溝の土器で接合資料が存在することから第21号方形周溝墓と第22号方形周溝墓は同時に存在したといえる。つまり、遺構面Ⅰ、第21号方形周溝墓、第22号方形周溝墓は同じ様式期と考えられる。

大溝(溝201)下位、中位から頸部に2条の凹線紋の入った広口壺A(第207図1134)が出土しているが、全体として凹線紋は盛行しておらず、大溝下位、中位は、第Ⅲ-Ⅳ様式前半期とする。大溝上位は、凹線紋のめぐる器台(第208図1144・1145)がある。包含層は口径の割に胴部の大きく張る甕(第231図1253)、叩き目に被われる甕(同1256)などがあり、比較的新しくなるが、第Ⅲ-Ⅳ様式後半期と考えられる。つまり、大溝上位と第20号方形周溝墓、包含層は同じ様式である。

D地区の各遺構出土の土器を概観した結果、第Ⅲ-Ⅳ様式の中でも前半期と後半期の2時期に分けられ、遺構面Ⅰと第15号墓、第16号墓、第18号墓、第19号墓、第21号墓、第22号墓、大溝下位は、第Ⅲ-Ⅳ様式前半期、第20号墓、大溝上位、包含層は、第Ⅲ-Ⅳ様式後半期と考える。

さらに遺構の面から考察すると、遺構面Ⅰでは、大溝肩部の井戸や土壙は大溝に切られていること、前述の大溝の遺構の記述から、遺構面Ⅰの大方の遺構は大溝掘削以前である。第20号方形周溝墓は、遺構面Ⅰの上面にあり、マウンド肩部は大溝の肩部と共存している。第23号方形周溝墓は、第20号方形周溝墓の対岸に位置し、墳丘・周溝の構造も同様であり、出土土器も凹線紋の盛行する器台破片などを出土することから新しい時期と考えられる。同様の立地を示すものに第17号方形周溝墓・壺棺墓があるが、これらは大溝肩部に位置する一群と考えられる。出土遺物を考慮すると、第20号方形周溝墓の土器と、第21・22号方形周溝墓の土器とでは、後者の方が古い様相を示す。また大溝上位の土器は凹線紋の盛行する時期といえるので、大溝上位及び第20号方形周溝墓など大溝沿岸に立地する方形周溝墓群は、第Ⅲ-Ⅳ様式後半期である。即ち遺構面Ⅱにおける方形周溝墓群の中に新旧の時期差があり、第21・22号方形周溝墓に代表される一群と第20号方形周溝墓に代表される大溝沿岸に立地する新しい一群とがある。前者は第Ⅲ-Ⅳ様式前半期であり、後者は第Ⅲ-Ⅳ様式後半期である。大溝は第21号方形周溝墓の時期に掘削され、時が経って大溝が浅くなった段階即ち大溝上位の時期に大溝肩部の方形周溝墓が作られたと考えられる。

しかし、現在までのところ、第Ⅲ-Ⅳ様式の明確な区分はなされておらず、この推論の正否については、遺構、遺物の詳細な検討を待たねばならない。

また、第22号方形周溝墓周溝出土の土器器種構成表に見るとおり、生駒山麓の胎土と他地域の胎土の割合は、大体7:3位になり、遺構面Ⅱにおいては、7割かた生駒西麓の胎土を使用していることがわかる。遺構面Ⅰや大溝における状況は今後の課題である。

他地域の胎土とした中に、茶褐色を呈し、多量の白色微砂粒、金雲母・黒雲母などの細粒は認められるが、肉眼では角閃石の砂粒は認められず、顕微鏡で観察すると細かな角閃石の粒子が認

められる「河内地方の胎土」のものがある。高杯B（第226図1239）や肩部外面、体部内面に刷毛目調整を施した甕（同1244・1245）に多い胎土である。台付鉢C（第205図1128）や、白褐色を呈し、断面三角形の貼付凸帯がめぐる大型壺（第207図1142）は摂津からの搬入品であろう。

暗茶褐色の生駒西麓の胎土で、器形の上からは摂津系土器の形態と考えられる、口縁部に5条の凹線紋の巡る台付鉢A（第212図1168）や、浅い2条の凹線紋の巡る広口壺B（同1175、第224図1215・1216）を暗茶褐色の生駒西麓の胎土でつくっていることも摂津と河内の交流を考える上で、問題を提起している。

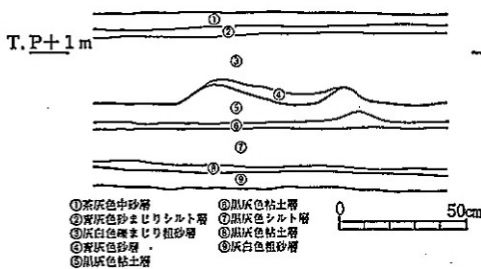
なお包含層の中には石鏃、石錐、石槍、石庖丁、大型蛤刃石斧、石錘、刃器、不定形石器などおおかたの器種が揃っており、第Ⅲ-Ⅳ様式後半期には、石器がなお盛んに利用されていたことがうかがえる。

木製品では、第21号方形周溝墓周溝より弥生時代中期後半の鞘状木製品（第238図W-43）が、検出されたのが注目される。対比できる資料として、庄内式の時期の包含層より、やはり鞘状木製品（第240図W-58）が出土しており、両者を比較すると弥生時代の鞘状木製品は長く、剣身を収める部分が厚みがあり（約1.0cm）、銅剣または磨製石剣の鞘であり、庄内式の時期の鞘は剣身を収める部分の厚みがなく（約0.5cm）、鉄剣の鞘であろうと考える。

3 弥生時代後期以降の遺構と遺物

D地区の弥生時代後期以降の遺構としては、ごく一部で足跡、畦畔状遺構、自然河川等を検出したにとどまる。足跡は、大溝の最終埋土層上面から検出された。一方、畦畔状遺構と自然河川は、足跡を覆う砂層と、その上の庄内式土器、木器を出土した粘土層上面から検出された。

＜足跡＞ 西側拡張部の大溝（溝201）の埋土を殆んど掘削した後に上面の一部分から約300個の足跡を検出した。この足跡は、溝201がほぼ埋まり、周囲の地表面より一段低い凹地が湿地状となっていた時に印されたもので、この足跡が深くつけられていることから当時の状況がうかがえる。調査地で一定の方向を持った足跡はなく、踏み荒したような感じである。足跡は、溝4の落ち込みを中心に厚く堆積した灰白色の砂、あるいは粗砂によって覆われていた。この砂層からは粗い叩き目をもつ鬚形土器の破片が若干出土しているので、足跡の時期は弥生時代中期末～後期の間に求められよう。



第236図 畦畔状遺構土層断面図

灰白色砂層の上には、第Ⅶ様式の甕（第237図1258）が出土した黒色有機質粘土層が約10cm位堆積していた。この層はゆるい起伏で南のE地区へ続く弥生時代後期の遺物包含層である。

＜畦畔状遺構＞（第236図） この遺構は、本地区南端の土層セクションの観察中に検出したものである。畦畔は、幅約0.6mのもの、そ

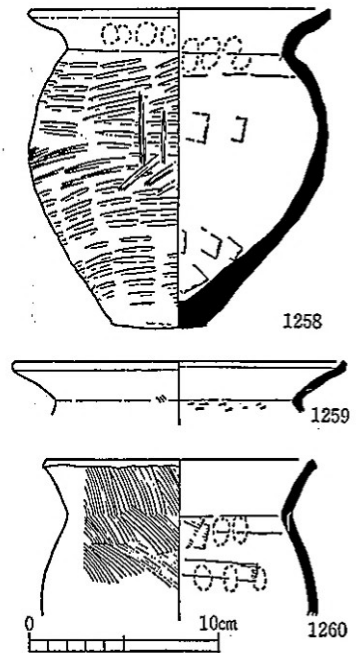
の西1mに幅約0.4mのもの2条が観察できた。この畦畔状遺構は、厚さ約0.55mに推積した黒灰色粘土層の上面に盛土されたものと考えられ、畦畔の間は水路で左右は水田であったと考えられる。またこの土層上面は、調査地区内において、南北に0.8mの高低差があり、北ではT.P.+1.5m、南ではT.P.+0.7mを測る。

〈出土遺物〉 ほとんどすべてが木製品で、加工痕のあるものや木片を加えると、数100点になる。一方土器は、甕の口縁部(第237図1259)1点のみである。木器(第239・240図)は粘土層上位から出土したものが多く、えぶり、鋏、鋤などの点数は相半ばしている。第239図W-57のえぶりは、身と柄の着装部がよくわかる例で、身にえぐりこんだ穴に、柄の先端部を差し込み、柄と身を固定するために、柄の先端部よりに納穴をもうけて、棒状のくさびを差し込んでいる。この他に鞘状木製品、三脚盤、槌、田舟なども出土している。

先にもふれた鞘状木製品は長さ15.1cm、幅3.3cm、厚み1.05cmを測る。裏面の剣身の納まる空間は、長さ11.5cm、幅2.6cm、厚さ0.25cmである。このような鞘を2枚あわせて使用するので、中に入る剣の厚みは最大0.5cmとなり、鉄剣の鞘になると思われる。滋賀県服部遺跡⁽⁴⁾より鞘におさめた状態の朱塗り木剣が出土しており、鞘の形態は本例とよく類似する。

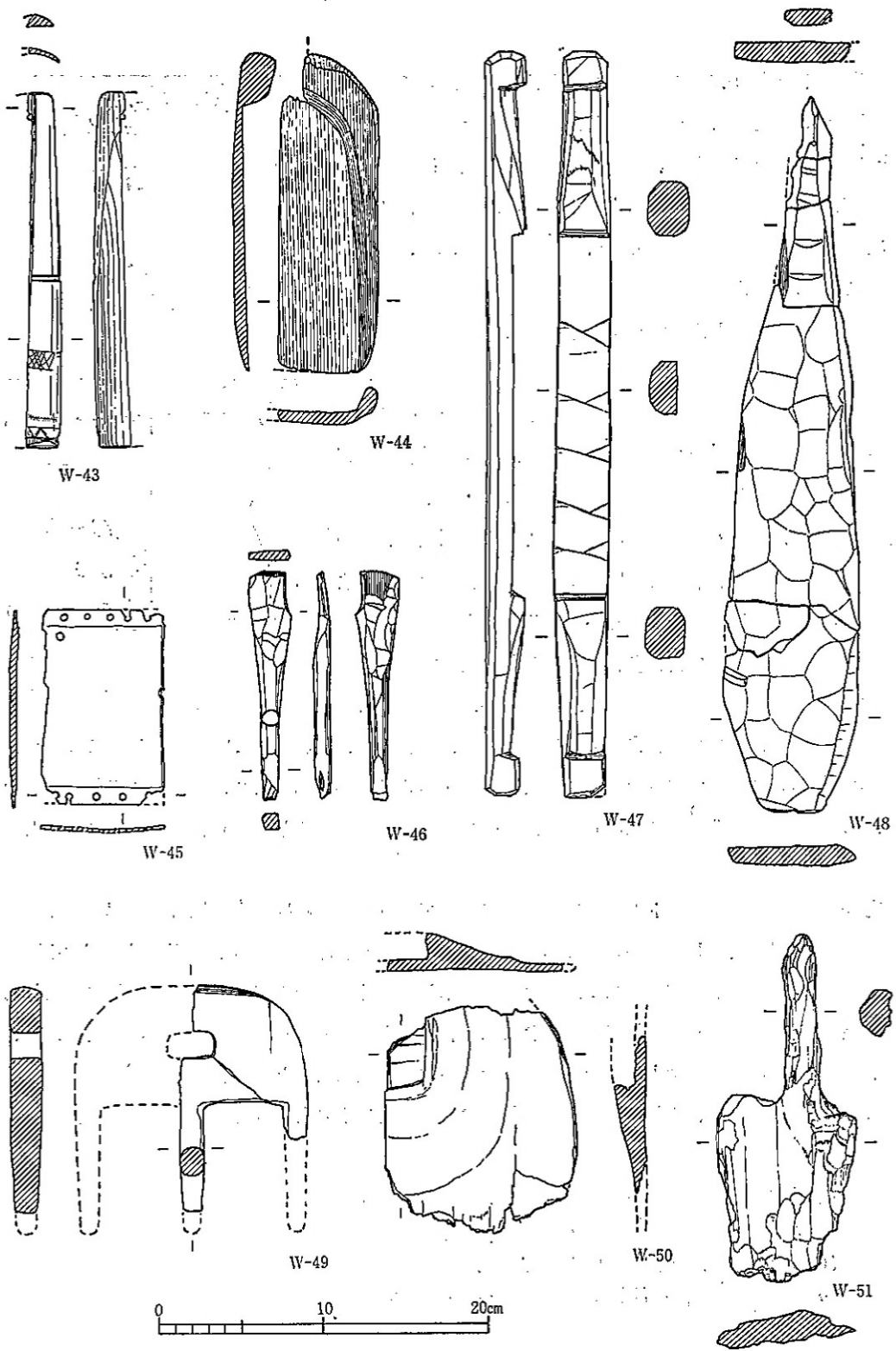
〈古墳時代中期以降〉 トレンチ部の調査において、トレンチほぼ中央を蛇行しながら西流する、自然河川を検出した。幅3~4m、深さ約1mを測り、粗砂~シルトが互層をなして堆積し、非常に不安定な状態の流れであったことを示している。この流路の北肩部でも護岸用に打ち込まれたとみられる一本の杭が検出されており、生活との関りが想定される。砂の堆積中には、布留式土器細片が少量含まれるので、その時期の川と考えてよいと思われる。

なお、D地区では、これより上層には何らの遺構も検出されなかった。

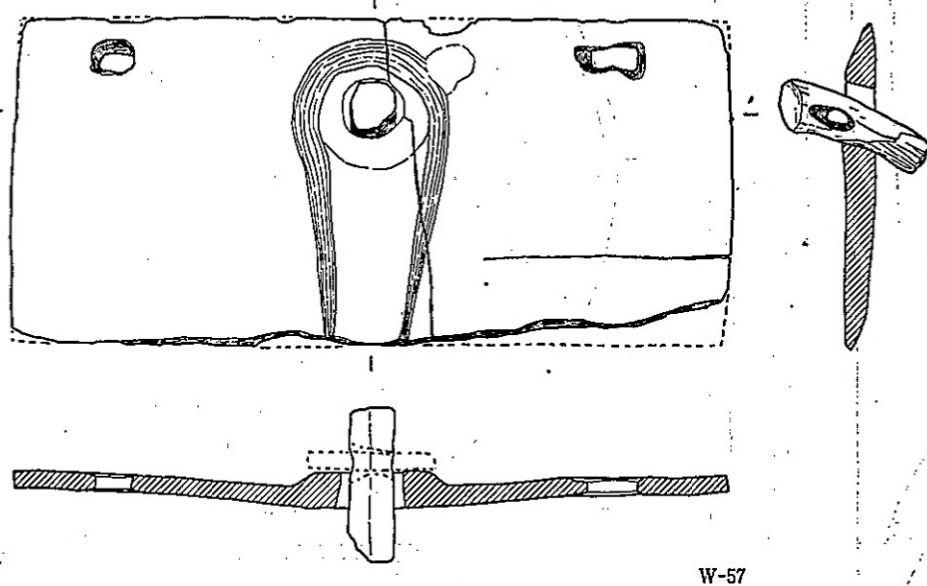
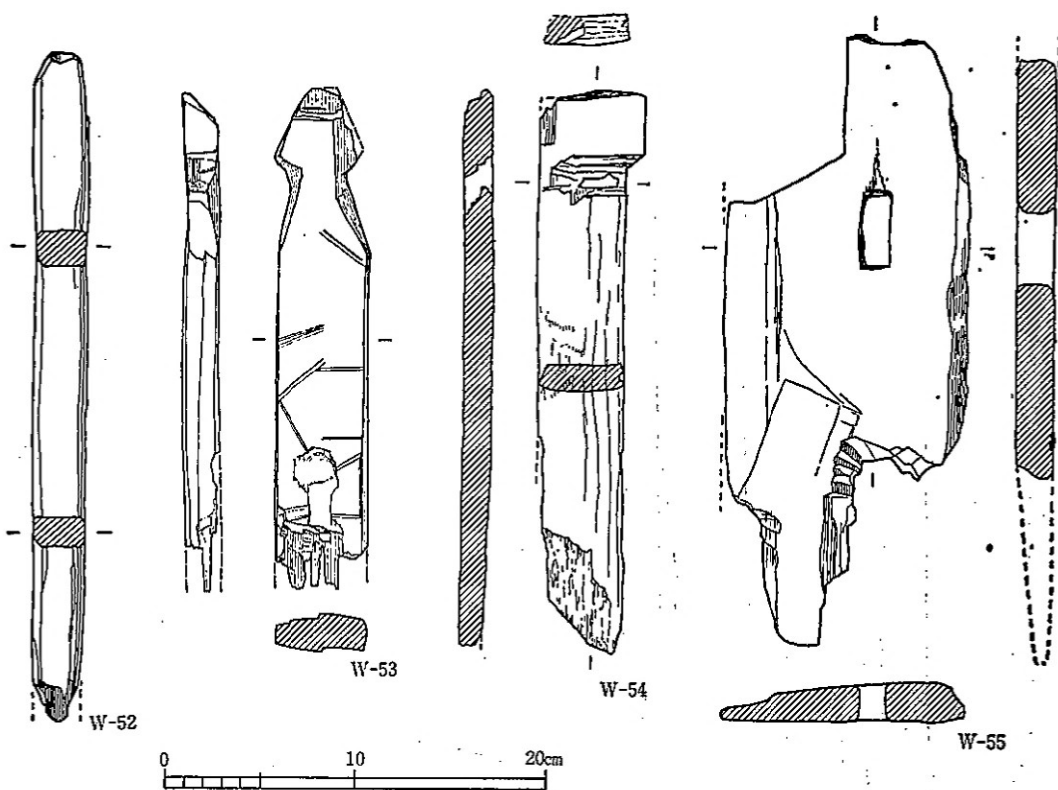


第237図 弥生後期包含層(1258)、庄内式包含層(1259)、布留式自然河川(1260)出土土器

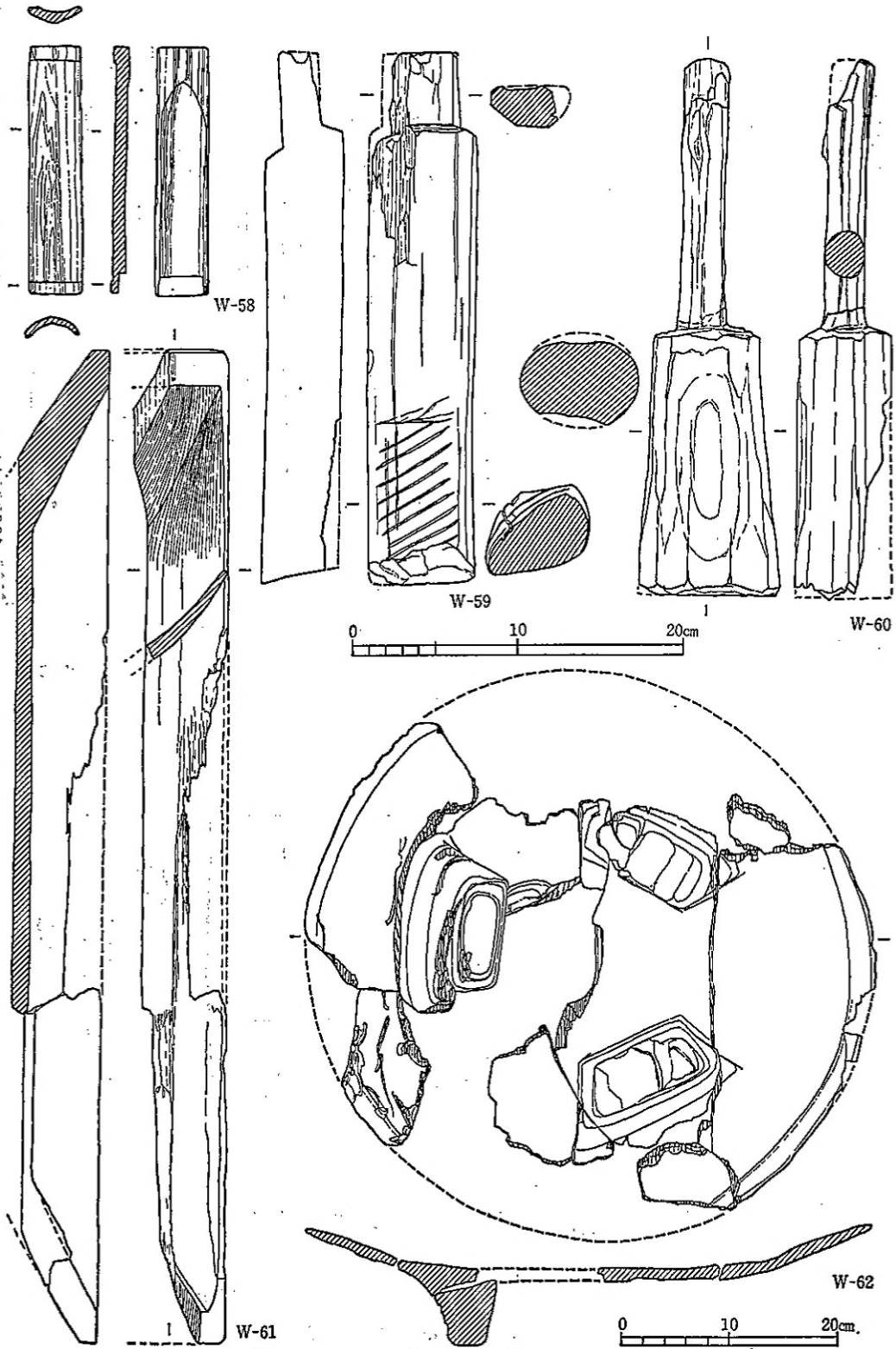
- 注 (1) 若林 泰 神戸市文化財調査報告6「伯母野山弥生遺跡」 1963
 青藤 英二
 (2) 佐原 真編 日本美術10「弥生土器」 1976
 (3) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡Ⅱ」 1973
 (4) 滋賀県教育委員会 守山市教育委員会「服部遺跡発掘調査概報」 1979



第238図 D地区出土木器(1)
 弥生時代中期 W-43 輪状木製品、W-44 「あかかき」状木製品、W-47 紡織具(ちまき)、
 W-48・50・51 鋤、W-49 又鋸、W-45・46 不明木製品。



第239図 D地区出土木器(2)
 弥生時代中期 W52 柄状木製品、W-53・54・55 板状木製品。
 古墳時代初頭 W-57 えぶり。



第240图 D地区出土木器(3)
 古墳時代初頭 W-58 鞘状木製品、W-59・60 槌、W-61 田舟、W-62 三脚盤。

第5節 E地区の調査

1 層序 (第241図)

調査結果からいえるE地区の特徴として、トレンチ南端が高く、北へ向って若干傾斜して各層が形成されている。その中での層位の変化は著しいが、概ね11層の堆積で、上層から、①暗灰色粘質土、②黄褐色粘質土、③褐色粘土、④淡灰色砂、⑤暗黒灰色粘土、⑥黒灰色粘土、⑦灰黒色粘土、⑧暗青色粘土、⑨黒色砂質粘土、⑩暗青色砂質粘土、⑪灰青色粘質砂である。

④淡灰色砂層は、南側に薄くなり、トレンチ南端から北へ約5mの地点で消滅する。遺構は②・③層上面に中世、⑥層上面に古墳時代、⑩・⑪層上面に弥生時代中期の遺構を検出した。また⑦・⑧層上面に自然流路を確認した。断面で確認したこの自然流路の規模は、⑦層上面の流路で幅約10m・深さ約0.6mを測り、④層上面の流路で幅約11m・深さ約0.4mを測る。両者とも遺物は含まないが、弥生時代後期に属すと考えられる。⑤層と⑥

層の間には、約3cm幅で腐植土層が堆積している。以上の様な変化を示す11層の下層には、⑫白褐色粗砂、⑬白褐色砂、⑭茶黒色粘土がみられる。本地区では無遺物であるが、A・B地区で弥生時代Ⅰ～Ⅱ様式の土器・木製品を出土した層は、⑭茶黒色粘土層に相当すると考えられる。

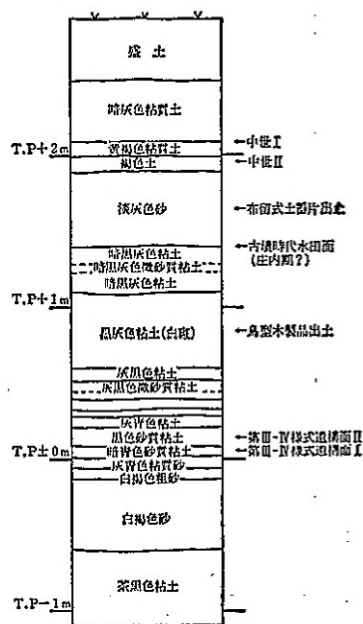
2 弥生時代中期の遺構と遺物

弥生時代中期の遺構面は、現地表から約2.5m掘り下げたレベル=T.P.+0.2m前後に検出した。遺構面は2面あるが、両遺構面のレベル差はわずか0.1mにすぎない。この間に遺物は殆んど含まないが、若干出土した土器を検討した結果、両遺構面の時期に大差はないと言える。

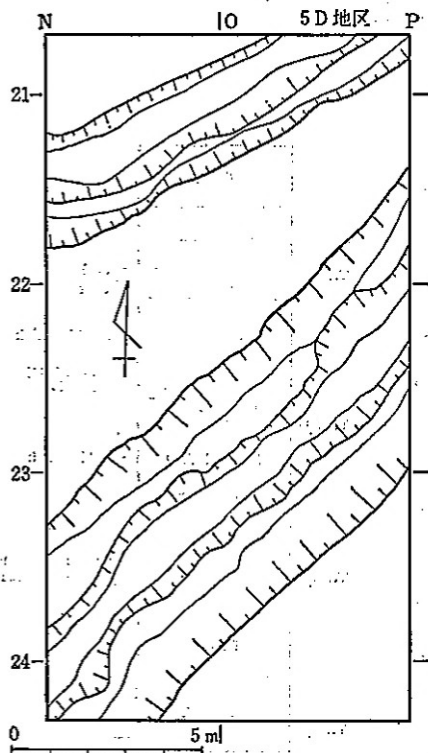
1) 遺構面Ⅰ (第242図)

この面で検出した遺構は、約2mの間隔を置き、ほぼ平行して流れる大小2本の溝である。この2本の溝以外には全く遺構は検出されず、平坦な面が続く。小溝を境にして北の面は、レベルが若干下がる。

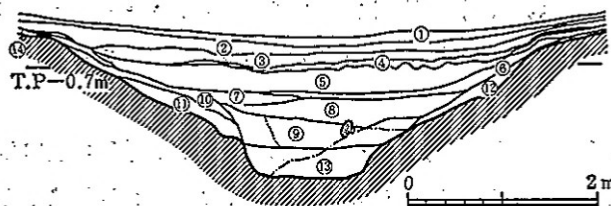
A 大溝(溝115) 大溝は南西—北東方向に走り、幅約6m、深さ約1.4mを測る。溝最深部のレベルは、南西端でT.P.-1.45m、中央でT.P.-1.56m、北東端でT.P.-1.7mを測る。この調査結果からみる限り、大溝の流れた方向は、南西から北東方向であると言える。溝の形状は、斜面の中ほどにテラス状の面をもつが、全体としてはV字溝状を呈する。溝内には、①灰茶



第241図 E地区土層断面模式図



第242図 弥生時代中期遺構面I



第243図 大溝(溝115)土層断面図

する口縁部であろう。1271はミニチュアの高杯、脚部である。中央を盛り上げた円板状の裾部に柱状部を貼り付けている。この裾部には、4個所の小穴を穿っている。1281は近江地方の形態を示す壺であるが、胎土の産出地は断定し難く、詳細な胎土分析を待って報告したい。器面全面にススが附着している。1278の体部には米粒形の刺突紋をめぐらしている。1282は口縁端部の一部に刻み目をほどこしている。

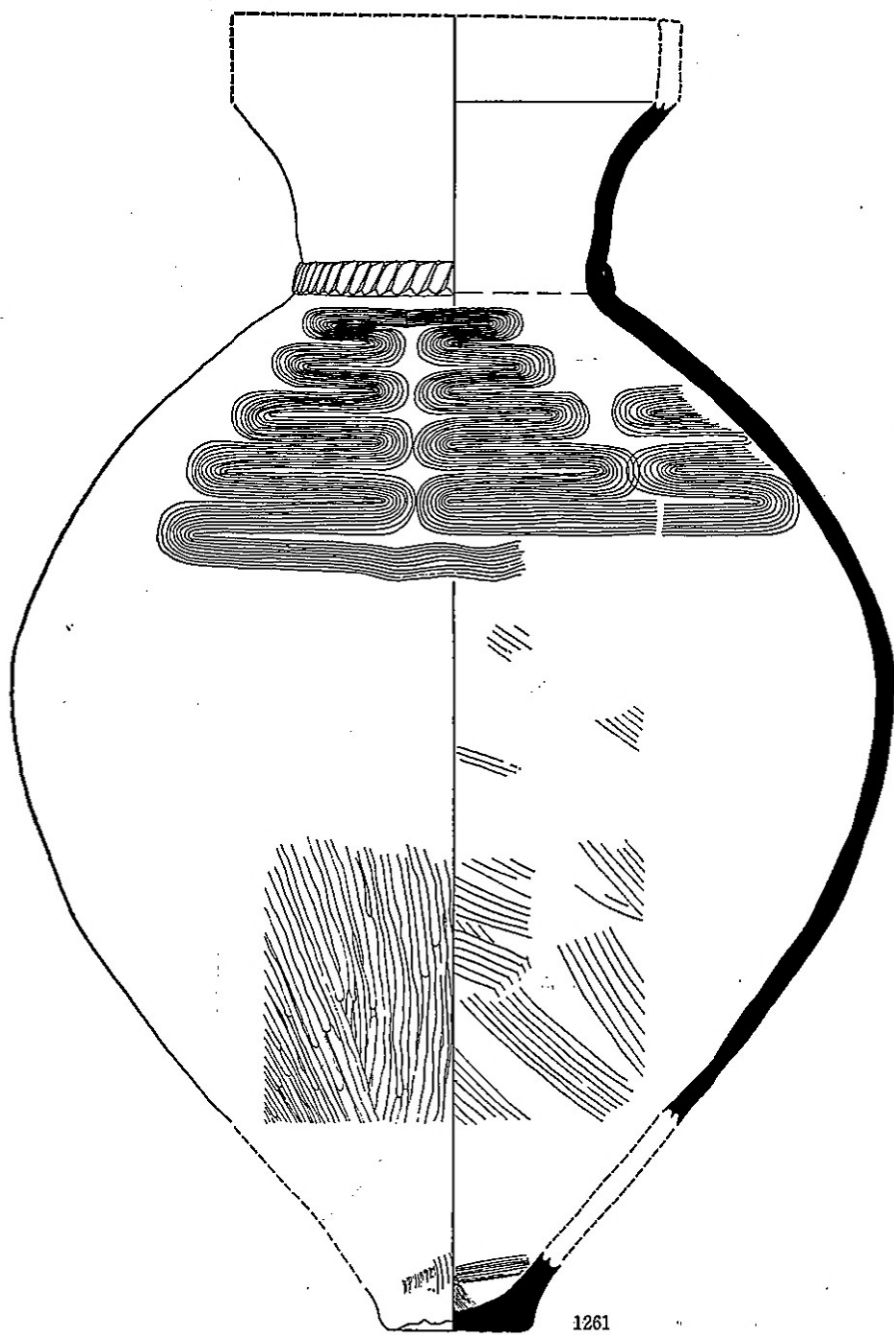
木製品は、溝内南斜面から4点が出土した(第260図)。W-69は、歯のないえぶりと考えられる。W-68は中央部に糸状のものの圧痕があるので(図版180)、両端に突起をつくり出した紡織具であろう。W-66、W-67は用途不明の木製品である。特にW-66は、先端部に2個所の

色粘土、②灰黒色粘土(炭化物含む)、③暗青色粘土、④褐色砂、⑤黒色腐植粘土、⑥暗灰色粘土、⑦暗灰色粘質砂、⑧暗灰色砂質粘土(白斑混り)、⑨暗灰色粘土(白斑混り)、⑩暗灰青色粘質砂、⑪黒灰色粘質砂、⑫白灰青色砂、⑬褐色砂・茶黒色粘土混合層、⑭暗青色粘質砂の各層が堆積している(第243図)。

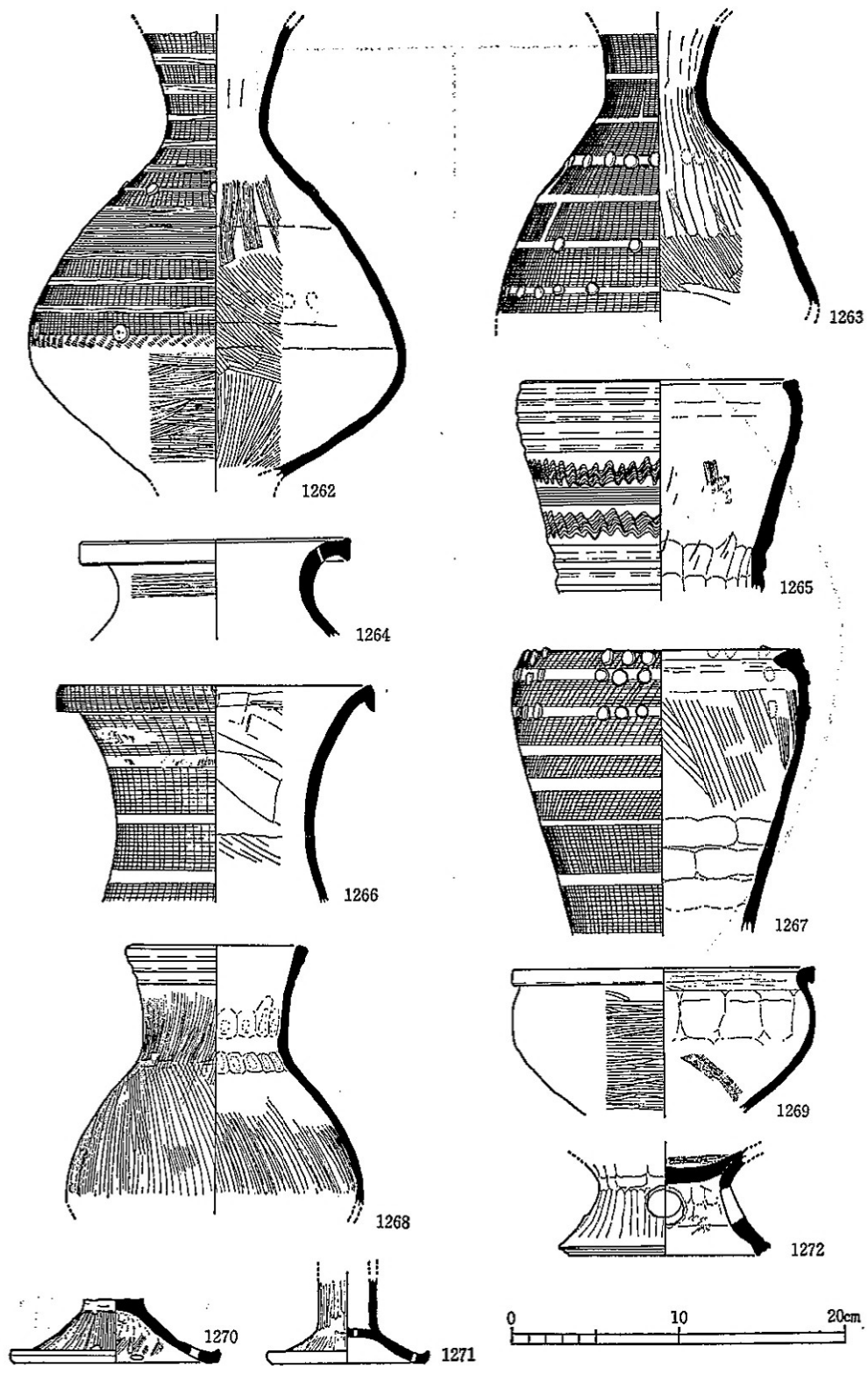
最下層の⑬層は0.4~0.8mの厚さで堆積し、遺物は非常に少ないが、溝北東端付近の底面上に畿内第Ⅲ様式の細頸壺1個体(第245図1262)が出土した。この壺の内面全面には、赤色顔料(朱)が附着している。溝南北両斜面に、溝肩から流れ込んだ⑪層・⑫層が薄く堆積しているが、土器は殆んど出土していない。以上の三層が、遺構面Ⅰから遺構面Ⅱの時期にかけて堆積したものと考えられる。

さらに若干色・質の相異なる4層—⑧・⑨・⑦・⑥層—と⑤層が堆積しているが、溝内出土の遺物は、殆んどこの5層から出土している(第244~246図)。

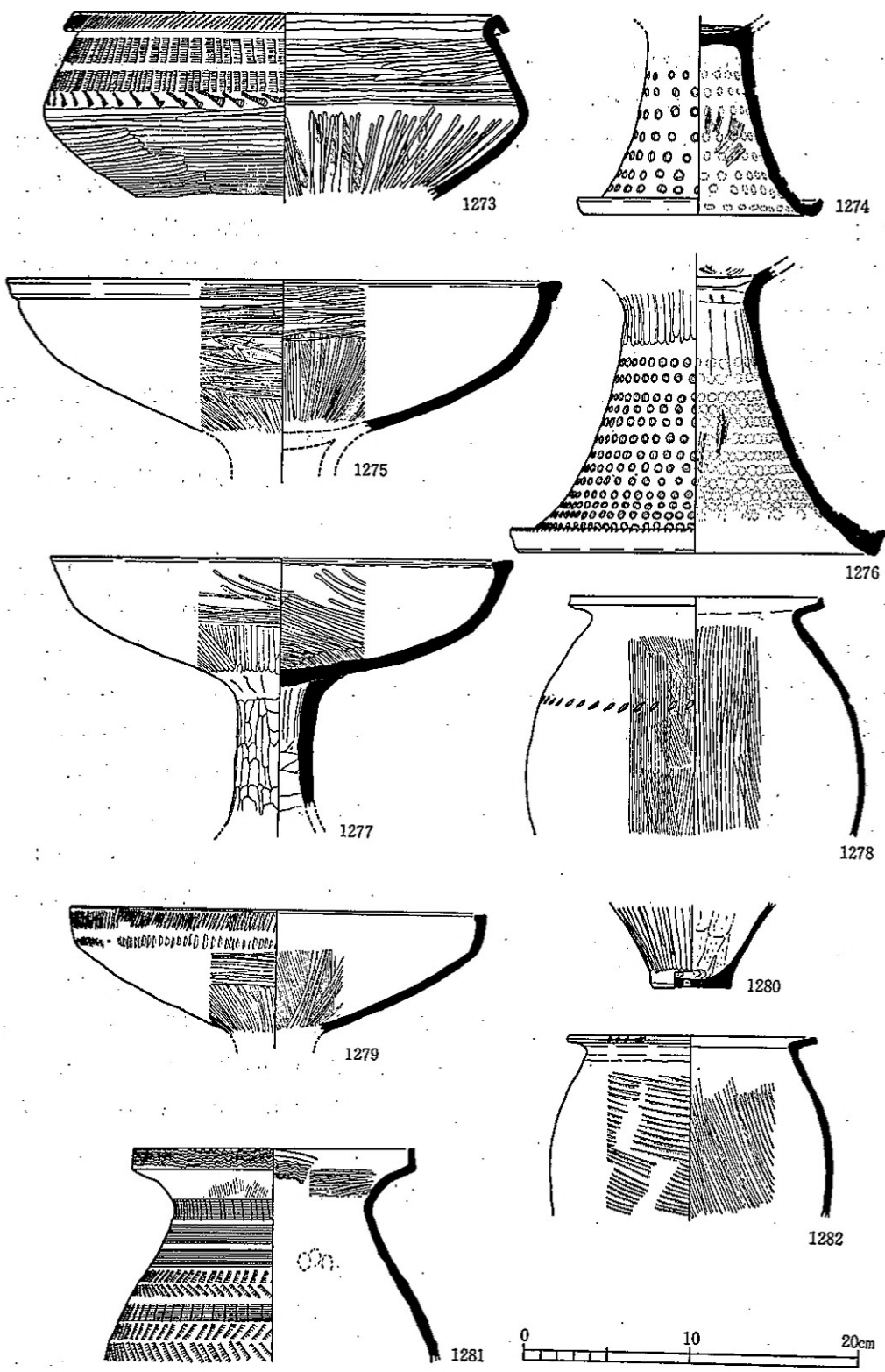
1261は広口壺形土器Bに分類される。頸部下端に圧痕紋凸帯をめぐらし肩部には流水紋が描かれている。口縁部は欠損しているが、頸部と口縁部の継ぎ目からみて、曲折し直立



第244图 大溝(溝115)出土土器(1)



第245图 大溝(溝115)出土土器(2)



第246图 大溝(溝115)出土土器(3)

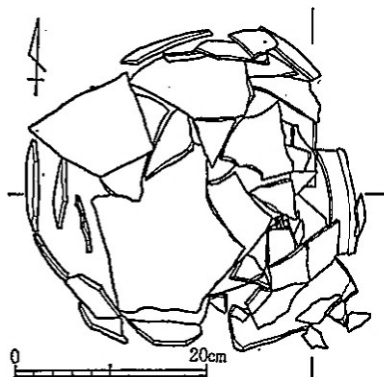
小穴を穿ち、何かを着装した様に見うけられる。この先端部と握部状の部分の間のくびれた個所に糸状のものを巻きつけた圧痕がある。溝内出土の石器は、敲石1点である。

B 溝（溝114） 大溝から北へ約2～4mの間隔を置き、大溝にほぼ平行して流れる溝114は、幅約2m、深さ約0.4mを測る。溝南肩から約0.3～0.8m幅のステップを挟んで、さらに約0.5m高くなる。そして大溝までの約2m幅の平坦面を形成している。溝内には、砂、粗砂などが不規則に堆積し、遺物は殆んど含まない。この堆積の上層で、器面が著しく磨滅した無頸壺が1点（第252図1289）完形で出土している。

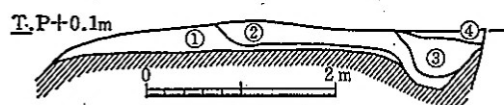
2) 遺構面Ⅰ（付図21）

この面では、2基の方形周溝墓と溝状遺溝、土塋、井戸、ピット等を検出した。前項で述べたように、大溝はある程度堆積した状態でこの時期にも流れていたようだ。また溝状遺構は、遺構面Ⅰの溝114が埋った後の状態と考えられる。その上に土塋、井戸、ピットが掘り込まれている。遺物は、大溝以北の包含層で多量に出土した（第253、254図）。

A 方形周溝墓 <第24号方形周溝墓> 大溝（溝115）と溝状遺構の間の平坦部に検出した。マウンドの一边は約2.5mと非常に小規模なものであり、周溝は大溝と溝状遺構を利用すると共に、両溝を結ぶように幅約0.7mの周溝を設けている。マウンド断面の層序（第248図）は、①暗褐色粘質砂、②褐色砂（小砂利含む）、③暗褐色砂（よく締っている）、④灰青色粘質砂である。

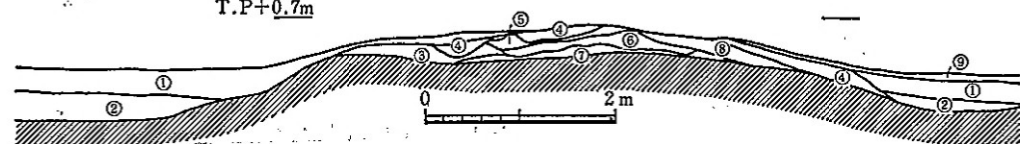


第247図 第24号方形周溝墓主体部



第248図 第24号方形周溝墓土層断面図

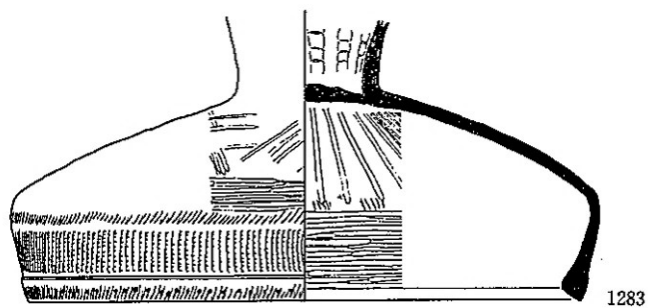
T.P.+0.7m



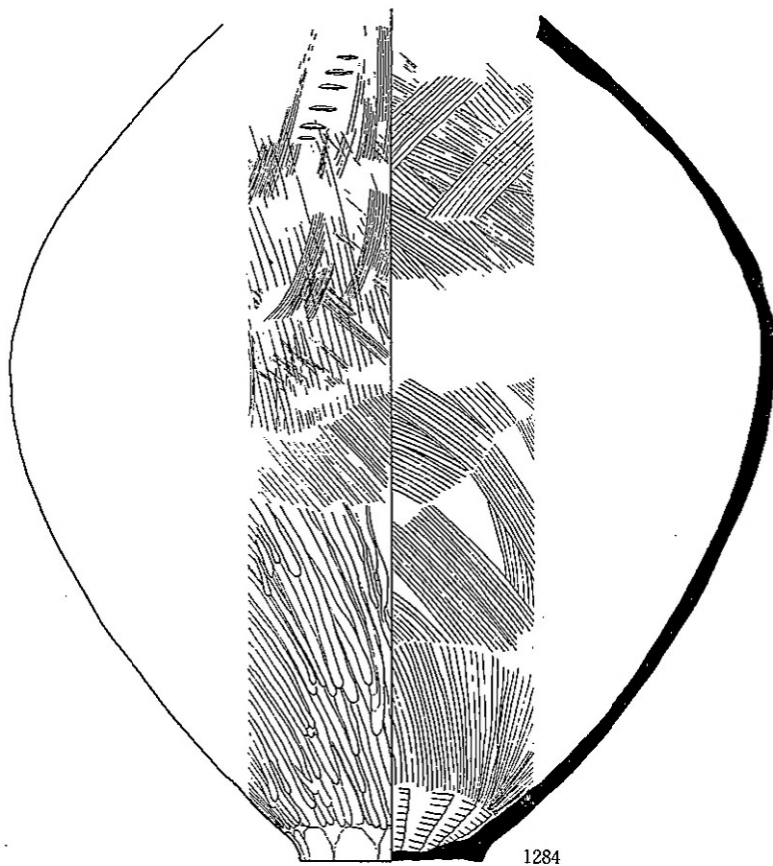
第249図 第25号方形周溝墓土層断面図

主体部は壺棺1基で、マウンド中央よりやや東に検出した。口縁部を打ち欠いた壺に、脚部を打ち欠いた高杯を蓋として使用している（第247図、第250図1283、1284）。壺は刷毛目調整が施され、肩部には1～2cmの横方向の刻み目紋が一部縦に並べられている個所がある。

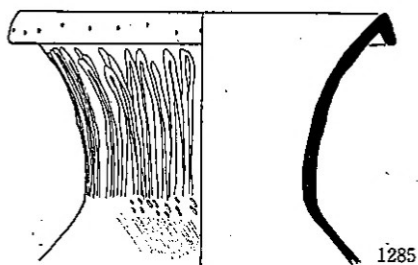
<第25号方形周溝墓> 大溝（溝115）南側にマウンドと周溝の北東部を検出した。周溝外周の一边の角度はN60°Eを示し、一边の長さは約12mを測る。主体部は調査区域外とみられ検出できなかった。溝底からマウンド頂までの高さは約1mを測る。マウンド北斜面に、畿内第Ⅲ様式の高杯、鉢、小型壺



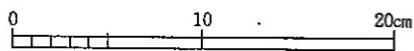
1283



1284



1285



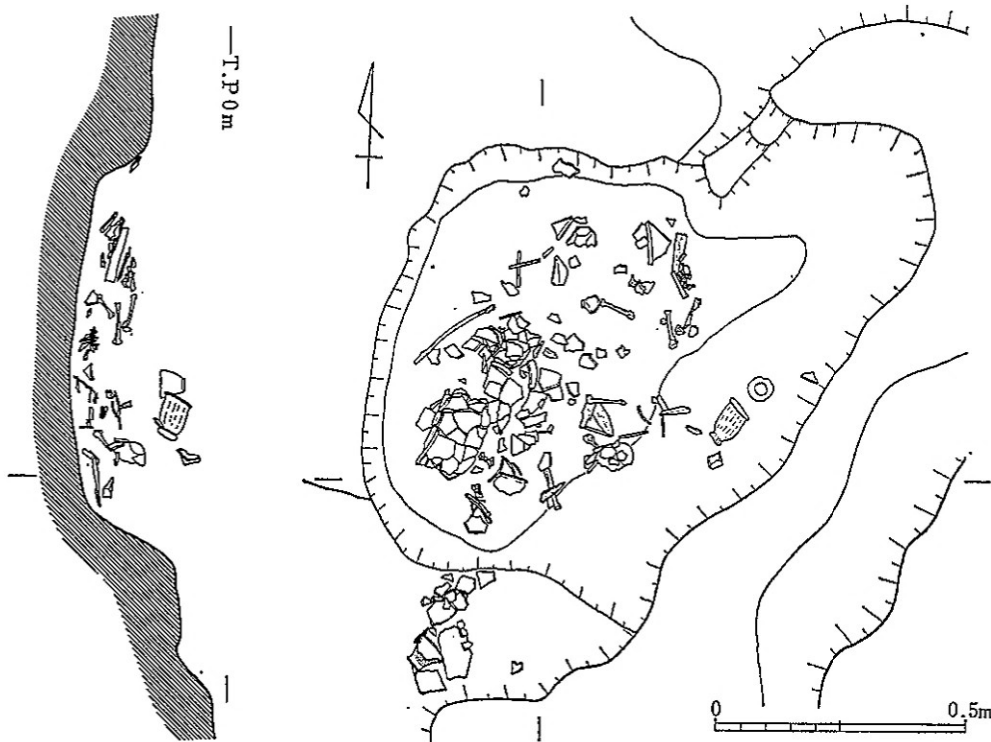
第250图 第24号方形周溝墓 (1283·1284)、第25号方形周溝墓 (1285) 出土土器

の供献土器とみられる遺物が出土した。周溝内からも少量ながら土器が出土している。第250図1285は、頸部に逆「V」字状にヘラミガキが施され、頸部下端には刺突紋がみられる。

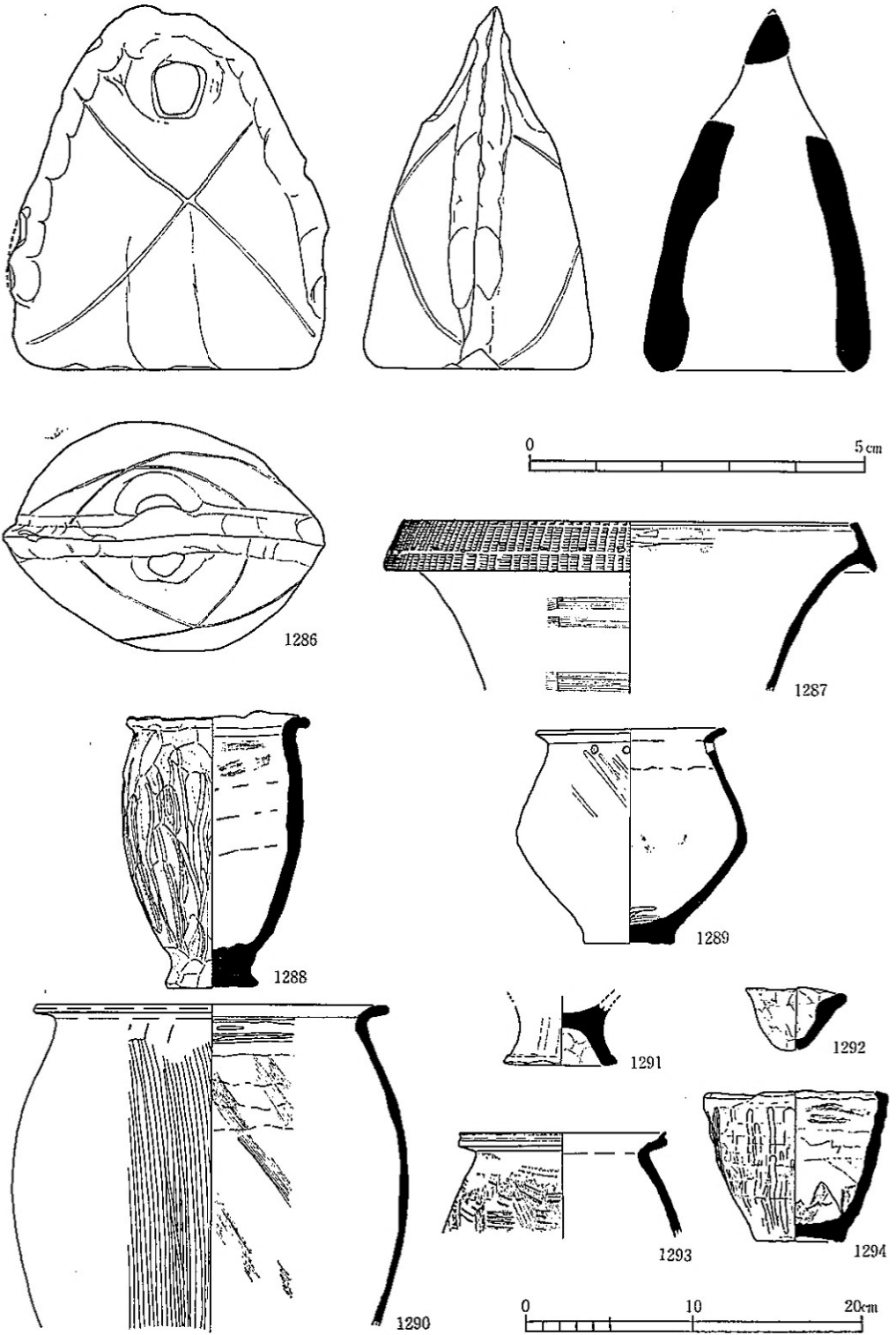
マウンドと周溝内堆積の層序は以下のとおりである（第249図）。①黒灰色粘土、②黒色粘土、③薄茶色粗砂、④黒色粘質砂、⑤灰黒色砂（礫含む）、⑥薄茶色微砂、⑦暗青色微砂、⑧薄茶色砂、⑨灰黒色粘土。

また、南東側周溝の外側には、方形の高まりがみられ、第25号墓マウンドとは周溝陸橋部で結ばれる。この高まりは一見マウンド状を呈するが、不整形であり、盛土も認められず、また埋葬施設も認められない。従ってこの高まりは自然地形であり、第25号墓もこの地形の一部分を利用して築造されたものと考えられる。

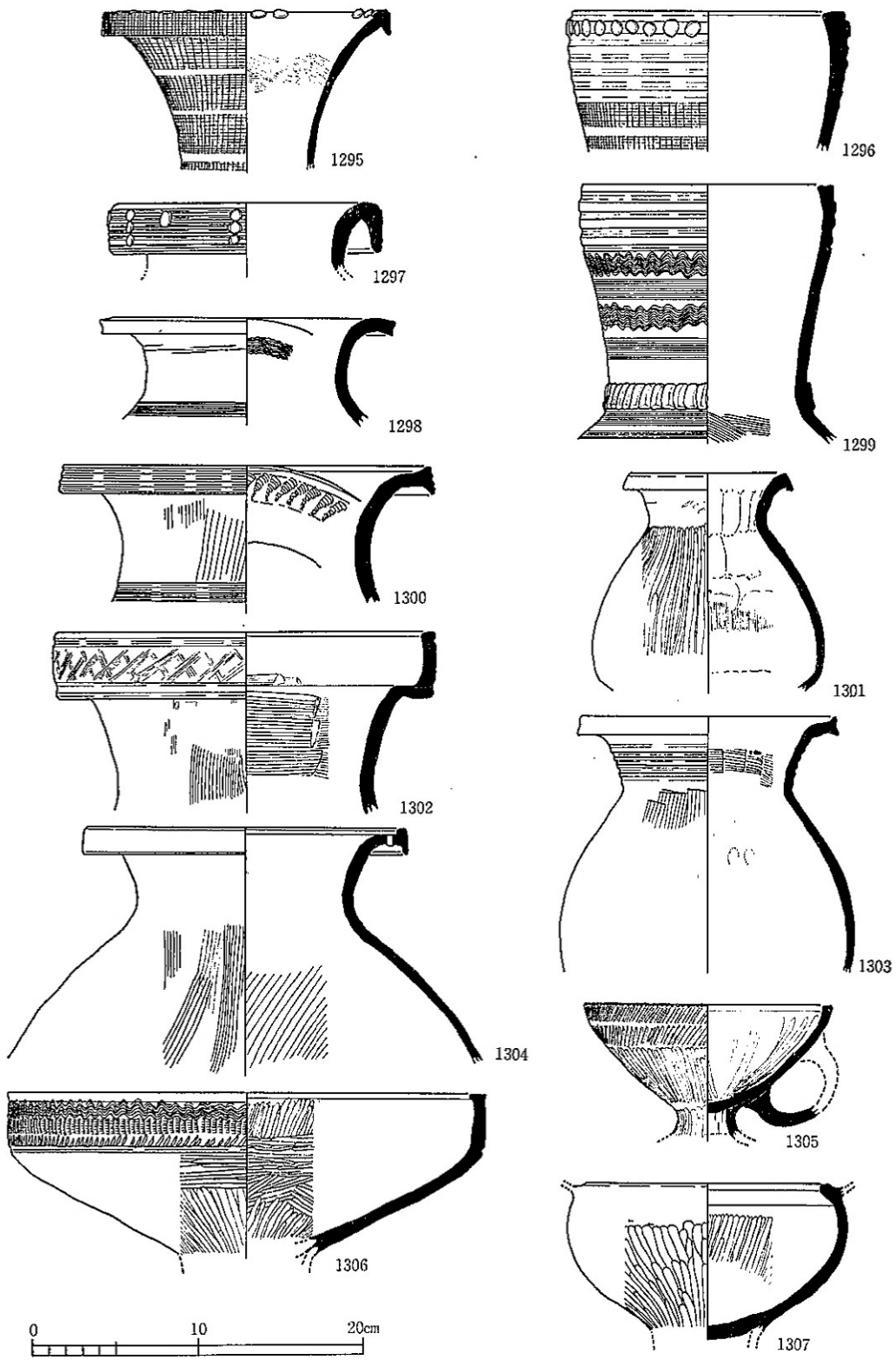
B 土壌 <土壌 276> 直径約2m、深さ約0.5mを測り、上面は一面の炭化物で覆われていた。この炭化物を除去すると、第251図にみるように多量の土器および獣骨が検出された。出土土器の主要なものは、第252図1287～1290、1293、1294に示す。1288の甕、1294の鉢はともに成形時の巻上げ・輪積みした粘土紐による凹凸が目立ち、粗雑な指ナデ調整後刷毛目・ヘラミガキが施こされている粗製の土器である。獣骨は、イヌ・シカが確認できている。これらの土器・獣骨のさらに下方、墳底から、朱彩を施した用途不明の板材（第230図W-64）が出土した。その



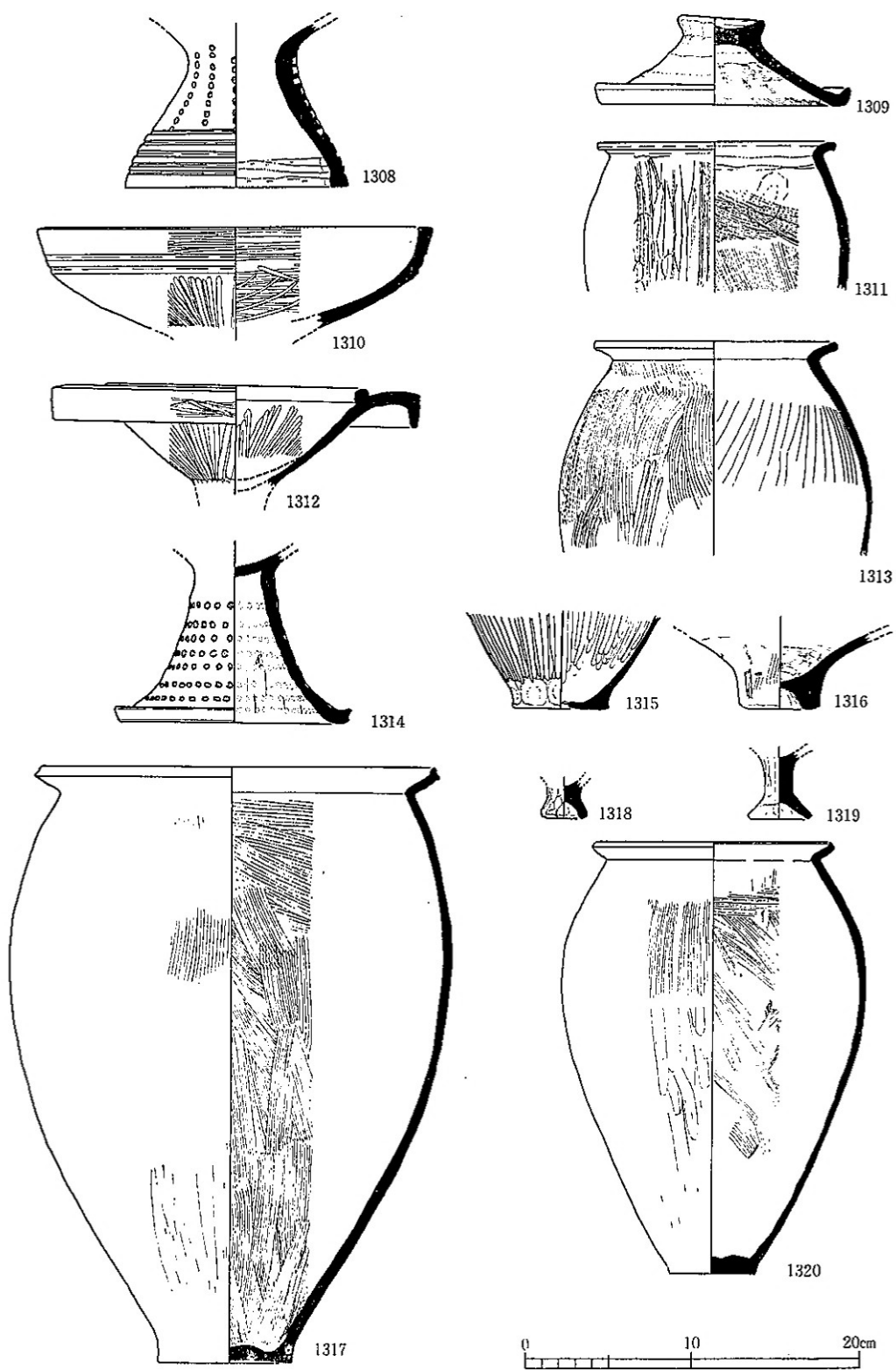
第251図 土壌 276 遺物出土状況実測図



第252図 弥生時代中期遺構出土遺物



第253图 弥生时代中期包含层出土遗物(1)



第254图 弥生時代中期包含層出土遺物（2）

他の土壙277～280は、遺物の出土はごく少量であった。

土壙 276 出土土器の器種構成をみると、甕が圧倒的多数を占め、個体識別のできる破片も含めて、壺1、鉢3に対して、甕が14を数える。また、石器では、E地区出土の砥石9点（第259図に一部図示）はいずれも土壙276周辺を含む溝状遺構内からの出土品である。

C 井戸 1 Eトレンチ北西隅に2基検出した。井戸6は口径約2.0m、底径約0.6m、深さ約0.7mを測る。最下層から両端を欠失した石槍（第258図S351）と少量の土器を検出した。この石槍は、ピット1305から出土した石槍先端部と接合できた。また上層からはイノシシ下顎骨を検出した。井戸7は、直径約1.5m、底径約0.6m、深さ約1.2mを測る。井戸底は茶黒色粘土（第241図）にまで達し、調査途中にも水が湧出していた。遺物は土器小片少量である。

D ピット 大溝（溝115）と溝状遺構の間の平坦部に3箇所、溝状遺構内に4箇所のピットを検出したが性格は不明である。ピット1305からは上述の石槍先端部、ピット1306からは全面に指圧痕のつく、いわゆる手づくねのミニチュア土器（第252図1292）を検出した。

特殊な遺物として、銅鐸型土製品が完形で出土した（同1286）。出土地点は、ピット1306の東側の溝状遺構内である。この土製品は、高さ5.5cm、幅4.8cm、厚さ3.4cmを測り、両側面には「X」の線刻（他に類例がない）があり、紐・ヒレ・舞孔（1穴）を表現している。胎土・焼成ともこの地域の弥生式土器と共通する。銅鐸型土製品は、本例を含め、現在までに佐賀県から千葉県までの各府県で次表のとおり30例を数える。時期の確認できる例は、弥生中期～後期に集中するが、本例はその中でも古い方に属すると思われる。

第18表 銅鐸型土製品出土地名表（1980年1月現在）

① 川寄若宮遺跡（佐賀県神埼郡神埼町）	⑩ 桑飼遺跡（京都府与謝郡加悦町）
② "（" " "）	⑪ 東奈良遺跡（大阪府茨木市沢良宜）
③ 川寄吉原遺跡（" " "）	⑫ 瓜生堂遺跡（" 東大阪市若江西新町）
④ 利田柳遺跡（" " "）	⑬ 亀井遺跡（" " "）
⑤ 高川原遺跡（徳島県名西郡石井町）	⑭ "（" " "）
⑥ 清水谷遺跡（岡山県阿哲郡哲西町）	⑮ "（" " "）
⑦ 上伊福遺跡（" 岡山市津島）	⑯ 池上遺跡（大阪府和泉市池上町）
⑧ 門前池遺跡（" 赤磐郡山陽町）	⑰ 四分遺跡（奈良県橿原市四分町）
⑨ 原尾島遺跡（" 岡山市原尾島）	⑱ "（" " "）
	⑲ 大福遺跡（" 桜井市大福町）
	⑳ 唐古遺跡（" 磯城郡田原本町）
	㉑ 上箕田遺跡（三重県鈴鹿市上箕田）
	㉒ 朝日遺跡（愛知県西春日井郡清州町）
	㉓ 西志賀遺跡（" 名古屋市北区貝田町）
	㉔ 見晴台遺跡（" " 南区見晴台）
	㉕ 岡島遺跡（" 西尾市岡島町）
	㉖ 住崎遺跡（" " 住崎町）
	㉗ "〈石製品〉（" " "）
	㉘ 稻荷前遺跡（神奈川県横浜市北区大場町）
	㉙ 熊ヶ谷遺跡（東京都町田市熊ヶ谷）
	㉚ つつとるば祭記遺跡（千葉県館山市沼）

3) 石器 E地区の弥生時代中期の遺構および包含層より出土した石器は総数43点ある（第20表、第258・259図、図版162～166）。その内訳は、武器としての石鏃2点・石槍2点・磨製石剣1点、工具としての石錐7点・敲石1点・砥石9点、漁撈具としての石錘1点、その他のものとして、不定形石器19点、その他の石器1点である。不定形石器以外に、サヌカイト剥片が49点ある。